

平成 27 年度社会調査実習報告書
—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—



平成 28 年 3 月

関西大学総合情報学部

はじめに

この報告書は、高槻市と関西大学が共同で、高槻市民を対象に実施した平成 27 年度市民意識調査「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」の成果をとりまとめたものです。本調査は、関西大学総合情報学部で開講されている授業「社会調査実習」(2015 年度)の一環として行われています。この授業では、学部生として上級の社会学的分析手法を習得するばかりでなく、受講生が各自の分析テーマを設定し、それらを盛り込んだ調査票の作成から最終報告書の執筆まで、社会調査の実施に必要な一連の作業を経験します。

この調査では毎年、研究テーマとして大学生ならではのユニークかつ現代的感覚に優れたテーマが取り上げられており、平成 27 年度の調査でもその長が受け継がれています。生活スタイルや生活満足度に対する家族構成の影響、インターネットやテレビなどの情報媒体の使い分けの実態、イベントへの参加や商業施設の利用といった地域との関わり合いかたなど、それぞれのテーマに柔軟な発想とみずみずしい感性が映し出されています。

本調査は今回で第 5 回目の実施となりますが、過去 4 回の調査では回収率が 60%程度で推移しており、今回も 61.2%という、近年の郵送調査としては非常に高い回収率が達成されました。時間と資源に限られる中、関西大学総合情報学部の松本渉先生からは時宜を得た的確なアドバイスをいただき、お陰さまで調査の一連の手続きを着実に進め、このような質の高いデータを得ることができました。また、ティーチング・アシスタントの吉崎雅基さん、スチューデント・アシスタントの松山奈央さん、中一誠さん、石倉広祐さんにはさまざまな形でご尽力いただき、授業を円滑に進めるために大きな助けとなりました。そして、仕事量が多く学習内容も多岐に渡る授業でありましたが、本講座の受講生の皆さんには辛抱強く、そして真剣に取り組んでいただきました。最終報告書は受講生の皆さんの努力の結晶として上梓されるものです。

最後になりましたが、本調査の実施にあたり多大なご協力をいただいた高槻市市民生活部市民生活相談課の皆さま、関西大学総合情報学部オフィスの皆さま、そして何より、調査にご協力いただいた高槻市民の皆さまに、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

2016 年 3 月

関西大学総合情報学部「社会調査実習」担当講師 塚常 健太

目次

はじめに		i
第 1 章 調査の概要	塚常健太・松本渉	1
第 2 章 調査結果	吉崎 雅基	8
第 3 章 高槻市民の文化財に対する意識調査	池谷 紘	115
第 4 章 市街地へのアクセス時間とバス利用頻度の関係	伊藤 圭佑	120
第 5 章 高槻市民は情報を収集するのにどのような媒体を用いるのか？	井本 菜摘	124
第 6 章 生活満足度と公共交通機関の満足度の関連性	大野 友也	131
第 7 章 生活におけるインターネット利活用の影響	川島 拓也	137
第 8 章 生活満足度と観光客誘致心理の関係性	木下 雅貴	149
第 9 章 地域への愛着と商店街の関わり	草野 優希	156
第 10 章 公園に行く頻度と情報収集との関係	多井中 美咲	161
第 11 章 緑を見る量とゆとりの関係	徳田 亜也美	165
第 12 章 高槻市民における生活満足度と人々の関わり	中尾 真子	170
第 13 章 地域イベントへの参加頻度と客層	中根 梨恵	177
第 14 章 生活満足度と世帯人数の関連性	西野 満音	184
第 15 章 水をよく使う人の特徴	尾藤 俊輔	191
第 16 章 理想とする消費税率と選挙投票率	藤 優希	196
第 17 章 結婚と幸せの関係性	宮崎 友紀	201
資料		205
予告ハガキ		207
調査票		209

第 1 章 調査の概要

塚常健太・松本渉

1. 調査の概要とスケジュール

「高槻市と関西大学による市民意識調査」は、平成 27 年 8 月から 9 月にかけて、高槻市と関西大学総合情報学部によって行われた。社会調査実習の一環として、前期には調査票の作成が、夏休みには調査票発送作業が、後期にはデータの打ち込み、データ作成、分析等が行われた(表 1)。

表 1 高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査スケジュール

	日付	授業内	授業外
前期	4/7	「社会調査実習」前期授業開講	
	4/14～6/9	基礎的・応用的な分析方法の習得	高槻市と関西大学の 打ち合わせ(随時)
	6/16～7/21	調査票の作成	
夏休み	7/28～8/5		調査票印刷
	7/31		サンプリング
	8/6	調査票発送準備作業	
	8/24		予告はがき発送
	8/27		調査票発送
	10/7		返送締切日
後期	9/29	「社会調査実習」後期授業開講	
	9/29～10/20	データの打ち込み・読み合わせ	
	10/27～11/24		データクリーニング
	12/1	応用的な分析方法の習得	
	12/12	中間レポートの提出	速報版報告書執筆
	1/19	最終授業(最終レポートの提出)	報告書執筆
	1/20～2/29		報告書編集

2. サンプリング

調査対象者： 20 歳以上 85 歳未満の高槻市民(1930 年 8 月 1 日～1995 年 7 月 31 日出生)

抽出名簿： 住民基本台帳（平成 27 年 7 月 31 日現在）

標本抽出法：層化抽出法

（具体的な手順）

1. 平成 27 年 6 月末現在の人口に基づいて、性別と年齢によって作成された 12 の層の人口を算出する。次に、その人口の比率に従って、計画標本 2,000 を各層に割り当てる(表 2)。

表 2 層化の基準日の人口構成と計画標本の割り当て

	平成 27 年 6 月末現在の人口			計画標本の割り当て		
	男	女	男女計	男	女	男女計
20 代	16,639	17,187	33,826	121	125	246
30 代	21,779	22,497	44,276	162	168	330
40 代	27,767	28,192	55,959	194	196	390
50 代	19,076	20,097	39,173	132	140	272
60 代	22,772	26,964	49,736	166	196	362
70 代以上	26,294	31,641	57,935	182	218	400
合計	134,327	146,578	280,905	957	1,043	2,000

2. 各層で割り当てられた人数を系統的に無作為抽出する。

3. 調査実施上の工夫

この調査では、調査および回収を円滑に実施するために、過年度と同様の工夫を行っている。

予告はがきの送付

調査票が届き次第、スムーズに回答できるように調査票発送の 3 日前に予告はがきを送付した。このように事前に調査の実施を通知することで、調査対象者は心の準備をすることができ、また調査に対する期待感を高められると考えたからである。なお、見やすくシンプルな文面とするため、ご挨拶以外にはがきに掲載した情報は最低限（「近日中に大きな茶封筒（ボールペン入り）が届くこと」「対象者が無作為で選ばれたこと」の 2 点）にとどめた。今回は 8 月 24 日（月）に予告はがきを送付した。

調査票送付日

調査票の送付は、お盆が終わってから最初の木曜日である平成 27 年 8 月 27 日(木)に行った。勤め人の夏休みを避けた上で、金曜日頃に調査票を受け取るためである。

同封物

筆記具を探す必要がないようにという配慮から、箱入りボールペンを同封した。また、箱を同封することで封筒の形状を目立たせ、ほかの郵便物に紛れなくなるという効果もある。なお事前にも事後にも金銭的な謝礼は一切行っていない。

調査票の用紙

目立つように、鶯色(なお前年は水色)の紙を使用した。また、やや重くなるが、裏面が透けて読みにくくならないように厚手の紙を利用した。

調査票における挨拶文

すぐに質問文が目に入るようにするため、挨拶文は 1 ページの上段のみにとどめた。その主な内容は、①調査目的以外に一切利用しないこと、②結果の公表を約束すること、③住所や名前を記入しないことをお願いすることの 3 点である。それぞれ、①安心感の付与、②社会還元の明示、③匿名性の担保を示している。

調査票の構成デザイン

二段組にすることによってスペースを有効に利用し、A4 サイズ 8 ページ(両面)の範囲に収まる調査票とした。文字フォントは、質問文を太字の MS ゴシック、選択肢を MS 明朝としてメリハリをつけた。

封筒

調査票送付用封筒については、A4 サイズの調査票を折り曲げずに済むように、角 2 サイズの糊付封筒を利用した。

一方、返信用の封筒については、ハイシール加工済みの角 2 サイズの封筒を利用した。調査対象者が、回答票を封入して返送しやすくするためである。

催促状(なし)

催促状の送付は行っていない。

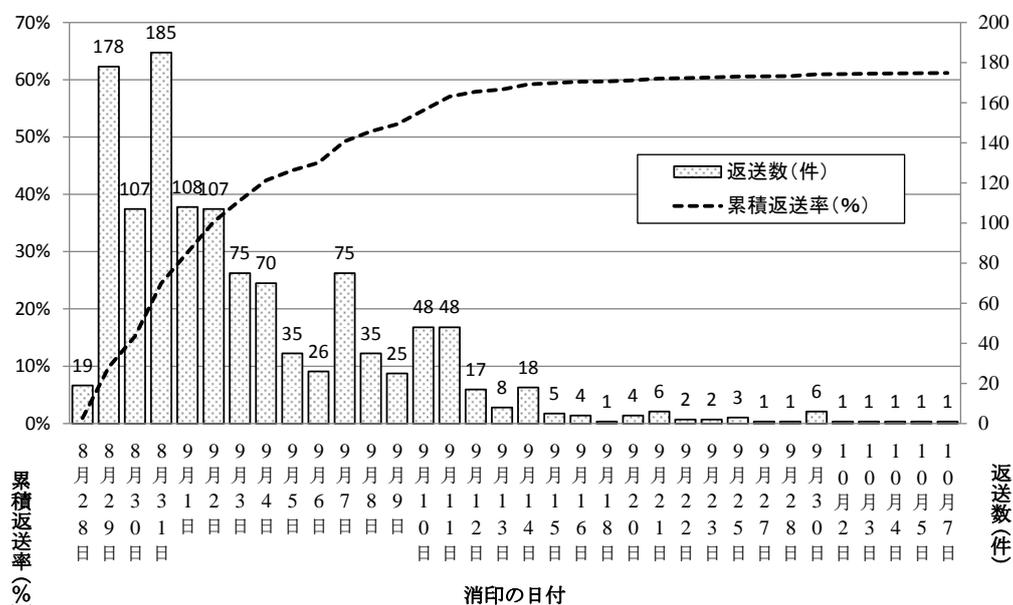
4. 調査票の回収状況

4.1. 返送状況

調査票の返送状況について述べる。図 1 は、消印の日付から調査票の返送状況の経過を示したものである。ただし消印が不明の 6 票については、高槻市の受け取り記録との照合により消印日を推定している。うち 2 票は特定の日に絞りこめないため、推定される期間(8月 28～30 日に 1 票、9月 11～13 日に 1 票)の中で最も返送数の多い日(8月 29 日、9月 11 日)の消印を割り振っている。残り 4 票の消印日は、8月 31 日に 2 票、9月 8 日に 1 票、9月 9 日に 1 票と推定される。

最も早い消印は翌 28 日(金)である。例年の調査と同様に、返送日の山が二つみられる。第 1 の山は、返送数が 178 の 8月 29 日(土)であり、調査票受取直後の記入・返送のピークといえる。第 2 の山は返送数が 185 で最大の返送数を記録している 8月 31 日(月)である。調査票受領後におとずれた土日を利用した記入・返送のピークといえる。これに続く山は、2 回目の月曜日である 9月 7 日であり、これは土日を利用した記入・返送によるものと考えられる。この返送のパターンはおおむね例年の調査と同様といえる。

累積返送率については、例年と同じく、調査票の返送受け取り期間の前半で返送率が 60%に達している。累積返送率のグラフ(図 1)が示しているように、回収期間後半に入ってもなだらかに上昇を続け、受け取り締切日頃には返送率が 61%を越えるという結果になった。



- (注1) 返送数とは、回答票の返送日ごとの件数(日付は消印による)。
- (注2) 累積返送率とは、その日までに返送された件数の累計を計画標本サイズで割った値。
- (注3) 消印が不明の回答票のうち、8月 28～30 日、9月 11～13 日の消印があると推定されるもの(各 1 票)は、それぞれ各期間の中で最も返送数の多い日(8月 29 日、9月 11 日)の票として計上している。

図 1 時系列に見た調査票の返送状況

4.2. 回収率と調査不能の内訳

郵送調査の特質上、締切日の9月11日(金)以降も調査票の返送が続いた。そのためしばらくの間返送を受け付け、10月7日(水)で打ち切った。返送されてきた調査票総数は1,226件であったが、2件については記入状況から無効と判断し、最終的に有効な回答票数を1,224件、回収率を61.2%とした。調査不能の内訳も含めた調査の状況は表3の通りである。

表3 回収率と調査不能の内訳

		件数	(%)
1. 調査不能	尋ね当たらず等	6	(0.30%)
	未返送	768	(38.40%)
	無効調査票	2	(0.10%)
	計	776	(38.80%)
2. 有効回答票		1224	(61.20%)
3. 計画標本サイズ(合計)		2,000	(100.00%)

4.3. 回収率の詳細

男女別の回収率については、男性54.4%、女性65.8%となり、女性の方が11%ほど高い(表4)。年齢層別の回収率では、70代以上で75.8%、60代が73.5%と高く、年齢が下がるにつれて回収率が低下し、20代では38.6%にまで低下する(表5)。社会調査において、男性よりも女性において、若年層よりも高年齢層において回収率が高くなることは一般的な傾向である。

表4 男女別の回収率

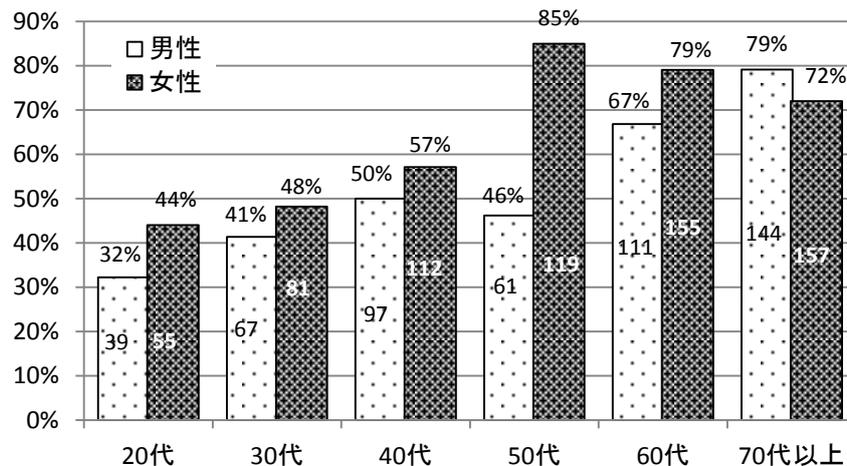
	男性	女性	不明	合計
回収標本	521	686	17	1,224
計画標本	957	1,043	—	2,000
回収率(%)	54.4%	65.8%	—	61.2%

(注) 男女別の回収率の計算には、不明分17件が含まれていない。

表5 年齢層別の回収率

	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	不明	合計
回収標本	95	149	209	181	266	303	21	1,224
計画標本	246	330	390	272	362	400	—	2,000
回収率(%)	38.6%	45.2%	53.6%	66.5%	73.5%	75.8%	—	61.2%

(注) 年齢層別の回収率の計算には、不明分21件が含まれていない。



(注1) 棒グラフの高さおよび上側の数字は、回収率をあらわしている。
(注2) 棒グラフの内側の数字は、各層における実際の回収数である。
(注3) 男女別・年齢層別のいずれかで不明となった分は含まれていない。

図2 男女・年齢層別の回収率

5. 回収標本の特徴

前述した男女別・年齢層別の回収率の違いにより、回収標本が母集団からある程度ずれている可能性があるため、その確認を行った。

表6は、母集団における男女・年齢別の人口分布と回収標本における男女・年齢別の人口分布を比較したものである。適合度検定*から、男女・年齢別の人口分布について、回収標本が母集団と乖離していることが統計学的に示されている。とりわけ、20代、30代の男性といった回収率の低い層では母集団よりも過小な人口割合である一方で、男性60代以上、女性50代以上といった回収率の高い層では母集団より過大な人口割合である。

高槻市の統計では、世帯人数別の人口分布もわかるので、この点についても回収標本と母集団との間の人口分布の比較を行った(表7)。その結果、この比較においても適合度検定*から両者が乖離していることが統計学的に示された。一人暮らしの多い20代、30代の回収率の低さがここにも影響したと考えられる。

*適合度検定

観測したデータの分布が、理論上の分布に当てはまっているかどうかを調べる統計学的手法。表6と表7では、平成27年6月末時点での高槻市全体の人口の分布を理論上の分布としている。なお、表6と表7の注釈にある統計量 χ^2 は適合度基準と呼ばれる値で、この値が0の場合二つの分布は同一であり、値が大きいほど乖離していることを示している。dfは、自由度と呼ばれる値(表6と表7では、「性別と年齢」「世帯人員数」の各カテゴリ数から1を引いた数に相当)である。pは、二つの分布が同一の分布である確率を表しており、統計量 χ^2 と自由度dfから計算されている。

表 6 男女・年齢別の人口分布の比較

性別	年齢	回収標本	%	H27年 6月末人口	%
男性	20代	39	(3%)	16,639	(6%)
男性	30代	67	(6%)	21,779	(8%)
男性	40代	97	(8%)	27,767	(10%)
男性	50代	61	(5%)	19,076	(7%)
男性	60代	111	(9%)	22,772	(8%)
男性	70～84	144	(12%)	26,294	(9%)
女性	20代	55	(5%)	17,187	(6%)
女性	30代	81	(7%)	22,497	(8%)
女性	40代	112	(9%)	28,192	(10%)
女性	50代	119	(10%)	20,097	(7%)
女性	60代	155	(13%)	26,964	(10%)
女性	70～84	157	(13%)	31,641	(11%)
		1,198	(100%)	280,905	(100%)

(注1)表左側の回収標本には、性別または年齢の不明分26件が含まれていない。

(注2)表右側はH27年6月末の高槻市全体の人口である。

(<http://www.city.takatsuki.osaka.jp/shisei/profilekeikaku/tokeijoho/jinko/index.html>) 参照。

(適合度検定) $\chi^2=79.5256$, $df=11$, $p=0.0000$

表 7 世帯人員別世帯数分布の比較

世帯人員数	回収標本	%	H27年6月末 世帯人員別人口	%
1人	117	9.6%	54,659	15.4%
2人	403	32.9%	92,630	26.1%
3人	278	22.7%	82,446	23.2%
4人	279	22.8%	89,040	25.1%
5人	71	5.8%	29,420	8.3%
6人	30	2.5%	5388	1.5%
7人	7	0.6%	1211	0.3%
8人	0	0.0%	360	0.1%
9人	0	0.0%	81	0.0%
10人	0	0.0%	30	0.0%
11人以上	0	0.0%	22	0.0%
無回答	39	3.2%	—	—
合計	1,224	100.0%	355,287	100.0%

(注1)表右側の世帯人数別人口は母集団の分布であり、高槻市の人口

(http://www.city.takatsuki.osaka.jp/shisei/profilekeikaku/tokeijoho/jinko/jinkou_h27/1436419198356.html)

から算出した。ただし、回収標本が20～84歳で構成されているのに対し、表右側の世帯人数別人口には未成年および85歳以上も含まれている。

(適合度検定) $\chi^2=71.4423$, $df=10$, $p=0.0000$

第2章 調査結果

吉崎雅基

1. 調査対象者の属性

調査票の質問順とは異なるが、はじめに本調査における回答者の属性を確認する。ただし、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入し、小数点第1位までを表示している。よって合計%は100.0%になるとは限らない。

回答者の性別は男性が521人で女性が686人であり女性の方が多い(図1)。年齢は60代と70代以上は2割以上と多く、20代は7.8%と最も少ない(図2)。男女別に年齢を確認しても同様の傾向が見られる(図3)。

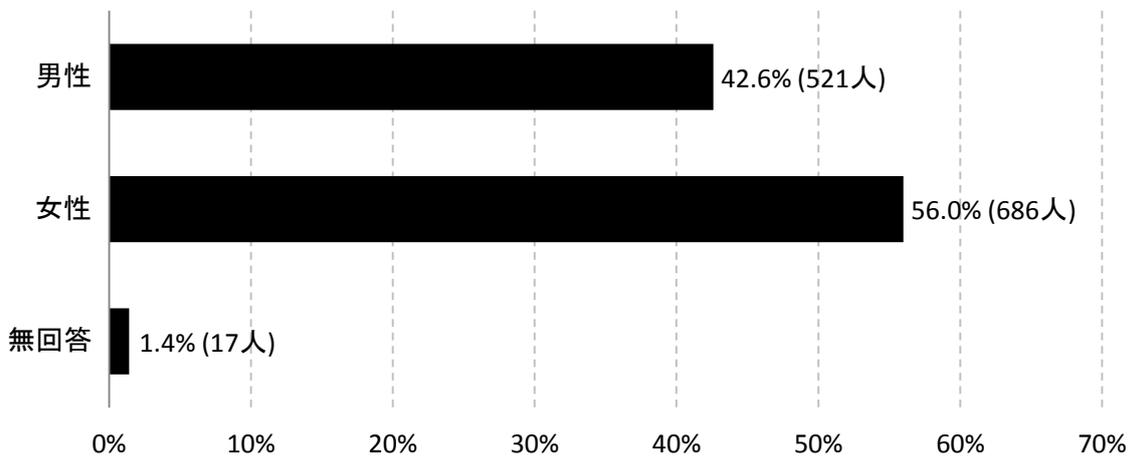


図1 Q53 性別

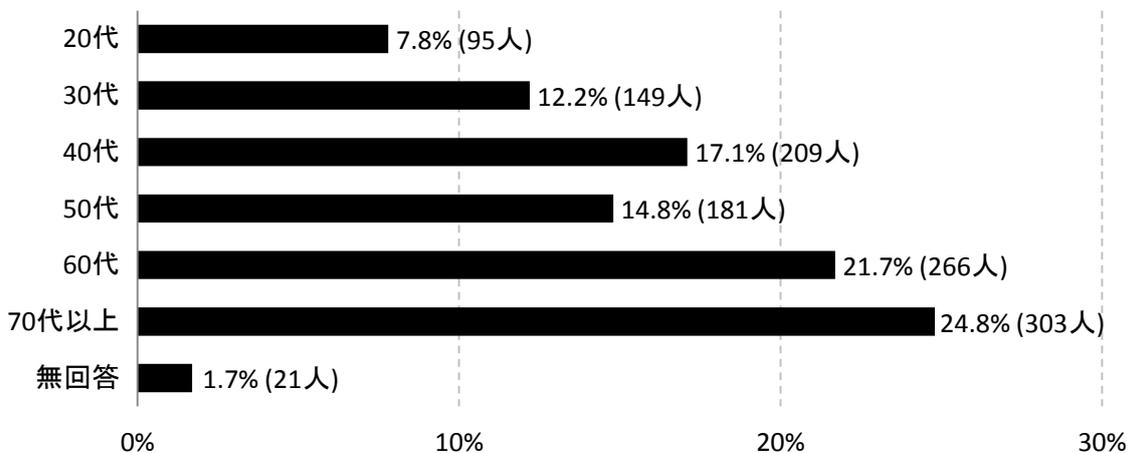


図2 Q54 年齢

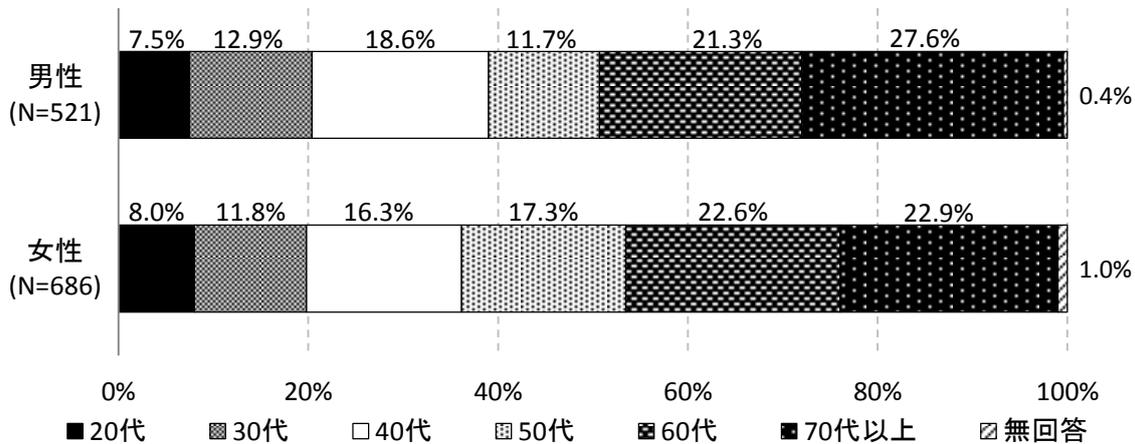


図 3 性別×年齢

以降、基本的には全ての質問項目に関して性別・年齢とのクロス集計を提示する。ただし、一部の回答者のみに回答が求められている質問項目に関しては、その項目に該当しない者を非該当者として分析から除外している。なお、本調査の全回答者数は 1,224 人である。性別・年齢の内訳については図 1 と図 2 を参照のこと。

職業は、合計を見ると常時雇用者が 28.1%と最も多く、次いで無職が多い。男女別で見ると、男性では常時雇用者が 43.8%と最も多く、女性では家事専業が 32.7%と最も多い。年代別で見ると、60 代以上で常時雇用者の割合が大きく減少し、無職が大きく増加している。臨時雇用、パート、アルバイトと回答した人は、50 代で 24.9%と全年代中で最も高い割合である（表 1）。

表 1 Q55 職業

		常時雇用の 勤め人	臨時雇用、 パート、 アルバイト	自営業主	自営業の 家族従業者	経営者、 役員	家事専業	学生	無職	その他	無回答
合計 (N=1224)		28.1	16.0	3.7	1.8	1.9	18.5	1.6	24.3	1.1	2.9
男女別	男性 (N=521)	43.8	9.2	6.5	0.8	3.5	0.4	1.5	31.5	0.8	2.1
	女性 (N=686)	16.9	21.6	1.5	2.6	0.7	32.7	1.6	19.5	1.5	1.5
年代別	20代 (N=95)	52.6	16.8	0.0	0.0	0.0	5.3	20.0	3.2	2.1	0.0
	30代 (N=149)	57.0	13.4	1.3	2.0	0.0	19.5	0.7	2.7	0.7	2.7
	40代 (N=209)	47.8	23.9	2.9	2.4	5.3	12.0	0.0	4.3	1.0	0.5
	50代 (N=181)	36.5	24.9	3.9	2.8	0.6	21.5	0.0	6.1	2.2	1.7
	60代 (N=266)	15.0	18.4	6.4	1.1	3.0	27.4	0.0	25.6	1.5	1.5
	70代以上 (N=303)	0.7	5.0	4.3	2.0	1.0	17.8	0.0	66.7	0.3	2.3

週あたりの労働日数は、年代別で見ると、20代から50代では5日の割合が最も高いが、60代以上では0日の割合が最も高い。男女別で見ると、女性では0日が44.0%と最も多く、次いで5日が多い。一方で、男性では5日が40.9%と最も多く、次いで0日が多い(図4)。

最終学歴は、男女別で見ると、男性では「大学(旧高専)・大学院」が45.3%と最も多いのに対し、女性では19.2%と男性よりも少ない。女性で最も多いのは「高校(または旧制中学など)」であり、40.8%である。また、「短大・高専(5年制)」は男性では2.1%と最も少ないのに対して、女性では19.4%と「高校(または旧制中学など)」に次いで2番目の多さである。年代別で見ると、20代では「大学(旧高専)・大学院」が58.9%であるが、年代が上がるごとに減少し、70代以上では16.5%である。反対に、20代では「高校(または旧制中学など)」と「中学(旧小学校など)」の合計が20.0%であるが、年代が上がるごとに増加し、70代以上では67.9%となっている(図5)。

居住地域について、ここでの地区とは小学校の校区を参考にしてしている。各地区と該当小学校区は、高槻北地区(芥川・真上・磐手・奥坂・清水・北清水・安岡寺・日吉台・北日吉台小学校)、高槻南地区(高槻・桃園・大冠・北大冠・松原・桜台・竹の内・西大冠・若松・南大冠・冠小学校)、五領地区(五領・上牧小学校)、高槻西地区(郡家・赤大路・阿武野・南平台・川西・土室・阿武山小学校)、如是・富田地区(芝生・丸橋・寿栄・富田・柳川・玉川・如是・津之江・五百住小学校)、三箇牧地区(三箇牧・柱本小学校)である。なお、本調査では檜田地区に該当する回答者は0人であった(図6)。

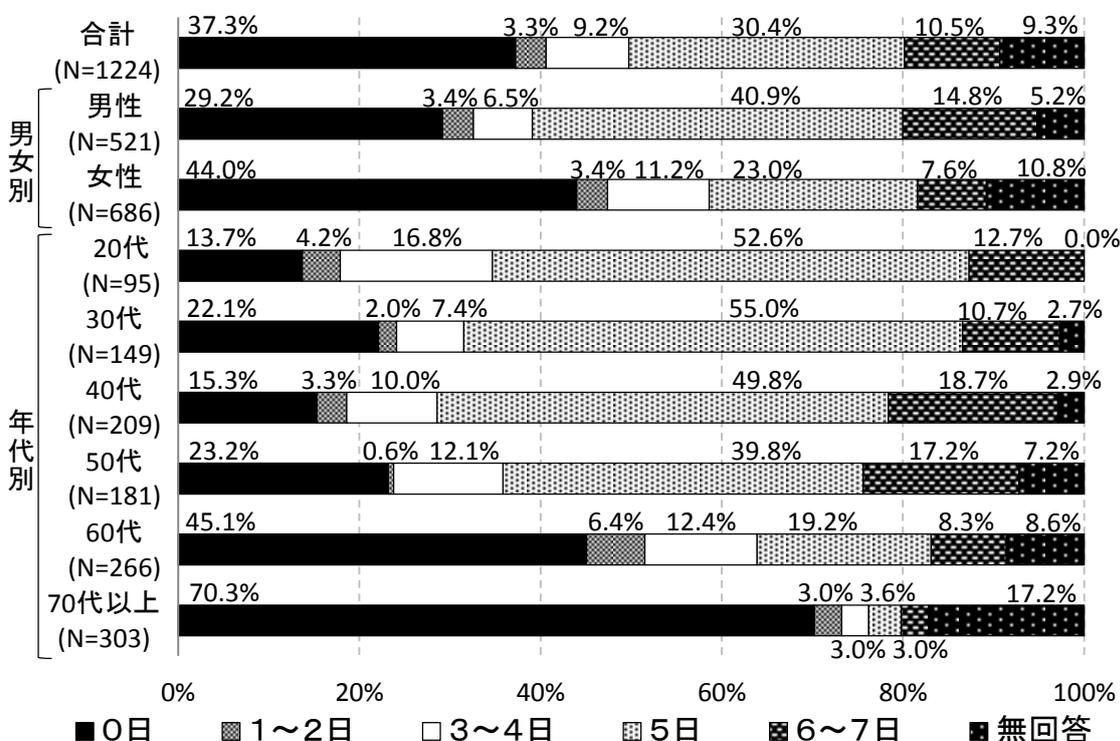


図4 Q56 週あたりの労働日数

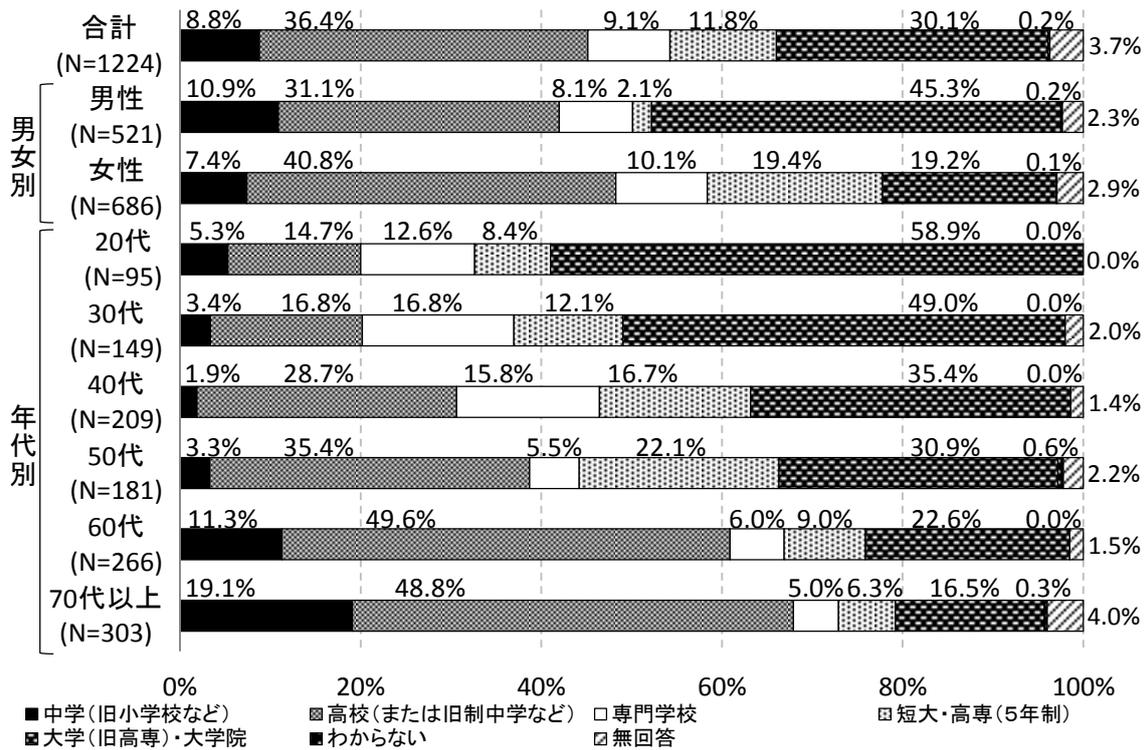


図 5 Q57 最終学歴

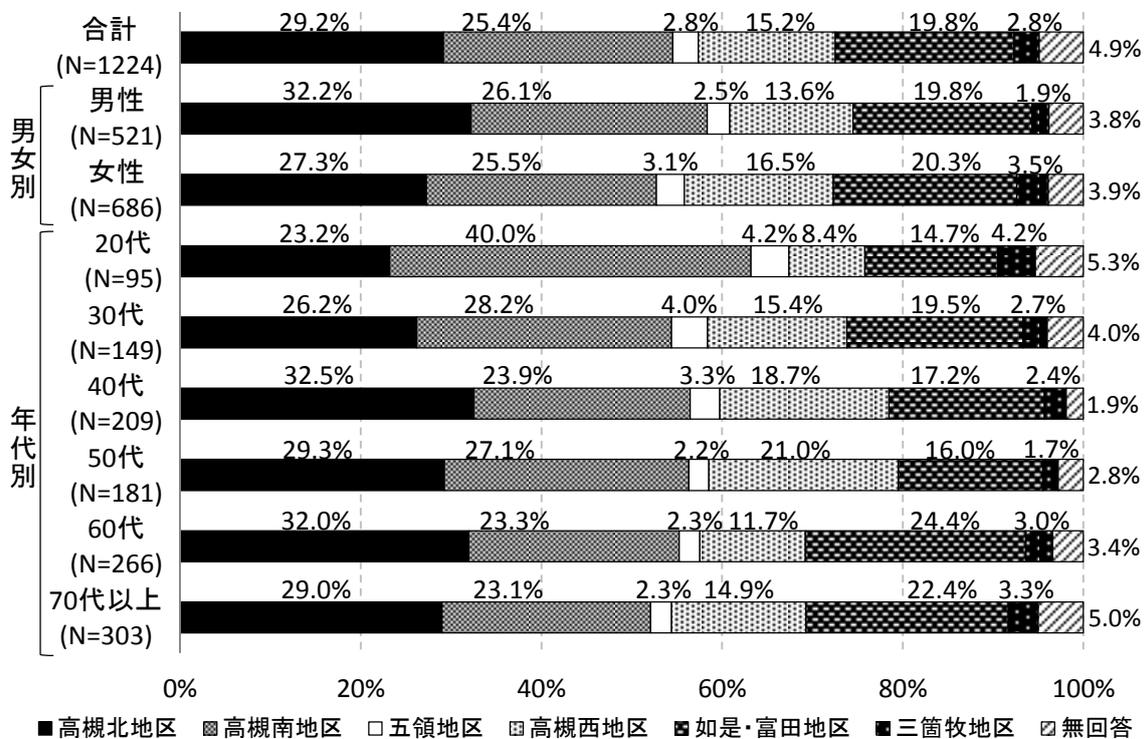


図 6 Q58 居住地域

高槻市内での居住年数に関しては、全体の8割以上が10年以上市内に居住していることが分かる。年代別で見ると、20代では「20年以上30年未満」が53.7%と最も多く、子どもころから市内に居住していることが分かる。70代以上では「40年以上50年未満」が41.6%と最も多い。なお、大きな男女差は見られない（表2）。

市民の住居は、男女別・年代別のすべての層で「一戸建て」の方が「集合住宅」よりも高い割合である。年代別で見ると、「一戸建て」の割合は、20代と30代では6割未満であるが、40代以上では6割以上である。特に、70代以上では74.3%と最も高い割合であり、唯一7割を超えている（図7）。

居住形態は、男女別・年代別のすべての層で「持ち家」が5割以上と最も高い割合である。60代以上では8割以上が「持ち家」である。20代では「民間の賃貸住宅」も33.7%と一定割合いるが、年代が上がるにつれて減少しており、60代で3.4%になる。70代以上では4.3%と少し増加する。「公社・公団等の公営の賃貸住宅」は、20代では2.1%であるが、年代が上がるごとに増加し、70代以上で11.6%になる（図8）。

表2 Q59 市内居住年数

		(%)									
		1年未満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上 40年未満	40年以上 50年未満	50年以上	無回答
合計 (N=1224)		1.4	3.3	4.1	6.9	12.2	17.4	21.7	22.6	8.4	2.0
男女別	男性 (N=521)	1.2	3.3	5.4	8.1	10.9	17.1	20.7	22.8	10.0	0.6
	女性 (N=686)	1.6	3.4	3.2	6.3	13.1	18.1	22.7	23.0	7.1	1.5
年代別	20代 (N=95)	8.4	11.6	6.3	4.2	14.7	53.7	0.0	0.0	0.0	1.1
	30代 (N=149)	1.3	9.4	14.8	22.1	10.7	11.4	28.2	0.0	0.0	2.0
	40代 (N=209)	1.4	2.9	5.3	11.0	26.3	9.1	17.7	25.4	0.0	1.0
	50代 (N=181)	0.6	1.1	1.1	5.0	15.5	30.9	21.0	13.8	11.0	0.0
	60代 (N=266)	1.1	0.8	2.3	3.0	6.8	16.9	30.8	27.4	9.8	1.1
	70代以上 (N=303)	0.0	1.3	1.0	2.6	5.3	8.3	20.8	41.6	18.5	0.7

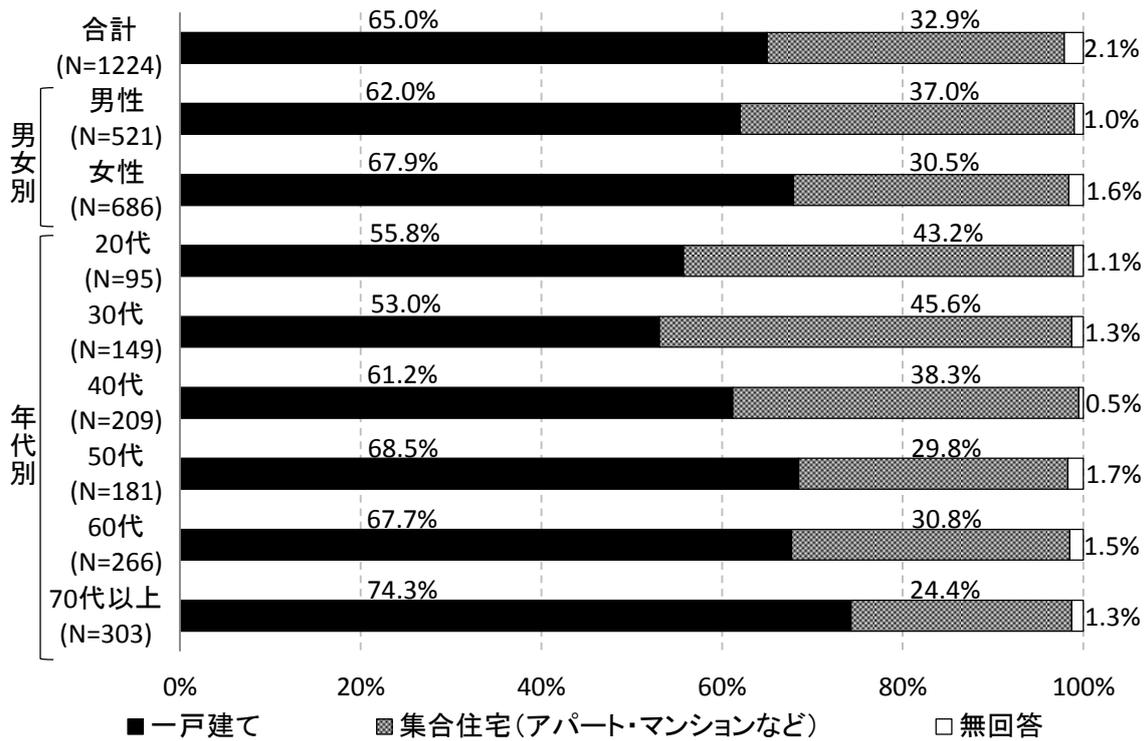


図 7 Q60 住居

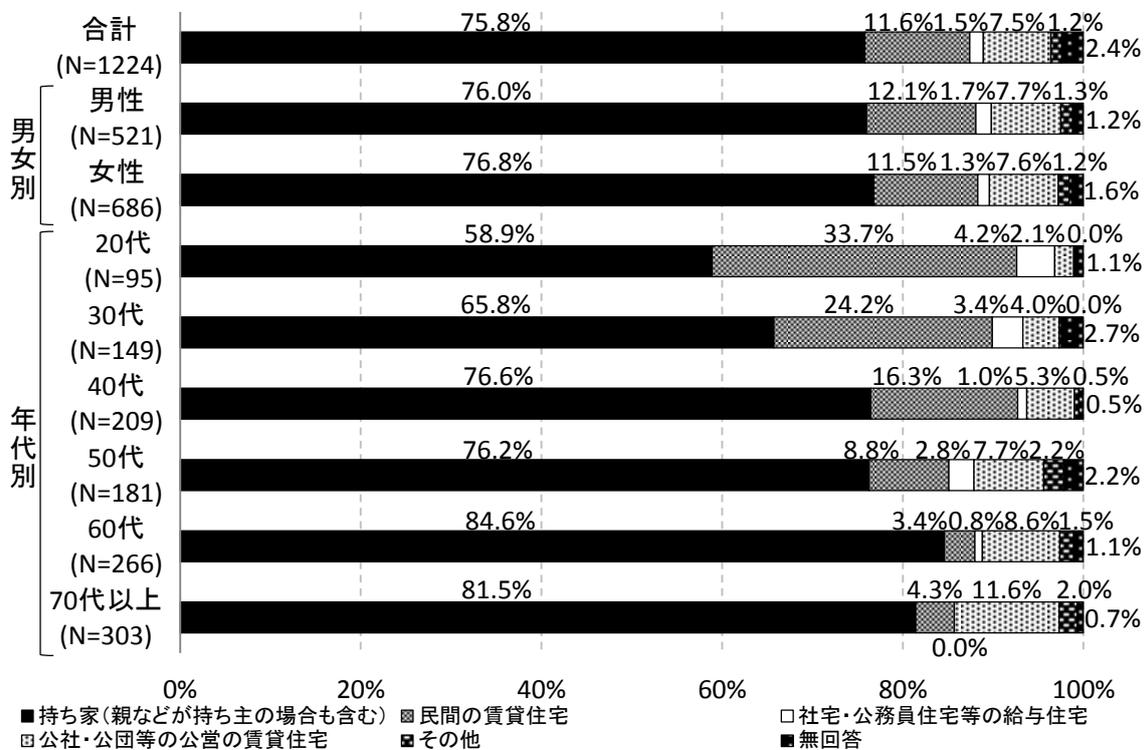


図 8 Q61 居住形態

世帯人数に関しては、その多くは2～4人世帯である。年代別で見ると、20代では3人世帯が最も多く、30代から50代では4人世帯が最も多い。また、60代以上では2人世帯が5割前後を占めている（表3）。

表3 Q62 世帯人数

		1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	(%) 無回答
合計 (N=1224)		9.6	32.9	22.7	22.8	5.8	2.5	0.6	3.2
男女別	男性 (N=521)	7.7	34.9	24.0	23.6	5.6	2.1	0.6	1.5
	女性 (N=686)	11.1	32.1	22.3	22.4	6.0	2.8	0.6	2.8
年代別	20代 (N=95)	8.4	13.7	26.3	25.3	15.8	6.3	2.1	2.1
	30代 (N=149)	6.0	11.4	30.9	38.9	6.0	2.7	1.3	2.7
	40代 (N=209)	6.7	16.3	22.5	39.7	9.6	1.9	1.0	2.4
	50代 (N=181)	6.1	26.0	25.4	29.3	7.7	3.3	0.0	2.2
	60代 (N=266)	8.6	48.9	21.4	13.9	2.6	2.6	0.0	1.9
	70代以上 (N=303)	16.8	53.1	18.5	7.9	1.7	1.0	0.3	0.7

世帯収入は、合計および男性・女性では「200～400万円未満」が最も多い。年代別で見ると、「わからない」を除いて割合が最も高いのは、20代では「200万円～400万円未満」で21.1%、30代と40代では「400万円～600万円未満」、50代では「600万円～800万円未満」と、年代が上がるごとに収入が高額になっている。ただし60代以上では「200万円～400万円未満」の割合が最も高い（表4）。

表4 Q63 世帯収入

		(%)									
		100万円未満	100万円～200万円未満	200万円～400万円未満	400万円～600万円未満	600万円～800万円未満	800万円～1000万円未満	1000万円～1500万円未満	1500万円以上	わからない	無回答
合計 (N=1224)		5.0	10.0	25.2	16.5	10.9	7.6	6.3	1.7	5.4	11.4
男女別	男性 (N=521)	2.9	8.4	29.0	19.6	10.9	9.8	6.9	1.9	2.7	7.9
	女性 (N=686)	6.7	11.5	22.7	14.6	11.1	6.0	6.0	1.6	7.4	12.4
年代別	20代 (N=95)	8.4	8.4	21.1	11.6	6.3	4.2	10.5	0.0	23.2	6.3
	30代 (N=149)	1.3	3.4	16.1	28.2	16.1	7.4	6.7	0.7	4.7	15.4
	40代 (N=209)	4.3	5.3	12.9	21.1	16.3	12.4	12.4	1.9	3.3	10.0
	50代 (N=181)	4.4	6.6	10.5	15.5	19.9	15.5	11.0	5.0	3.3	8.3
	60代 (N=266)	4.9	11.3	33.8	16.9	9.0	6.4	3.4	1.9	3.8	8.6
	70代以上 (N=303)	6.6	18.8	42.2	10.6	3.0	2.3	0.7	0.7	4.3	10.9

2. 各質問項目の結果

ここからは回答者個人の属性だけではなく、意識や行動などの項目についての結果の概要を示す。ここでも基本的には性別・年齢によるクロス集計を提示する。なお、一部の回答者のみに回答が求められている質問項目に関しては、その項目に該当しない者を非該当者として分析から除外している。回答者の性別と年齢の分布については8ページの図1と図2を参照のこと。

なお、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入し、小数点第1位までを表示している。よって合計%は100.0%になるとは限らない。

Q1の生活満足度に関しては、男女別・年代別のすべての層で5割以上が「満足」もしくは「やや満足」と回答している。なお、年代別で見ると、「満足」と回答した人の割合は70代以上が19.8%と最も高く、反対に30代が11.4%と最も低い(図9)。

Q2の居住地の暮らしやすさに関しては、男女別・年代別のすべての層で「非常によい」または「まあよい」と回答した人が8割前後である。年代別で見ると、「非常によい」と回答した人の割合は40代で16.7%と最も高い(図10)。

Q3の地域に住み続けたいかに関しては、男性・女性のどちらにおいても「ずっと住み続けたい」または「住み続けたい」と回答した人の割合は56.7%である。その割合を年代別で見ると、年代が上がるごとに増加しており、20代で38.9%であるのに対して70代以上では64.3%である。ただし50代では40代よりも1.8%だけ減少している(図11)。

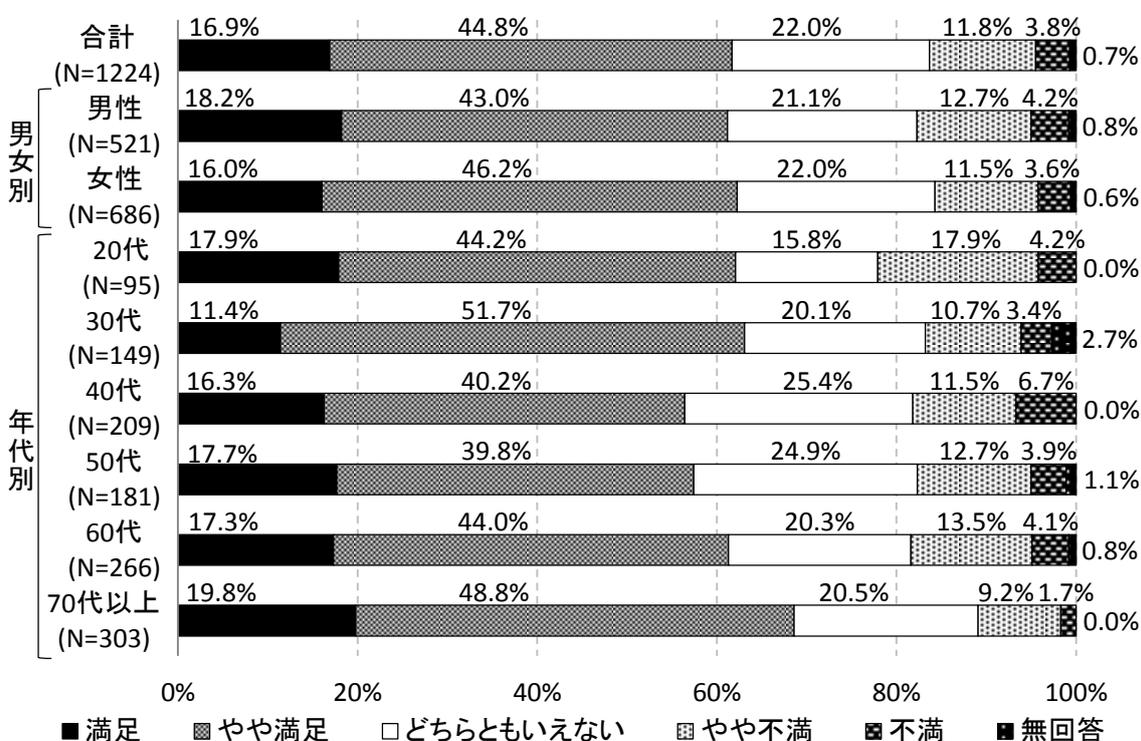


図9 Q1 生活満足度

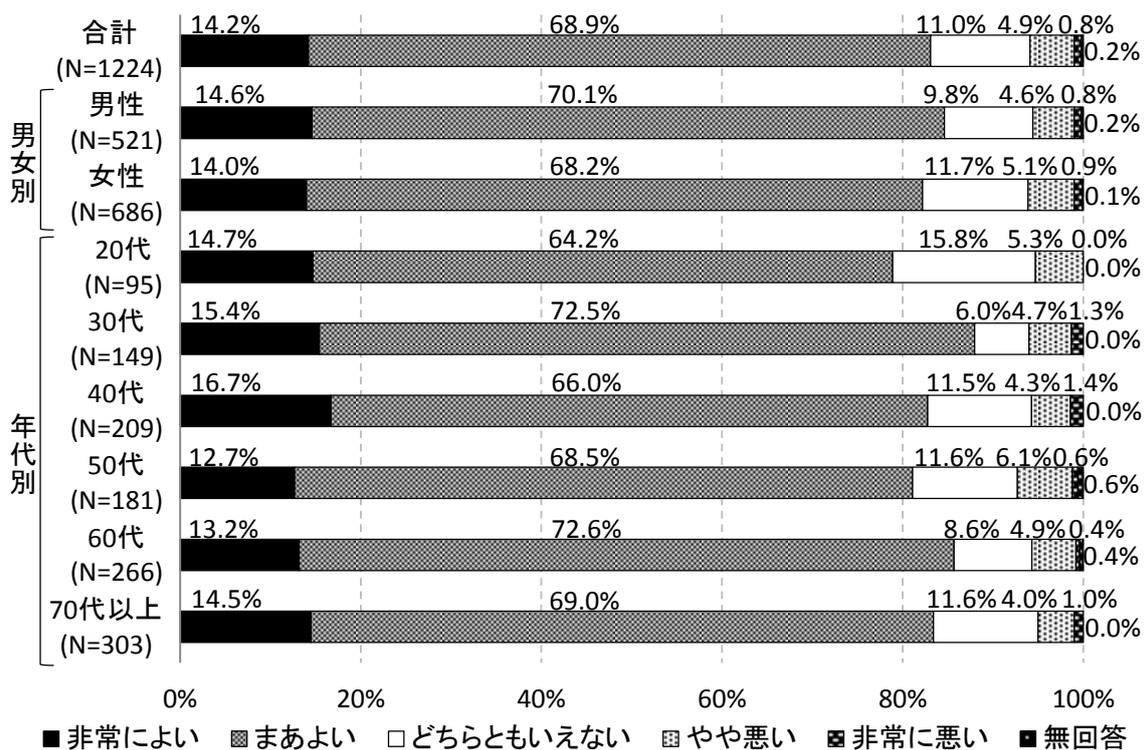


図 10 Q2 居住地域の暮らしやすさ

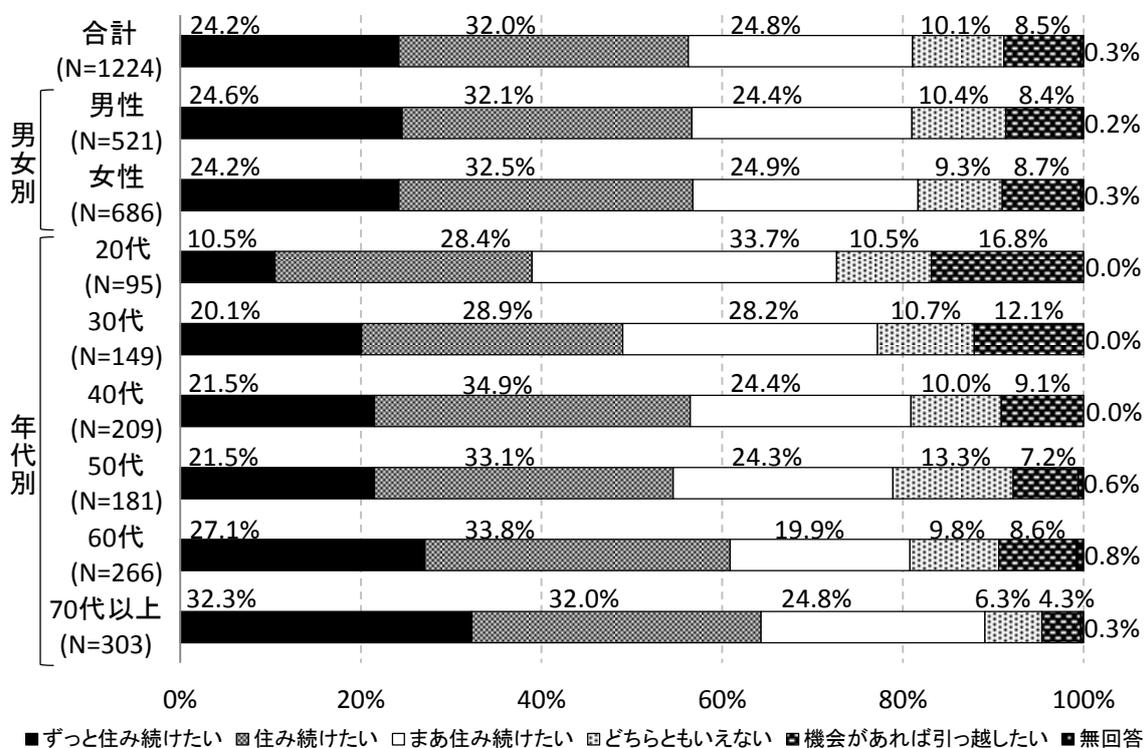


図 11 Q3 地域に住み続けたいか

Q4 の地域で植物を見かけるかに関しては、男女別で見ると、「よく見かける」と回答した人の割合は男性で 61.8%、女性で 70.7%であり女性の方が高い。年代別で見ると、その割合は 20 代で 54.7%、30 代で 48.3%であるが、以降年代が上がるごとに増加し、70 代以上では 74.9%である (図 12)。

Q5 の地域の自然の量に関しては、男女別・年代別のすべての層で「普通だと思う」の割合が最も高い。年代別で見ると、「やや少ないと思う」または「少ないと思う」と回答した人の割合は 30 代と 40 代でのみ 2 割以上である。また、「多いと思う」または「やや多いと思う」と回答した人の割合が、40 代から 60 代では 5 割を超えている (図 13)。

Q6 の近所での世間話の頻度に関しては、合計で見ると、「月に 1~2 日」以上の頻度が 61.7%である。年代別で見ると、20 代は「ほとんどない」の割合が 75.8%と最も高く、年代が上がるごとにその割合は減少している。70 代以上では「ほとんどない」の割合は 16.2%である。「ほとんどない」を除くと、30 代を除くすべての年代において「週に 1~2 日」の割合が最も高い。30 代では「月に 1~2 日」の割合が最も高い (図 14)。

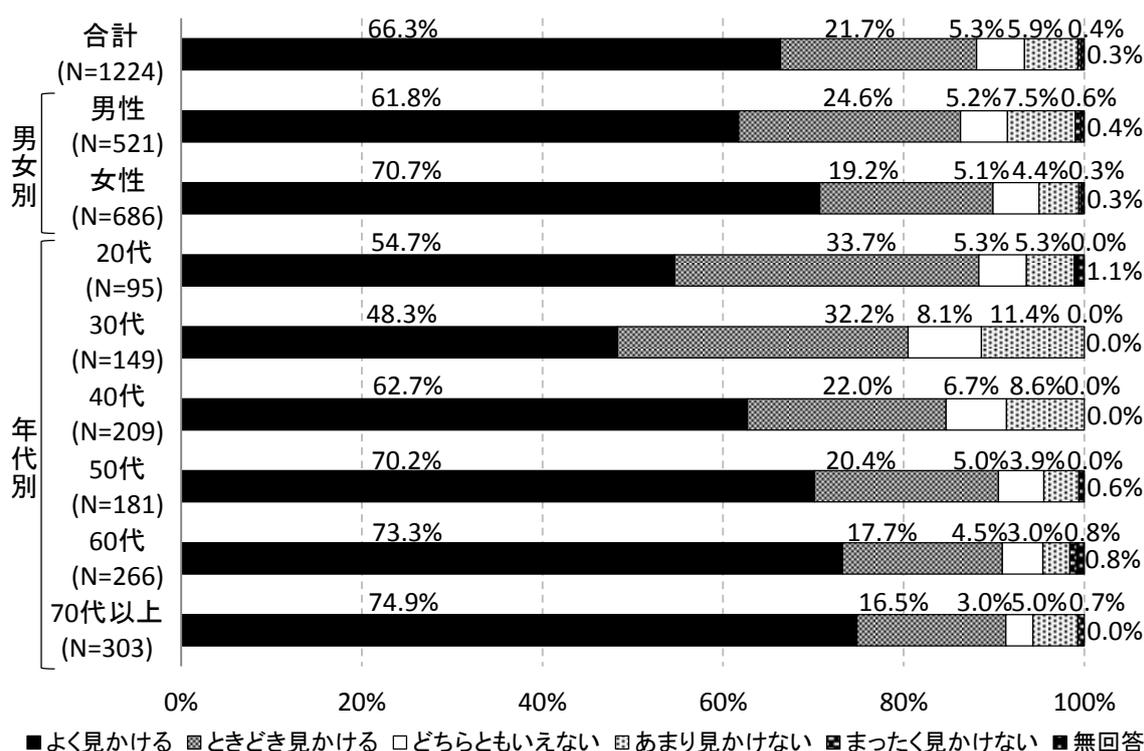


図 12 Q4 地域で植物を見かけるか

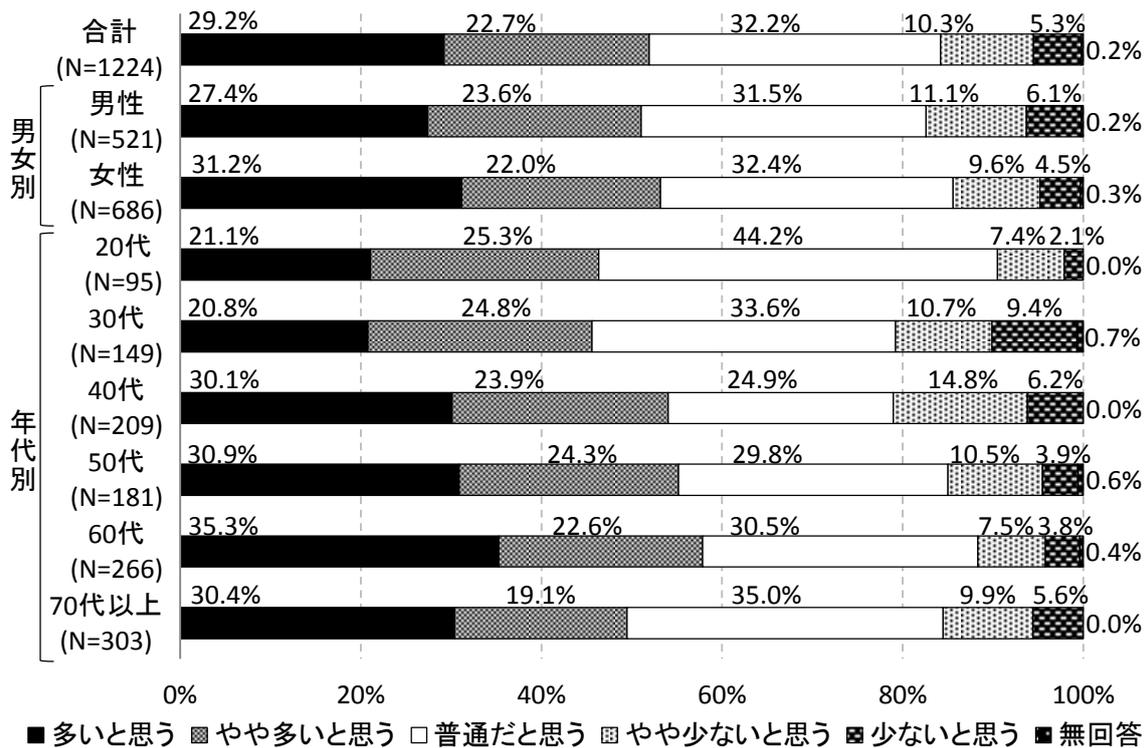


図 13 Q5 地域の自然の量

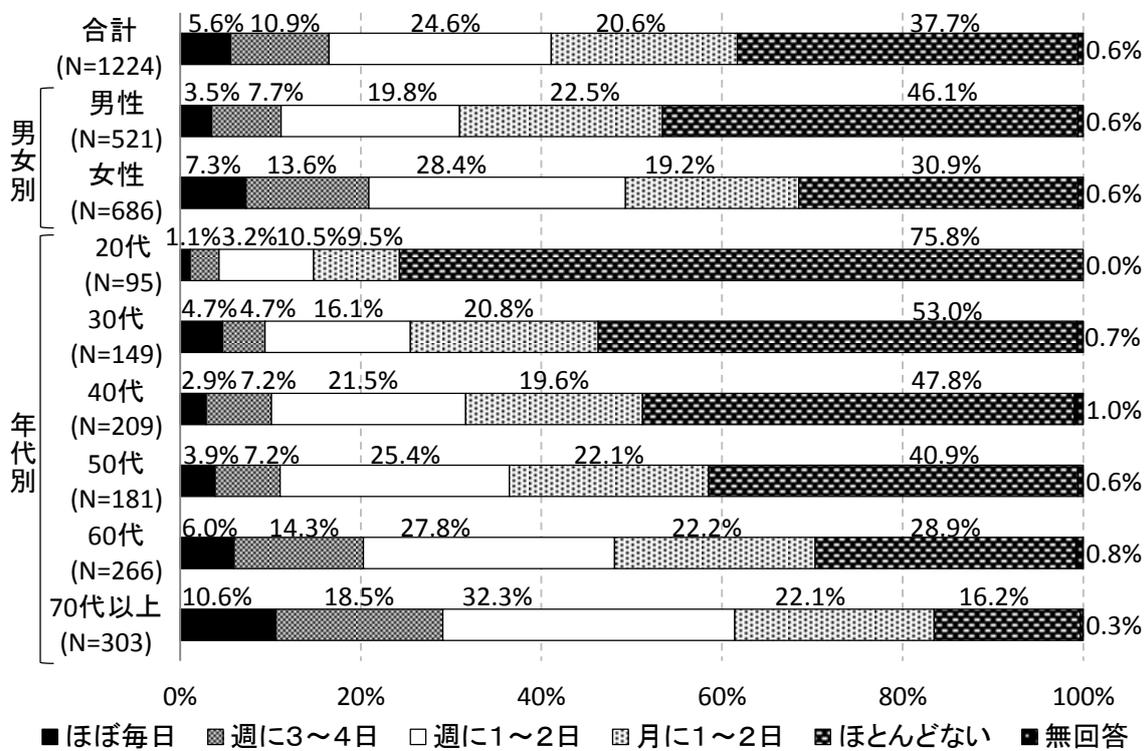


図 14 Q6 近所での世間話の頻度

Q7の近所づきあいを増やしたいかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「どちらともいえない」が最も高く5割から7割以上である。「増やしたい」または「少し増やしたい」と回答した人の割合は、30代が34.9%であり最も高く、次いで20代の32.6%である。男女別で見ると、その割合は男性で28.8%、女性で23.7%であり男性の方が高い（図15図18）。

Q8の高槻市に愛着を感じるかに関しては、「感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は、男女別・年代別のすべての層で7割以上である。特に70代以上では83.5%であり最も高く、すべての年代の中で唯一8割以上である。次いで高いのは20代であり78.9%である（図16）。

Q9の電車に対する満足度に関しては、男女別・年代別のすべての層で「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が7割以上である。割合が最も高いのは70代以上であり、78.9%である（図17）。

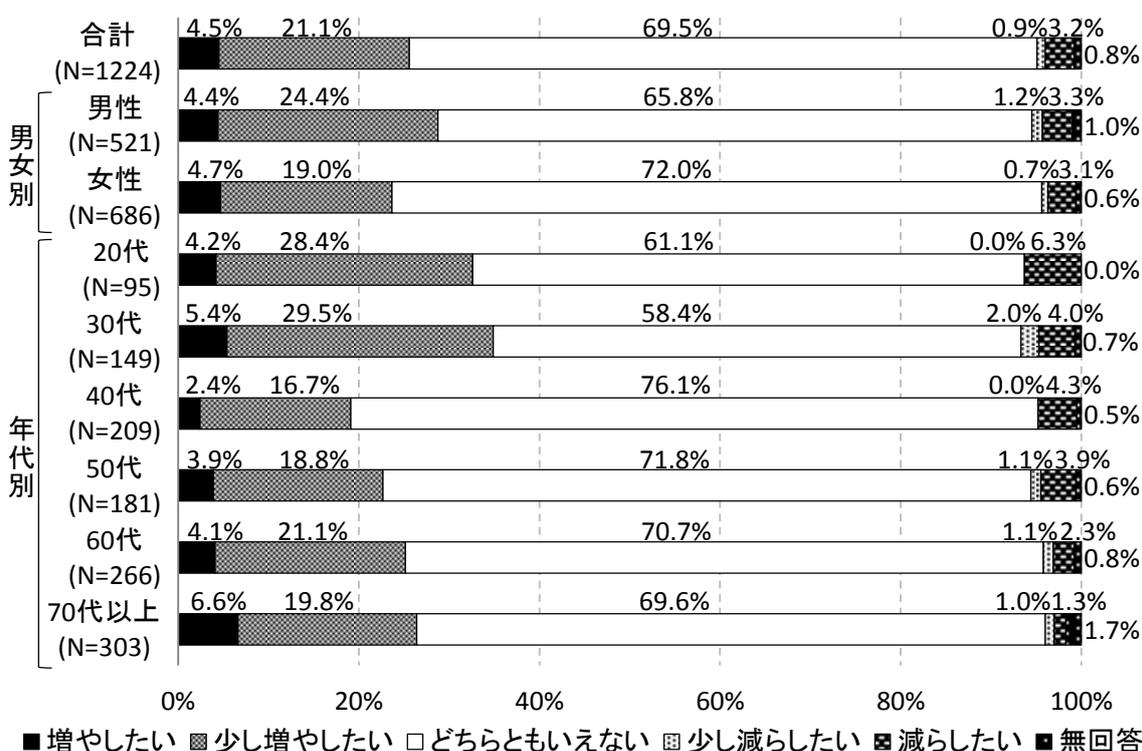


図15 Q7 近所づきあいを増やしたいか

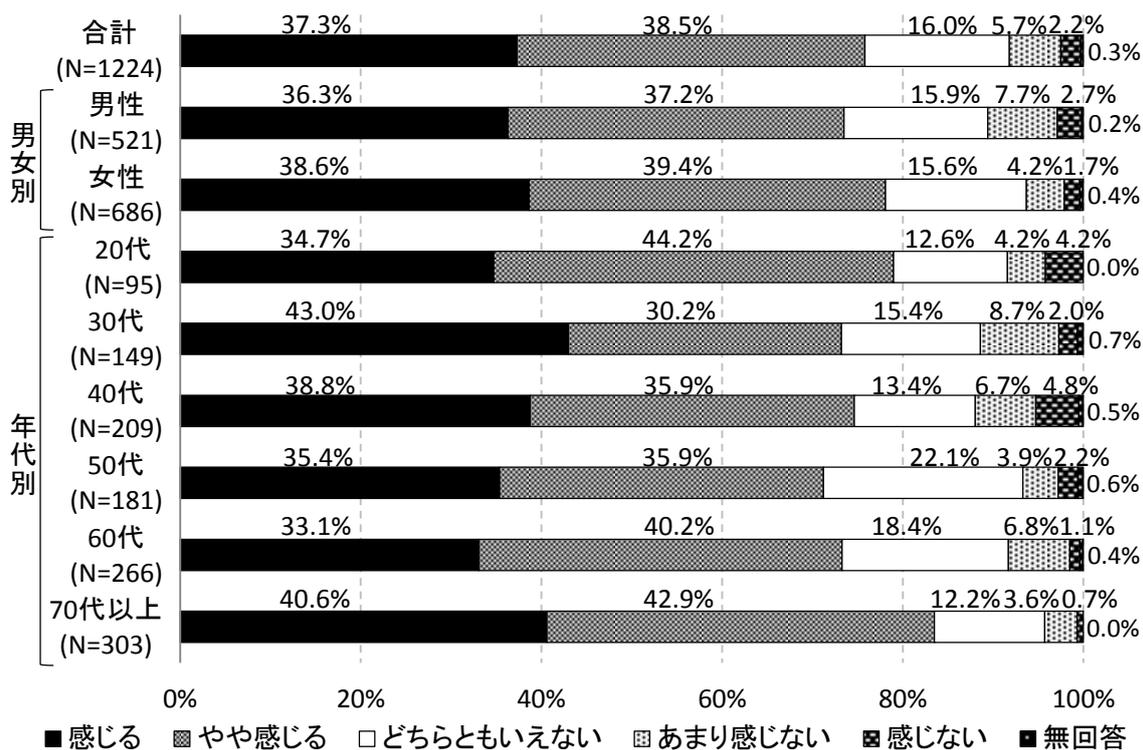


図 16 Q8 高槻市に愛着を感じるか

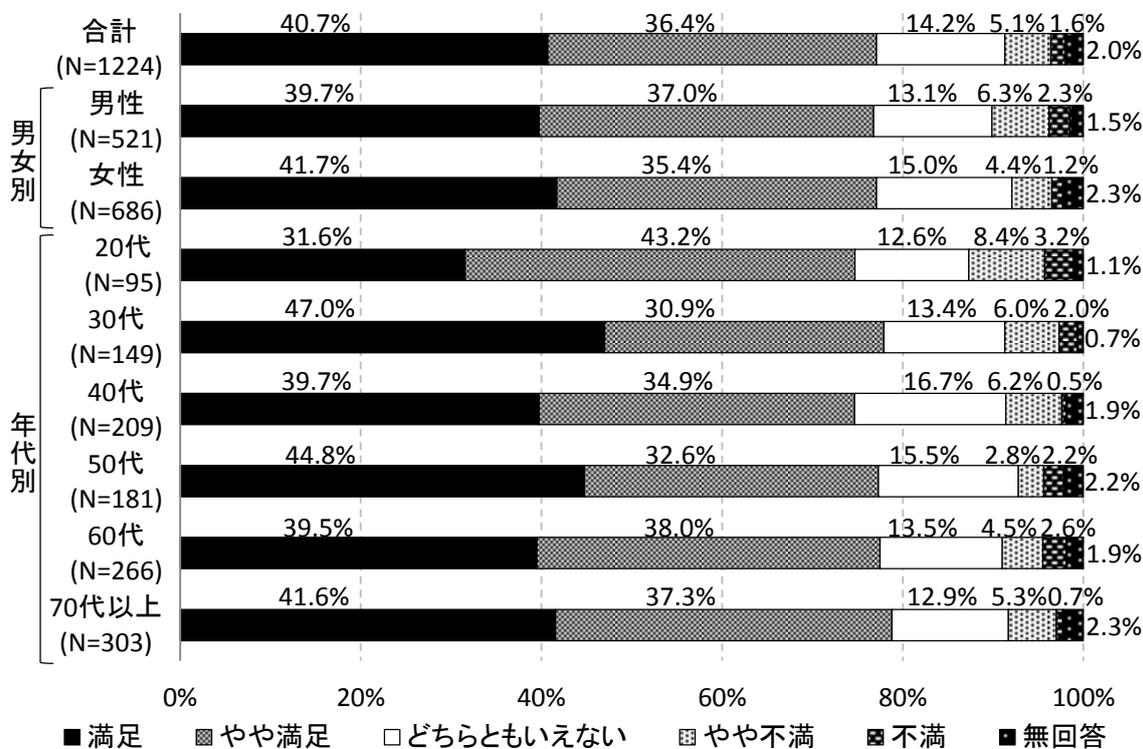


図 17 Q9 電車の満足度

Q10のバスに対する満足度に関しては、70代以上を除く男女別・年代別のすべての層で「どちらともいえない」の割合が最も高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は、年代別で見ると、40代で一度減少するものの、以降年代が上がるごとに増加する。特に70代以上は60代と比較して23ポイントほど増加しており、すべての年代の中で唯一7割以上である(図18)。

Q11のバスの乗客はマナーを守っているかに関しては、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、70代以上でのみ6割以上であり、68.4%である。これは、その他の年代よりも12ポイント以上高い割合である(図19)。

Q12の市バスの利用頻度に関しては、合計で見ると、「月に1~2日」以上利用する割合は50.2%である。年代別で見ると、「週に1~2日」の割合は20代から60代では1.5割以下であるが、70代以上でのみ27.7%である。また、「年に1~2日」の割合は、20代から60代では2割以上であるが、70代以上でのみ17.8%である。「利用しない」の割合は40代で最も高く28.7%である(図20)。

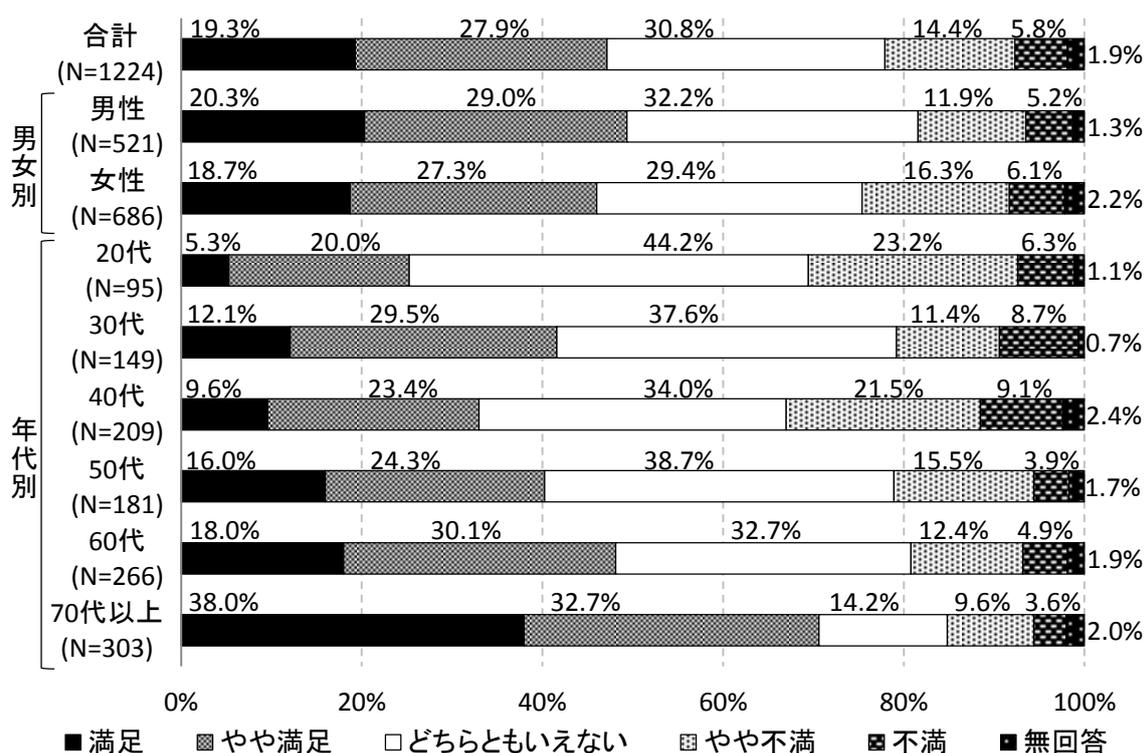


図18 Q10バスの満足度

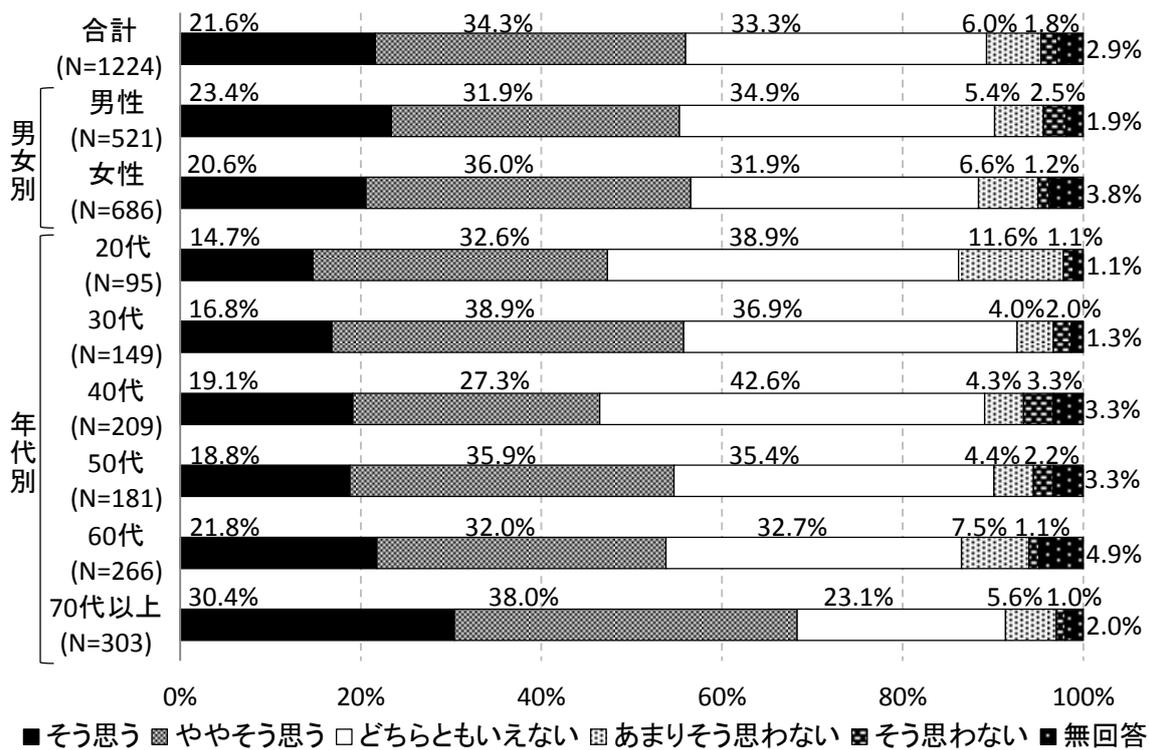


図 19 Q11 バスの乗客はマナーを守っているか

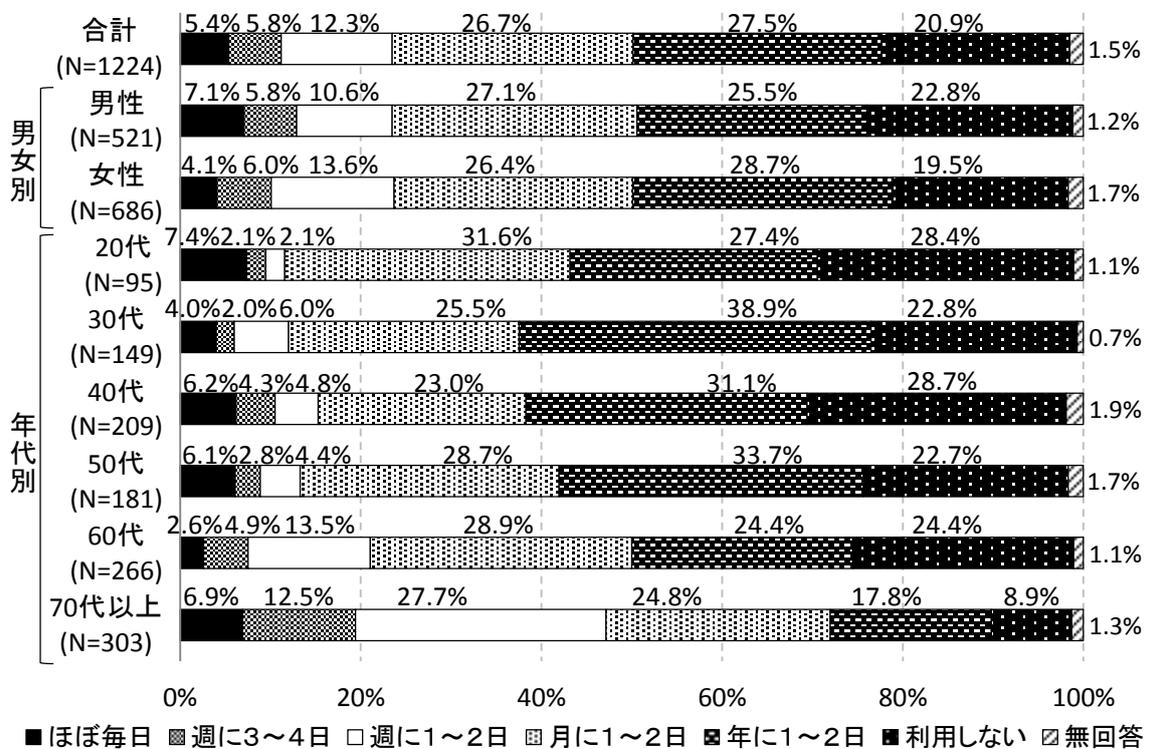


図 20 Q12 市バスの利用頻度

Q13 の公園に行く頻度に関しては、30代を除く男女別・年代別のすべての層で「公園には行かない」が最も高い割合である。30代では「月に1~2回」が最も高い割合である。男女別で見ると、月に1~2日以上の頻度の割合は、男性では50.4%、女性では34.0%であり、男性の方が16ポイントほど高い。年代別で見ると、その割合は30代で60.4%と最も高く、他の年代よりも15ポイント以上高い(図21)。

Q14 の商店街や繁華街までの所要時間に関しては、30代と50代を除く男女別・年代別のすべての層で「30分以上1時間未満」が最も高い割合である。30代と50代では「20分以上30分未満」が最も高い割合である。年代別で見ると、商店街や繁華街まで20分未満である人の割合は30代で最も高く42.2%であるが、年代が上がるごとに減少し、70代以上では23.7%である(図22)。

Q15 の商店街や繁華街に行く頻度に関しては、男女別・年代別のすべての層で「月に1~2日」が最も高い割合である。男女別で見ると、週に3~4日以上行く割合は男性では12.0%、女性では18.4%であり、女性の方が6ポイントほど高い。年代別で見ると、週に3~4日以上行く割合は、どの年代でも2割未満であり、最も高い割合は70代以上の17.9%である(図23)。

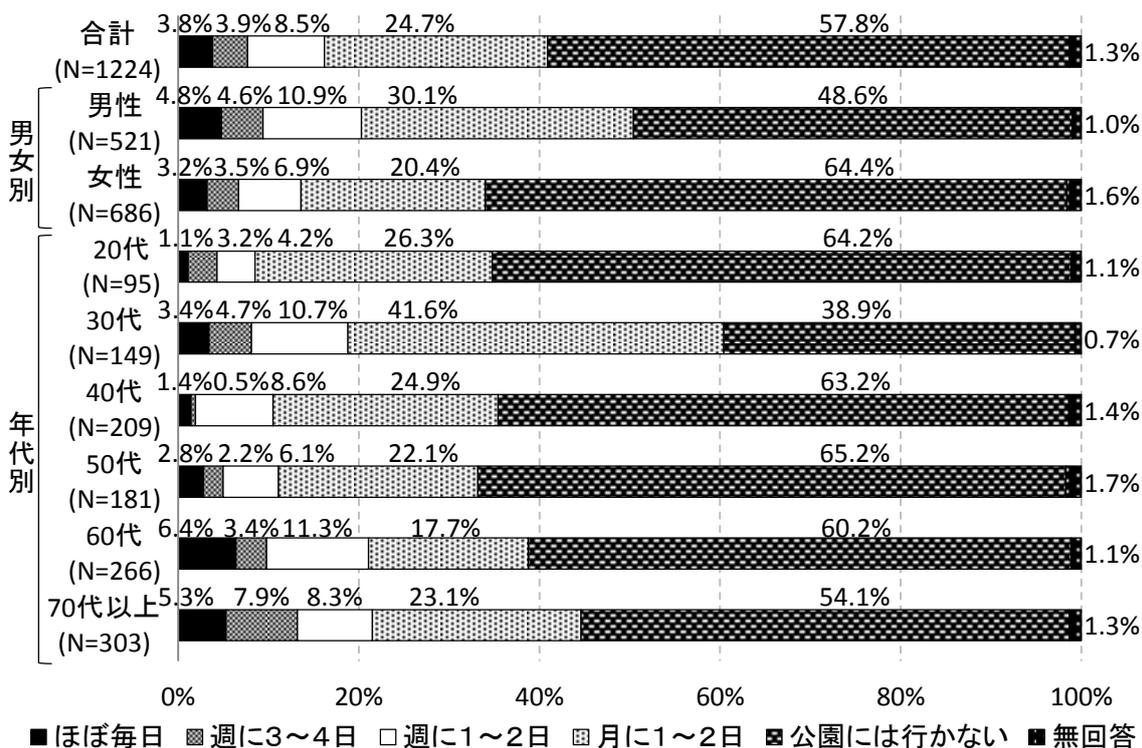


図 21 Q13 公園に行く頻度

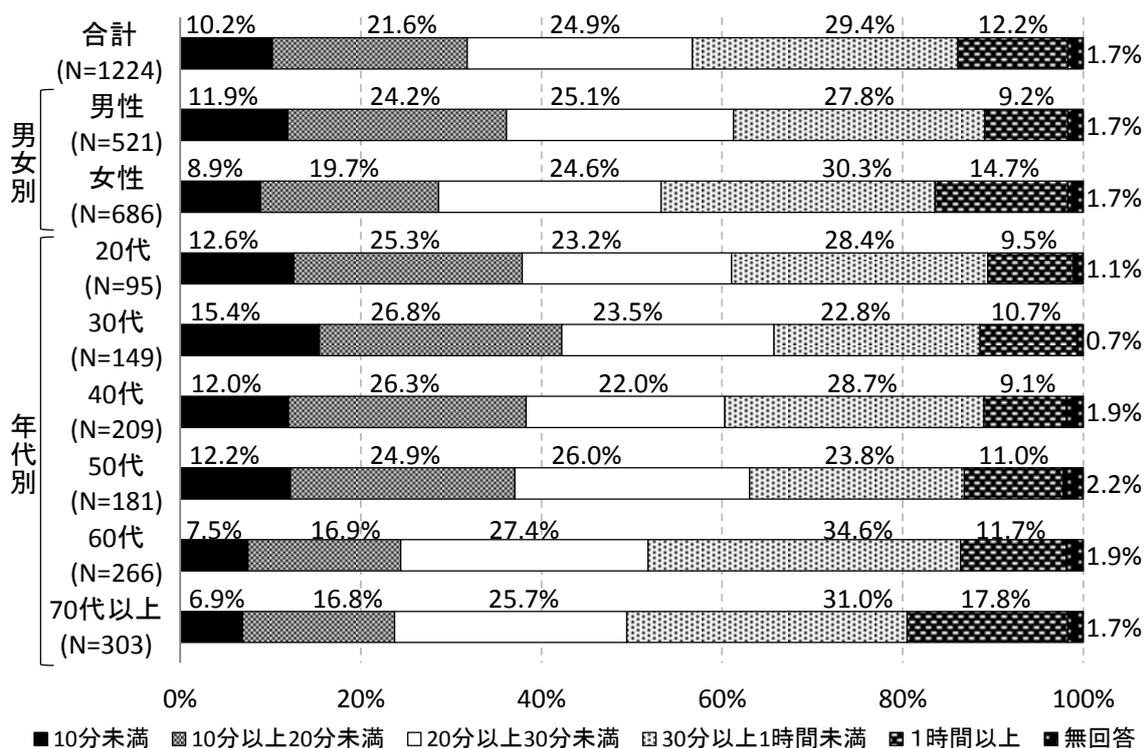


図 22 Q14 商店街や繁華街までの所要時間

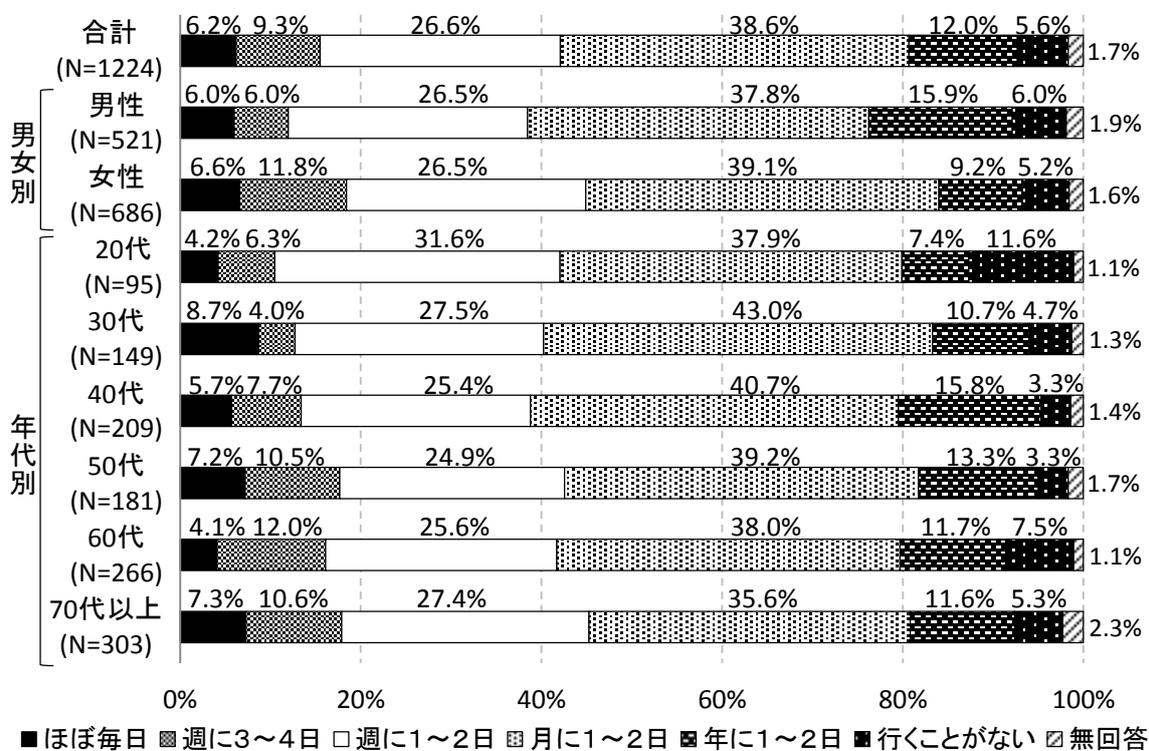


図 23 Q15 商店街や繁華街に行く頻度

Q16 の中心市街地に行く頻度が 3 年前と比べて増加したかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「増加した」または「少し増加した」と回答した人の割合は、20 代で 28.6%、30 代で 28.2%であり、他の年代よりも 7 ポイント以上高い。「減少した」と回答した人の割合は、70 代以上でのみ 2 割以上である（図 24）。

Q17A～Q17F では、中心市街地において、それぞれが 3 年前と比べて向上したか低下したかを質問している。なお、Q17A～Q17F のいずれにおいても、20 代では「3 年前を知らない」の割合が極めて高くなっていることに注意が必要である。

Q17A の防災面での安全性や快適性に関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「低下した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で 3%に満たない。年代別で見ると、「向上した」の割合は 30 代と 50 代では 2 割未満であるが、それ以外の年代では 2 割以上である（図 25）。

Q17B の防犯面での安全性や快適性に関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「低下した」の割合は、40 代を除く男女別・年代別のすべての層で 1 割未満であるが、40 代では 10.5%である。「向上した」の割合は 30 代を除く男女別・年代別のすべての層で 1 割以上であるが、30 代では 6.7%である（図 26）。

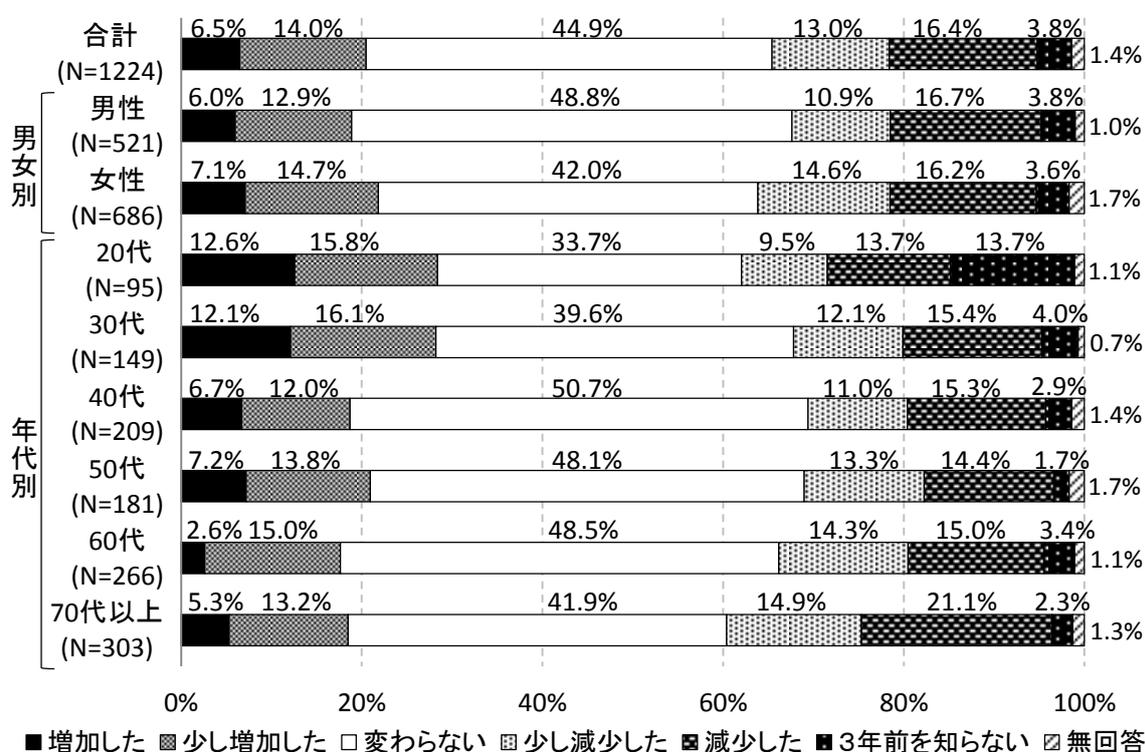


図 24 Q16 中心市街地に行く頻度が 3 年前と比べて増加したか

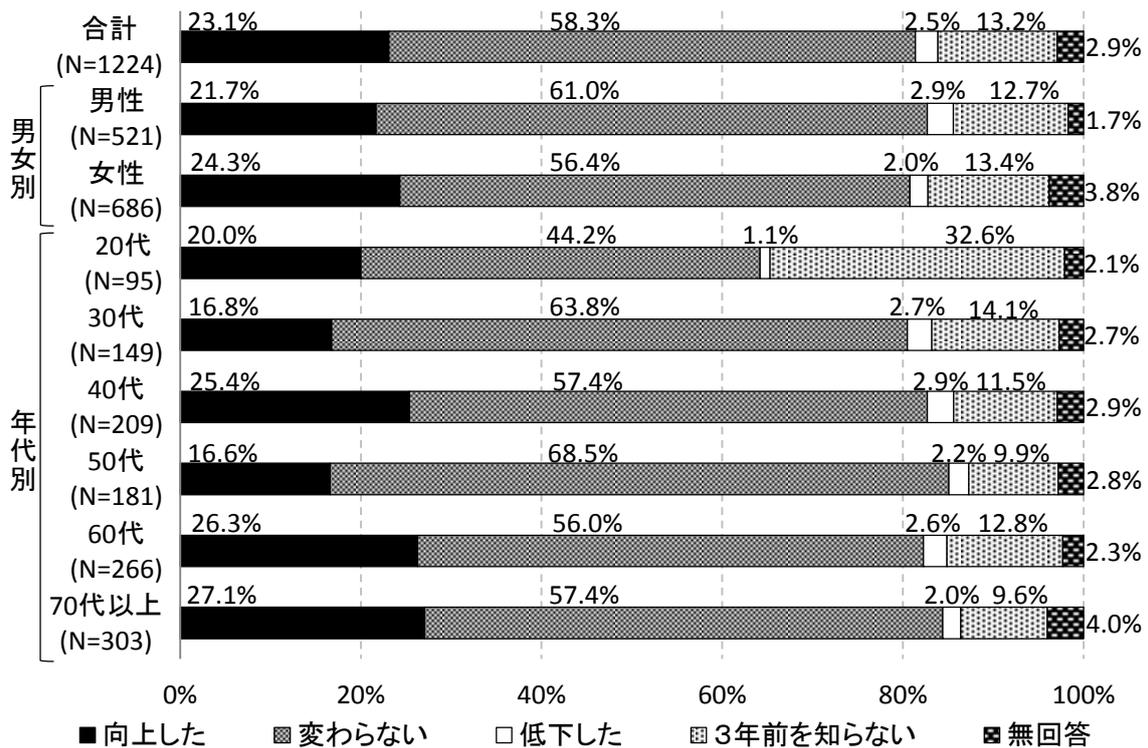


図 25 Q17A 中心市街地で3年前と比べて向上したか 防災面での安全性や快適性

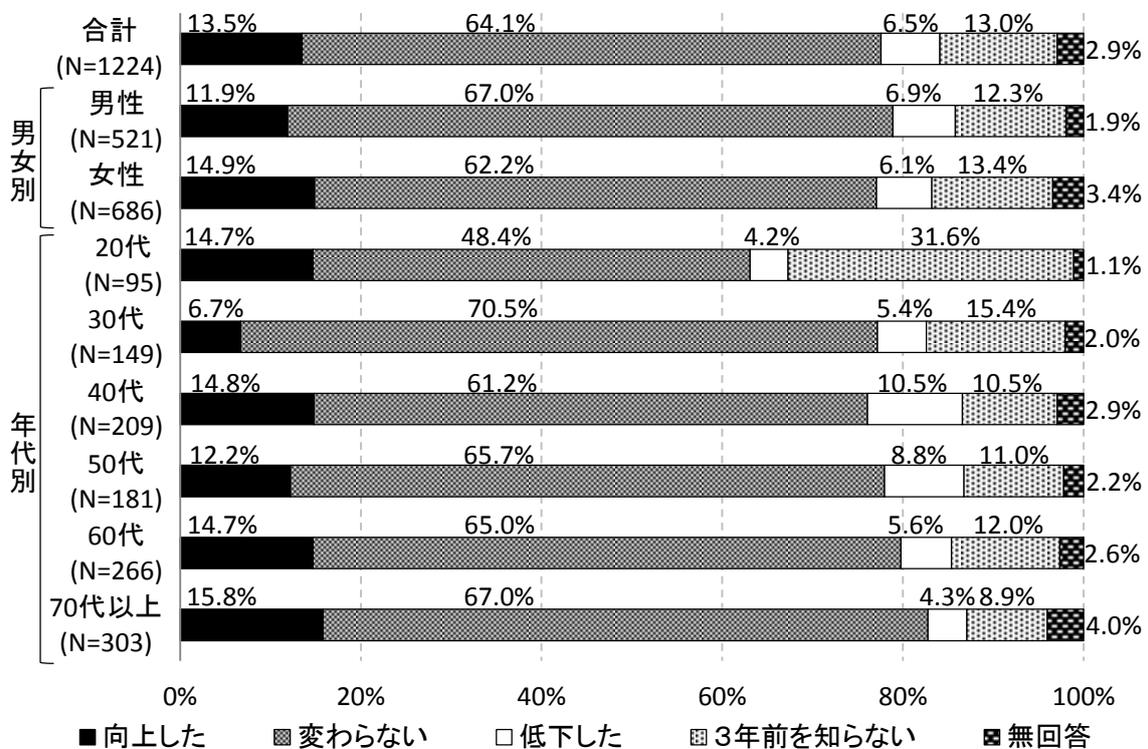


図 26 Q17B 中心市街地で3年前と比べて向上したか 防犯面での安全性や快適性

Q17C の居住環境に関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「低下した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で1割未満である。年代別で見ると、「向上した」の割合は30代で最も高く30.2%であるが、年代が上がるごとに減少し、70代以上では15.5%になる。なお、20代では23.2%である（図27）。

Q17D の公共交通機関に関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「低下した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で1割未満である。年代別で見ると、「向上した」の割合は20代で18.9%、70代以上で18.8%であり、その他の年代よりも高い割合である（図28）。

Q17E の歩行者にとっての歩きやすさに関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「低下した」の割合は、50代と70代以上では1割以上であり、その他の年代では1割未満である。「向上した」の割合は、30代で26.6%と最も高い割合であるが、年代が上がるごとに減少し、70代以上では15.2%になる。なお、20代では18.9%である（図29）。

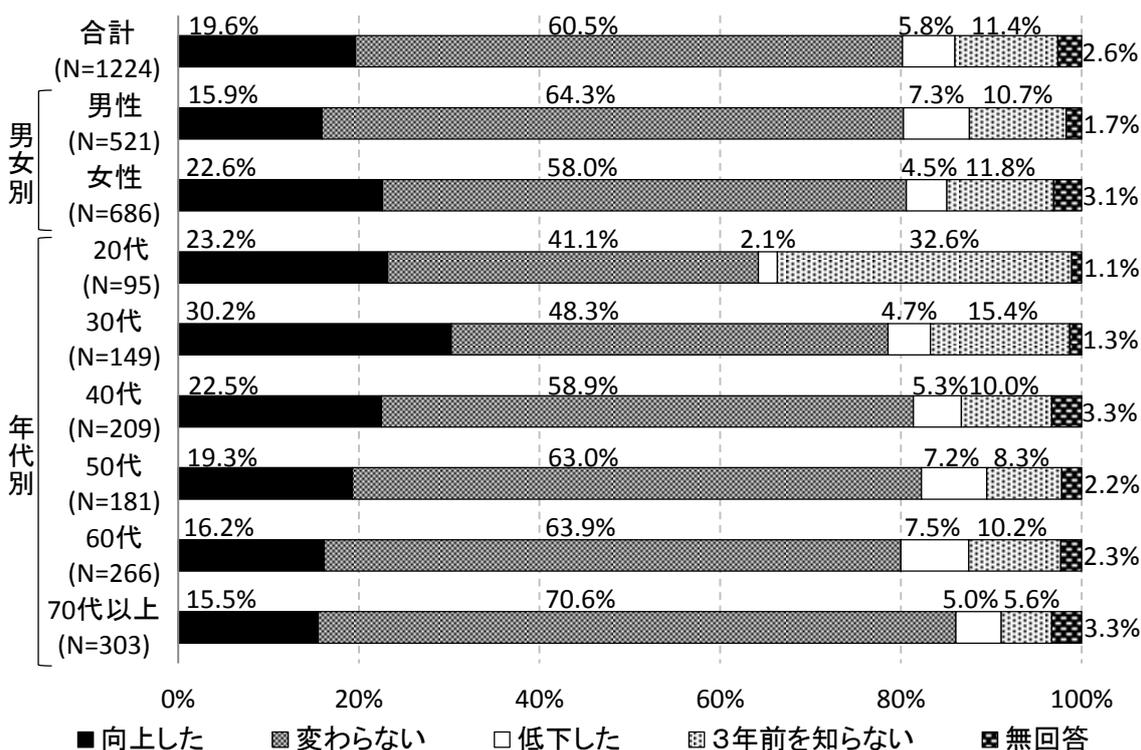


図27 Q17C 中心市街地で3年前と比べて向上したか 居住環境

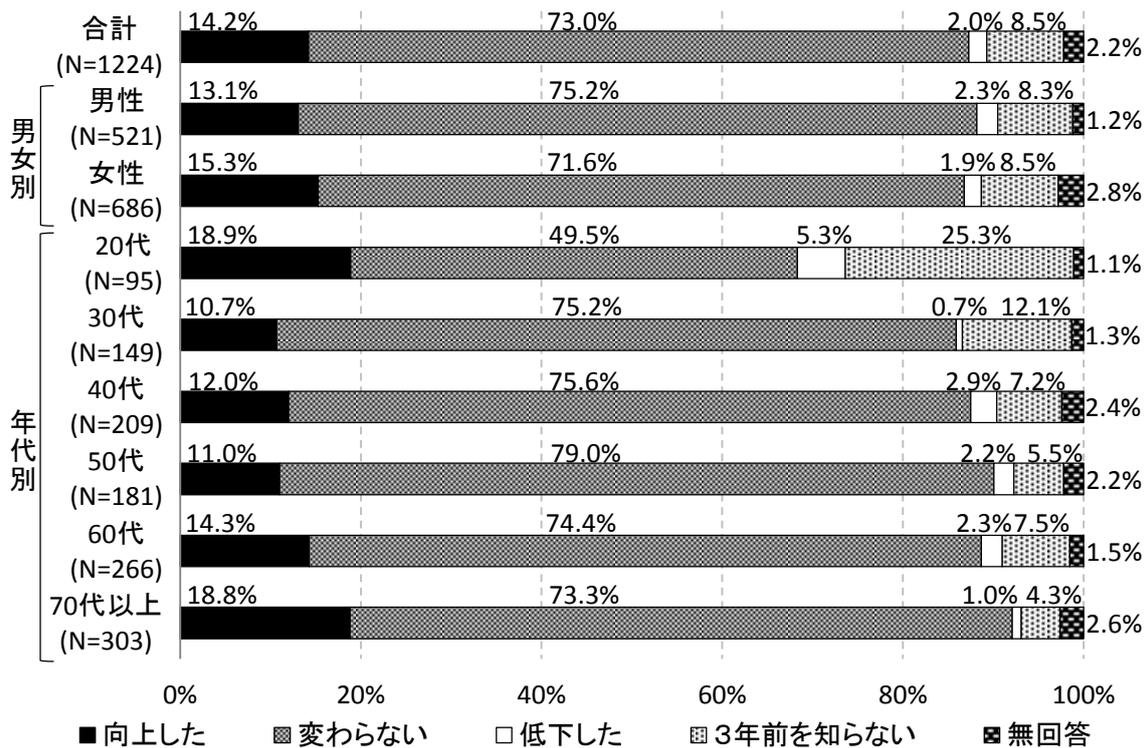


図 28 Q17D 中心市街地で3年前と比べて向上したか 公共交通機関

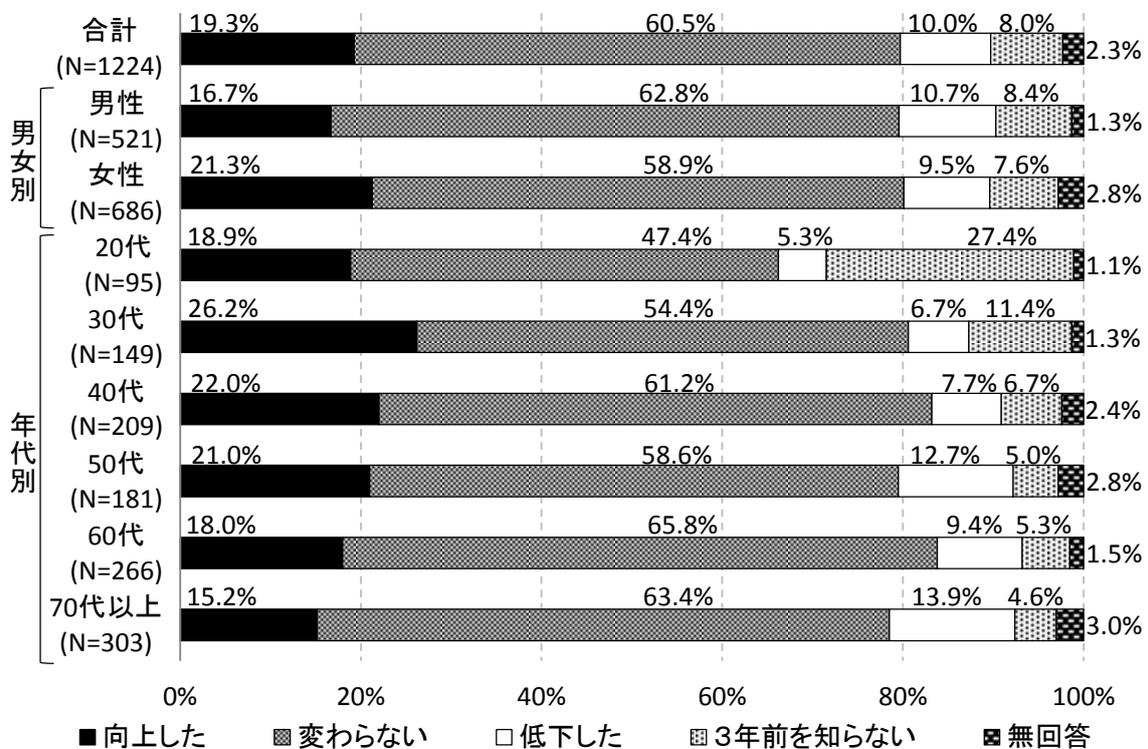


図 29 Q17E 中心市街地で3年前と比べて向上したか 歩行者にとっての歩きやすさ

Q17Fの風紀や治安に関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、20代を除く男女別・年代別のすべての層で「低下した」の割合の方が「向上した」の割合よりも高い。特に50代では、「低下した」の割合がすべての年代の中で唯一2割以上である。20代では「向上した」の割合の方が「低下した」の割合よりも低い(図30)。

Q18A~Q18Kでは、中心市街地において、それぞれが3年前と比べて増加したか減少したかを質問している。なお、Q18A~Q18Kのいずれにおいても、20代では「3年前を知らない」の割合が極めて高くなっていることに注意が必要である。

Q18Aの文化活動に関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で1割未満である。「増加した」の割合は、すべての年代の中で70代以上のみが2割以上である(図31)。

Q18Bのコミュニティ活動に関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で1割未満である。「増加した」の割合は、すべての年代の中で70代以上のみが2割以上である(図32)。

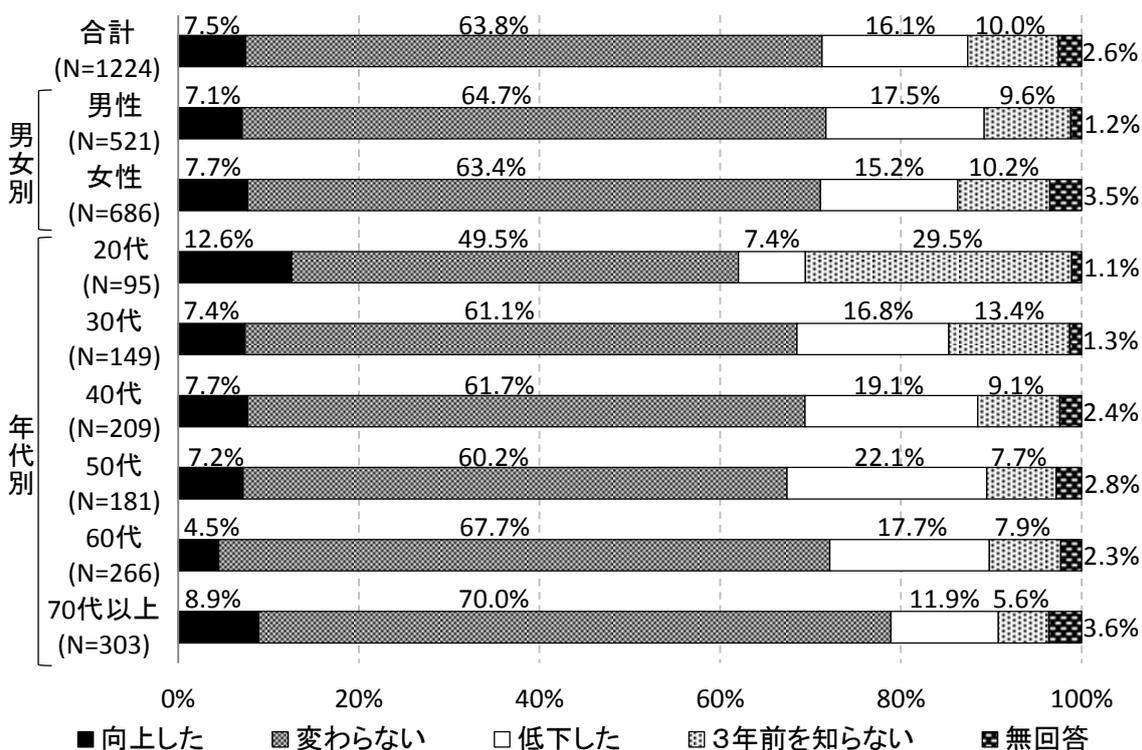


図30 Q17F 中心市街地で3年前と比べて向上したか 風紀や治安

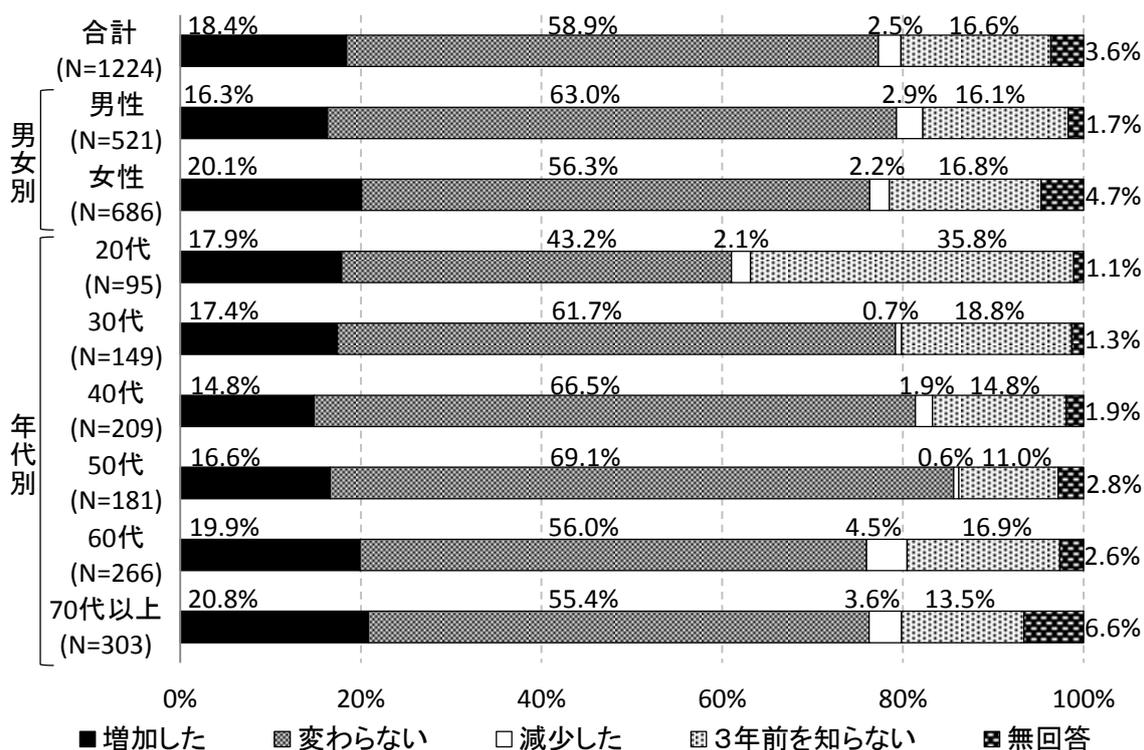


図 31 Q18A 中心市街地で3年前と比べて増加したか 文化活動

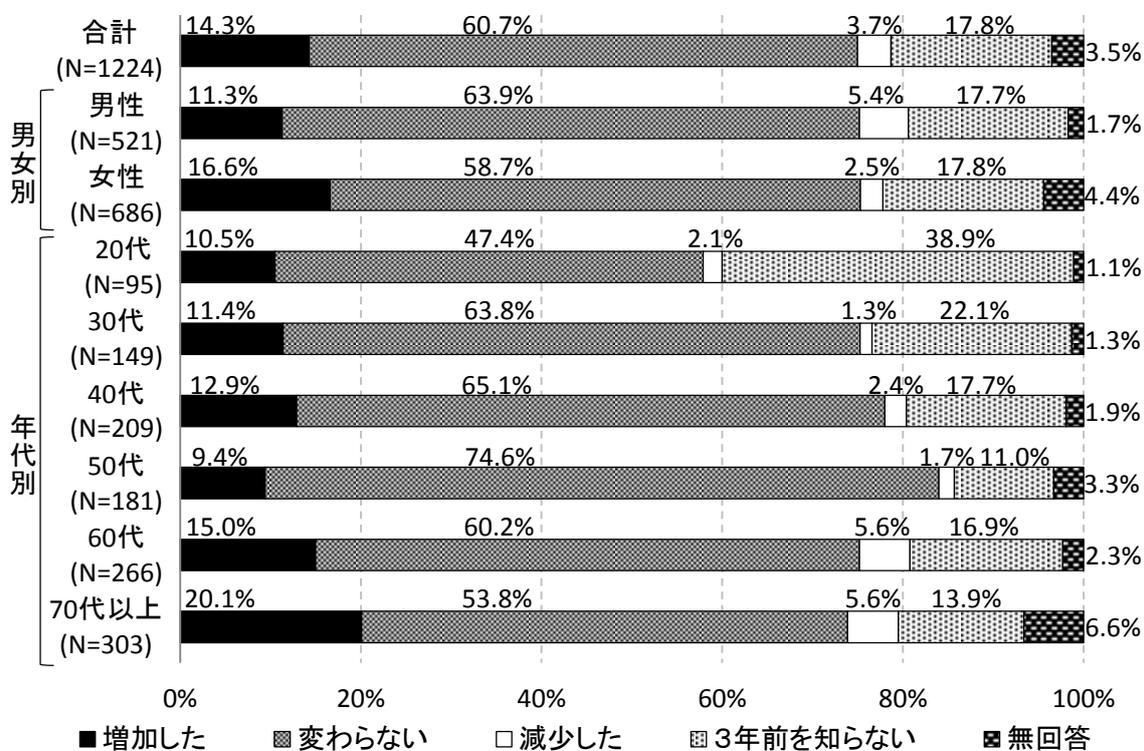


図 32 Q18B 中心市街地で3年前と比べて増加したか コミュニティ活動

Q18Cの商店街の魅力に関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「減少した」の割合は、20代を除く男女別・年代別のすべての層で1割以上であるが、20代では8.4%である。「増加した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で2割未満である（図33）。

Q18Dの百貨店などの大型店の魅力に関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「減少した」の割合は、20代と30代を除く男女別・年代別のすべての層で1割以上であるが、20代では9.5%、30代では9.4%である。「増加した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で2割未満である。特に70代以上は9.6%と最も低い割合である（図34）。

Q18Eの買い物やイベントでのにぎわいに関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で1割未満である。年代別で見ると、「増加した」の割合は、20代と70代以上では2割未満であるが、その他の年代では2割以上である。特に30代は26.8%であり、すべての年代の中で最も高い割合である（図35）。

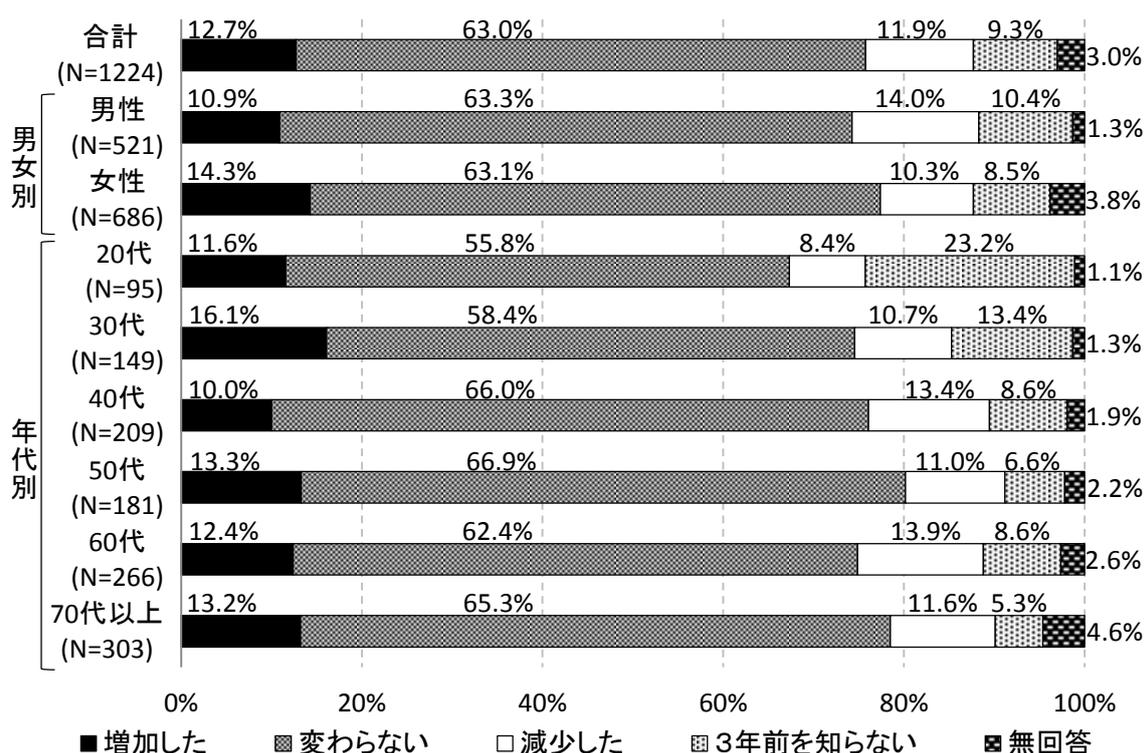


図33 Q18C 中心市街地で3年前と比べて増加したか 商店街の魅力

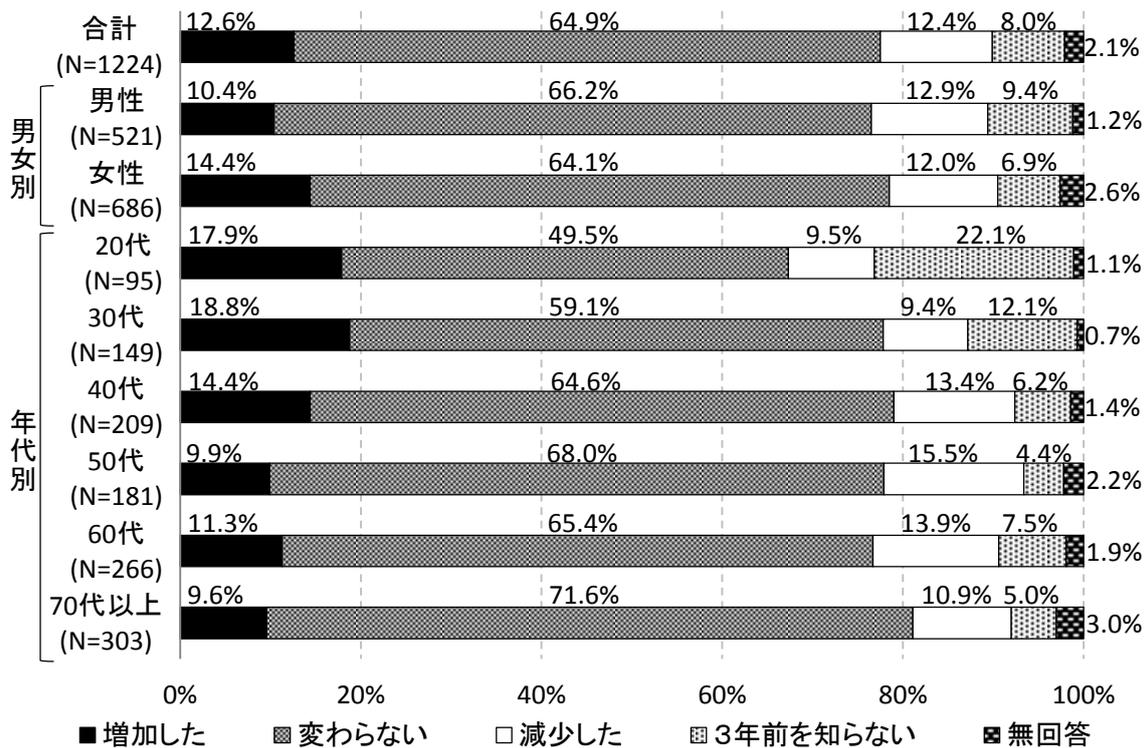


図 34 Q18D 中心市街地で3年前と比べて増加したか 百貨店などの大型店の魅力

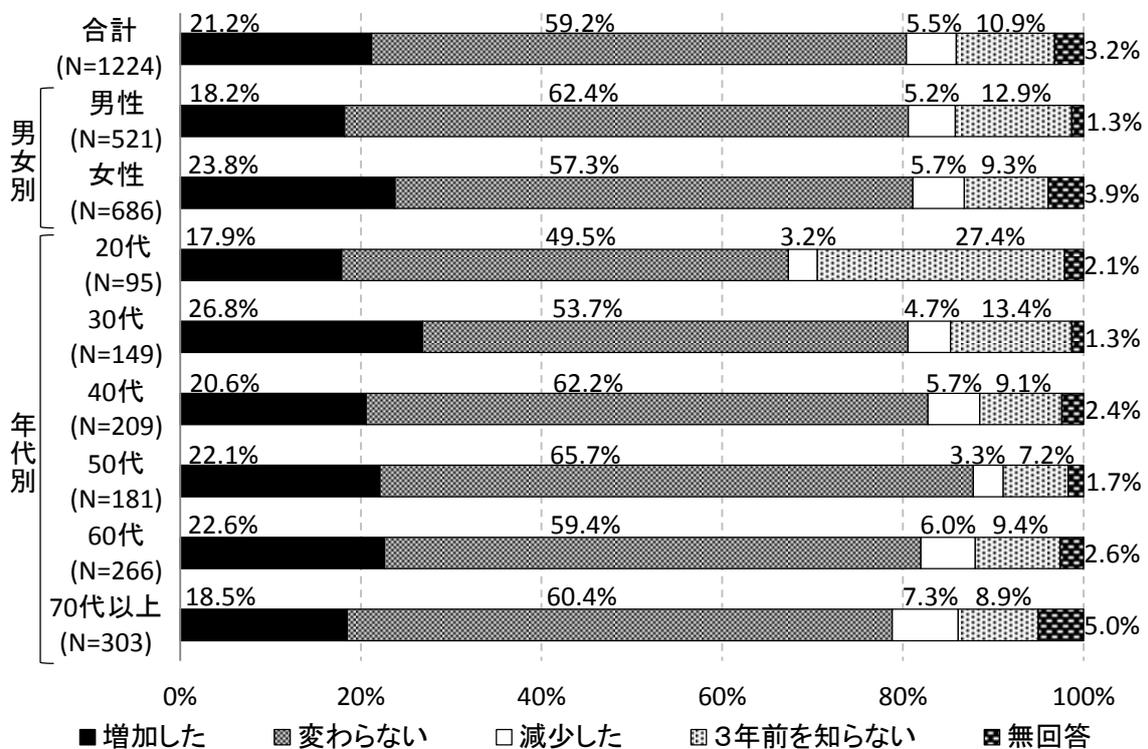


図 35 Q18E 中心市街地で3年前と比べて増加したか 買い物やイベントでのにぎわい

Q18Fの魅力的な飲食店に関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別に見ると、「減少した」の割合は、20代では5.3%であるが年代が上がるごとに増加し、70代以上では12.9%になる。「増加した」の割合は、30代で最も高く36.2%であるが年代が上がるごとに減少し、70代以上では15.5%になる。なお、20代では31.6%である（図36）。

Q18Gのオフィスなど業務施設に関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、男女別・年代別のすべての層で「増加した」と「減少した」の割合はいずれも1割未満である。（図37）。

Q18Hの病院などの医療機関に関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で1割未満である。年代別で見ると、「増加した」の割合は20代で最も低く14.7%であるが、その他の年代では3割程度である（図38）。

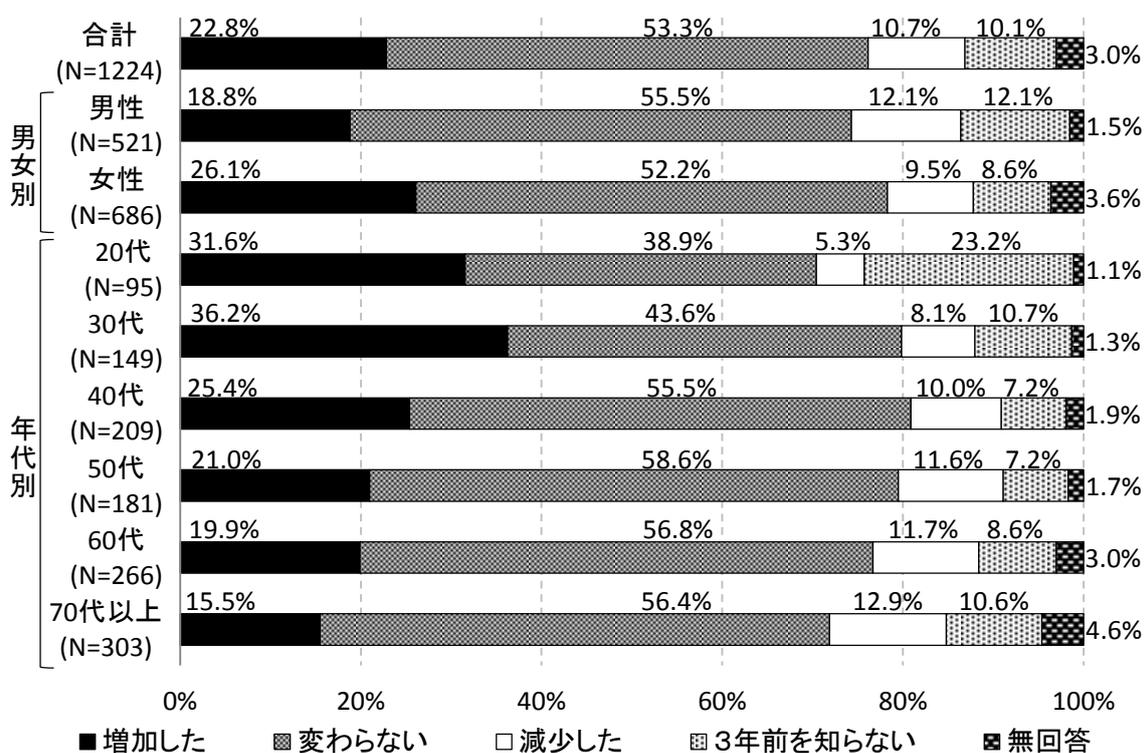


図 36 Q18F 中心市街地で3年前と比べて増加したか 魅力的な飲食店

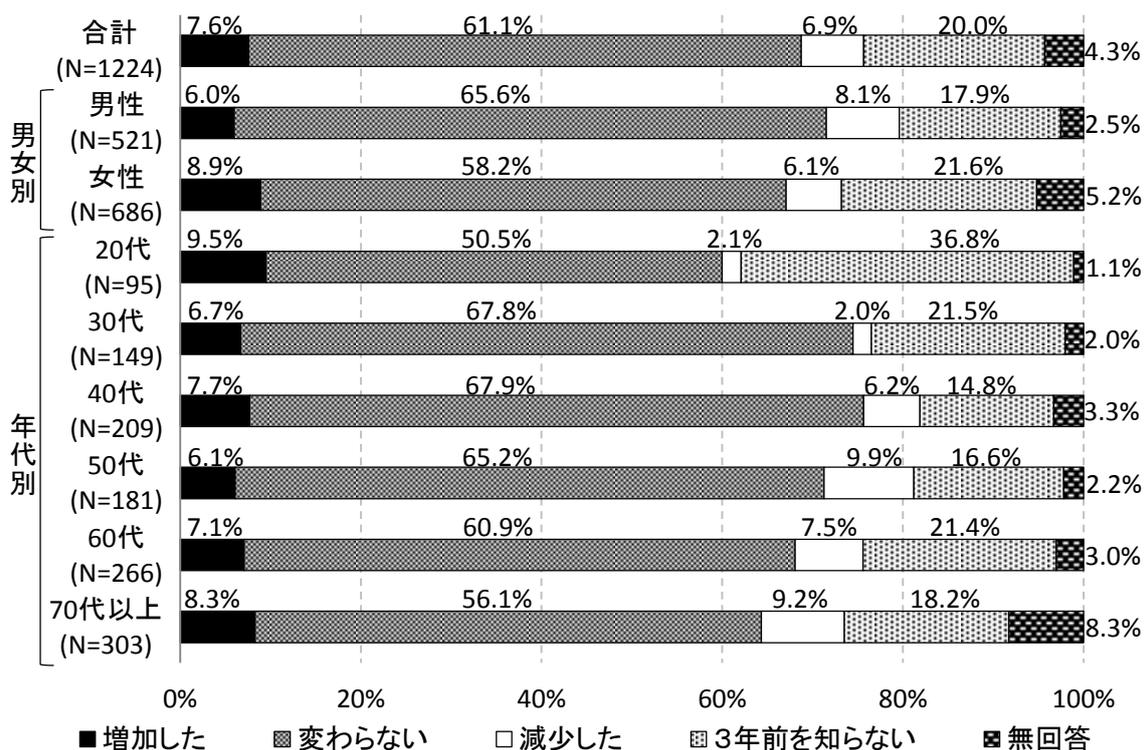


図 37 Q18G 中心市街地で3年前と比べて増加したか オフィスなど業務施設

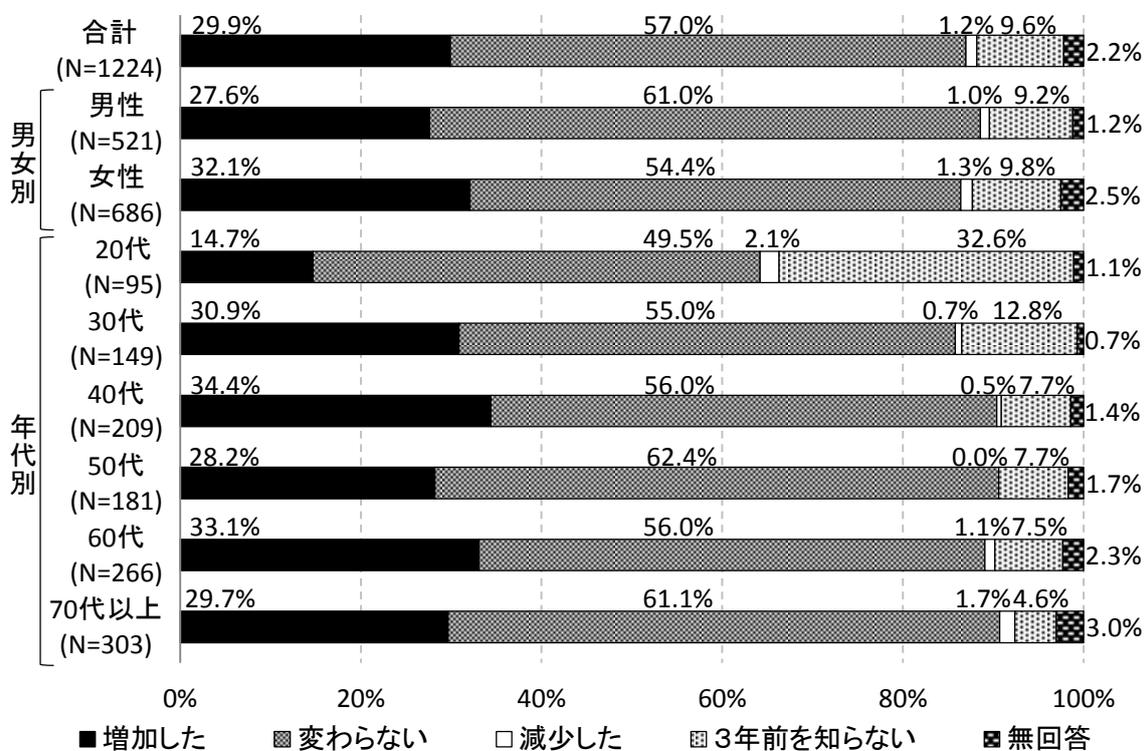


図 38 Q18H 中心市街地で3年前と比べて増加したか 病院などの医療機関

Q18I の道路の渋滞に関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で1割未満である。年代別で見ると、「増加した」の割合は60代でのみ3割以上である。また、20代が最も低い割合であり23.2%である（図 39）。

Q18J の駐輪場に関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で1割未満である。年代別で見ると、「増加した」の割合は20代でのみ3割以上である。また、70代以上が最も低い割合であり、22.1%である（図 40）。

Q18K の街なかの緑や潤いに関しては、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「減少した」の割合は、20代と30代でのみ1割未満である。「増加した」の割合は、30代と60代では1割以上であるが、その他の年代では1割未満である（図 41）。

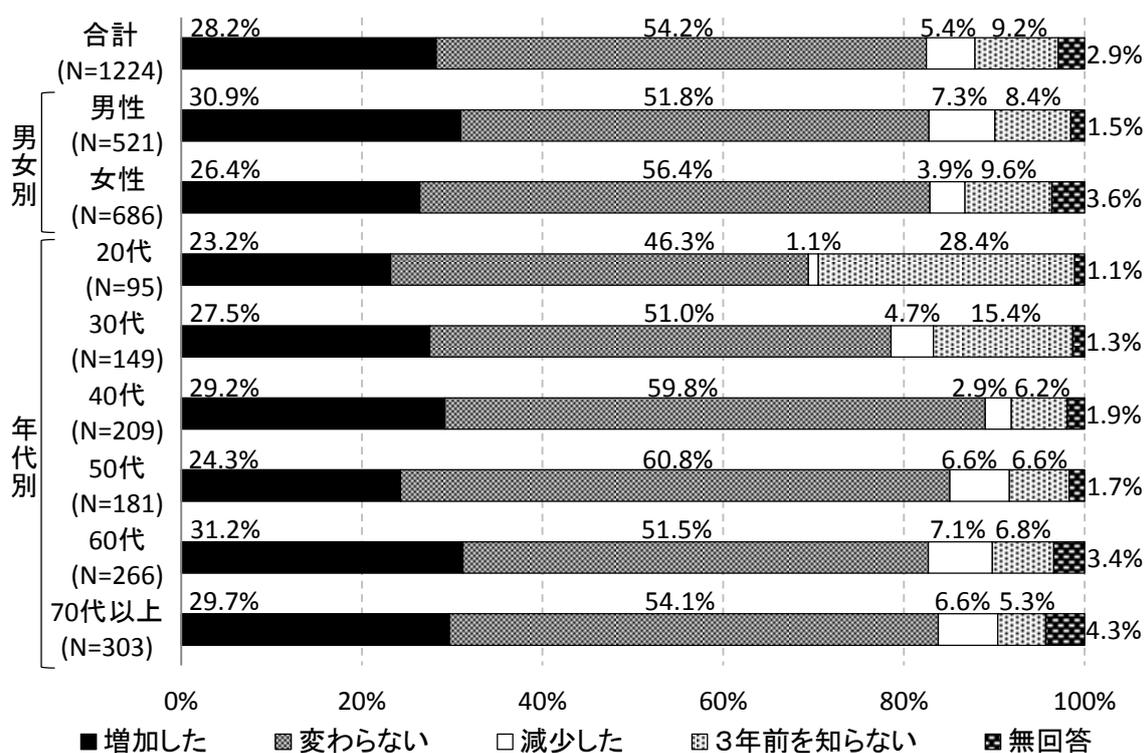


図 39 Q18I 中心市街地で3年前と比べて増加したか 道路の渋滞

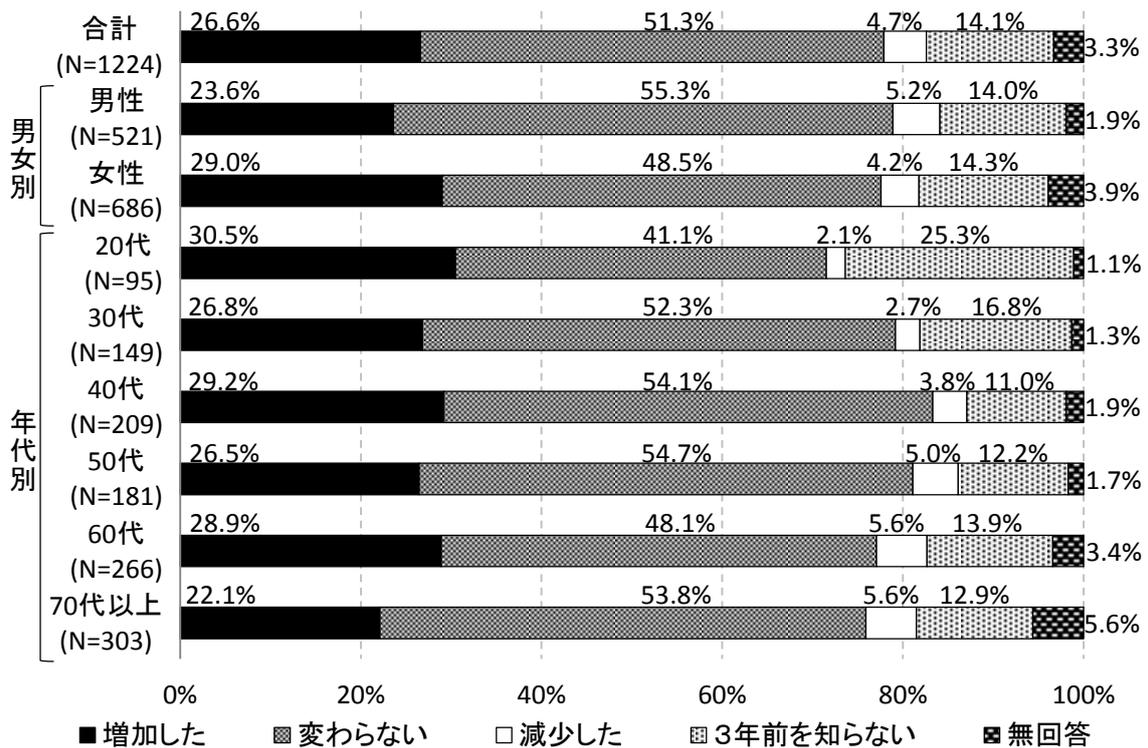


図 40 Q18J 中心市街地で3年前と比べて増加したか 駐輪場

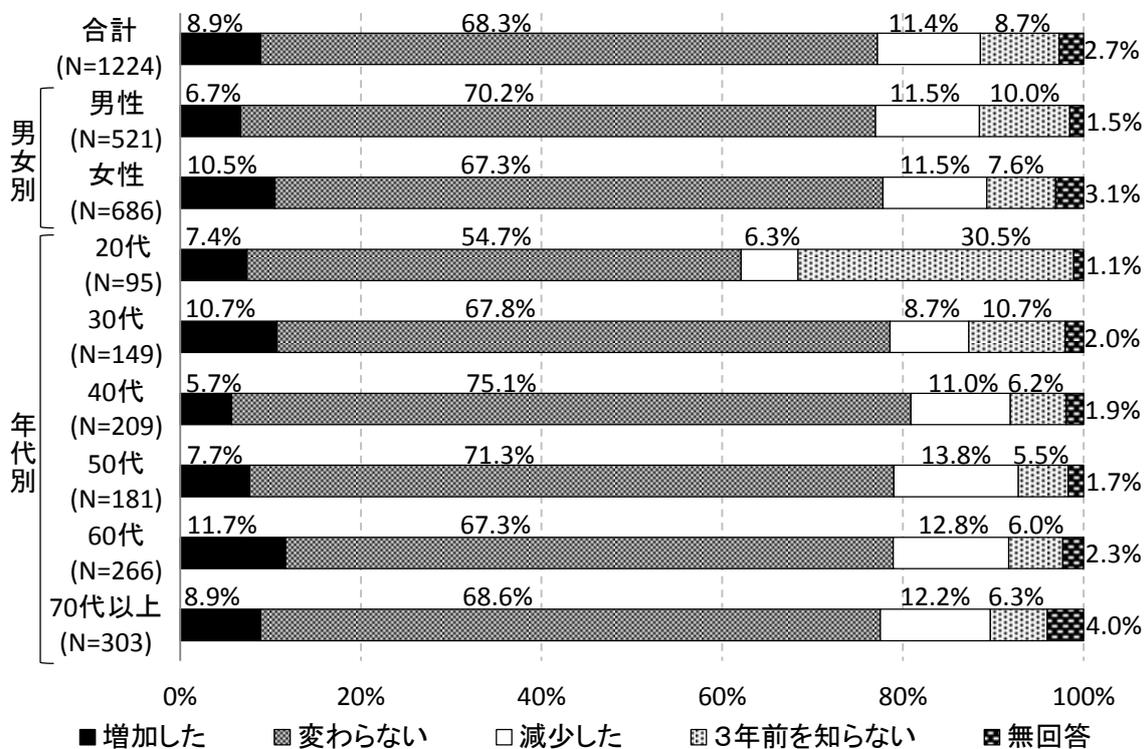


図 41 Q18K 中心市街地で3年前と比べて増加したか 街なかの緑や潤い

Q19 の中心市街地で必要な取り組みに関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「安心・安全に生活できるよう、治安・防犯の向上を図る」が最も高い割合であり、67.4%である。続いて「休日や夜間の突然の病気やケガで困らないよう、病院など医療機能の充実を図る」、「高齢者等も安全・快適に生活できるよう、街のバリアフリー化を図る」、「街路樹や植栽、公園の整備など、緑豊かな住居環境の向上を図る」の順に高く、いずれも4割以上5割未満である（図42）。

Q19 を男女別で見ると、「街路樹や植栽、公園の整備など、緑豊かな住居環境の向上を図る」の割合は男性で46.4%、女性で36.4%であり、男性の方が10ポイント高く、最も男女差が大きい（図43）。

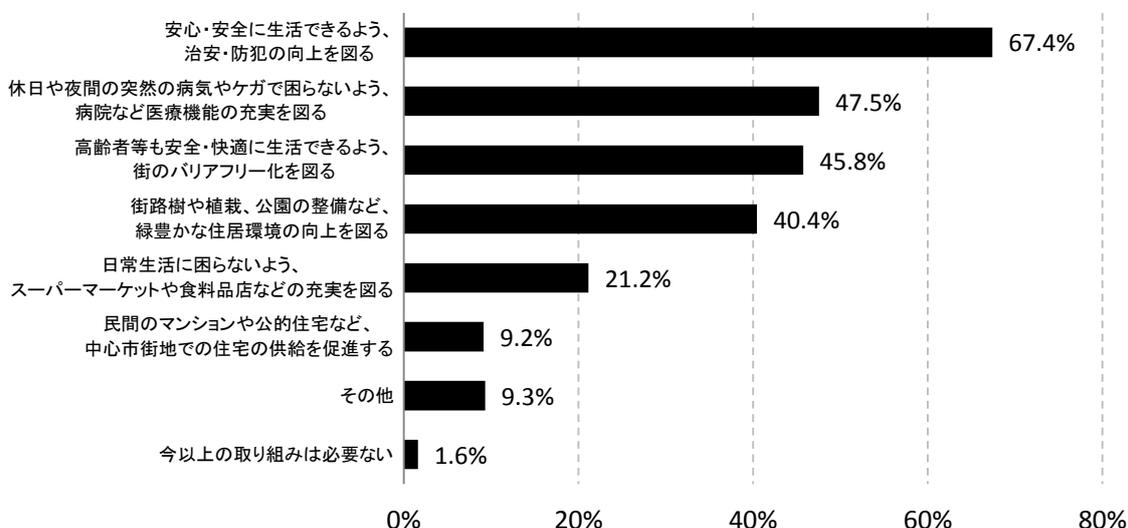


図42 Q19 中心市街地で必要な取り組み（複数回答・全体 N=1224）

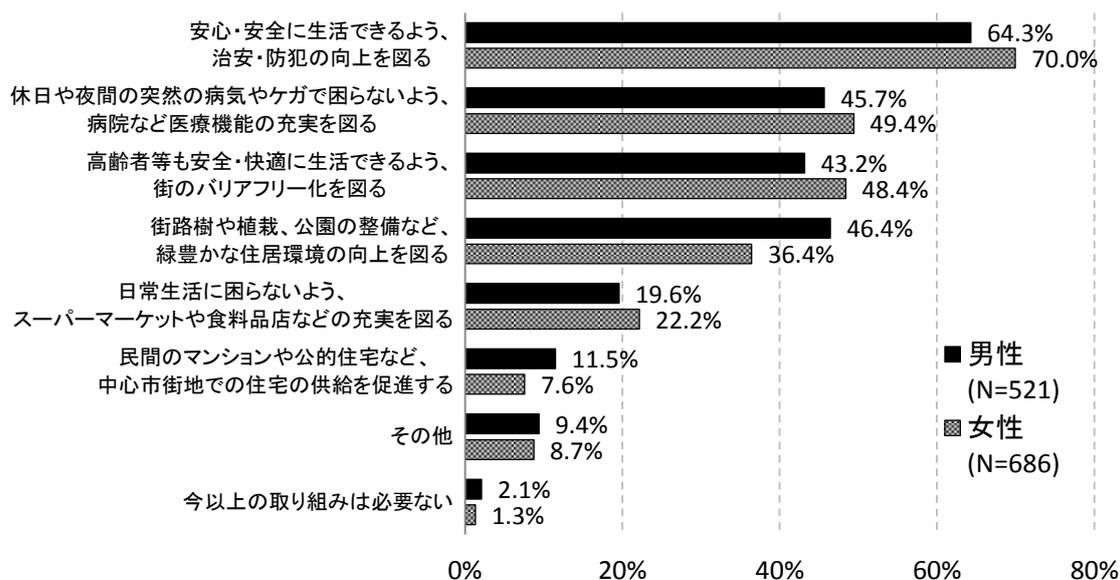


図43 Q19 中心市街地で必要な取り組み（複数回答・男女別）

Q19 を年代別で見ると、「高齢者等も安全・快適に生活できるよう、街のバリアフリー化を図る」の割合は、20代では23.2%であるが、年代が上がるごとに増加し、70代以上では59.7%である（図44）。

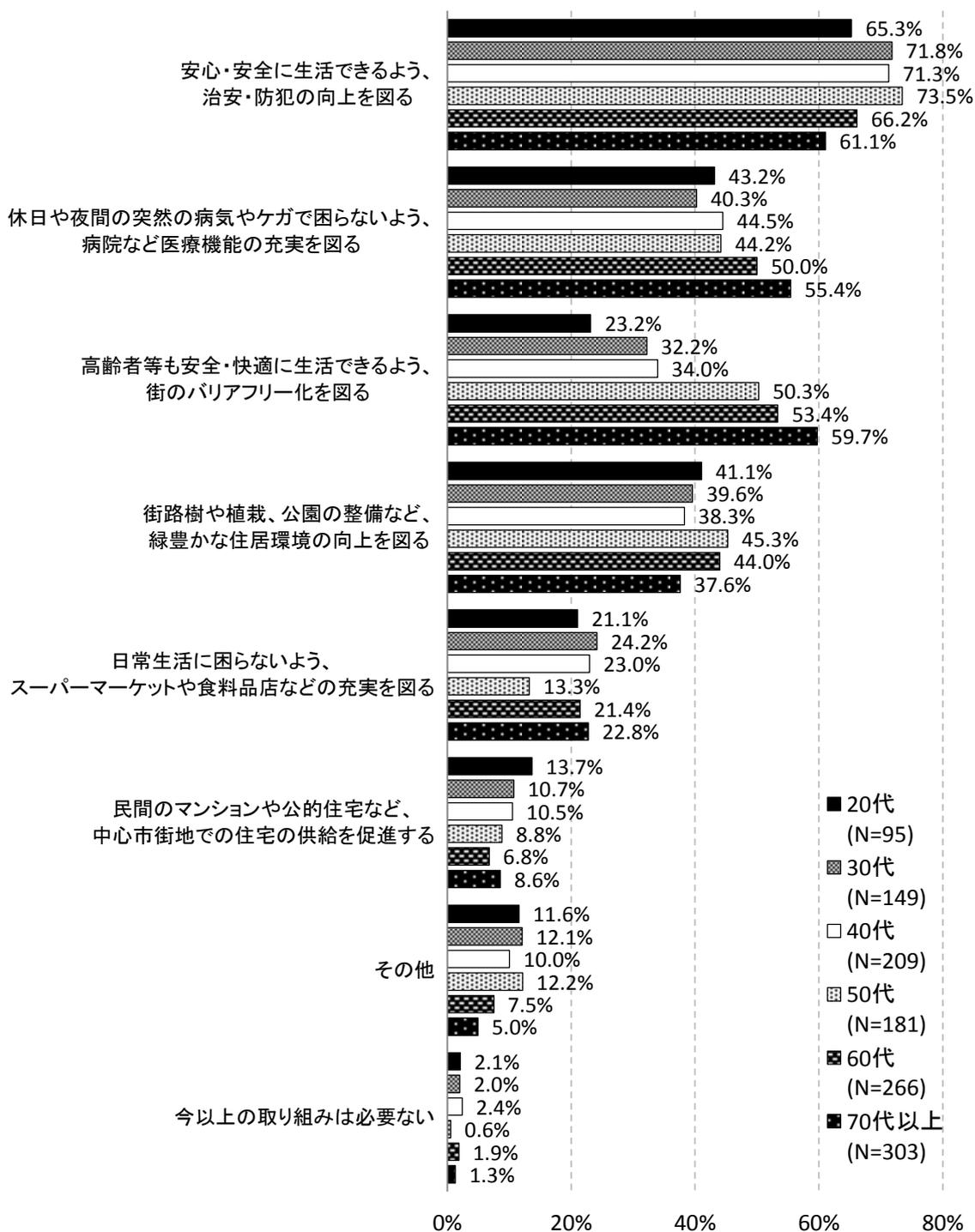


図44 Q19 中心市街地で必要な取り組み（複数回答・年代別）

Q20 の地域のボランティア活動への参加頻度に関しては、男女別・年代別のすべての層で「まったくしない」が最も高い割合である。数年に1回以上の頻度でボランティア活動に参加している人の割合は20代で最も低く16.9%であるが、年代が上がるごとに増加し、60代では48.2%になる。ただし70代以上では減少して44.2%である(図45)。

Q21Aの高槻シティハーフマラソンへの参加頻度に関しては、男女別・年代別のすべての層で「全く参加したことがない」の割合が9割以上であり、最も高い割合である。参加したことがある人の割合は、男女別で見ると、男性で6.1%、女性で3.4%であり男性の方が3ポイントほど高い。年代別で見ると、30代が6.7%と最も高い(図46)。

Q21Bの高槻まつりへの参加頻度に関しては、合計で見ると、参加したことがある人の割合は58.7%である。年代別で見ると、その割合は、30代で71.8%と最も高いが、年代が上がるごとに減少し、70代以上では46.2%である。なお、20代では66.3%である。また、20代から50代では「時々参加している」の割合が最も高いが、60代以上では「全く参加したことがない」の割合が最も高い(図47)。

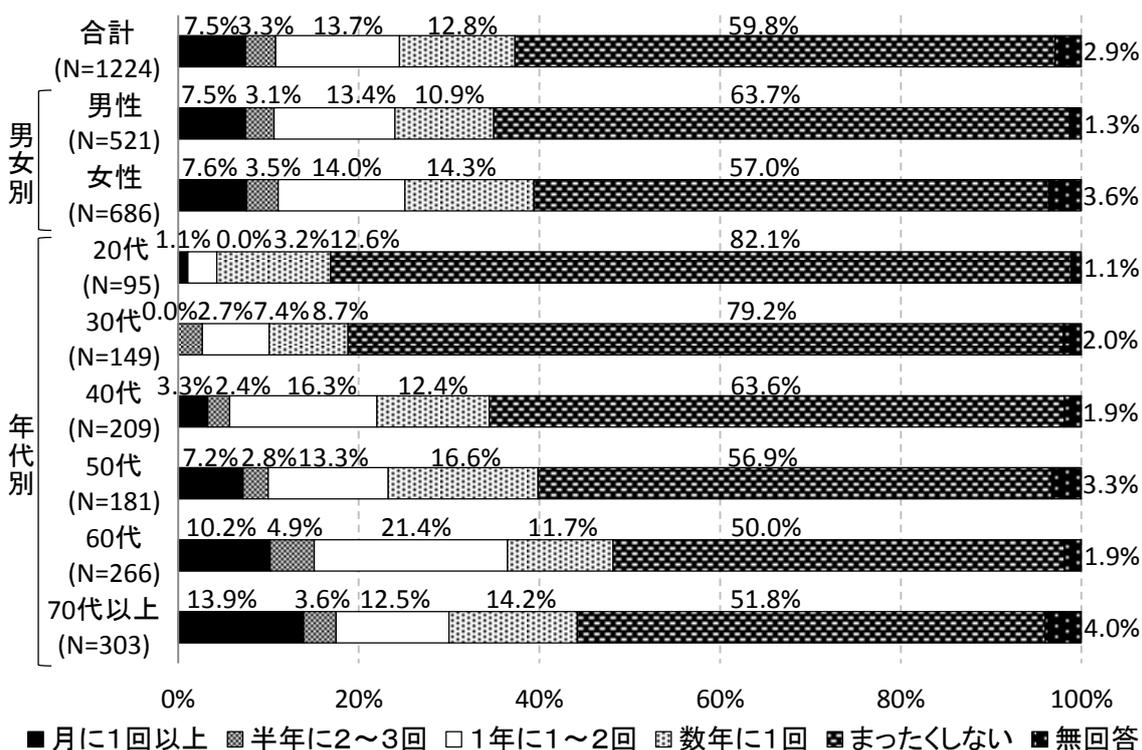


図45 Q20 地域のボランティア活動への参加頻度

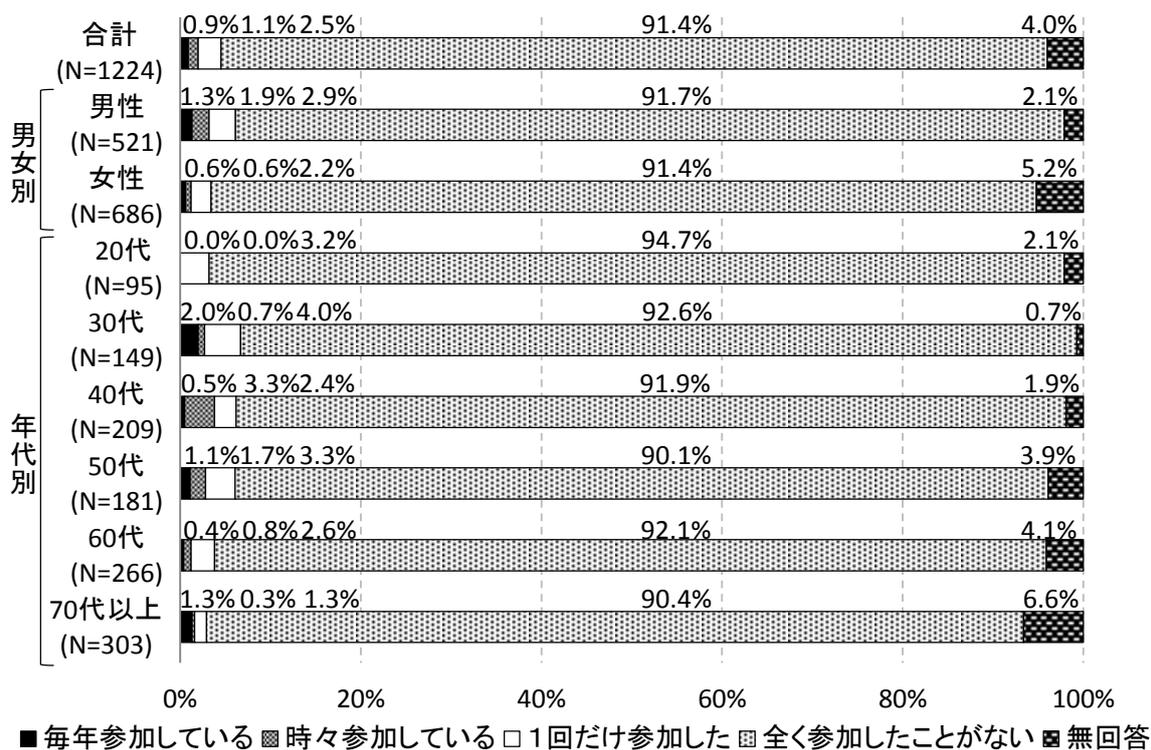


図 46 Q21A 高槻シティハーフマラソンへの参加頻度

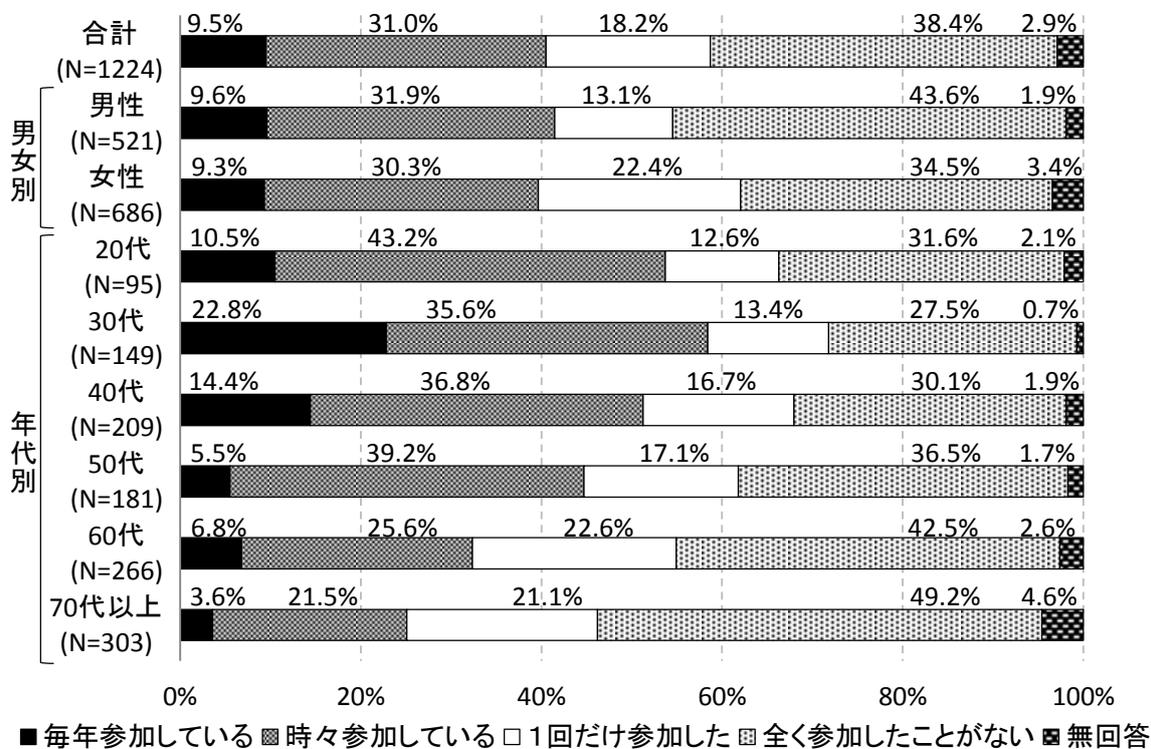


図 47 Q21B 高槻まつりへの参加頻度

Q21Cの高槻ジャズストリートへの参加頻度に関しては、男女別・年代別のすべての層で5割以上が「全く参加したことがない」と回答し、最も高い割合である。参加したことがある人の割合は、年代別で見ると40代で最も高く38.7%であり、年代が上がるごとに減少、また下がるごとに減少している。20代では26.4%、70代以上では30.7%である(図48)。

Q21Dの関西大学の行事(講演会や学園祭など)への参加頻度に関しては、男女別・年代別のすべての層で「全く参加したことがない」の割合が8割以上であり最も高い。1回以上の頻度での参加は、20代が13.7%であり最も高い割合である(図49)。

Q22の高槻市に観光客を呼び込みたいかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「どちらともいえない」が最も高い割合である。合計で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は30.6%である。年代別で見ると、その割合は70代以上が最も高く35.3%であり、30代が最も低く22.8%である(図50)。

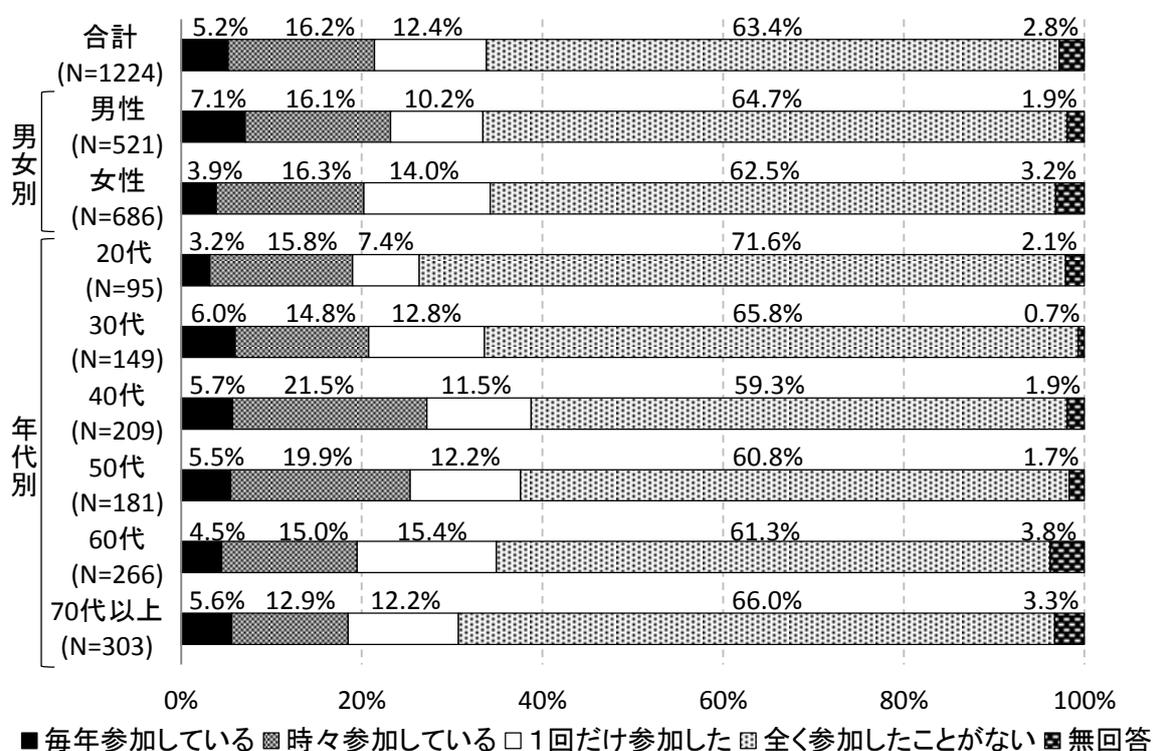


図48 Q21C 高槻ジャズストリートへの参加頻度

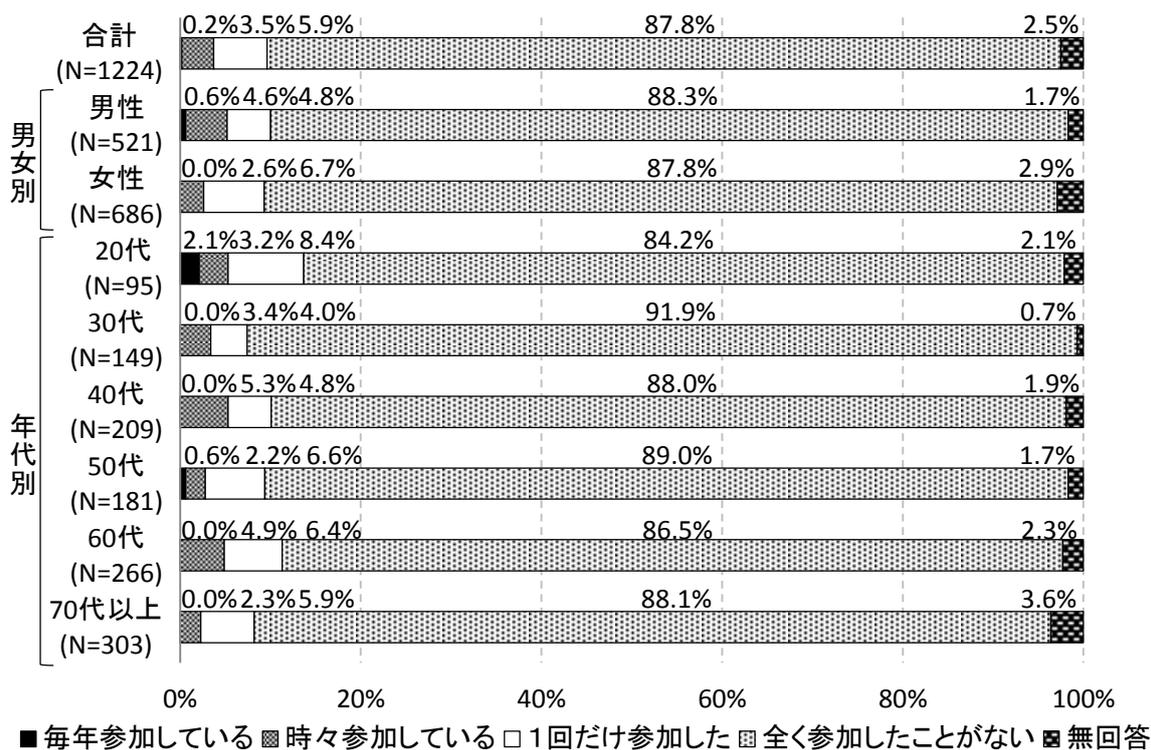


図 49 Q21D 関西大学の行事(講演会や学園祭など)への参加頻度

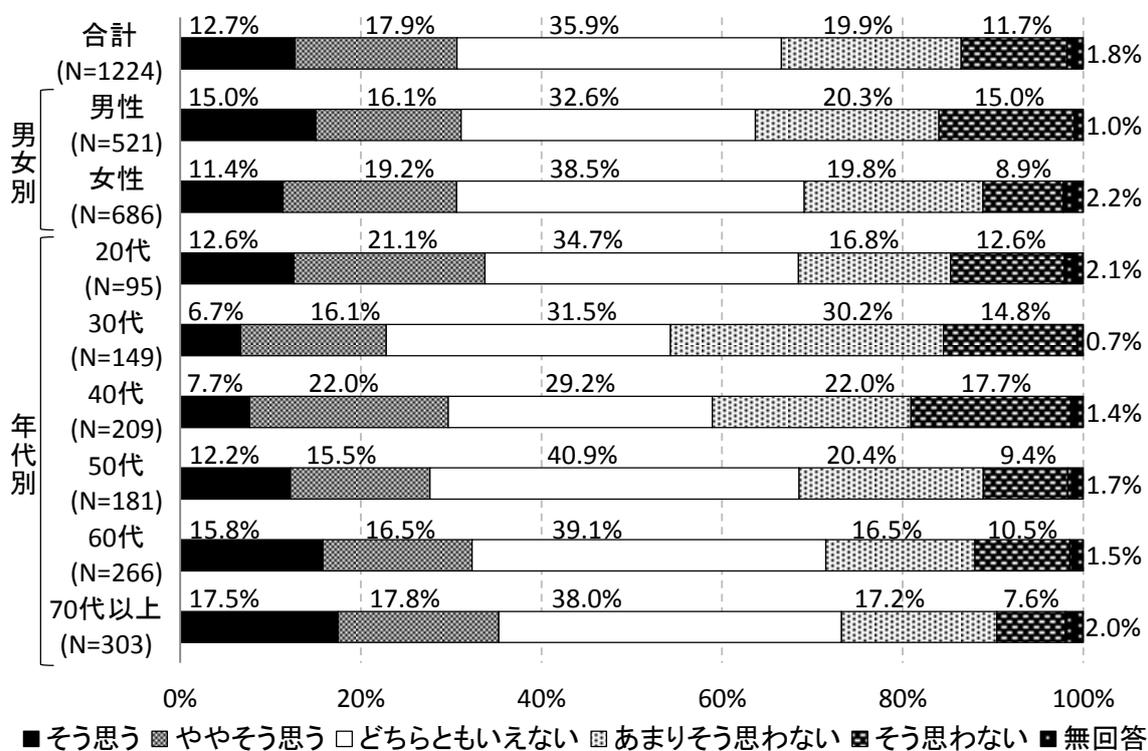


図 50 Q22 高槻市に観光客を呼び込みたいか

Q23 の高槻市に地域ブランドがあると思うかに関しては、50 代を除く男女別・年代別のすべての層で「あまりそう思わない」が最も高い割合であり 3 割以上である。50 代では「ややそう思う」が 32.0%であり最も高い割合である。男女別で見ると、その割合は男性で 24.3%、女性で 31.3%であり、女性の方が 7 ポイントほど高い (図 51)。

Q24 の高槻市の歴史文化財に関心があるかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「やや関心がある」が最も高い割合である。年代別で見ると、30 代以上では「やや関心がある」の割合は「あまり関心がない」の割合と比較して 10 ポイント以上高いが、20 代においては 1 ポイントほどの差である (図 52)。

Q25 の文化財を次世代に伝えていくことを重要だと思うかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「重要だと思う」が最も高い割合で 5 割以上である。また、男女別・年代別のすべての層で「重要ではないと思う」または「まったく重要ではないと思う」と回答した人の割合は 1 割未満である。年代別で見ると、「非常に重要だと思う」または「重要だと思う」と回答した人の割合は、20 代で最も低く 62.1%であるが、年代が上がるごとに増加し、60 代では 77.4%である。70 代以上では少し減少し 75.9%である (図 53)。

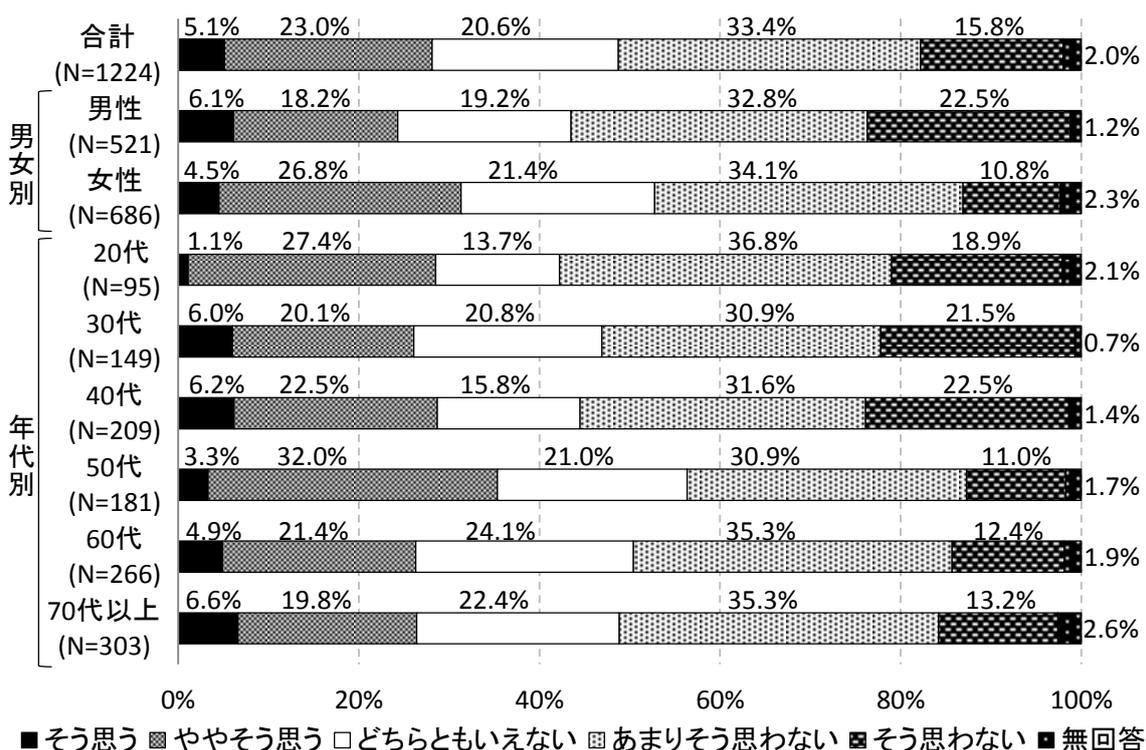


図 51 Q23 高槻市に地域ブランドがあると思うか

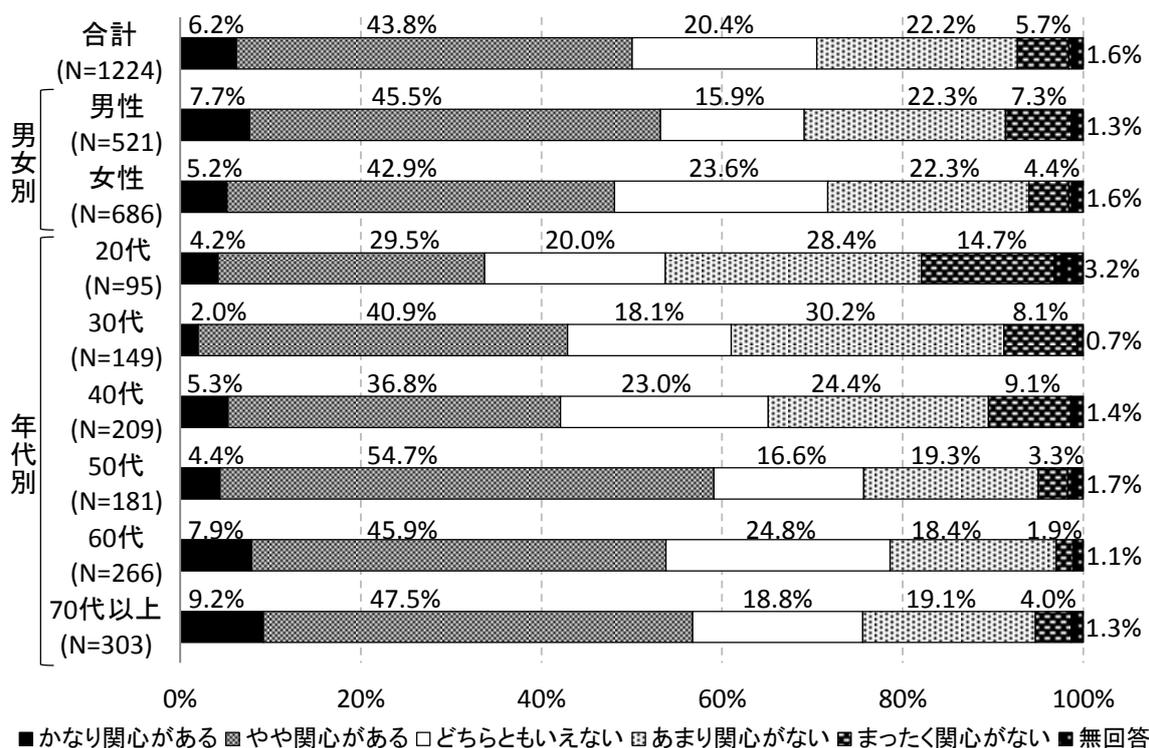


図 52 Q24 高槻市の歴史文化財に関心があるか

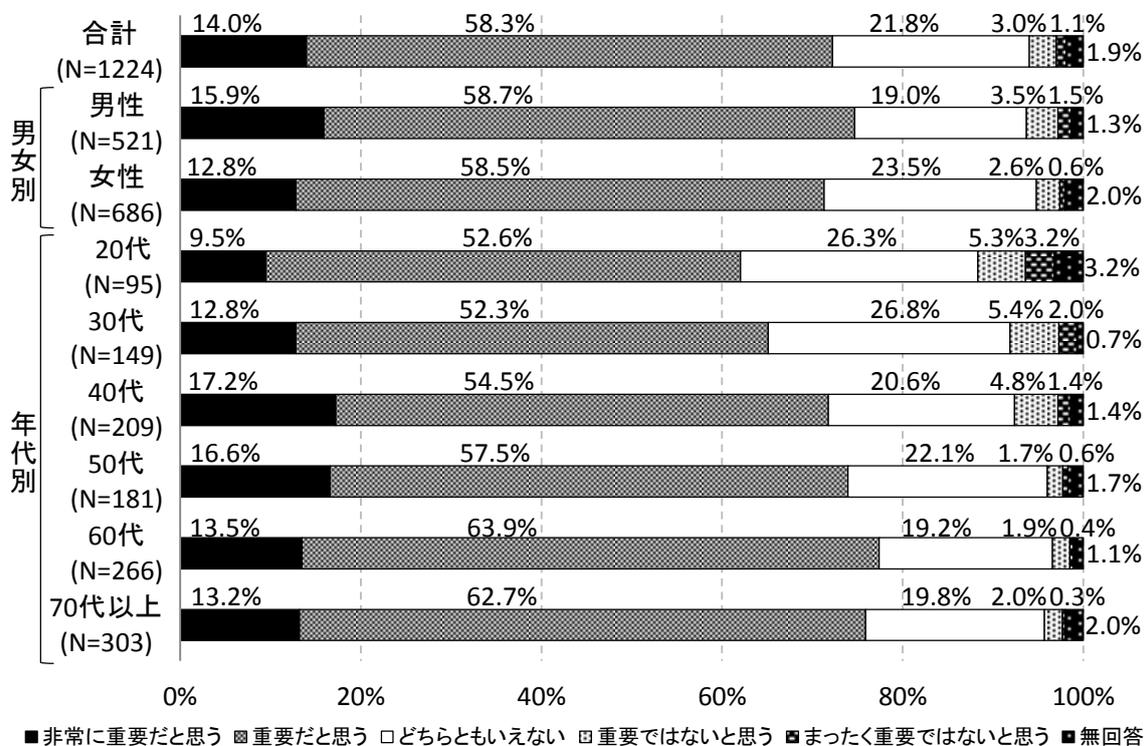


図 53 Q25 文化財を次世代に伝えていくことを重要だと思うか

Q26 の関心が高い環境問題の話題に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「地球温暖化」、「異常気象」、「食品・飲料水の安全性」、「大気汚染・PM2.5」の順に高い割合であり、2割以上である（図 54）。

Q26 を男女別で見ると、「地球温暖化」、「異常気象」、「食品・飲料水の安全性」、「大気汚染・PM2.5」はいずれも女性の方が高い割合である。特に「食品・飲料水の安全性」は最も男女差が大きく、12ポイントほど女性の方が高い。「新エネルギー・再生可能エネルギー」においては男性の方が高い割合であり、男性で21.5%、女性で13.8%である（図 55）。

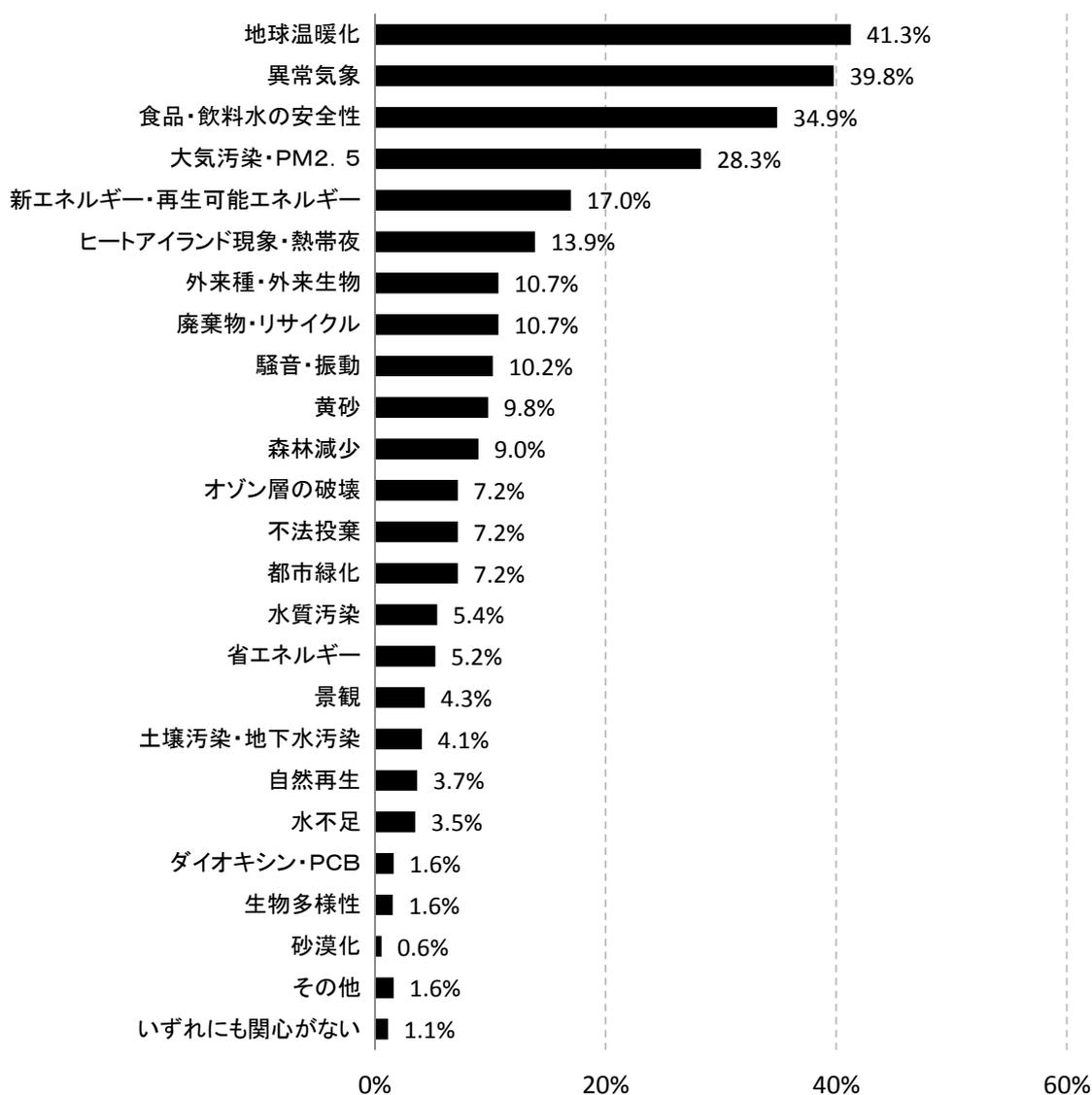


図 54 Q26 関心が高い環境問題の話題（複数回答・全体 N=1224）

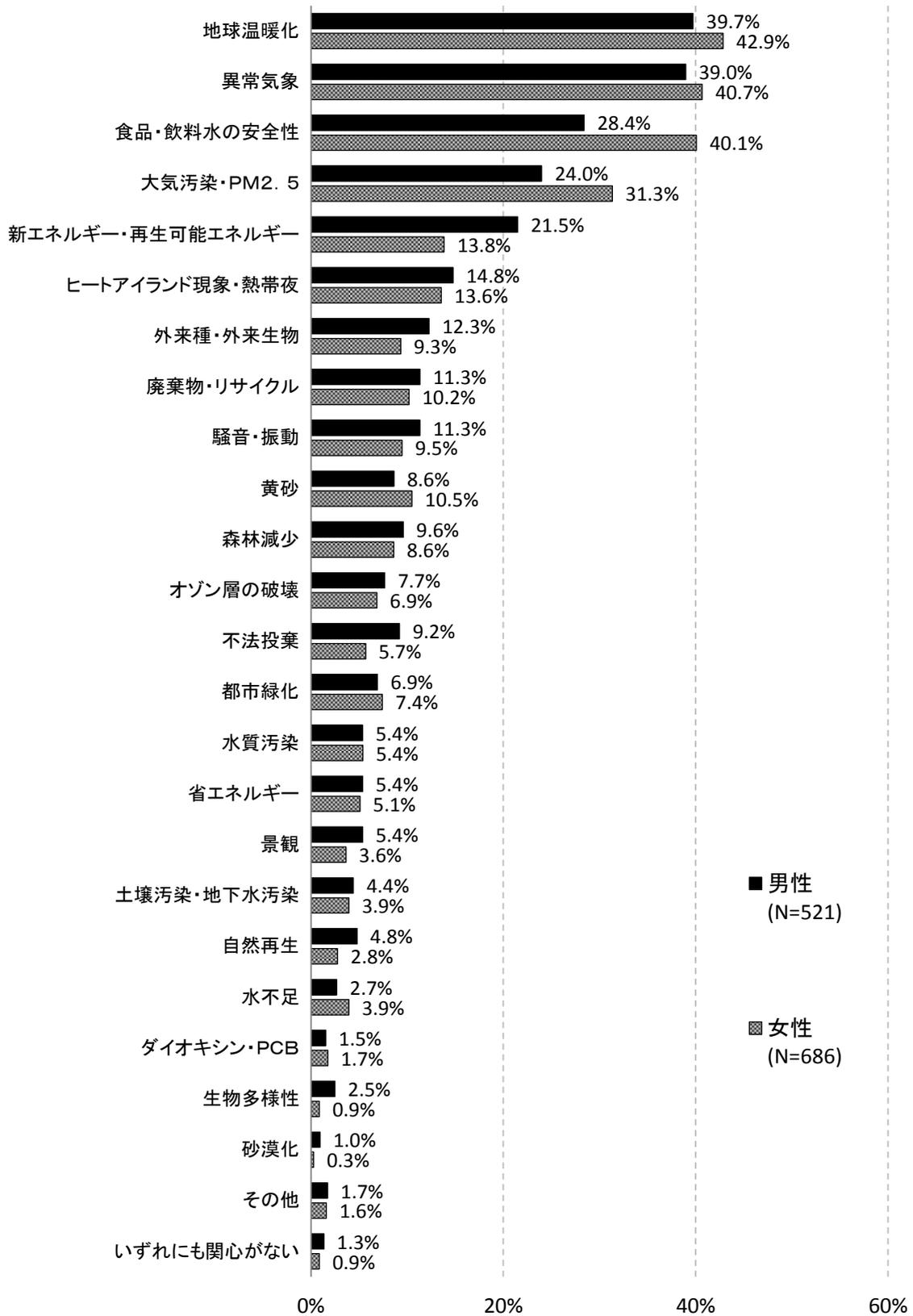


図 55 Q26 関心が高い環境問題の話題（複数回答・男女別）

Q26 を年代別で見ると、「地球温暖化」では 70 代以上が最も高い割合であり 47.5%である。「異常気象」では 50 代が最も高い割合であり 48.1%である。「食品・飲料水の安全性」では 60 代が最も高い割合であり 39.5%である。「大気汚染・PM2.5」では 30 代が最も高い割合であり 39.6%である（表 5, 図 56）。

表 5 Q26 関心が高い環境問題の話題（複数回答・年代別）

	(%)							
	地球温暖化	異常気象	食品・飲料水の安全性	大気汚染・PM2.5	新エネルギー・再生可能エネルギー	ヒートアイランド現象・熱帯夜	外来種・外来生物	廃棄物・リサイクル
20代 (N=95)	41.1	35.8	33.7	25.3	13.7	10.5	8.4	5.3
30代 (N=149)	40.9	39.6	32.2	39.6	16.8	12.1	6.7	13.4
40代 (N=209)	40.7	32.5	32.1	33.0	19.1	15.8	17.2	8.6
50代 (N=181)	33.1	48.1	35.9	31.5	22.1	15.5	7.2	12.2
60代 (N=266)	41.0	38.3	39.5	22.9	15.0	16.5	10.5	12.0
70代以上 (N=303)	47.5	42.6	33.7	22.8	16.2	11.9	10.9	10.9

	(%)							
	騒音・振動	黄砂	森林減少	オゾン層の破壊	不法投棄	都市緑化	水質汚染	省エネルギー
20代 (N=95)	13.7	10.5	9.5	11.6	5.3	2.1	3.2	4.2
30代 (N=149)	4.7	17.4	10.7	6.0	5.4	8.1	0.7	6.7
40代 (N=209)	9.6	12.4	5.7	7.2	6.2	7.2	5.3	10.0
50代 (N=181)	9.4	9.4	11.0	8.8	8.3	4.4	5.5	2.8
60代 (N=266)	13.2	7.9	11.3	6.4	8.6	8.3	7.1	4.9
70代以上 (N=303)	10.6	5.0	7.6	6.6	7.9	9.6	6.9	3.3

	(%)								
	景観	土壌汚染・地下水汚染	自然再生	水不足	ダイオキシン・PCB	生物多様性	砂漠化	その他	いずれにも関心がない
20代 (N=95)	5.3	5.3	1.1	9.5	1.1	4.2	1.1	2.1	4.2
30代 (N=149)	2.7	2.7	2.0	4.7	1.3	2.0	0.7	2.7	0.7
40代 (N=209)	4.3	3.8	4.8	2.9	1.0	1.9	0.0	1.0	1.0
50代 (N=181)	3.9	4.4	4.4	3.9	2.8	1.7	0.6	2.8	0.0
60代 (N=266)	7.1	4.1	3.4	2.3	1.1	0.4	0.4	1.1	0.8
70代以上 (N=303)	3.0	4.3	4.3	2.0	2.3	1.3	1.0	1.3	1.3

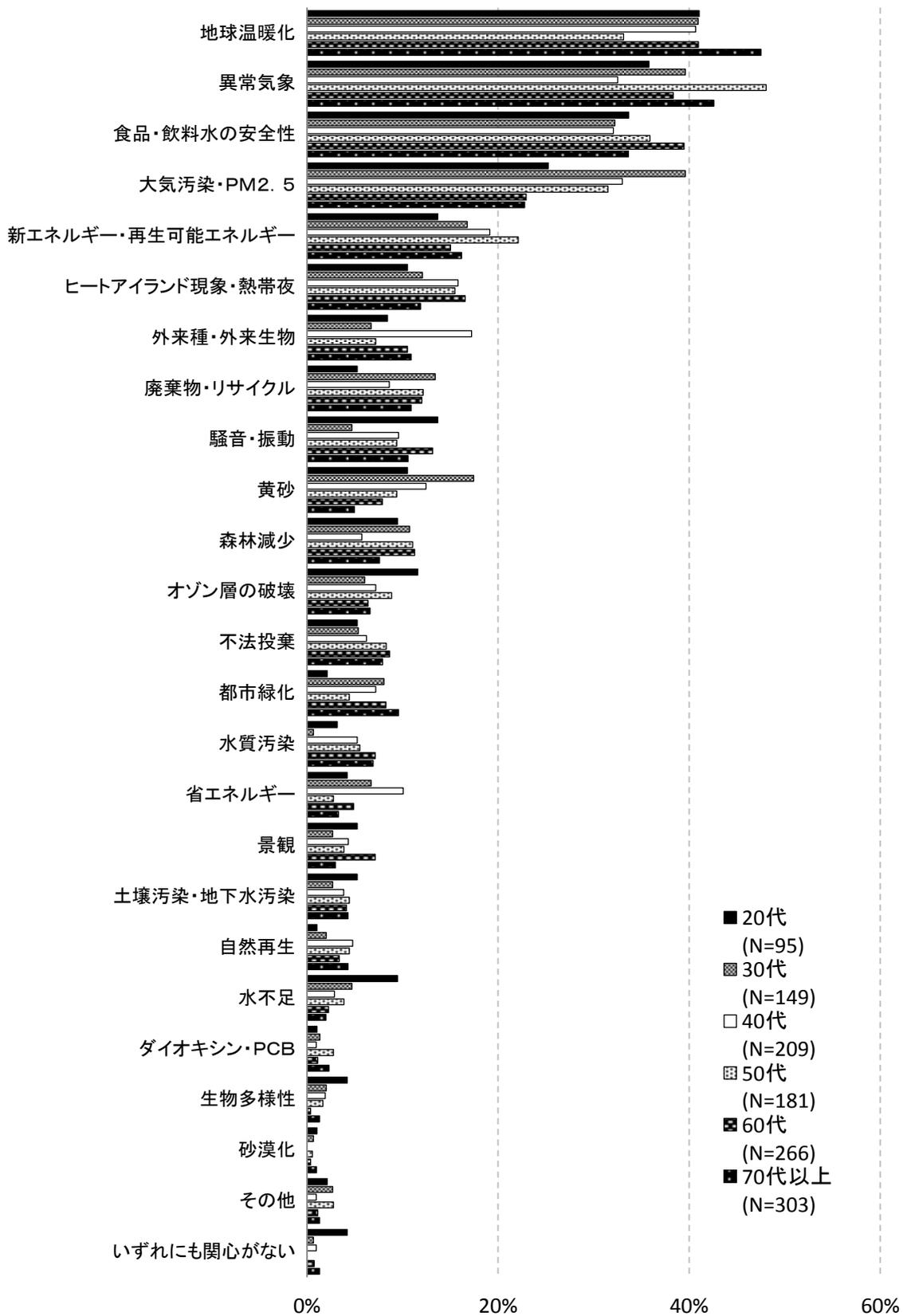


図 56 Q26 関心が高い環境問題の話題（複数回答・年代別）

Q27①の参加したことがある活動に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「自治会など地域で行う清掃活動」、「子ども会などが主催するリサイクル品の集団回収」、「市が実施する市内一斉清掃」の順に高い割合である（図 57）。

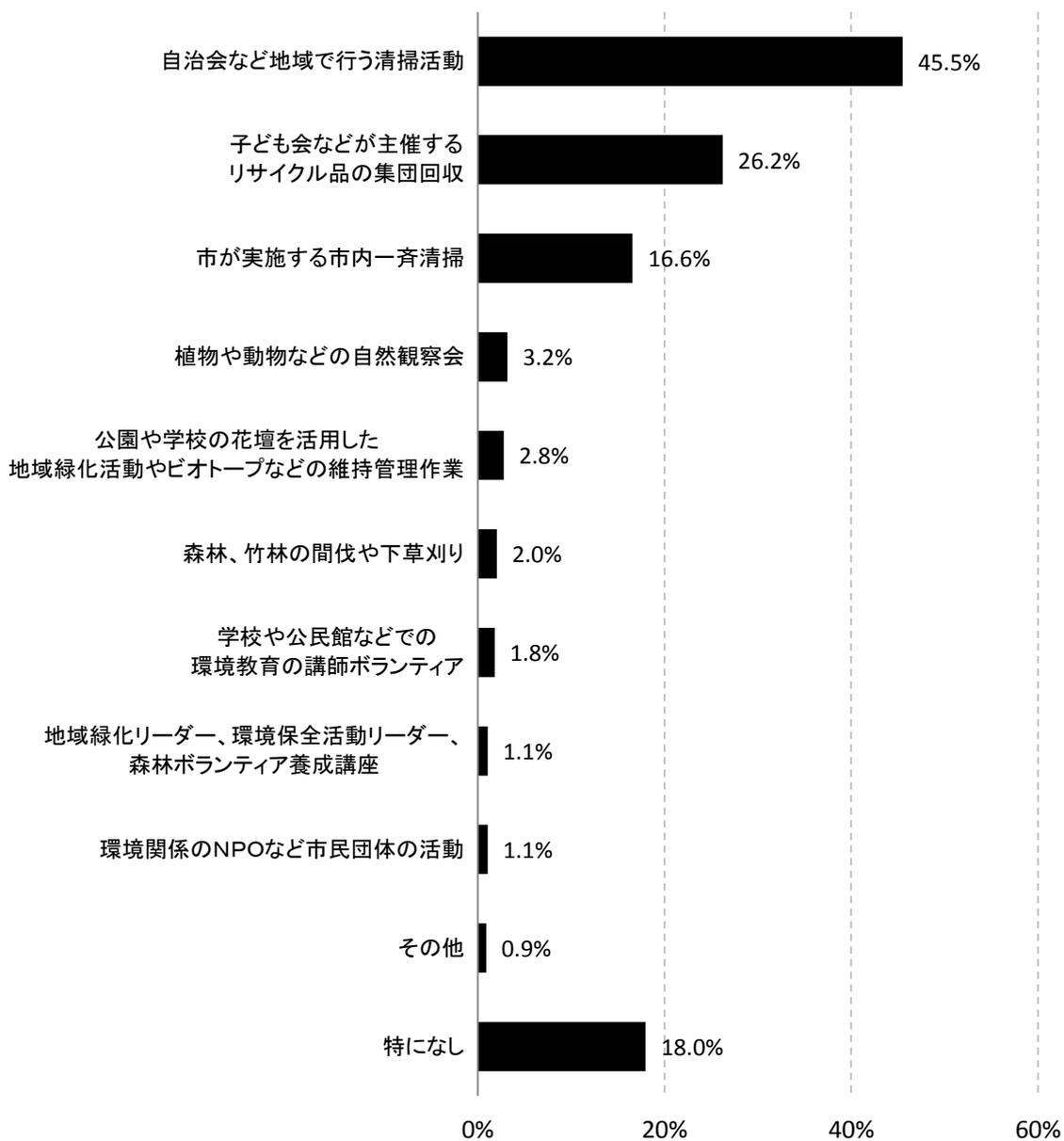


図 57 Q27① 参加したことがある活動（複数回答・全体 N=1224）

Q27①を男女別で見ると、「自治会など地域で行う清掃活動」、「子ども会などが主催するリサイクル品の集団回収」、「市が実施する市内一斉清掃」のいずれも女性の方が高い割合である。特に「子ども会などが主催するリサイクル品の集団回収」は最も男女差が大きく、男性で19.0%、女性で32.2%と、女性の方が13ポイントほど高い（図58）。

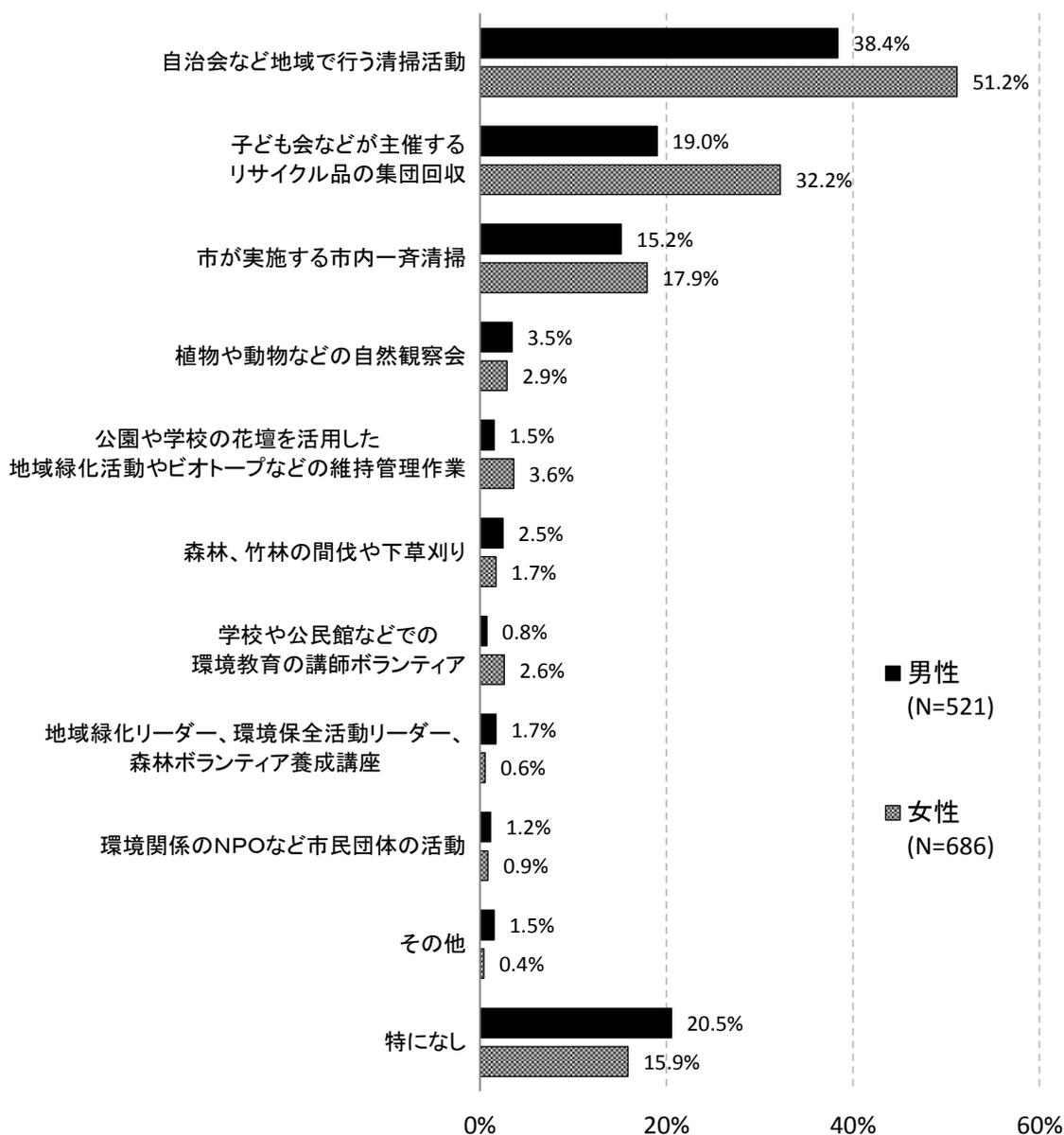


図 58 Q27① 参加したことがある活動（複数回答・男女別）

Q27①を年代別で見ると、「自治会など地域で行う清掃活動」と回答した人の割合は、30代以下は3割未満であるのに対して、40代以上では4割以上である。「子ども会などが主催するリサイクル品の集団回収」においては、30代以下は2割未満であるのに対して、40代以上では2割以上である。「市が実施する市内一斉清掃」においては、40代以下は2割未満であるのに対して、50代以上では2割以上である。また、「自治会など地域で行う清掃活動」、「子ども会などが主催するリサイクル品の集団回収」、「市が実施する市内一斉清掃」のいずれにおいても、50代と60代の割合の差は2ポイント未満である（図59）。

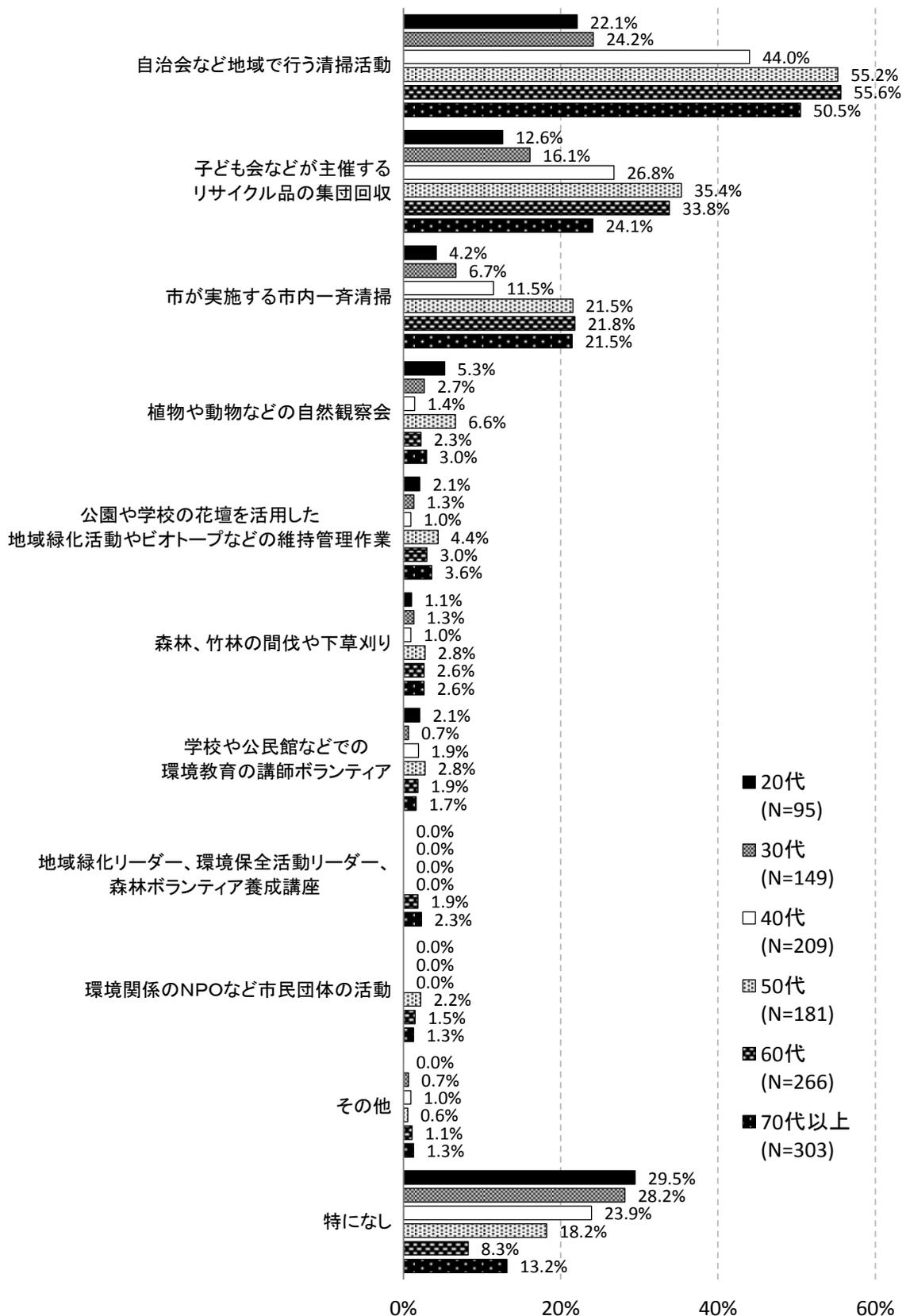


図 59 Q27① 参加したことがある活動（複数回答・年別別）

Q27②の今後参加してみたい活動に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「特になし」を除くと、「植物や動物などの自然観察会」のみが1割以上であり、最も高い割合である。以降、「市が実施する市内一斉清掃」、「公園や学校の花壇を活用した地域緑化活動やビオトープなどの維持管理作業」の順に高い割合である。なお、「特になし」の割合は30.1%である（図60）。

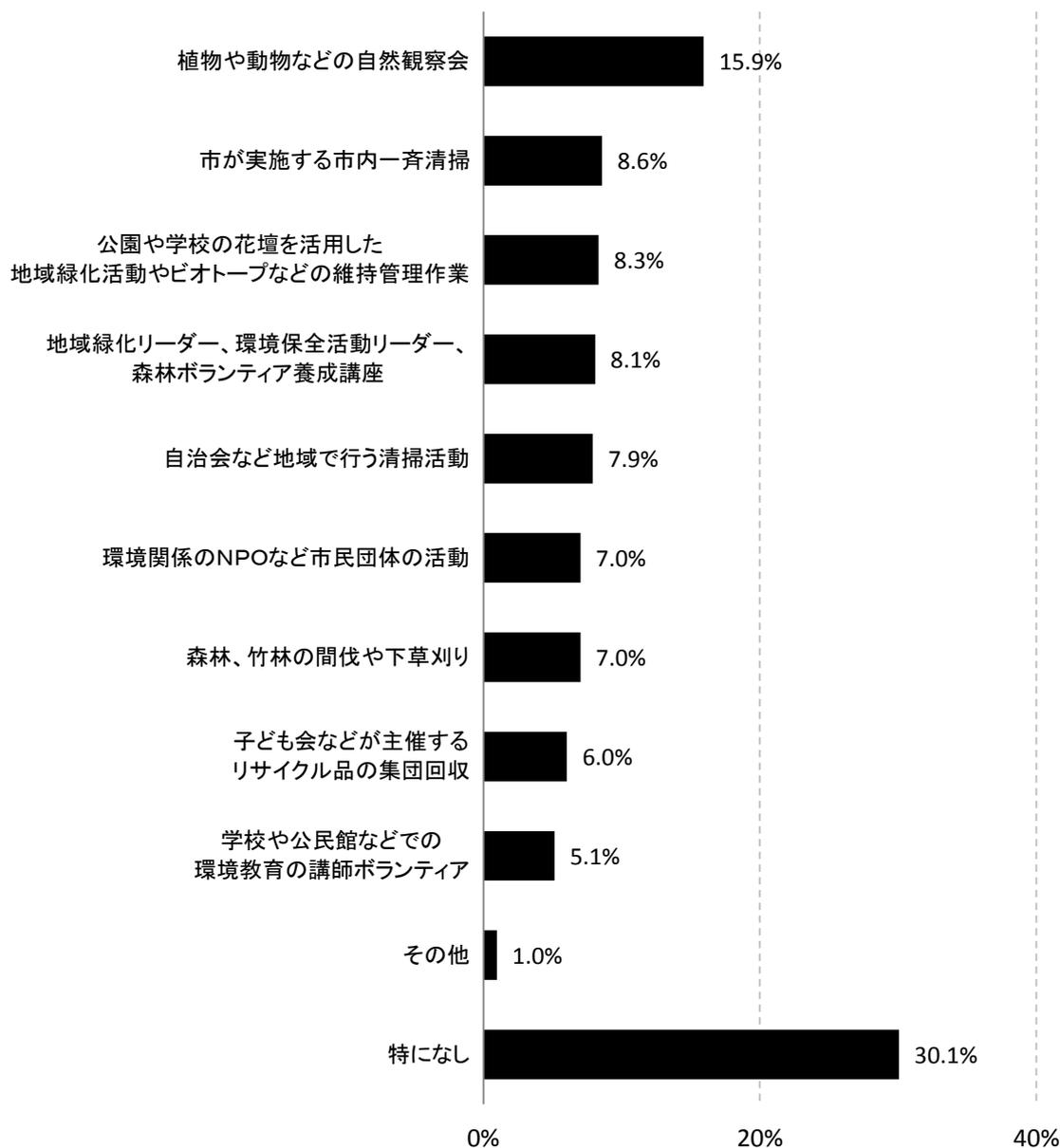


図 60 Q27② 今後参加してみたい活動（複数回答・全体 N=1224）

Q27②を男女別で見ると、「その他」を除いてすべての項目で女性よりも男性の方が高い割合である。特に「地域緑化リーダー、環境保全活動リーダー、森林ボランティア養成講座」で最も男女差が大きく、男性で11.1%、女性で6.0%であり男性の方が5ポイントほど高い割合である。なお、「その他」の割合は男女ともに1.0%であり等しい（図 61）。

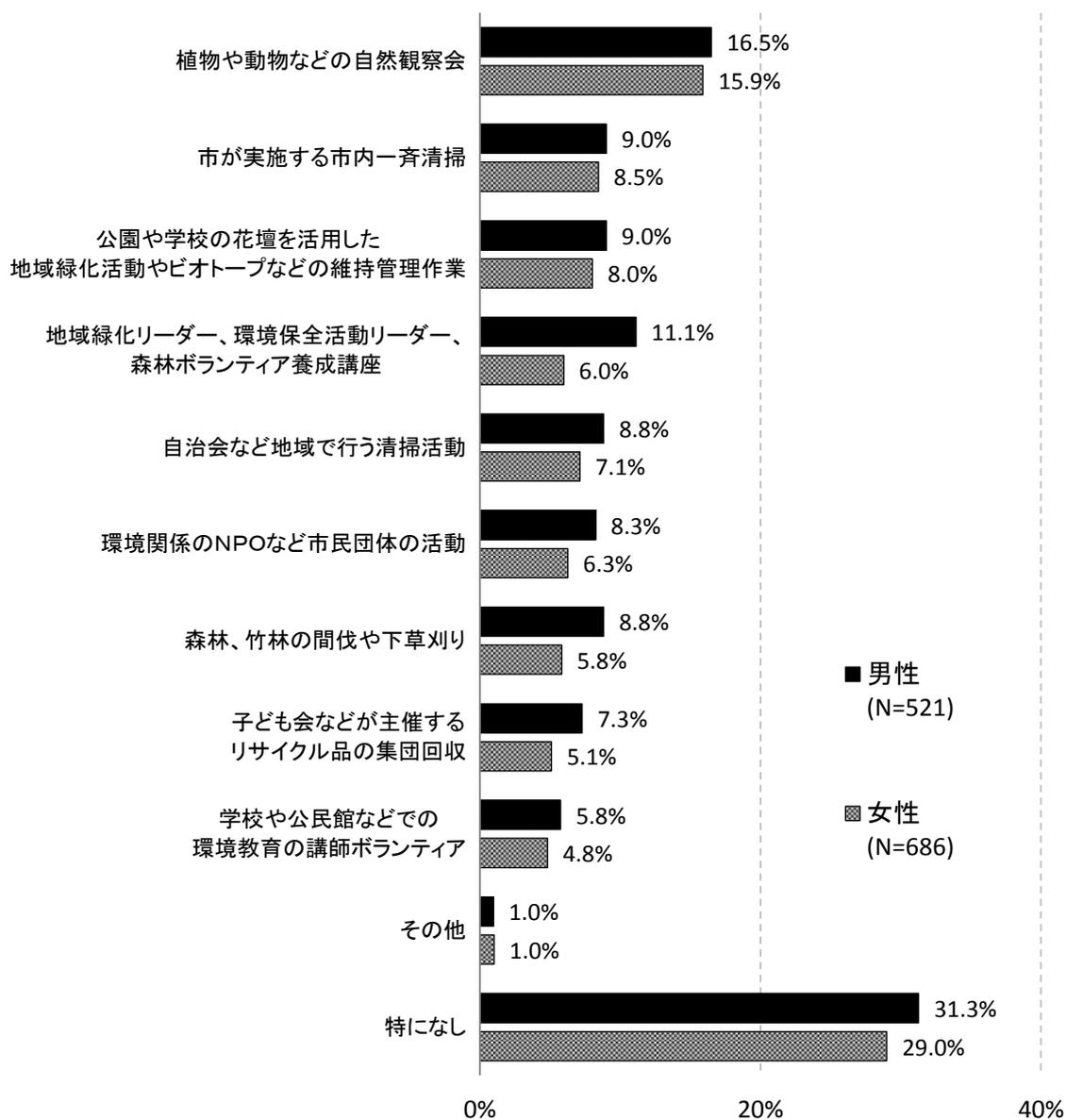


図 61 Q27② 今後参加してみたい活動（複数回答・男女別）

Q27②を年代別で見ると、「植物や動物などの自然観察会」の割合は、いずれの年代においても、その差は3ポイント以内である。また、「公園や学校の花壇を活用した地域緑化活動やビオトープなどの維持管理作業」、「地域緑化リーダー、環境保全活動リーダー、森林ボランティア養成講座」、「環境関係のNPOなど市民団体の活動」、「森林、竹林の間伐や下草刈り」、「学校や公民館などでの環境教育の講師ボランティア」において、20代が最も高い割合である（図 62）。

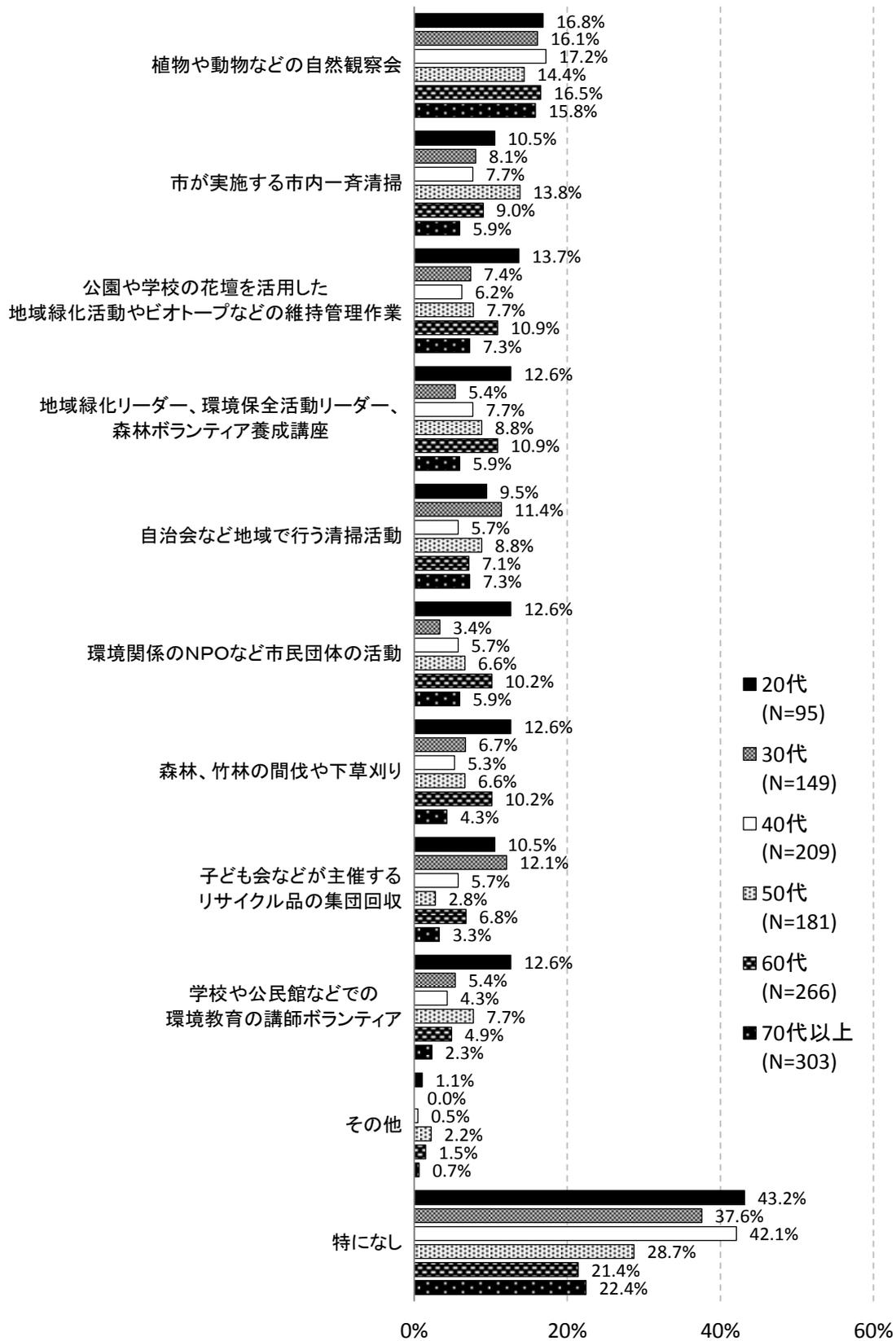


図 62 Q27② 今後参加してみたい活動（複数回答・年代別）

Q28A～Q28J では、それぞれの環境にやさしい行動を、どの程度するかについて尋ねている。

Q28A の持参した買い物袋やかばんの利用に関しては、60 代を除く男女別・年代別のすべての層で「ときどきする」が最も高い割合である。60 代では「よくする」が最も高い割合である。男女別で見ると、「いつもする」または「よくする」と回答した人の割合は男性では 33.8%、女性では 49.3%であり、女性の方が 15 ポイントほど高い。年代別で見ると、その割合は、40 代以下では 4 割未満であるが、50 代以上では 4 割以上である（図 63）。

Q28B の旬の食材や地元の食材の購入に関しては、男女別・年代別のすべての層で「ときどきする」が最も高い割合である。男女別で見ると、「いつもする」または「よくする」と回答した人の割合は男性では 26.5%、女性では 40.5%であり、女性の方が 14 ポイント高い。年代別で見ると、その割合は、40 代以下では 3 割未満であるが、50 代以上では 4 割前後である（図 64）。

Q28C の回収ボックスの利用に関しては、男性と 30 代以下を除く男女別・年代別のすべての層で「いつもする」が最も高い割合である。男性と 30 代以下では「まったくしない」が最も高い割合である。男女別で見ると、「いつもする」または「よくする」と回答した人の割合は男性で 44.2%、女性で 54.4%であり、女性の方が 10 ポイントほど高い。年代別で見ると、その割合は、60 代が最も高く 58.7%である（図 65）。

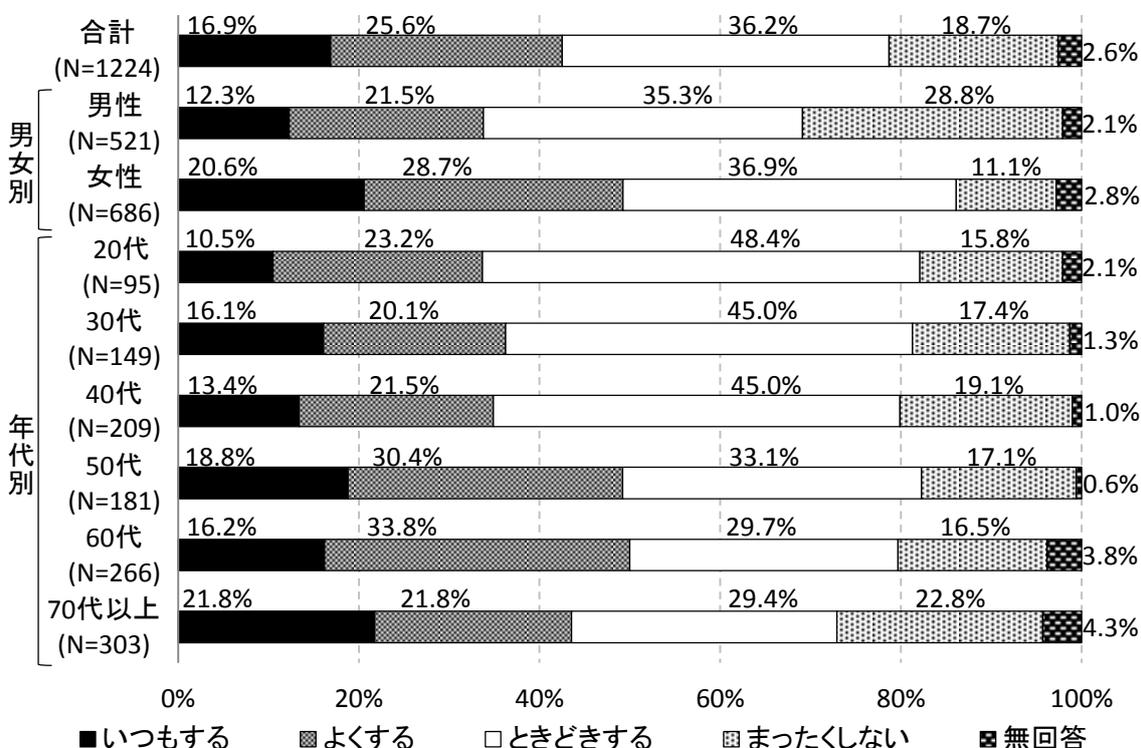


図 63 Q28A 環境にやさしい行動 持参した買い物袋やかばんの利用

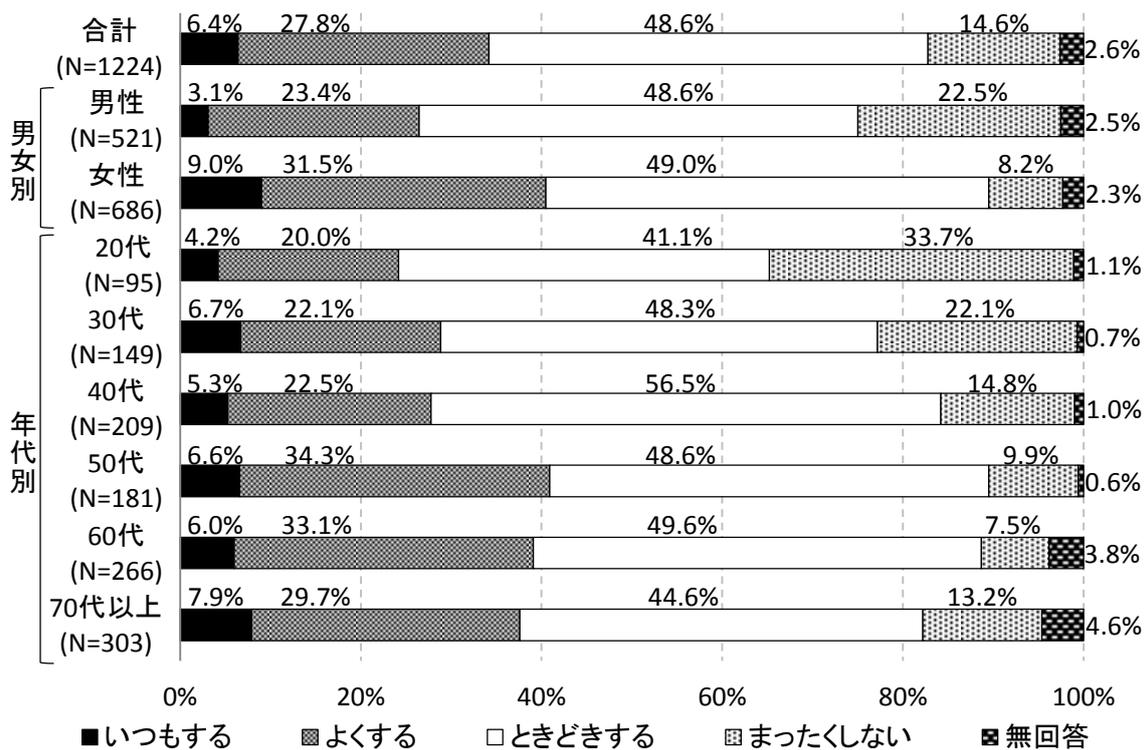


図 64 Q28B 環境にやさしい行動 旬の食材や地元の食材の購入

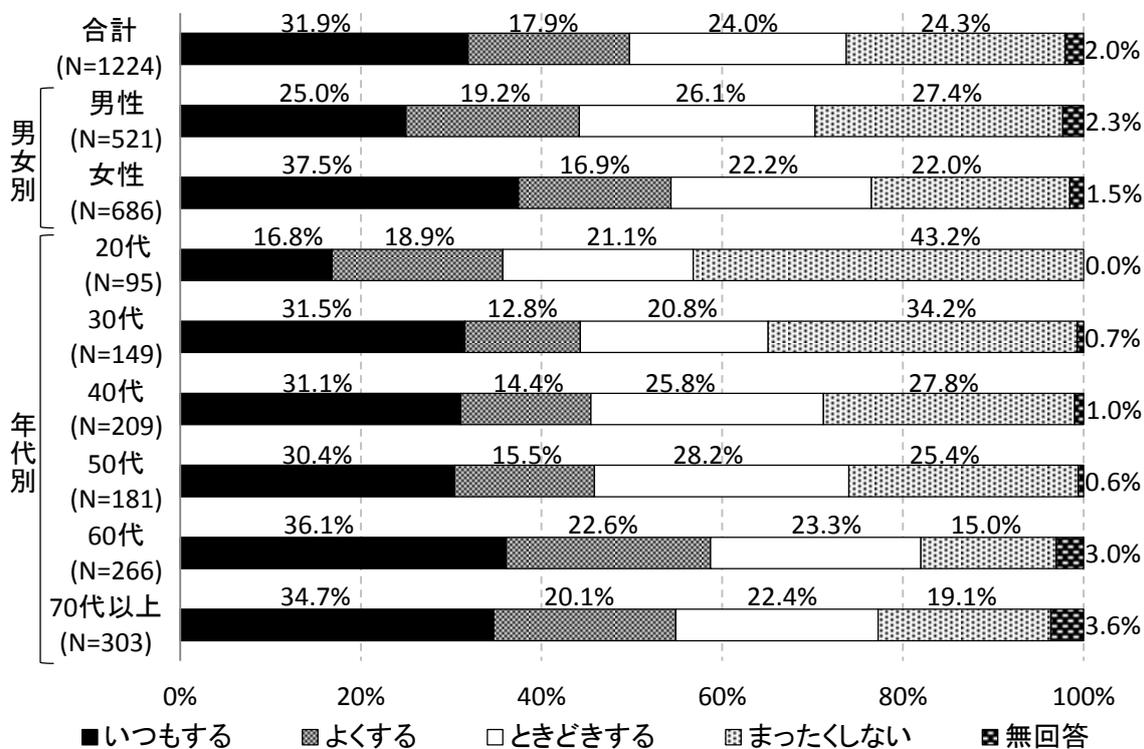


図 65 Q28C 環境にやさしい行動 回収ボックスの利用

Q28Dのエコマーク商品の購入に関しては、男女別で見ると、男性では「まったくしない」が44.9%で最も高い割合であるのに対して、女性では「ときどきする」が50.4%で最も高い割合である。年代別で見ると、「いつもする」または「よくする」と回答した人の割合は、20代では4.2%であるが年代が上がるごとに増加し、70代以上では23.7%である(図66)。

Q28Eの冷暖房の温度設定を控えめにするに関しては、男女別で見ると、「いつもする」または「よくする」と回答した人の割合は男性で61.6%、女性で74.2%であり女性の方が12ポイントほど高い。年代別で見ると、30代でのみ「いつもする」が最も高い割合であり39.6%である。また、「まったくしない」の割合は、いずれの年代においても1割未満である(図67)。

Q28Fの使わない時に電気を消すに関しては、合計で見ると、「いつもする」または「よくする」と回答した人の割合は79.7%であり8割近い。年代別で見ると、「いつもする」の割合は40代以下では4割以上であるが、50代以上では4割未満である。特に50代は最も低い割合であり、50代でのみ3割未満である(図68)。

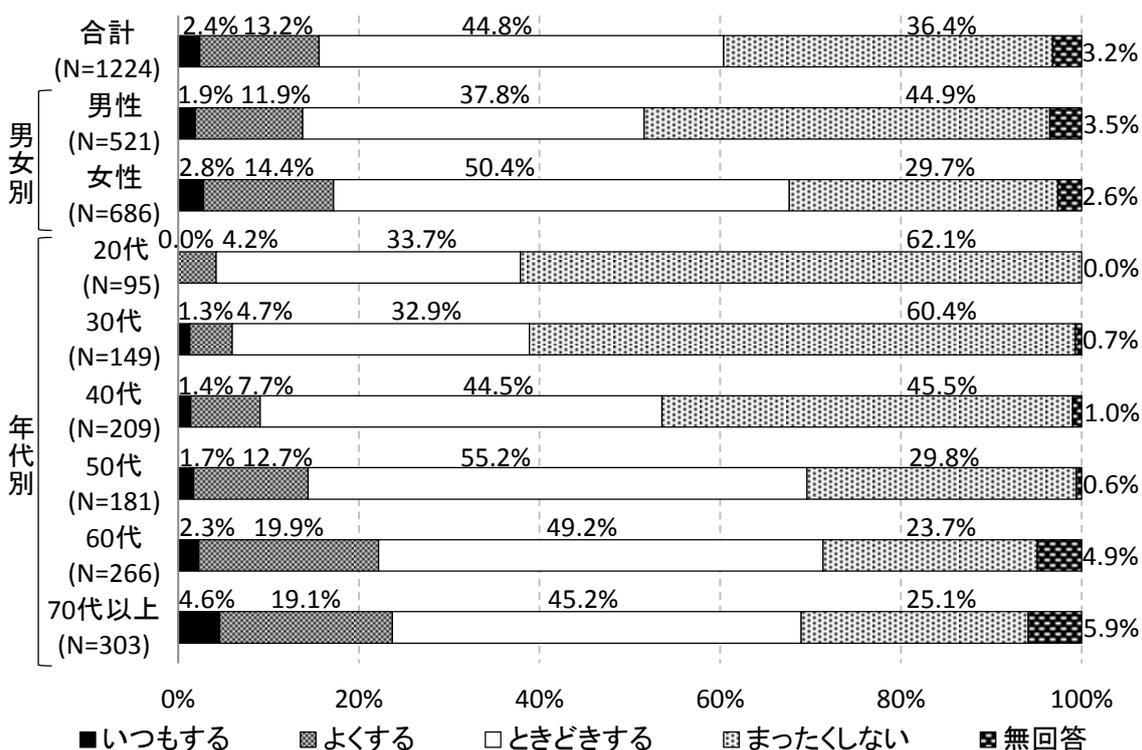


図 66 Q28D 環境にやさしい行動 エコマーク商品の購入

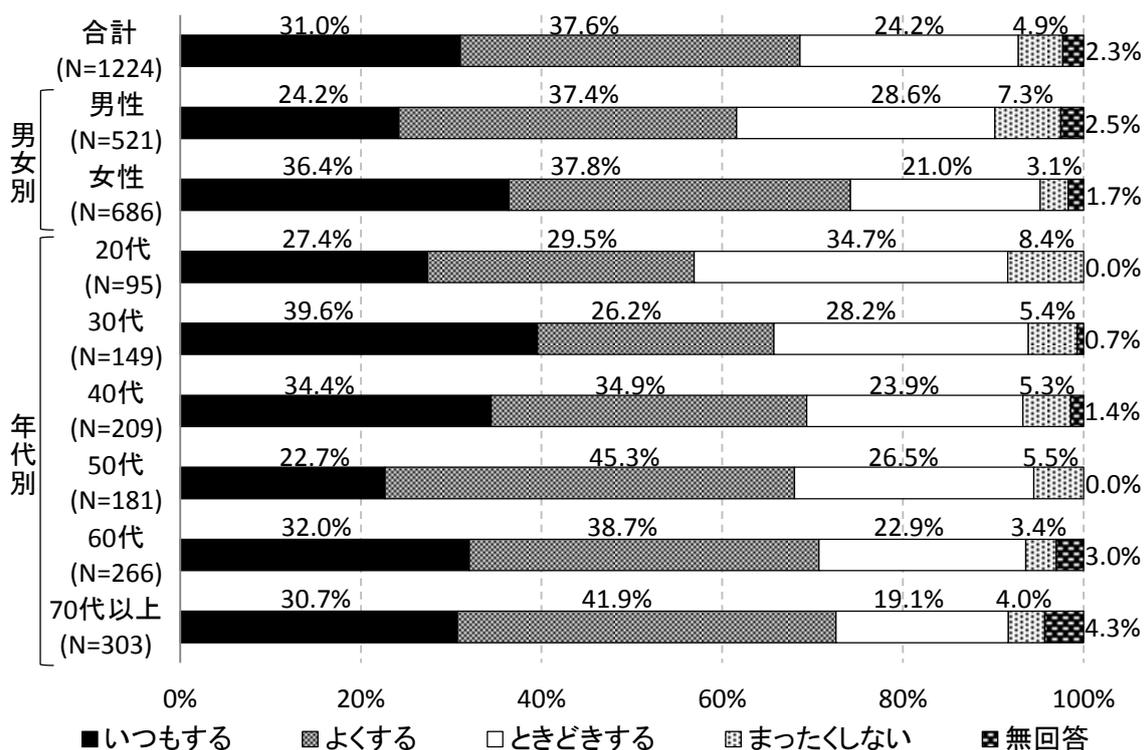


図 67 Q28E 環境にやさしい行動 冷暖房の温度設定を控えめにする

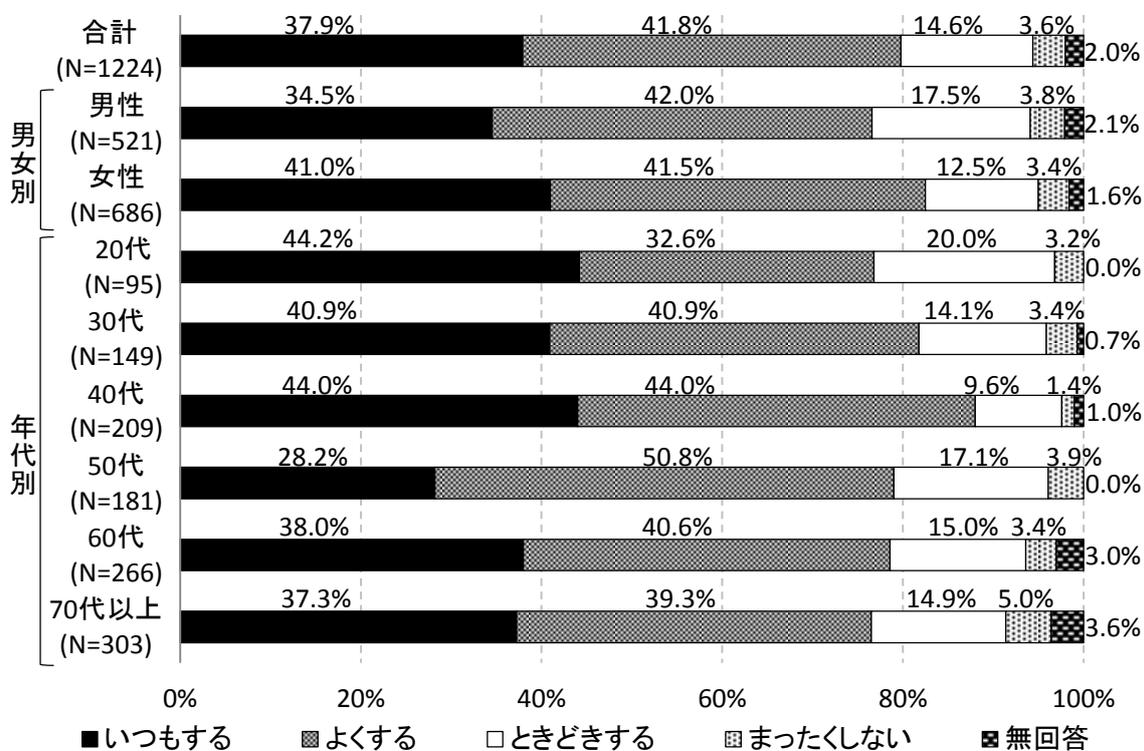


図 68 Q28F 環境にやさしい行動 使わない時に電源を消す

Q28G の地域の集団回収への参加に関しては、20 代を除く男女別・年代別のすべての層で「いつもする」が最も高い割合である。20 代では「まったくしない」で最も高い割合である。男女別で見ると、「いつもする」または「よくする」と回答した人の割合は男性では 60.4%、女性では 72.3%であり女性の方が 12 ポイントほど高い。年代別で見ると、その割合は 20 代では 36.8%であるが、年代が上がるごとに増加し、70 代以上では 79.6%である（図 69）。

Q28H の物を長く使用するに関しては、合計で見ると、「いつもする」または「よくする」と回答した人の割合は 57.0%である。年代別で見ると、20 代が最も低い割合であり 50.5%である。また、70 代以上では 64.0%であり、唯一 6 割を超えている（図 70）。

Q28I の自動車の代わりに徒歩・自転車に関しては、男女別で見ると、「いつもする」または「よくする」と回答した人の割合は男性では 57.5%、女性では 64.0%であり、女性の方が 7 ポイントほど高い。年代別で見ると、その割合は 20 代で最も高く 69.5%である。最も低い年代は 40 代であり 53.1%である（図 71）。

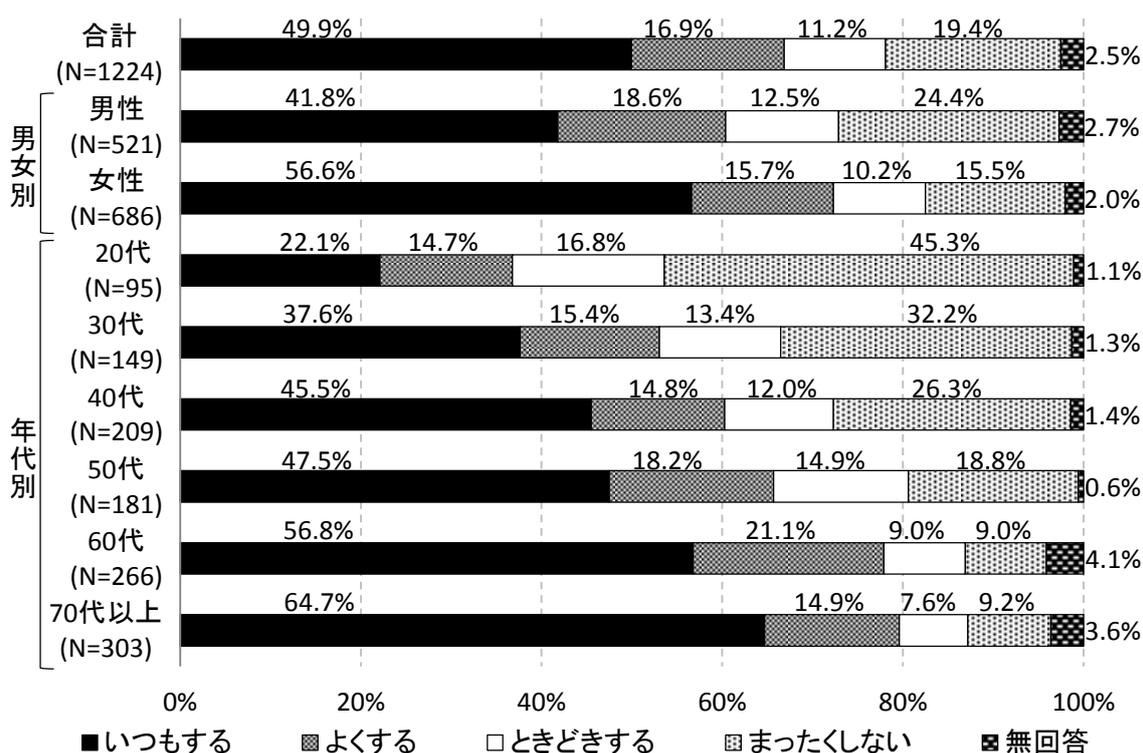


図 69 Q28G 環境にやさしい行動 地域の集団回収への参加

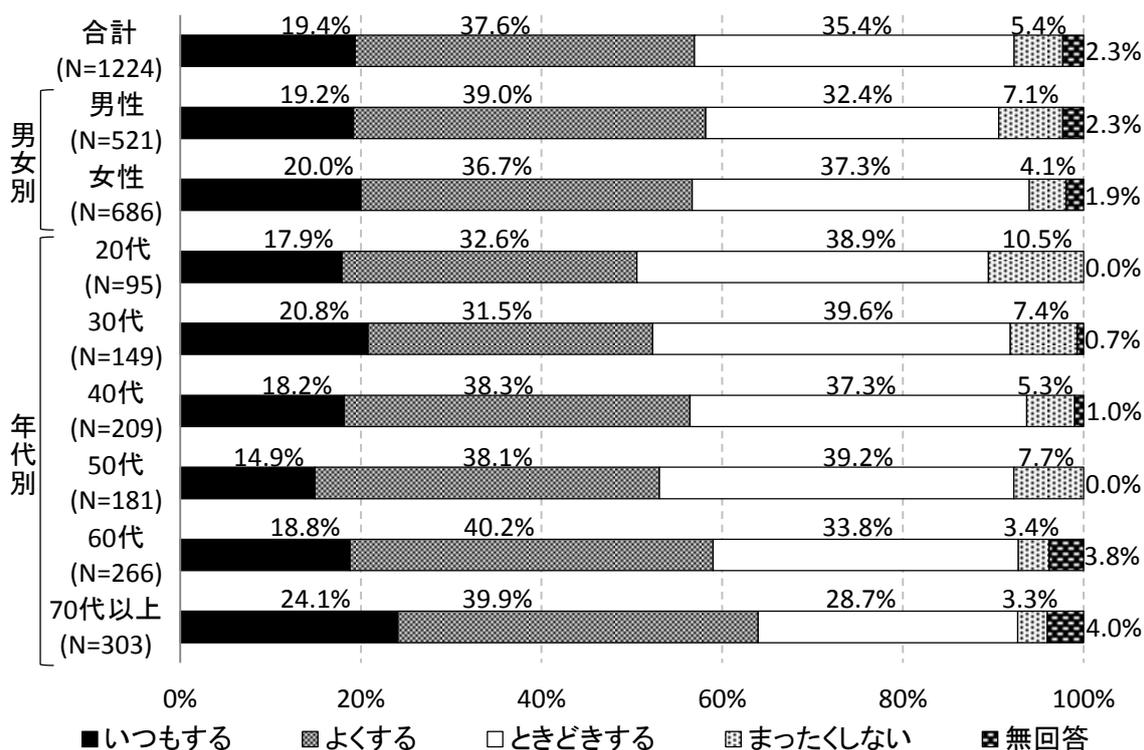


図 70 Q28H 環境にやさしい行動 物を長く使用する

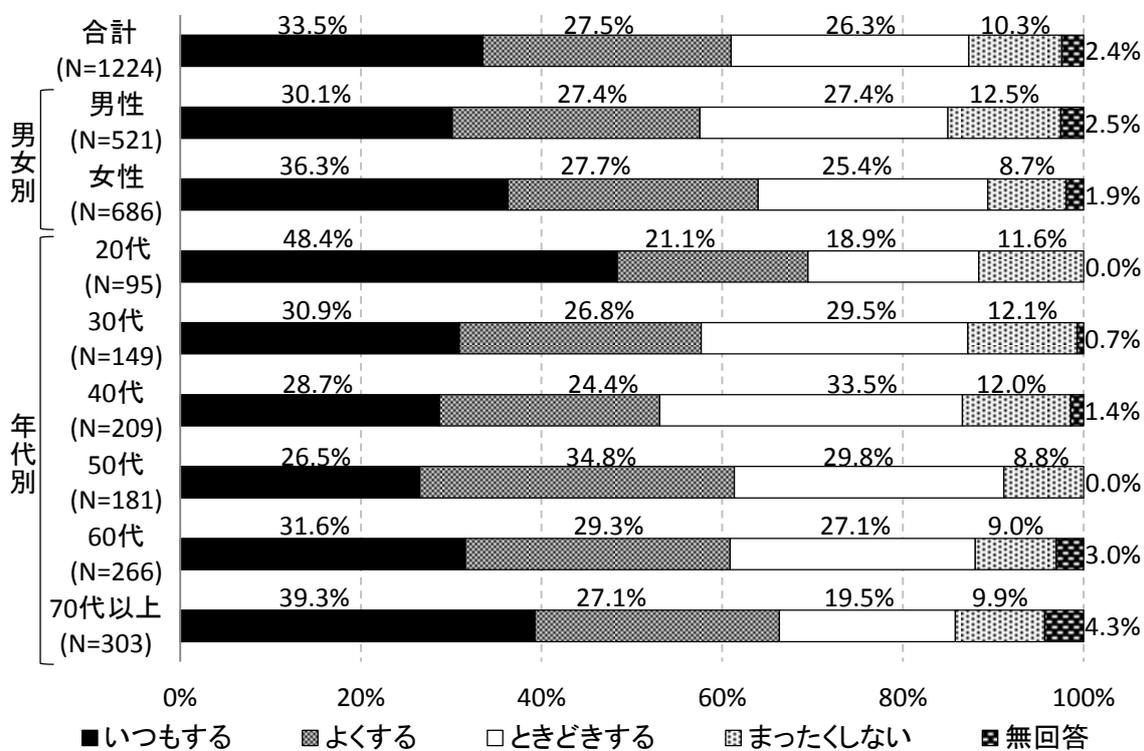


図 71 Q28I 環境にやさしい行動 自動車の代わりに徒歩・自転車

Q28Jのエコドライブに関しては、男女別で見ると、「いつもする」または「よくする」と回答した人の割合は男性では51.2%、女性では32.4%であり男性の方が19ポイントほど高い。また、「運転免許を持っていない」の割合は男性では12.1%、女性では39.4%であり、女性の方が26ポイントほど高い。年代別で見ると、「運転免許を持っていない」以外では、30代を除いて「よくする」の割合が最も高い。30代においては「ときどきする」が最も高い割合である（図72）。

Q29の水の使用量に配慮した機器の使用に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「節水型洗濯機」と「シングルレバー式湯水混合水栓」がともに4割程度である。以降、「家庭用バスポンプ」、「食器洗い機」、「節水型トイレ」、「節水シャワーヘッド」の順に高い割合であり、いずれも2割以上3割未満である（図73）。

Q29を男女別で見ると、「家庭用バスポンプ」を使用している人の割合は男性では26.1%、女性では32.8%であり、男女差が最も大きく、女性の方が6ポイントほど高い。「いずれも使用していない」と回答した人の割合は、男性では19.4%、女性では14.9%であり、男性の方が高い割合である（図74）。

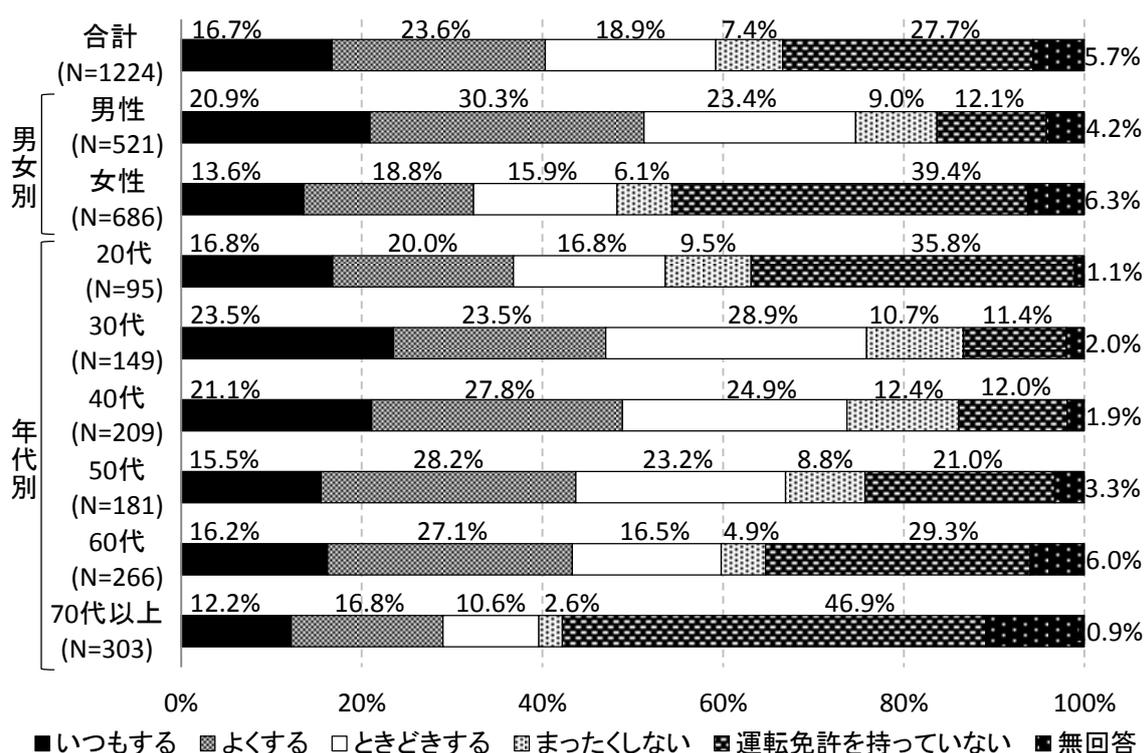


図72 Q28J 環境にやさしい行動 エコドライブ

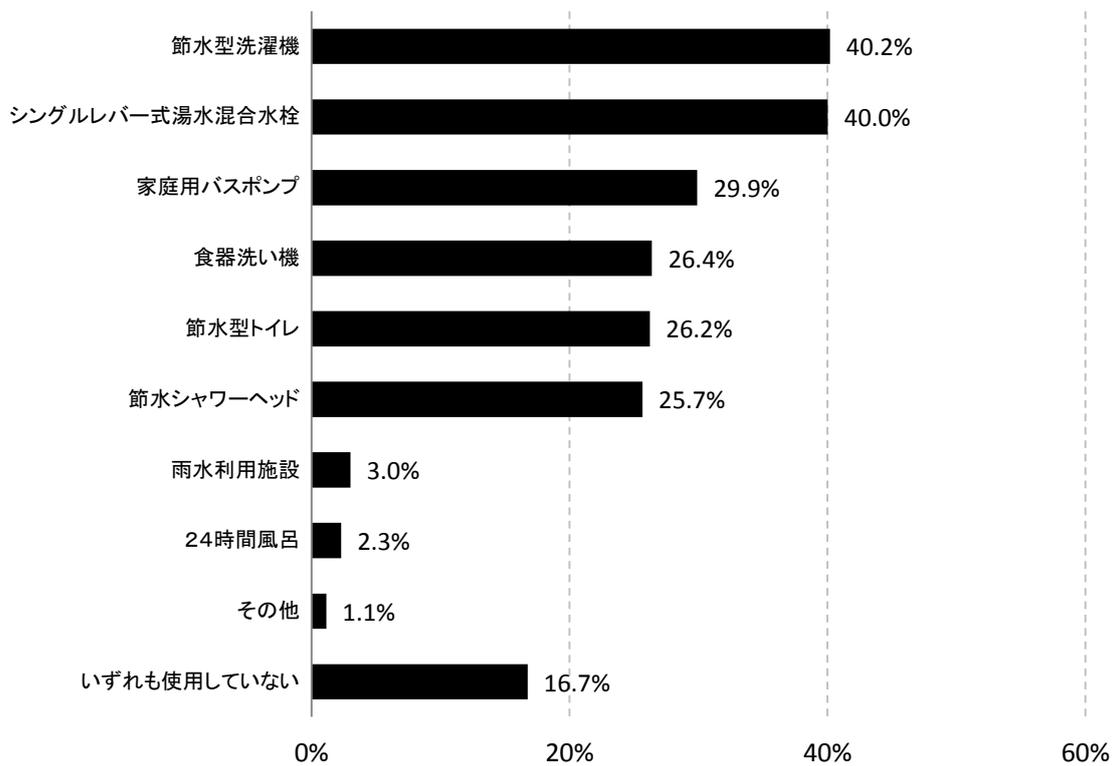


図 73 Q29 水の使用量に配慮した機器の使用（複数回答・全体 N=1224）

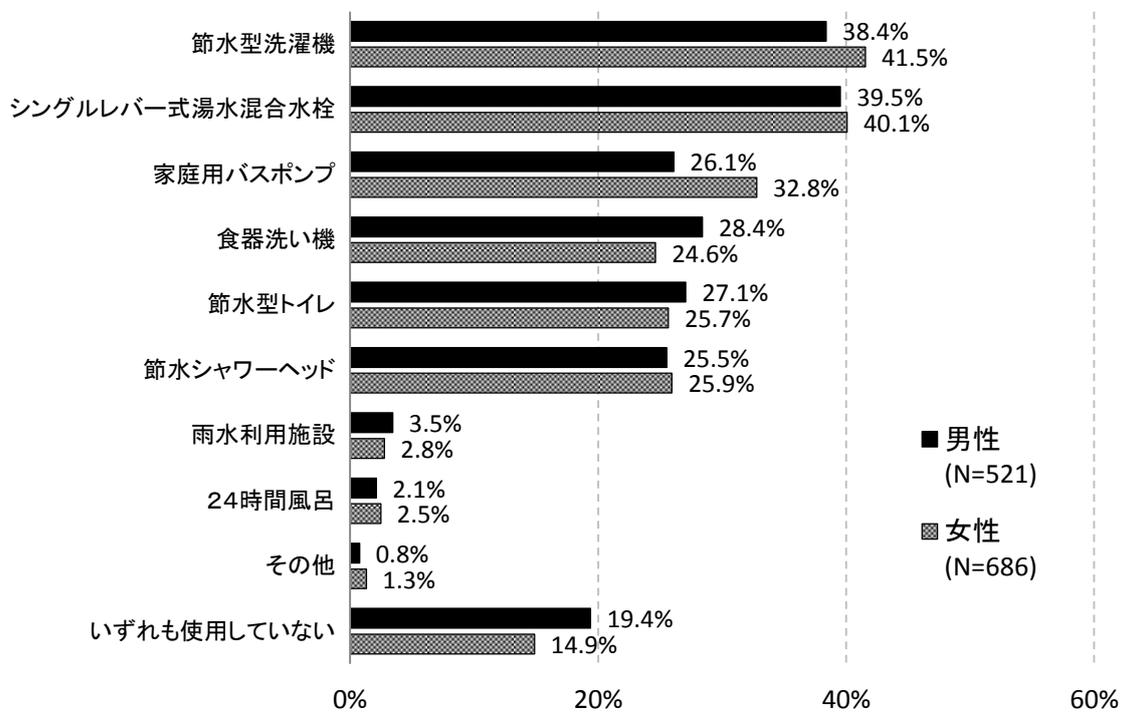


図 74 Q29 水の使用量に配慮した機器の使用（複数回答・男女別）

Q29 を年代別で見ると、「節水型洗濯機」と「シングルレバー式湯水混合水栓」において、40代から60代はいずれも45%以上であるが、その他の年代は4割未満である。「食器洗い機」を使用している割合では40代が特に高く、その他の年代よりも10ポイント以上高い。また、「いずれも使用していない」の割合は20代が最も高く31.6%であり、年代が上がるごとに減少し、60代では8.6%になる。70代以上では増加して21.8%になる（図75）。

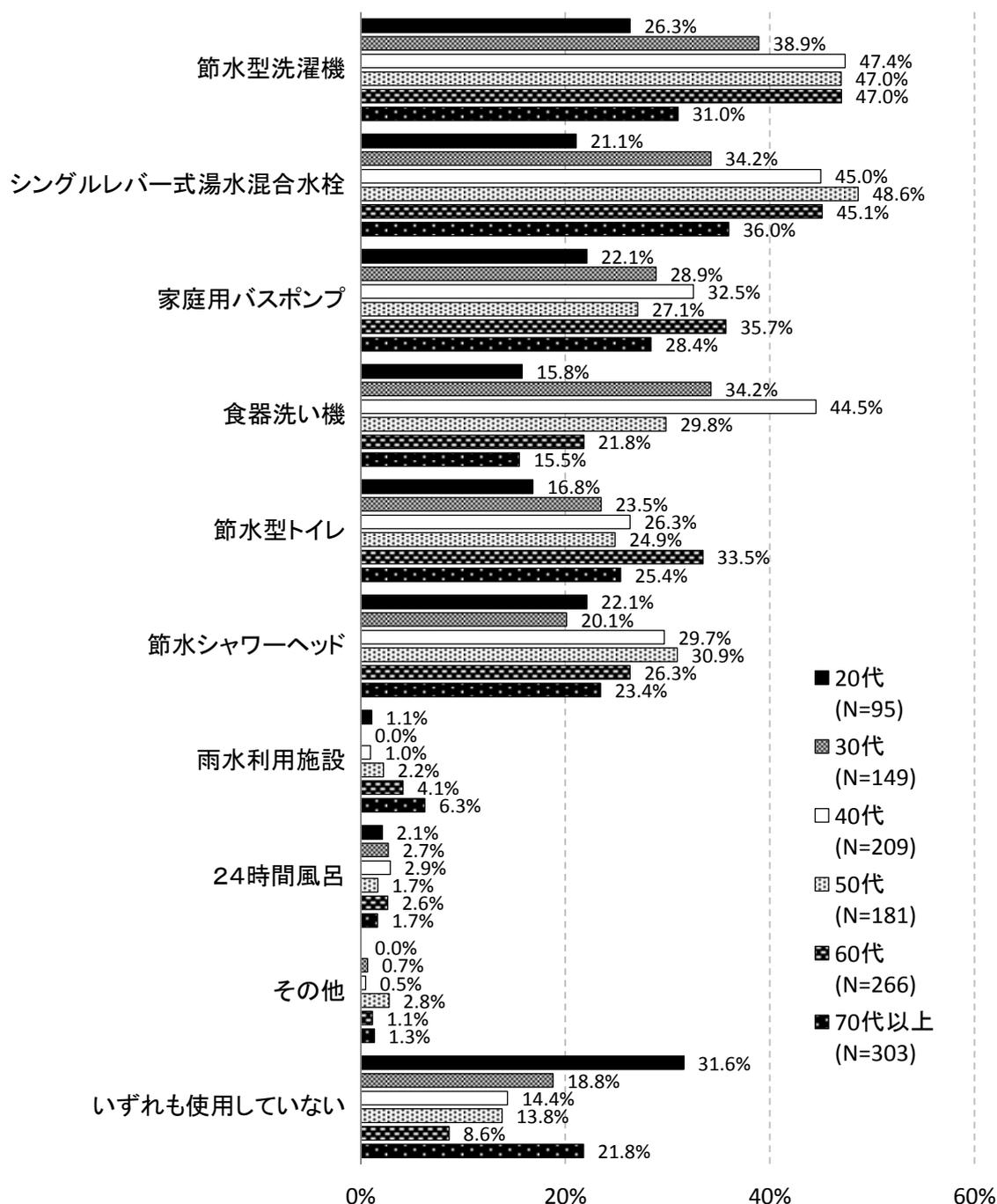


図75 Q29 水の使用量に配慮した機器の使用（複数回答・年代別）

Q30 の水を使用する機器の今後 1 年以内の購入予定に関しては、男女別・年代別のすべての層で「ない」が最も高い割合で 9 割程度であった。なお、「ある」と回答した場合の具体的な機器の例として、ウォーターサーバー・トイレ・浄水器・食器洗い機・洗濯機・水素水サーバー・節水シャワーヘッド・加湿器・給湯器などがあつた（図 76）。

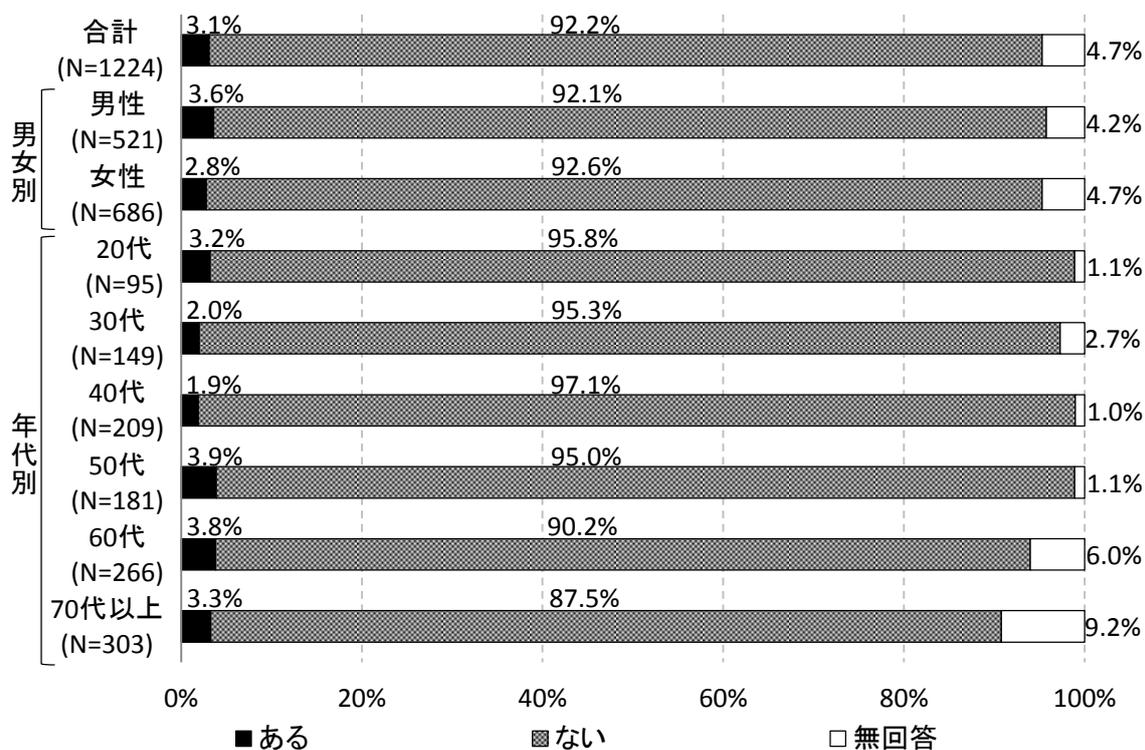


図 76 Q30 水を使用する機器の今後 1 年以内の購入予定

Q31 の直近 2 ヶ月の使用水量に関しては、世帯人数とのクロス集計も提示する。合計で見ると、「30m³以上 40m³未満」が 19.8%と最も高い割合である。次いで「40m³以上 50m³未満」、「20m³以上 30m³未満」の順に多い。年代別で見ると、50代と70代以上を除き「30m³以上 40m³未満」が最も高い割合である。なお、50代では「40m³以上 50m³未満」が最も高く、70代以上では「20m³以上 30m³未満」と「30m³以上 40m³未満」が最も高く同じ割合である。世帯人数別で見ると、世帯人数が増加するごとに最も割合が高い使用水量も増加している（表 6）。

Q32A の補助対象だと知っている機器に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「1 つも知らない」を除くと「太陽光発電システム」、「エコキュート」、「ペアガラス・二重窓」の順で高い割合である。特に「太陽光発電システム」は他の機器よりも 20 ポイント以上高い。なお、「1 つも知らない」の割合は 42.2%である（図 77）。

Q32A を男女別で見ると、「エコキュート」の割合は男性で 20.7%、女性で 23.6%であり、最も男女差が大きく、女性の方が 3 ポイントほど高い（図 78）。

表 6 Q31 直近 2 ヶ月の使用水量（立方メートル）

		10m ³ 未満	10m ³ 以上 20m ³ 未満	20m ³ 以上 30m ³ 未満	30m ³ 以上 40m ³ 未満	40m ³ 以上 50m ³ 未満	50m ³ 以上 60m ³ 未満	60m ³ 以上 70m ³ 未満	70m ³ 以上	無回答
合計 (N=1224)		2.8	7.5	12.5	19.8	14.7	10.1	4.3	4.9	23.4
男女別	男性 (N=521)	3.3	6.1	11.1	19.8	13.4	12.3	5.0	5.4	23.6
	女性 (N=686)	2.3	8.6	13.7	20.0	15.7	8.5	3.9	4.7	22.6
年代別	20代 (N=95)	3.2	3.2	11.6	12.6	8.4	8.4	3.2	10.5	38.9
	30代 (N=149)	3.4	5.4	10.7	21.5	16.1	12.1	2.7	2.0	26.2
	40代 (N=209)	2.4	8.1	10.0	21.1	18.7	8.6	3.3	4.3	23.4
	50代 (N=181)	3.9	6.1	8.8	18.8	19.3	13.8	6.1	6.1	17.1
	60代 (N=266)	3.0	7.5	12.4	24.8	13.5	10.5	4.9	4.5	18.8
	70代以上 (N=303)	1.7	10.2	17.5	17.5	11.2	8.3	5.0	5.0	23.8
	世帯人数別	1人 (N=117)	19.7	27.4	21.4	6.8	4.3	0.9	0.0	0.9
2人 (N=403)		1.2	8.9	18.1	29.0	10.9	6.0	2.7	2.7	20.3
3人 (N=278)		1.1	4.3	10.8	19.4	19.8	11.2	5.4	4.0	24.1
4人 (N=279)		1.1	1.8	6.8	15.8	21.1	16.8	7.2	6.5	22.9
5人 (N=71)		0.0	4.2	1.4	12.7	15.5	11.3	8.5	15.5	31.0
6人 (N=30)		0.0	0.0	0.0	6.7	3.3	23.3	3.3	20.0	43.3
7人 (N=7)		0.0	0.0	0.0	14.3	14.3	28.6	0.0	28.6	14.3

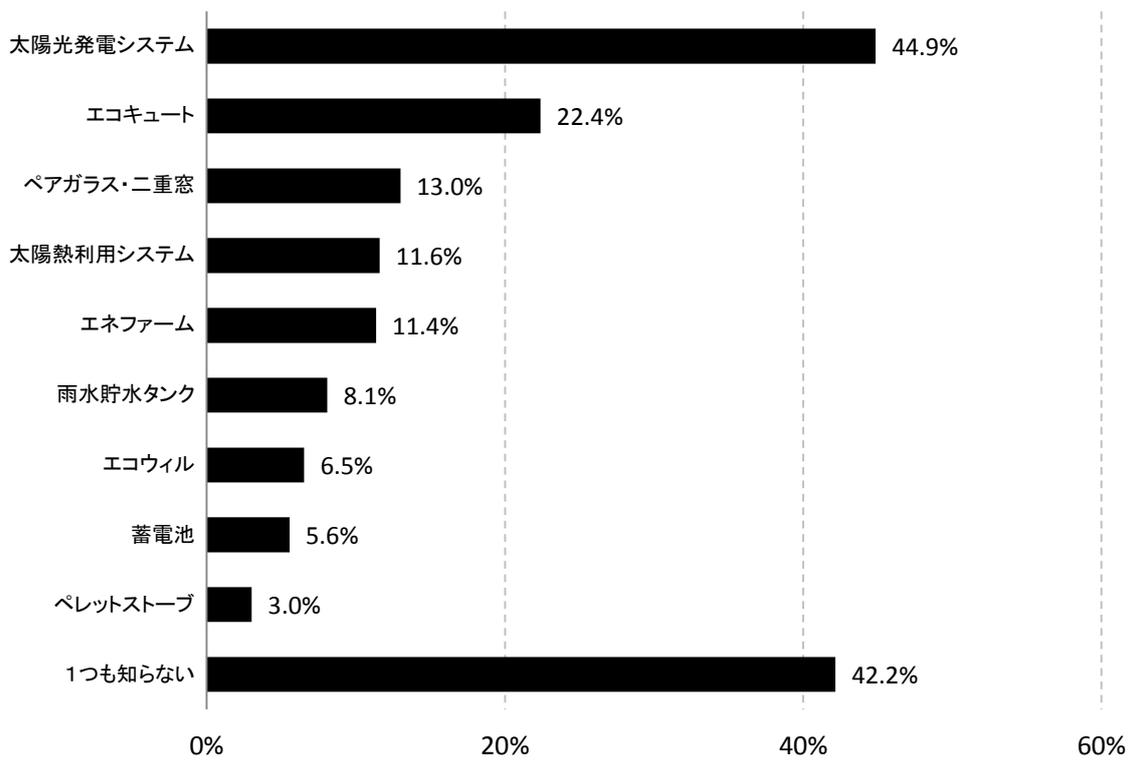


図 77 Q32A 補助対象だと知っている機器 (複数回答・全体 N=1224)

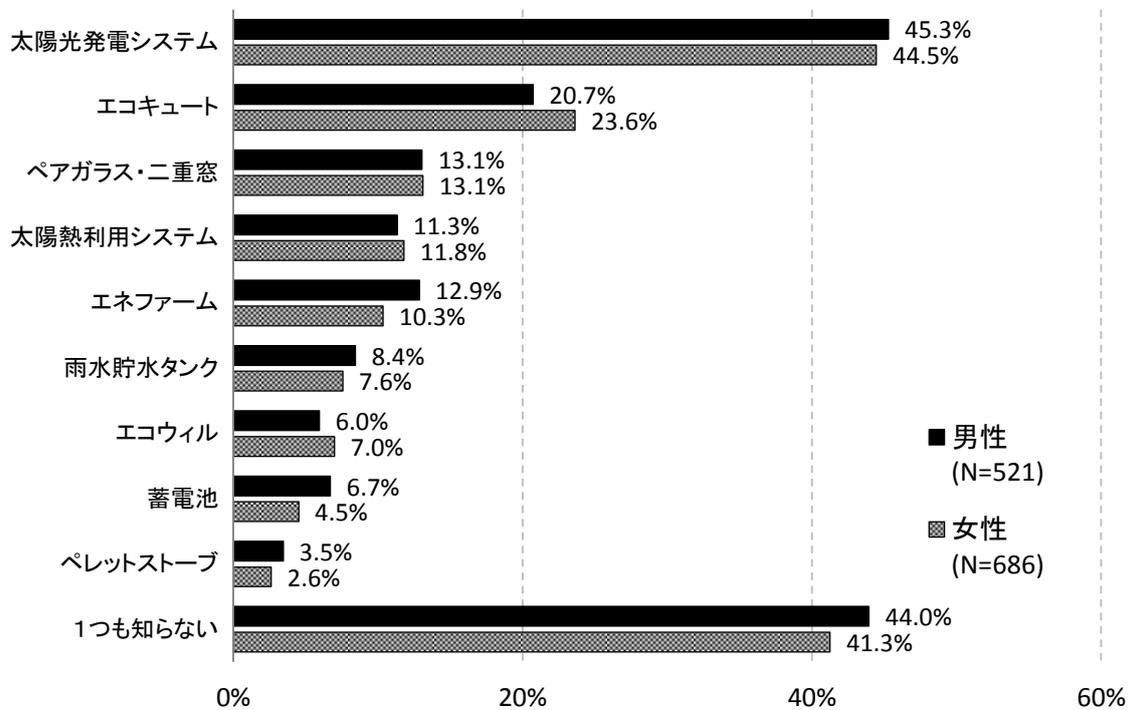


図 78 Q32A 補助対象だと知っている機器 (複数回答・男女別)

Q32A を年代別で見ると、「1 つも知らない」以外では、「エネファーム」と「エコウィル」を除いて、いずれにおいても 20 代が最も低い割合である。「エネファーム」と「エコウィル」では 70 代以上が最も低い割合である。また、「太陽光発電システム」、「エコキュート」、「太陽熱利用システム」、「エネファーム」、「雨水貯水タンク」では 20 代から 50 代まで年代が上がるごとに割合が増加している。なお、「1 つも知らない」では、20 代が 58.9%であり、その他の年代よりも 10 ポイント以上高い (図 79)。

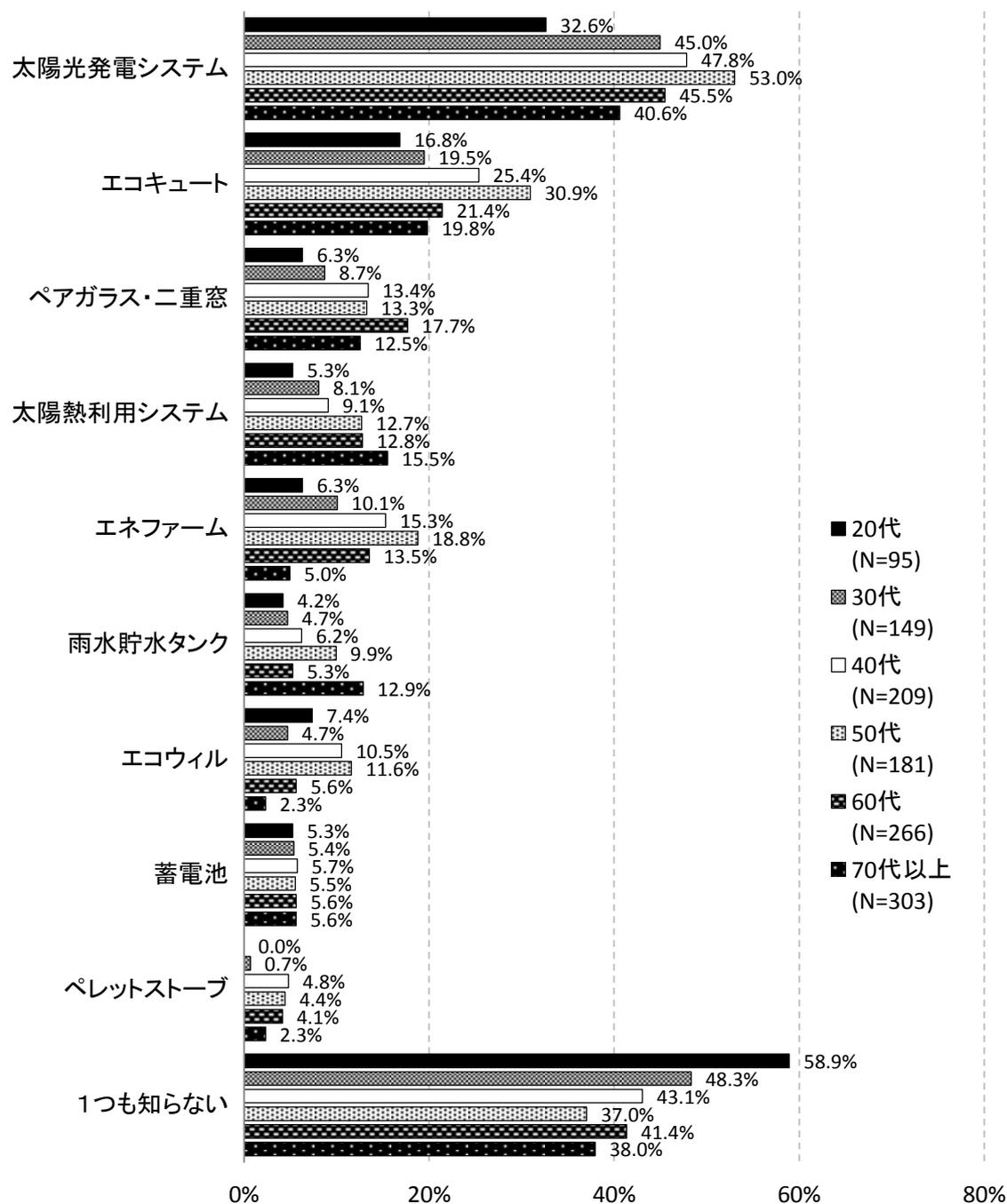


図 79 Q32A 補助対象だと知っている機器 (複数回答・年代別)

Q32Bの自宅に導入したい機器に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「特になし」を除くと、「太陽光発電システム」、「ペアガラス・二重窓」、「蓄電池」の順に高い割合である。なお、「特になし」の割合は60.8%である（図80）。

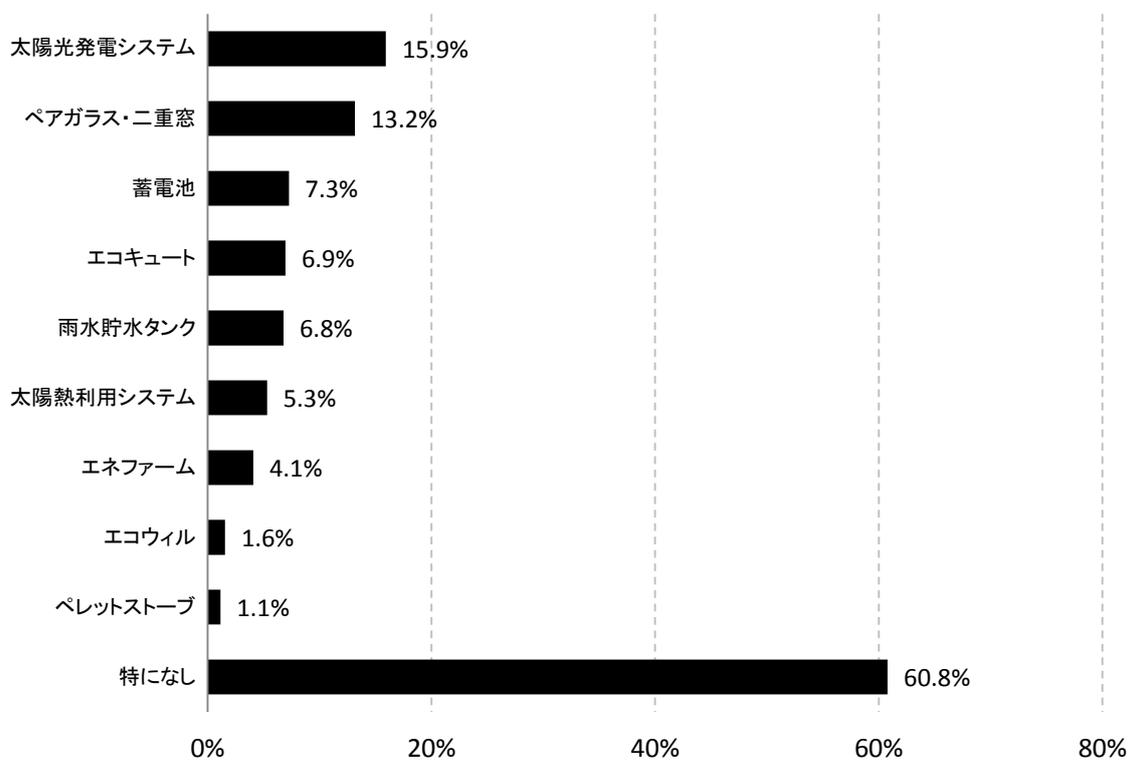


図80 Q32B 自宅に導入したい機器（複数回答・全体 N=1224）

Q32B を男女別で見ると、「雨水貯水タンク」と「エコキュート」を除いて、いずれも男性の方が高い割合である。「雨水貯水タンク」では男女等しい割合であり、「エコキュート」では女性の方が高い割合である。また、「蓄電池」において男性が 8.8%、女性が 6.0%であり、最も男女差が大きく、3ポイントほど男性の方が高い（図 81）。

Q32B を年代別で見ると、40代は「エコキュート」でのみ、60代は「雨水貯水タンク」でのみ最も高い割合である。「特になし」においては、20代が 67.4%と最も高く、50代が 52.5%と最も低い割合である（図 82）。

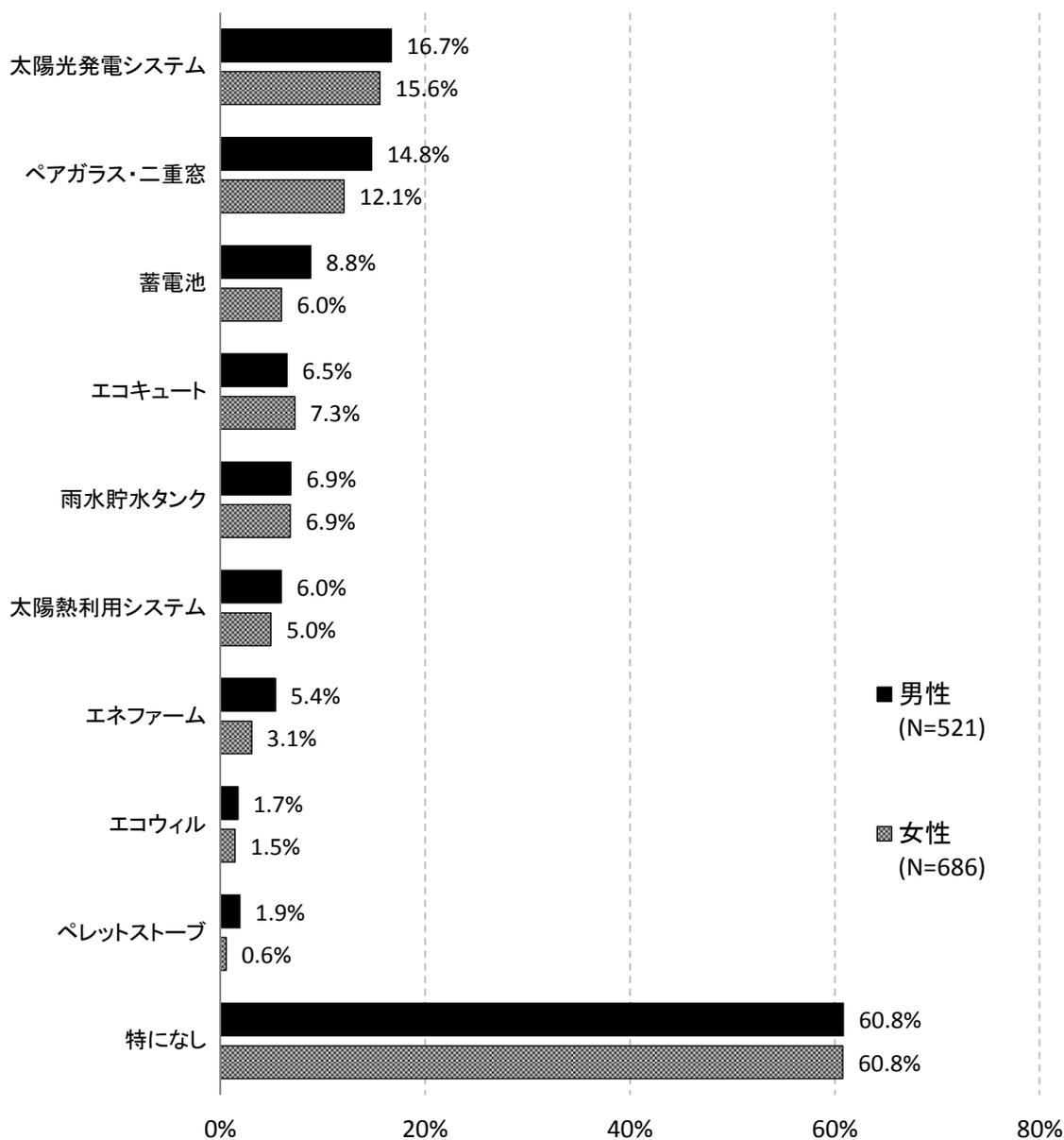


図 81 Q32B 自宅に導入したい機器（複数回答・男女別）

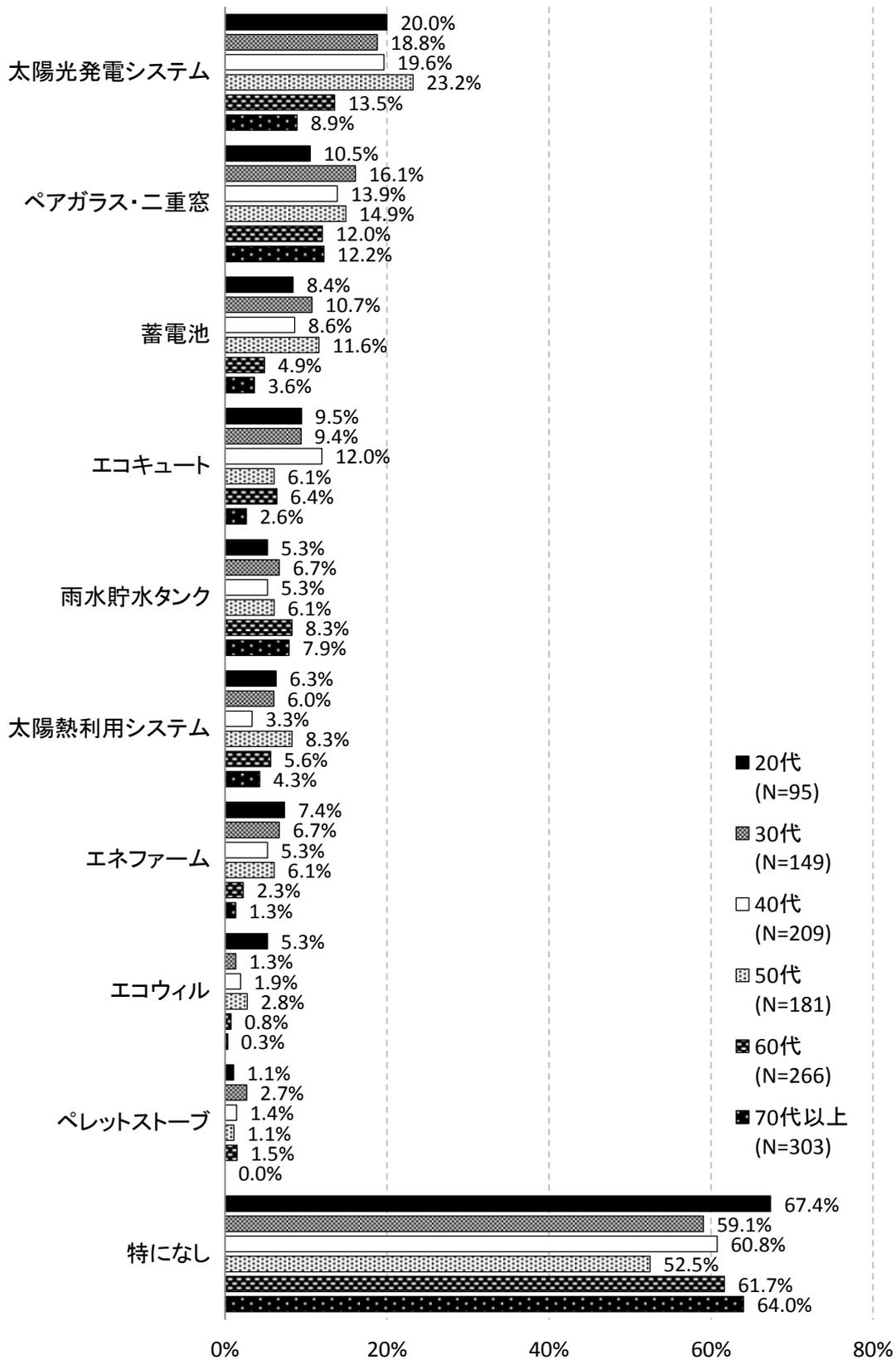


図 82 Q32B 自宅に導入したい機器（複数回答・年代別）

Q33①～Q33⑥では、高槻市がそれぞれの望ましい環境像にどの程度近づいていると思うかについて尋ねている。

Q33①の市民一人ひとりの心と行動が将来へ良好な環境を引き継ぐまちに関しては、20代と70代以上を除く男女別・年代別のすべての層で「あまり近づいていない」が最も高い割合である。20代と70代以上では「わからない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「十分近づいている」または「かなり近づいている」と回答した人の割合は50代以上では1割以上である（図83）。

Q33②の誰もが心地よく、憩いと安らぎある生活を営めるまちに関しては、20代を除く男女別・年代別のすべての層で「あまり近づいていない」が最も高い割合である。20代においては「かなり近づいている」が最も高い割合である。男女別で見ると、「十分近づいている」または「かなり近づいている」と回答した人の割合は男性では20.4%、女性では27.4%であり、女性の方が7ポイント高い。年代で見ると、その割合は、20代でのみ3割以上であり34.8%である（図84）。

Q33③の河川を軸に人と自然をつなぐみどり豊かなまちに関しては、30代以下を除く男女別・年代別のすべての層で「あまり近づいていない」が最も高い割合である。30代以下においては「わからない」が最も高い割合である。男女別で見ると、「十分近づいている」または「かなり近づいている」と回答した人の割合は男性では23.8%、女性では31.8%であり、女性の方が8ポイント高い（図85）。

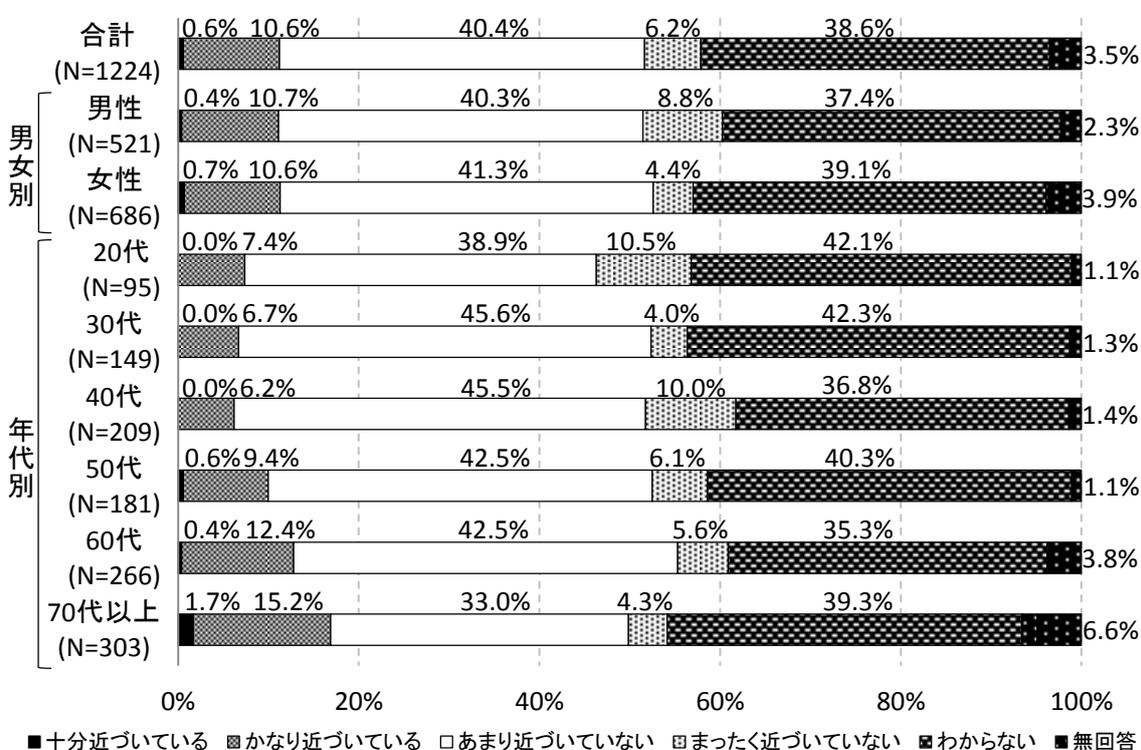


図83 Q33① 市の環境像 市民一人ひとりの心と行動が将来へ良好な環境を引き継ぐまち

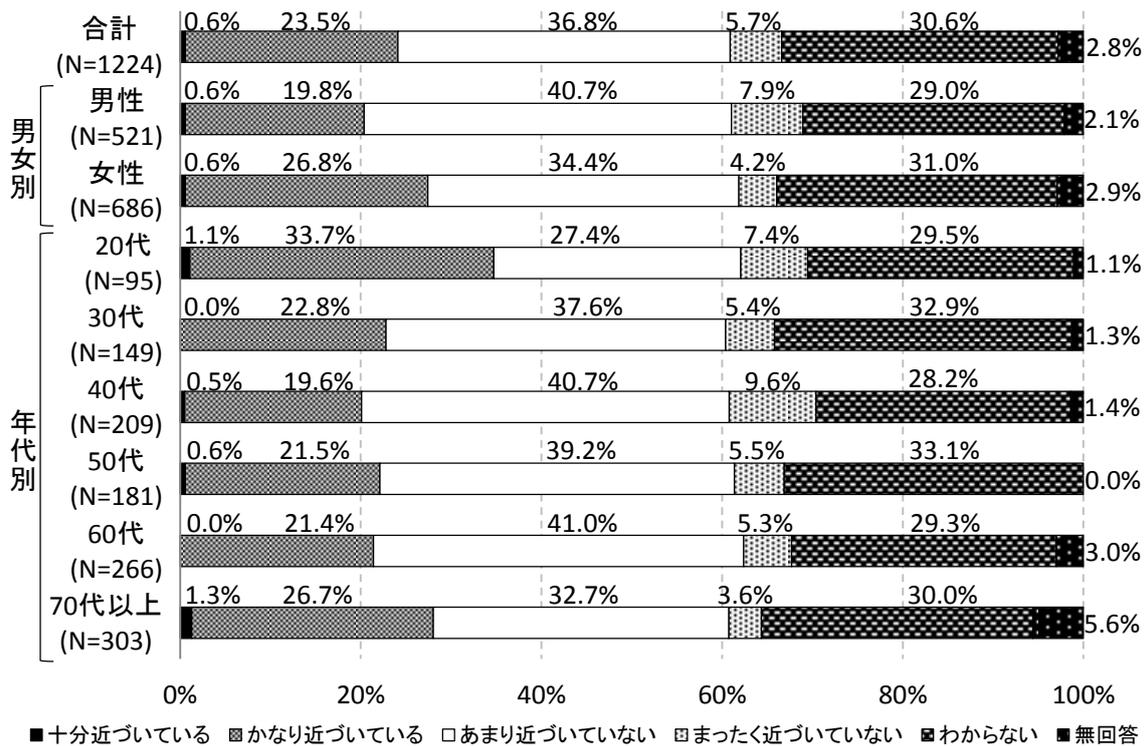


図 84 Q33② 市の環境像 誰もが心地よく、憩いと安らぎある生活を営めるまち

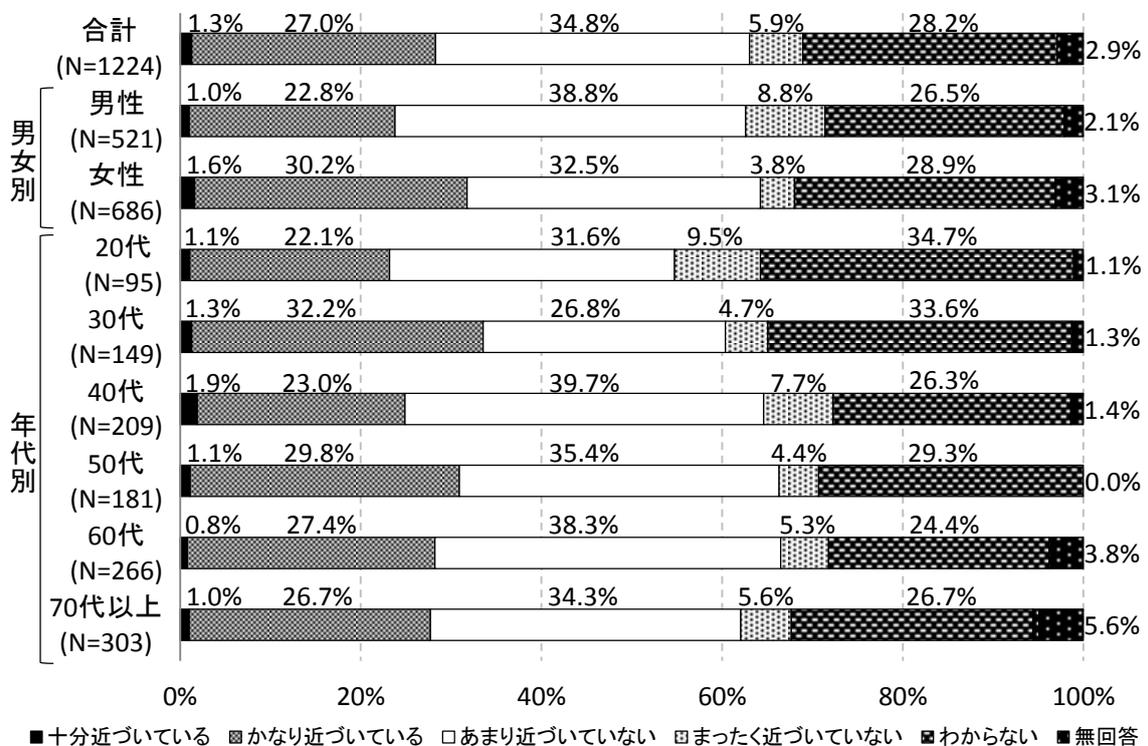


図 85 Q33③ 市の環境像 河川を軸に人と自然をつなぐみどり豊かなまち

Q33④のゆったりとした時間が流れるおだやかで風格のあるまちに関しては、男女別・年代別のすべての層で「あまり近づいていない」が最も高い割合である。男女別で見ると、男性では17.7%、女性では22.6%であり、女性の方が5ポイントほど高い。年代別で見ると、「十分近づいている」または「かなり近づいている」と回答した人の割合は、20代で最も高く26.3%である。30代は26.2%と20代に近い割合である（図86）。

Q33⑤の限りある資源を活かして、ごみゼロをめざすまちに関しては、男女別・年代別のすべての層で「あまり近づいていない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「十分近づいている」または「かなり近づいている」と回答した人の割合は、40代で最も低く9.1%であるが、年代が上がるごとに増加し70代以上では28.4%である。20代と30代はいずれも11%程度である（図87）。

Q33⑥の地球規模で考え、身近なことから行動するまちに関しては、合計と男性・女性で見ると、いずれも「あまり近づいていない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「十分近づいている」または「かなり近づいている」と回答した人の割合は、40代で最も低く5.7%であるが、年代が上がるごとに増加し70代以上では16.2%である。なお、20代は8.4%、30代は9.4%である。また、「まったく近づいていない」の割合は、20代で最も高く14.7%であるが、年代が上がるごとに減少し、70代以上では5.9%である（図88）。

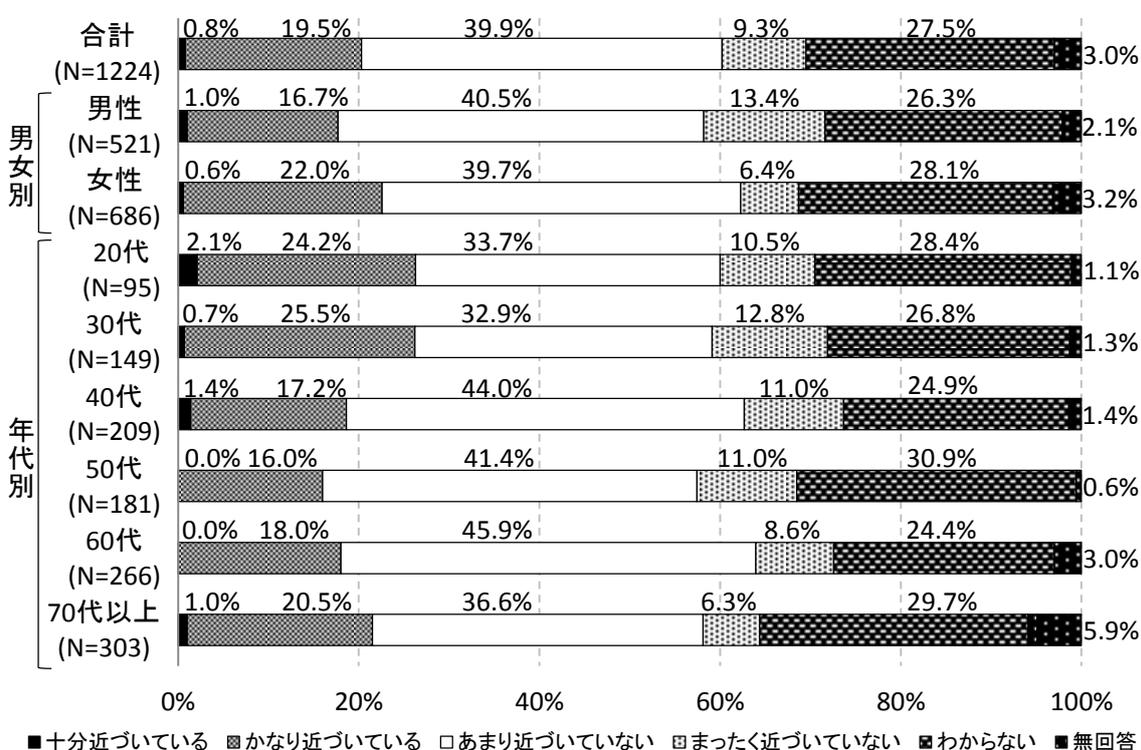


図86 Q33④ 市の環境像 ゆったりとした時間が流れるおだやかで風格のあるまち

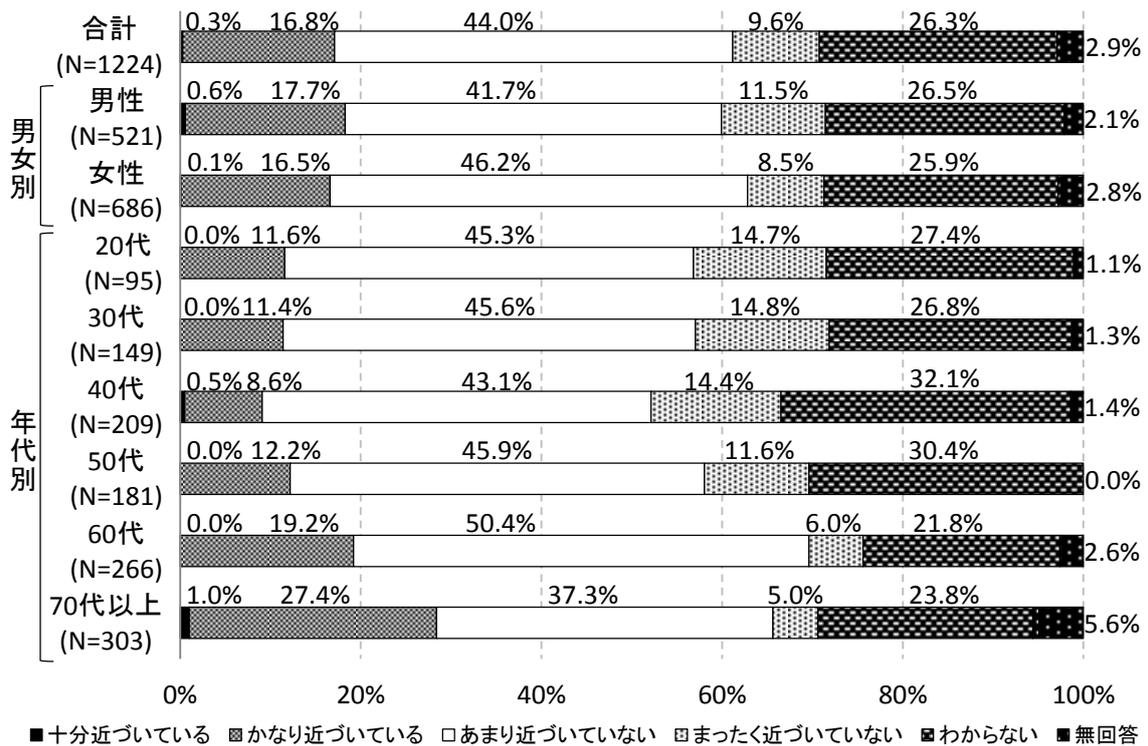


図 87 Q33⑤ 市の環境像 限りある資源を活かして、ごみゼロをめざすまち

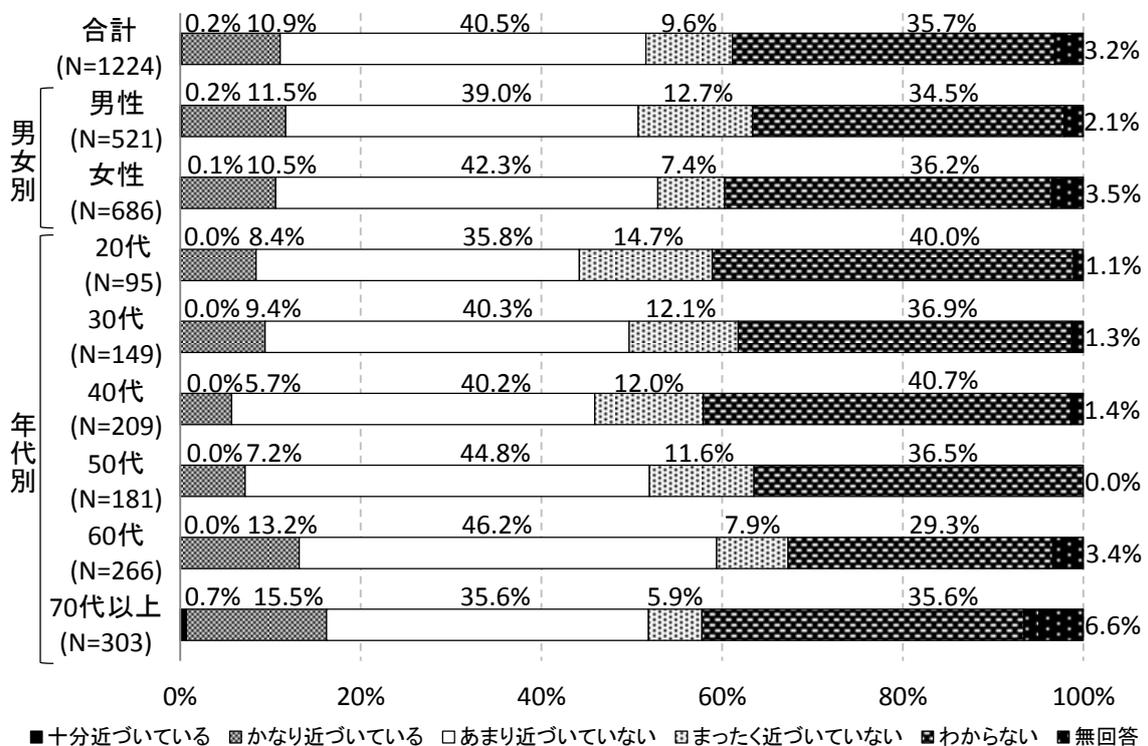


図 88 Q33⑥ 市の環境像 地球規模で考え、身近なことから行動するまち

Q34のJR高槻駅のドライ型ミストを体験したかに関しては、男性を除く男女別・年代別のすべての層で「南側と北側の両方とも体験した」が最も高い割合である。男性では「知らなかった」が最も高い割合である。また、50代を除く男女別・年代別すべての層で「北側だけを体験した」よりも「南側だけを体験した」の方が高い割合である。50代においては「北側だけを体験した」の方が高い（図89）。

Q35Aのドライ型ミストで涼しさを感じたかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「少し感じた」が最も高い割合であり5割から6割程度である。男女別で見ると、「すごく感じた」の割合は男性では10.9%、女性では18.2%であり女性の方が7ポイントほど高い。年代別で見ると、50代でのみ2割以上であり最も高い割合であり、70代以上でのみ1割未満であり最も低い割合である（図90）。

Q35Bのドライ型ミストで楽しさを感じたかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「少し感じた」が最も高い割合である。年代別で見ると、「すごく感じた」の割合は男性では10.2%、女性では21.0%であり、女性の方が11ポイントほど高い割合である。年代別で見ると、「すごく感じた」または「少し感じた」と回答した人の割合は、30代で80.0%と最も高いが、年代が上がるごとに減少し、70代以上では55.7%である。なお、20代では63.4%である（図91）。

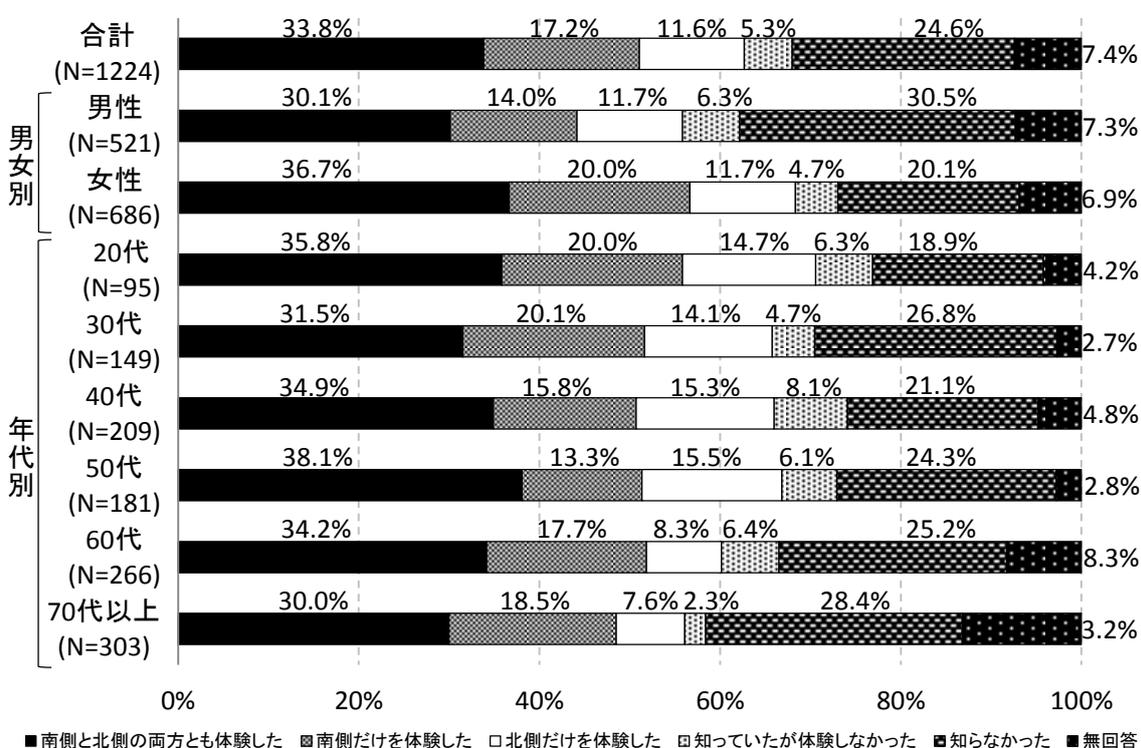


図 89 Q34 JR高槻駅のドライ型ミストを体験したか

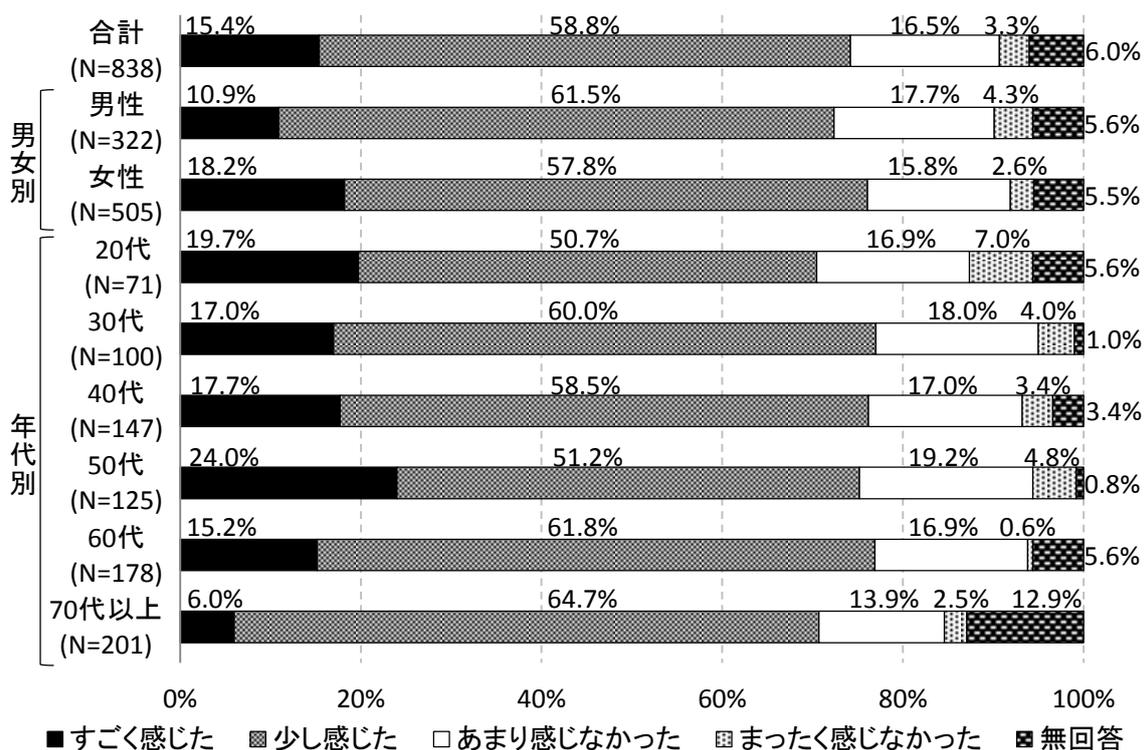


図 90 Q35A ドライ型ミストで涼しさを感じたか

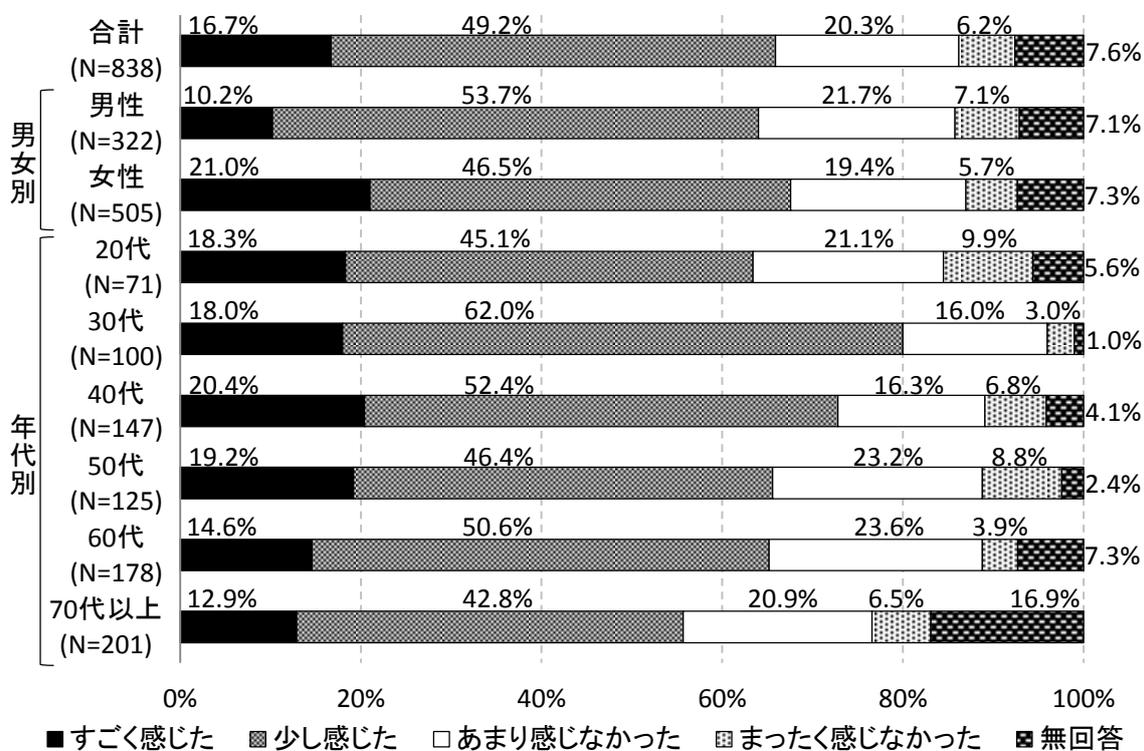


図 91 Q35B ドライ型ミストで楽しさを感じたか

Q36A のヒートアイランド対策を積極的に進める必要があるかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「ややそう思う」が最も高い割合である。男女別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は男性では 67.3%、女性では 74.6%であり女性の方が 7 ポイントほど高い。年代別で見ると、その割合は、30 代で最も高く 81.9%であり、70 代以上で最も低く 58.4%である (図 92)。

Q36B のドライ型ミストを増やすとよいかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「ややそう思う」が最も高い割合である。男女別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は男性では 60.1%、女性では 66.9%であり女性の方が 7 ポイントほど高い。年代別で見ると、その割合は、50 代で最も高く 71.8%であり、70 代以上で最も低く 53.8%である (図 93)。

Q36C のドライ型ミストと他の様々な方法を組み合わせるとよいかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「ややそう思う」が最も高い割合である。男女別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は男性では 71.0%、女性では 79.3%であり女性の方が 8 ポイントほど高い。年代別で見ると、その割合は、30 代で最も高く 85.9%であり、70 代以上で最も低く 62.4%である (図 94)。

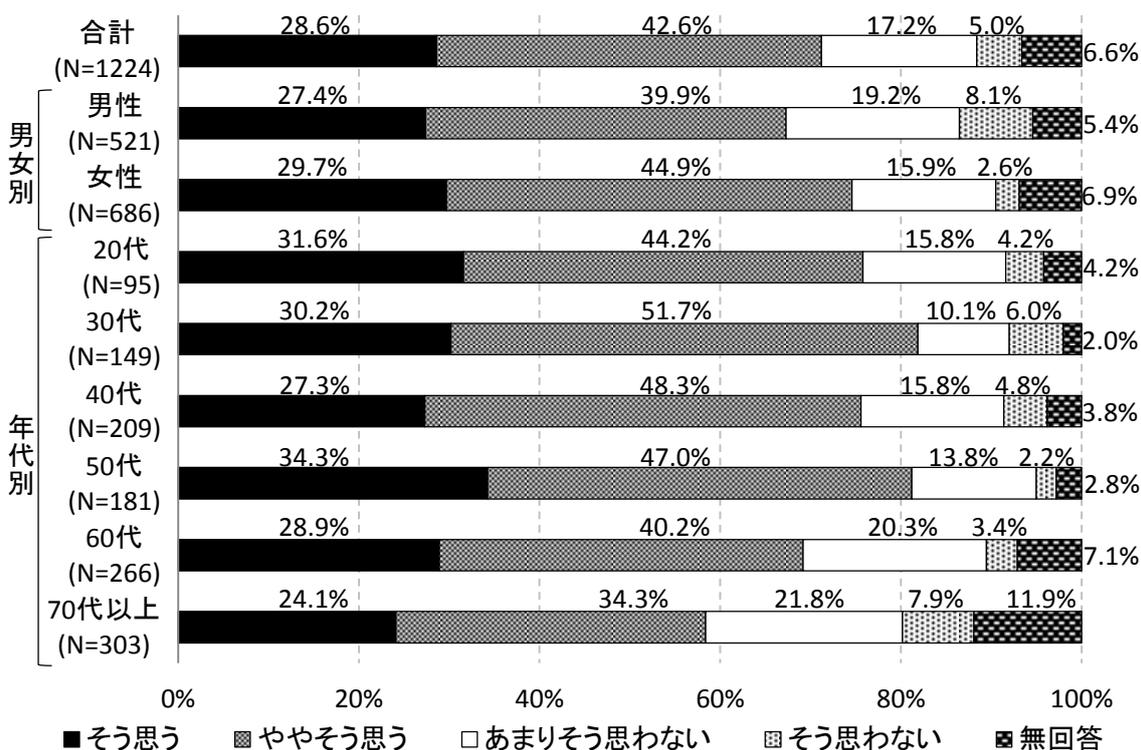


図 92 Q36A ヒートアイランド対策を積極的に進める必要があるか

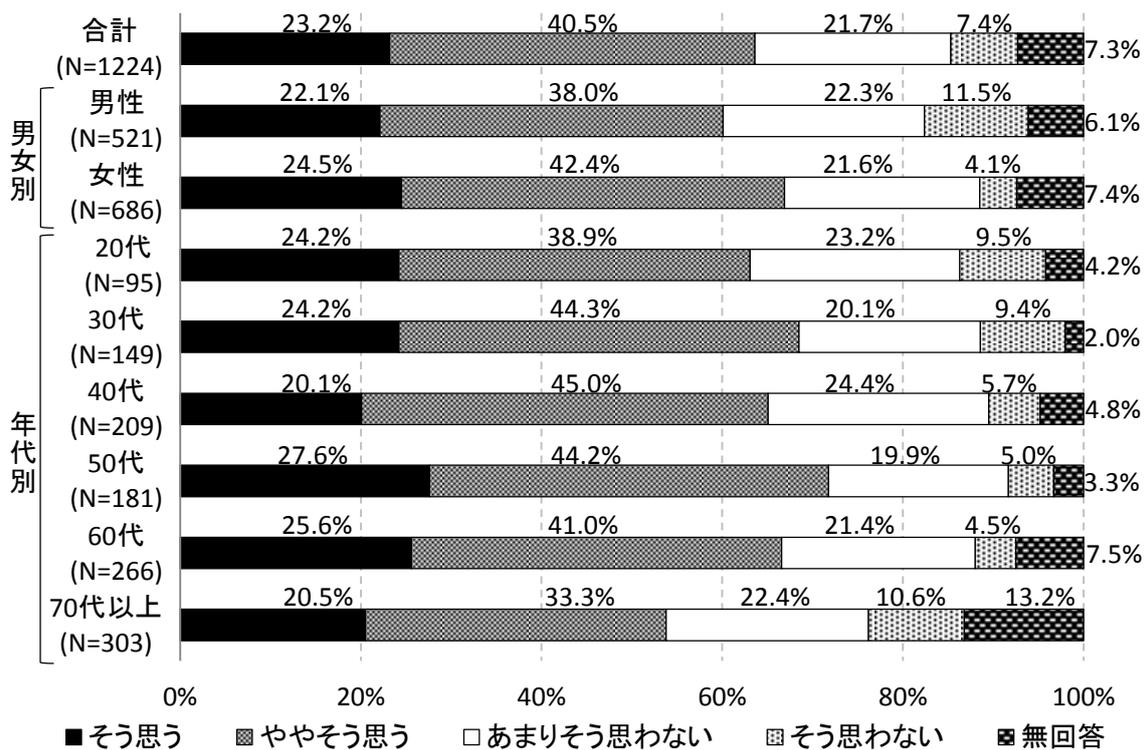


図 93 Q36B ドライ型ミストを増やすとよいか

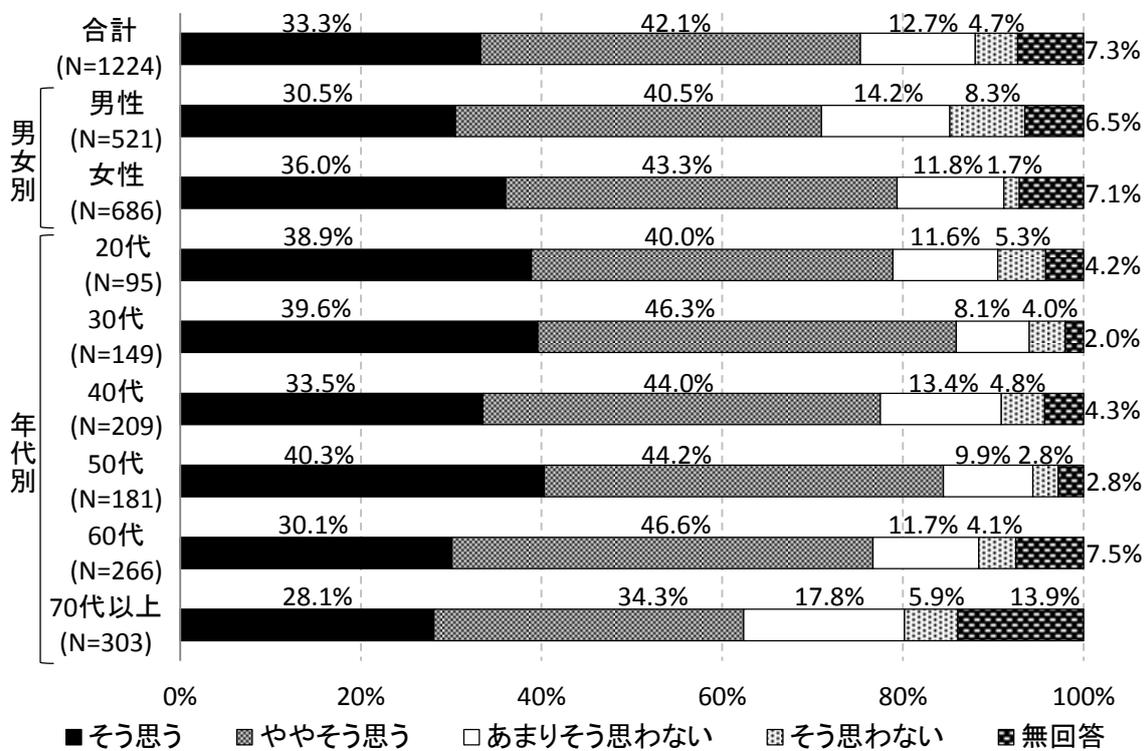


図 94 Q36C ドライ型ミストと他の様々な方法を組み合わせるとよいか

Q36D のヒートアイランド対策についてもっと知らせてほしいかに関しては、70 代以上を除く男女別・年代別のすべての層で「ややそう思う」が最も高い割合である。70 代以上では「そう思う」が最も高い割合である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、50 代で最も高く 81.8%であるが、年代が上がるごとに、また、年代が下がるごとに減少し、20 代では 64.2%、70 代以上では 59.8%になる（図 95）。

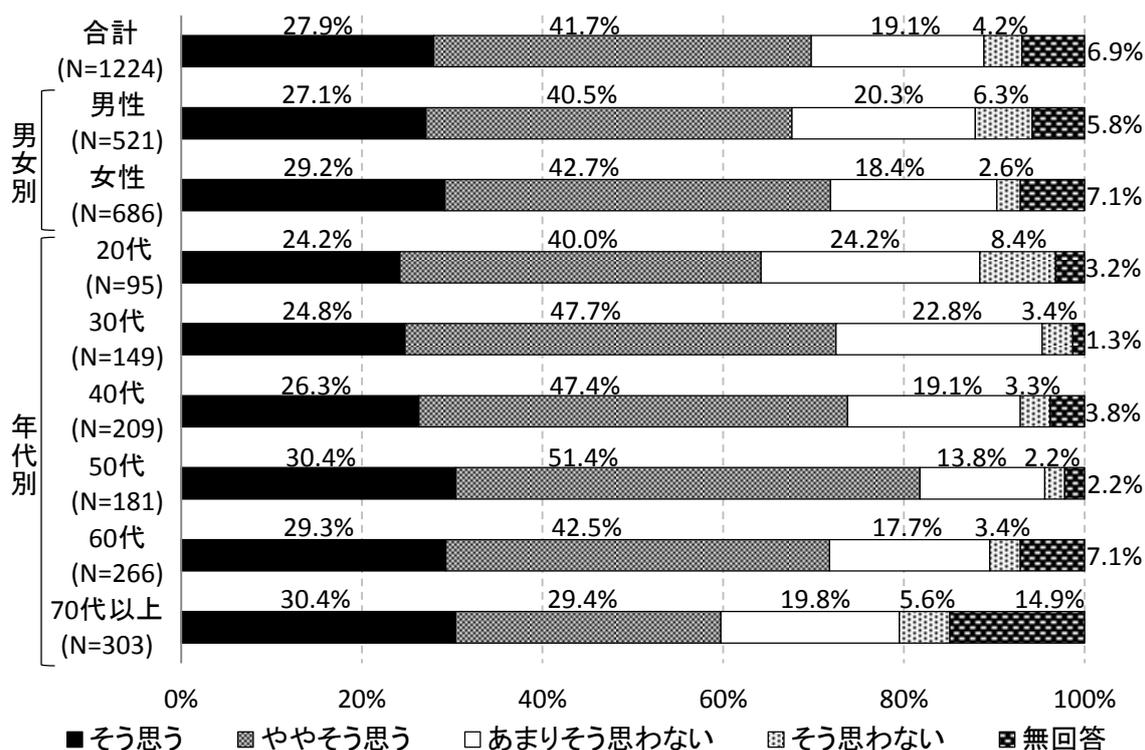


図 95 Q36D ヒートアイランド対策についてもっと知らせてほしいか

Q37 の救急車を呼ぶ判断に迷ったことがあるかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「ない」が5割以上と最も高い割合である。特に20代は69.5%と最も高い。「ある」の割合は、男女別で見ると、男性が34.9%、女性が41.3%と女性の方が6ポイントほど高い。年代別で見ると、20代を除いて3割以上である（図96）。

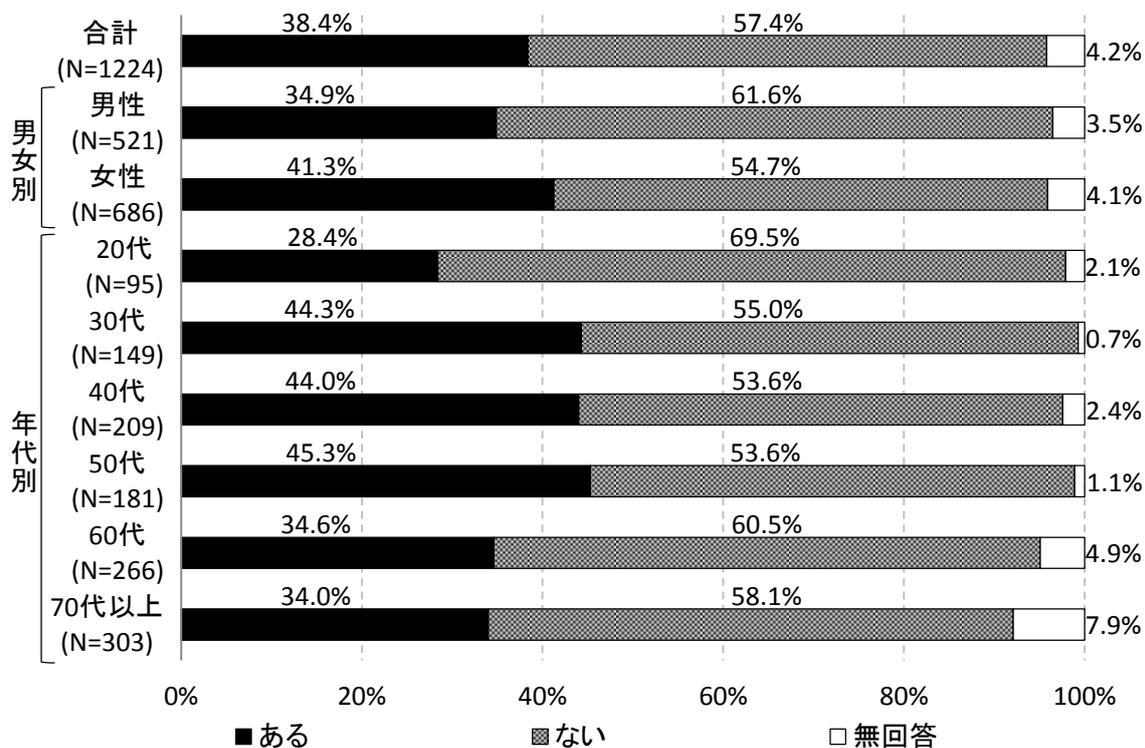


図96 Q37 救急車を呼ぶ判断に迷ったことがあるか

Q38 の夜間・休日の緊急診療可能機関を知っているかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「はい」の割合が 7 割から 8 割以上であり最も高い。「いいえ」の割合は、20 代でのみ 2 割以上であり、全年代中で最も高い割合である（図 97）。

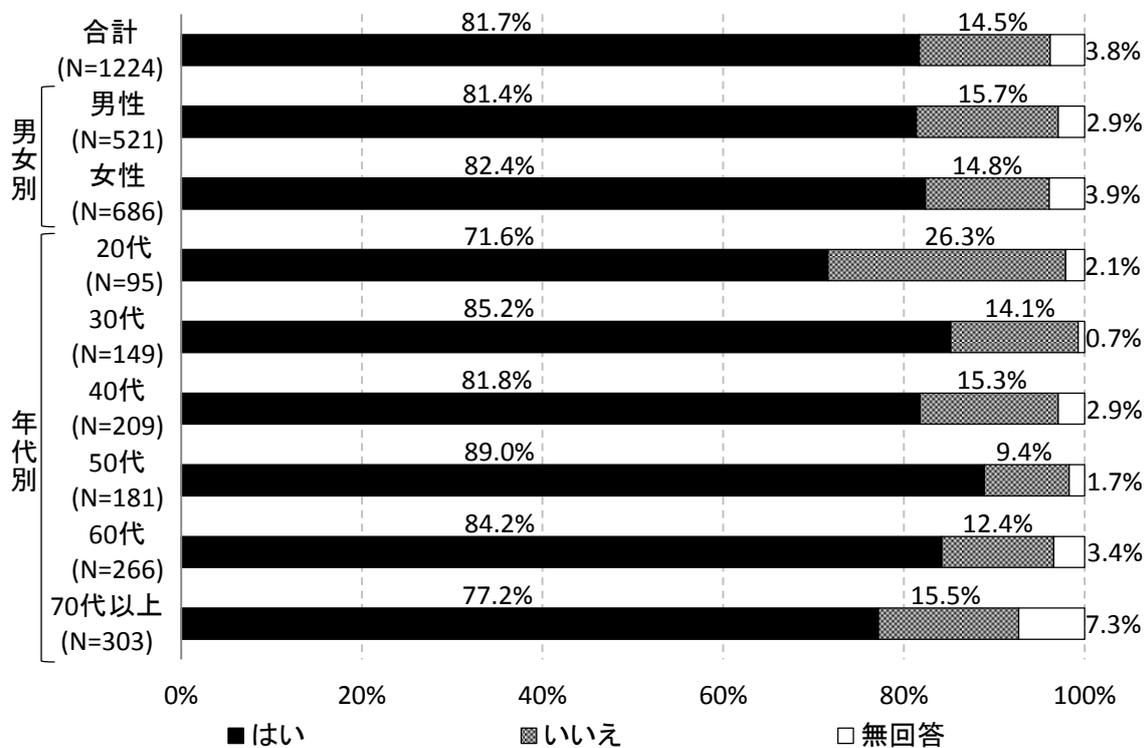


図 97 Q38 夜間・休日の緊急診療可能機関を知っているか

Q39 の「救急安心センターおおさか」を知っているかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「いいえ」の割合が5割から8割であり最も高い。「はい」の割合は、男性では30.1%、女性では36.4%と女性の方が6ポイントほど高い。年代別で見ると、「はい」の割合は、20代が15.8%と最も低い割合であり、30代が43.6%と最も高い割合である。40代以上では、いずれも33.0~35.0%である（図98）。

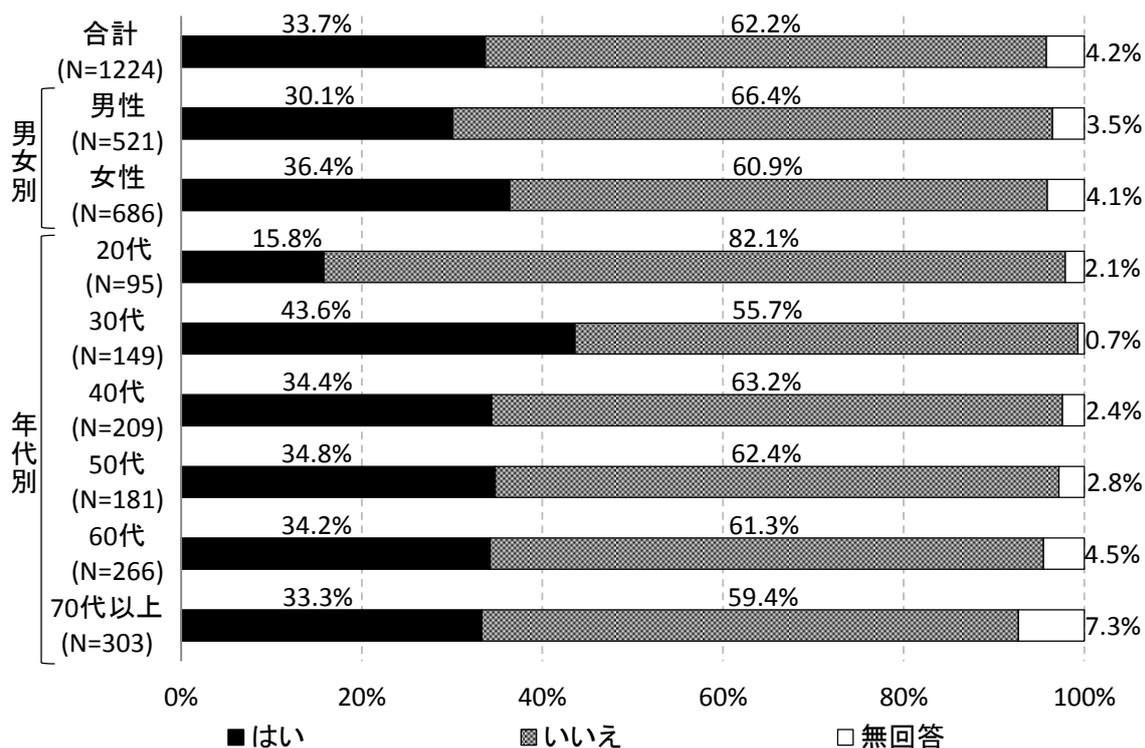


図 98 Q39 「救急安心センターおおさか」を知っているか

Q40①と Q40②では、居住地域と居住年数とのクロス集計も提示する。また、図の数字が読みづらくなる場合は同時に表も提示している。

Q40①の市の仕事のうち良くなってきたものに関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「図書館、博物館などの文化施設の整備」、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」、「スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり」の順に高い割合である。特に「図書館、博物館などの文化施設の整備」、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」はその他の項目よりも10ポイント以上高い（図 99）。

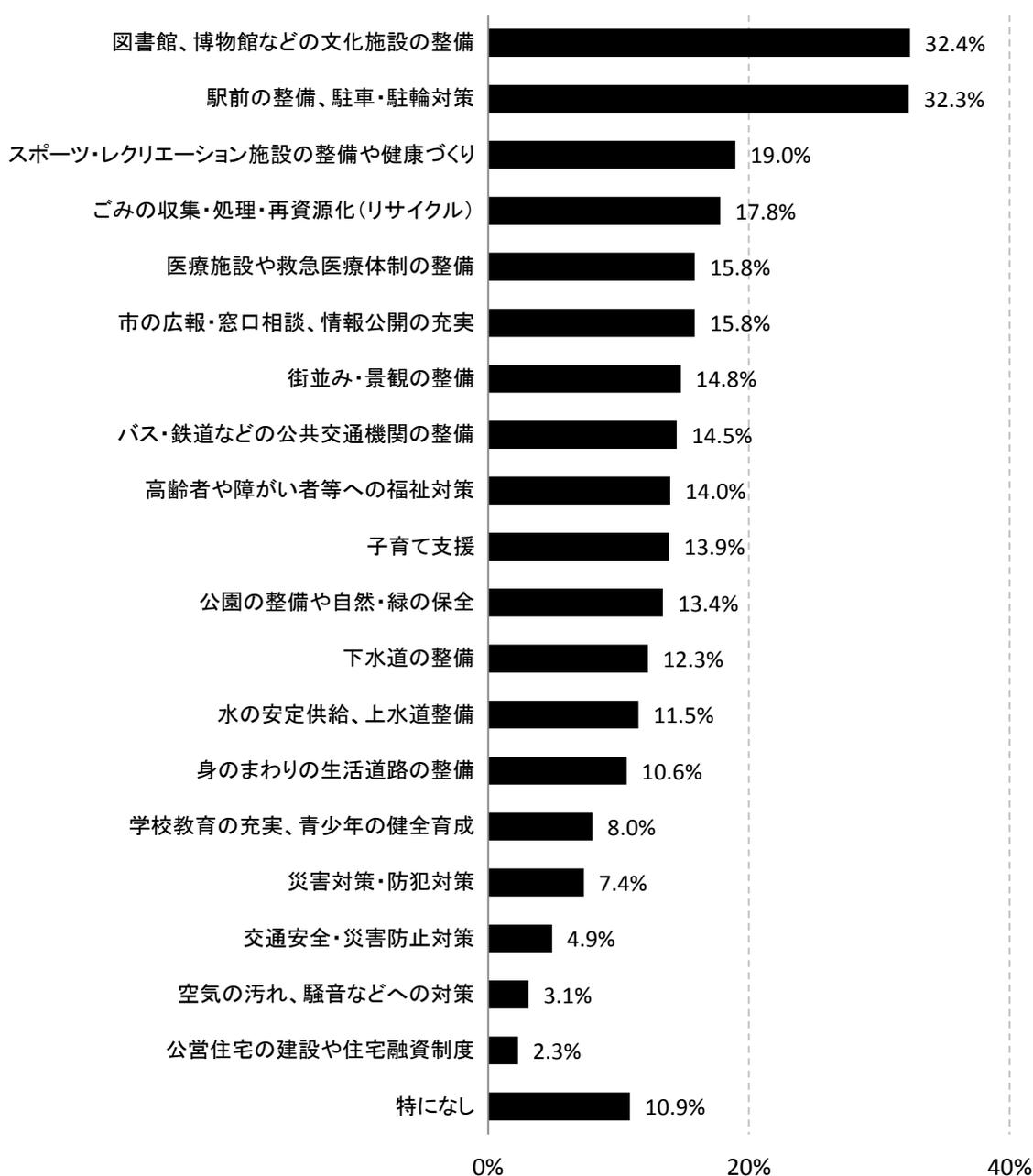


図 99 Q40① 市の仕事のうち良くなってきたもの（複数回答・全体 N=1224）

Q40①を男女別で見ると、「街並み・景観の整備」、「子育て支援」において、男性よりも女性の方が5ポイント以上高い割合である（図 100）。

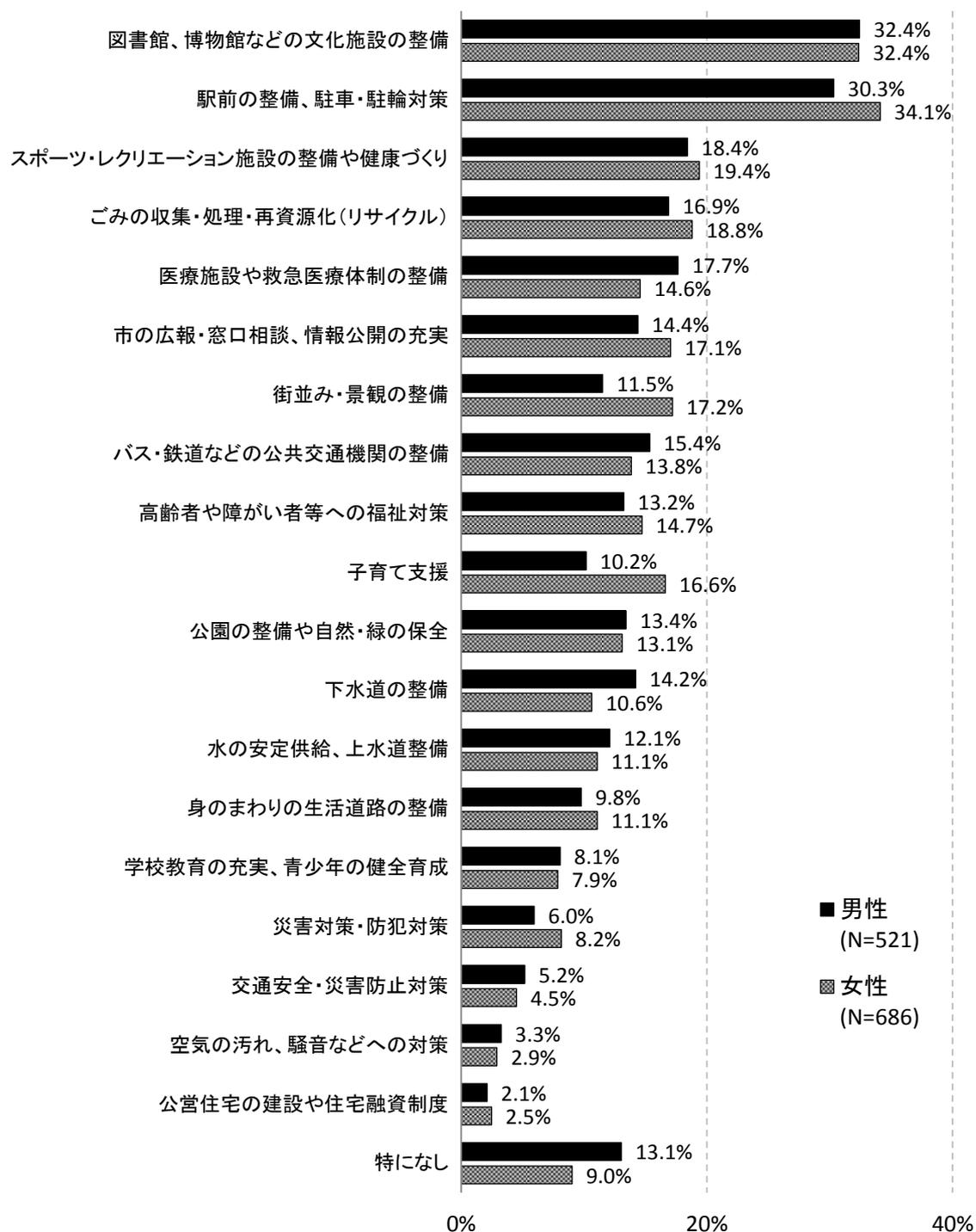


図 100 Q40① 市の仕事のうち良くなってきたもの（複数回答・男女別）

Q40①を年代別で見ると、約半数の項目において、70代以上が最も高い割合もしくは2番目に高い割合である。また、すべての年代において「図書館、博物館などの文化施設の整備」と「駅前の整備、駐車・駐輪対策」が上位2項目であり、「特になし」を除くと、20代では「バス・鉄道などの公共交通機関の整備」と「高齢者や障がい者等への福祉対策」、30代と40代では「子育て支援」、50代では「スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり」、60代と70代以上では「ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）」がそれぞれ3番目に高い割合である（表7、図101）。

表7 Q40① 市の仕事のうち良くなってきたもの（複数回答・年代別）

	(%)						
	図書館、博物館などの文化施設の整備	駅前の整備、駐車・駐輪対策	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）	医療施設や救急医療体制の整備	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	街並み・景観の整備
20代 (N=95)	21.1	25.3	7.4	4.2	12.6	5.3	13.7
30代 (N=149)	26.8	32.9	16.8	8.7	15.4	12.8	19.5
40代 (N=209)	34.4	34.4	21.5	9.6	12.4	11.5	14.8
50代 (N=181)	31.5	34.3	19.3	16.6	14.9	17.7	18.2
60代 (N=266)	36.5	34.2	21.4	22.6	17.3	21.8	13.5
70代以上 (N=303)	33.7	31.0	19.8	29.4	19.1	18.5	12.2
	(%)						
	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	高齢者や障がい者等への福祉対策	子育て支援	公園の整備や自然・緑の保全	下水道の整備	水の安定供給、上水道整備	身のまわりの生活道路の整備
20代 (N=95)	15.8	15.8	6.3	11.6	5.3	4.2	9.5
30代 (N=149)	14.1	4.7	22.1	15.4	3.4	5.4	11.4
40代 (N=209)	8.1	9.6	22.5	12.0	4.3	6.2	8.1
50代 (N=181)	12.7	11.0	17.7	11.0	13.8	12.7	11.6
60代 (N=266)	14.3	16.9	11.7	13.5	17.3	13.2	10.2
70代以上 (N=303)	20.5	20.5	6.3	15.5	19.5	18.5	12.5
	(%)						
	学校教育の充実、青少年の健全育成	災害対策・防犯対策	交通安全・災害防止対策	空気の汚れ、騒音などへの対策	公営住宅の建設や住宅融資制度	特になし	
20代 (N=95)	6.3	7.4	5.3	4.2	3.2	17.9	
30代 (N=149)	6.0	4.7	4.7	1.3	1.3	13.4	
40代 (N=209)	11.0	5.7	2.9	1.4	3.3	12.4	
50代 (N=181)	7.2	4.4	3.3	3.3	1.7	14.4	
60代 (N=266)	8.3	10.5	6.8	1.9	1.5	7.5	
70代以上 (N=303)	7.6	8.9	5.9	5.6	3.0	6.9	

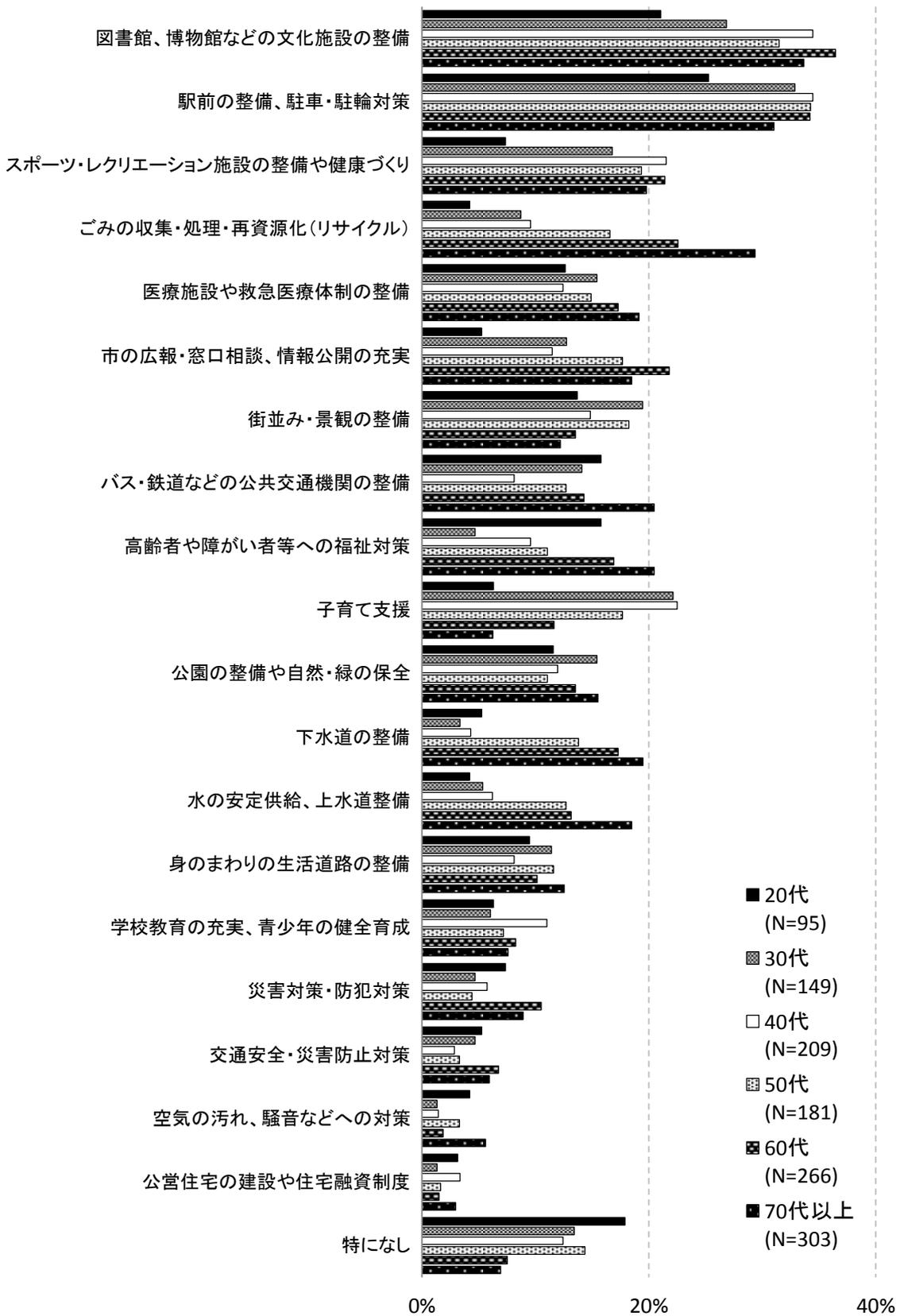


図 101 Q40① 市の仕事のうち良くなってきたもの（複数回答・年代別）

Q40①を居住地域別で見ると、すべての割合の中で、「図書館、博物館などの文化施設の整備」と「駅前の整備、駐車・駐輪対策」における高槻北地区の割合のみが4割以上である。また、「バス・鉄道などの公共交通機関の整備」において、五領地区が32.4%と、その他の地区よりも13ポイント以上高い割合である（表8、図102）。

表8 Q40① 市の仕事のうち良くなってきたもの（複数回答・居住地域別）

	図書館、博物館などの文化施設の整備	駅前の整備、駐車・駐輪対策	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）	医療施設や救急医療体制の整備	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	街並み・景観の整備
高槻北地区 (N=357)	43.7	42.6	21.6	21.3	18.8	17.6	19.3
高槻南地区 (N=311)	22.5	32.2	16.4	19.6	15.8	14.1	10.6
五領地区 (N=34)	17.6	29.4	17.6	17.6	5.9	17.6	14.7
高槻西地区 (N=186)	36.0	28.0	19.4	15.6	12.9	17.7	16.7
如是・富田地区 (N=242)	29.3	26.0	19.4	13.6	15.3	15.3	14.0
三箇牧地区 (N=34)	26.5	20.6	26.5	17.6	20.6	14.7	8.8

	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	高齢者や障がい者等への福祉対策	子育て支援	公園の整備や自然・緑の保全	下水道の整備	水の安定供給、上水道整備	身のまわりの生活道路の整備
高槻北地区 (N=357)	18.5	13.7	15.1	15.1	14.3	11.2	11.8
高槻南地区 (N=311)	11.9	14.5	15.1	11.3	13.2	13.8	8.7
五領地区 (N=34)	32.4	11.8	5.9	8.8	14.7	8.8	11.8
高槻西地区 (N=186)	17.7	15.1	16.1	14.5	12.9	9.7	17.2
如是・富田地区 (N=242)	8.7	11.6	10.3	11.6	7.9	10.7	5.8
三箇牧地区 (N=34)	8.8	26.5	14.7	23.5	17.6	20.6	17.6

	学校教育の充実、青少年の健全育成	災害対策・防犯対策	交通安全・災害防止対策	空気の汚れ、騒音などへの対策	公営住宅の建設や住宅融資制度	特になし
高槻北地区 (N=357)	11.5	8.1	6.4	3.6	2.0	8.1
高槻南地区 (N=311)	6.1	5.5	3.9	3.2	2.6	13.2
五領地区 (N=34)	8.8	2.9	2.9	2.9	0.0	5.9
高槻西地区 (N=186)	9.1	6.5	4.3	3.2	0.5	8.1
如是・富田地区 (N=242)	5.0	9.5	3.7	2.1	3.3	13.6
三箇牧地区 (N=34)	8.8	14.7	11.8	2.9	2.9	17.6

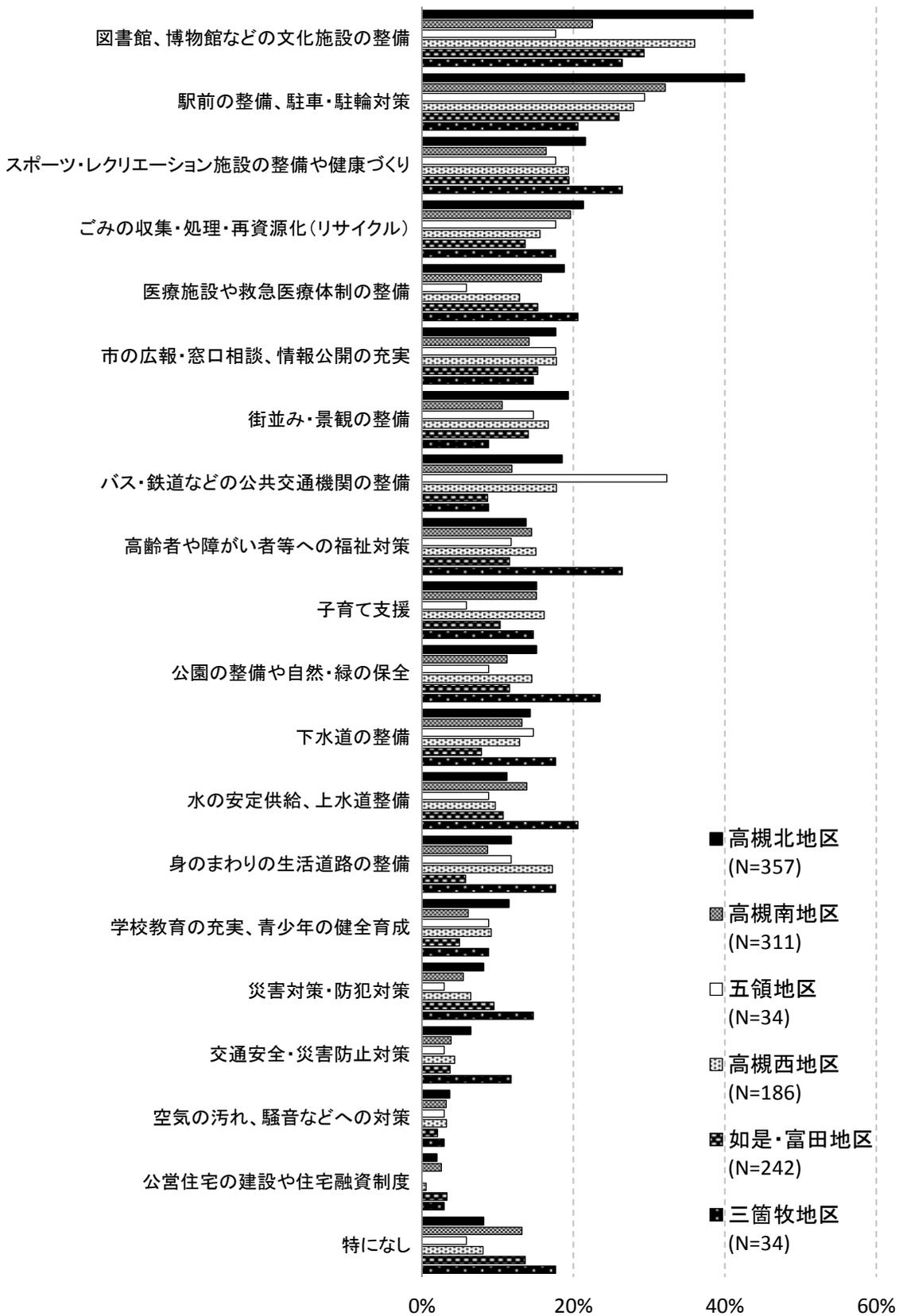


図 102 Q40① 市の仕事のうち良くなってきたもの（複数回答・居住地域別）

Q40①を居住年数別で見ると、すべての割合の中で、「図書館、博物館などの文化施設の整備」における50年以上の居住者のみが4割以上の割合である。また、「水の安定供給、上水道整備」において、50年以上の居住者がその他の年数の居住者よりも7ポイント以上高い(表9, 図103)。

表9 Q40①市の仕事のうち良くなってきたもの(複数回答・居住年数別)

	図書館、博物館などの文化施設の整備	駅前、駐輪場の整備	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	医療施設や救急医療体制の整備	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	街並み・景観の整備
1年未満(N=17)	5.9	5.9	5.9	5.9	0.0	0.0	0.0
1年以上3年未満(N=40)	20.0	12.5	7.5	5.0	10.0	7.5	15.0
3年以上5年未満(N=50)	16.0	20.0	12.0	12.0	12.0	12.0	8.0
5年以上10年未満(N=85)	24.7	29.4	11.8	12.9	16.5	7.1	16.5
10年以上20年未満(N=149)	35.6	34.9	16.1	12.8	10.7	18.1	17.4
20年以上30年未満(N=213)	32.4	30.0	15.5	13.1	17.8	12.2	16.9
30年以上40年未満(N=266)	33.1	38.7	24.1	20.3	16.5	17.3	16.5
40年以上50年未満(N=277)	36.1	32.5	22.0	24.5	16.6	21.3	13.4
50年以上(N=103)	40.8	37.9	26.2	25.2	22.3	19.4	11.7

	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	高齢者や障がい者等への福祉対策	子育て支援	公園の整備や自然・緑の保全	下水道の整備	水の安定供給、上水道整備	身のまわりの生活道路の整備
1年未満(N=17)	0.0	5.9	5.9	0.0	0.0	0.0	0.0
1年以上3年未満(N=40)	5.0	2.5	2.5	17.5	0.0	0.0	5.0
3年以上5年未満(N=50)	10.0	10.0	14.0	6.0	4.0	4.0	4.0
5年以上10年未満(N=85)	10.6	5.9	18.8	12.9	5.9	9.4	7.1
10年以上20年未満(N=149)	14.8	12.8	18.1	15.4	7.4	8.1	11.4
20年以上30年未満(N=213)	15.5	9.4	14.6	10.8	7.5	8.0	11.3
30年以上40年未満(N=266)	14.3	13.9	11.3	13.2	16.5	13.9	12.4
40年以上50年未満(N=277)	15.5	19.9	13.7	14.4	17.3	14.4	10.8
50年以上(N=103)	20.4	24.3	12.6	15.5	22.3	22.3	14.6

	学校教育の充実、青少年の健全育成	災害対策・防犯対策	交通安全・災害防止対策	空気の汚れ、騒音などへの対策	公営住宅の建設や住宅融資制度	特になし
1年未満(N=17)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	23.5
1年以上3年未満(N=40)	2.5	2.5	0.0	0.0	0.0	30.0
3年以上5年未満(N=50)	4.0	2.0	6.0	2.0	6.0	22.0
5年以上10年未満(N=85)	8.2	7.1	0.0	0.0	0.0	11.8
10年以上20年未満(N=149)	8.7	10.1	6.7	2.0	1.3	15.4
20年以上30年未満(N=213)	6.6	7.0	5.6	1.4	1.9	10.8
30年以上40年未満(N=266)	7.9	6.4	2.6	5.3	2.6	6.0
40年以上50年未満(N=277)	9.0	9.4	6.5	3.2	3.2	8.3
50年以上(N=103)	12.6	7.8	8.7	7.8	1.9	7.8

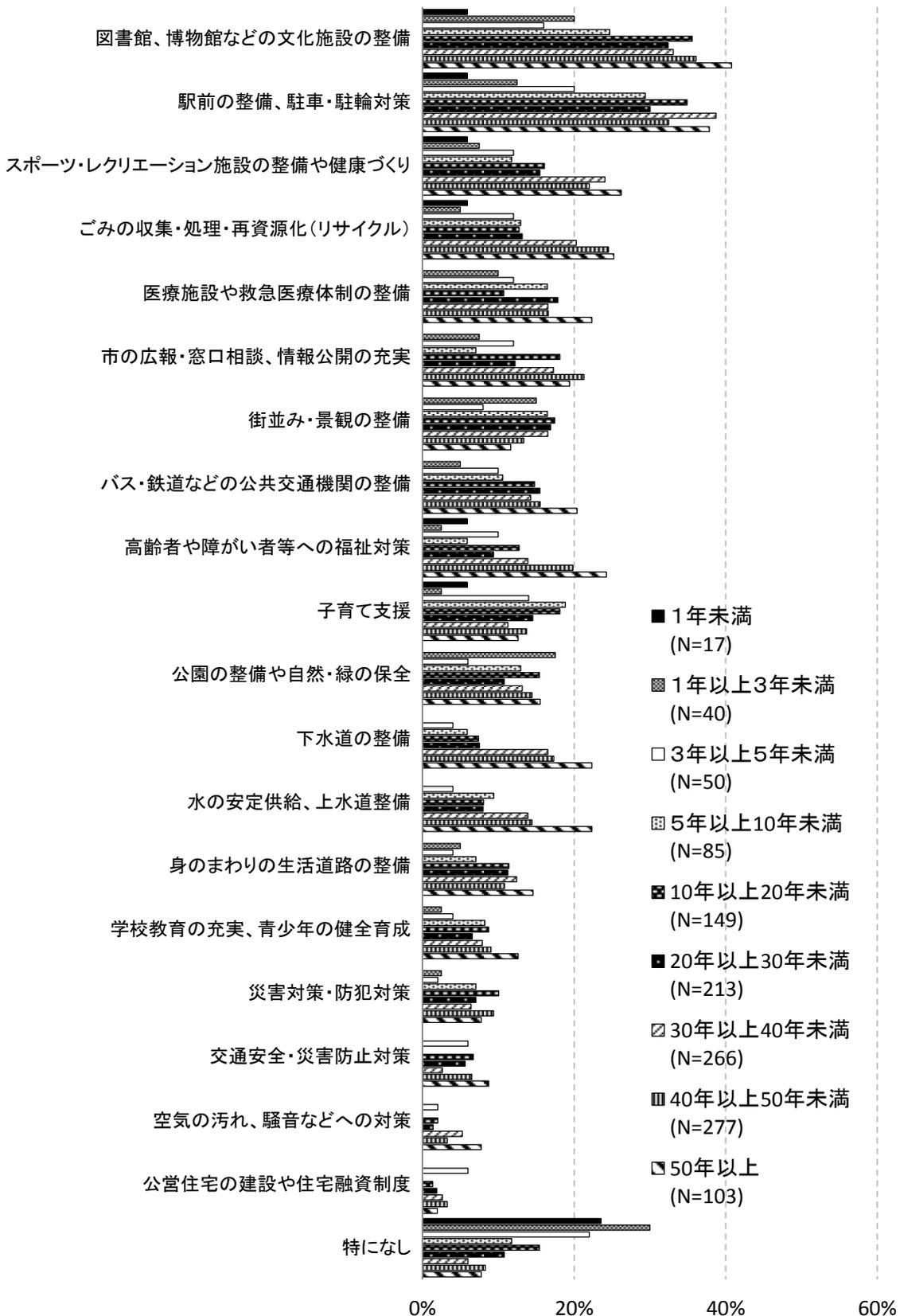


図 103 Q40① 市の仕事のうち良くなってきたもの（複数回答・居住年数別）

Q40②の市の仕事のうち力を入れてほしいものに関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「学校教育の充実、青少年の健全育成」、「高齢者や障がい者等への福祉対策」、「医療施設や救急医療体制の整備」の順に高い割合である（図 104）。

Q40②を男女別で見ると、男性の方が高い割合を示す項目のうち、最も男女差が大きいのは「スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり」であり、男性が 14.2%、女性が 8.6%と男性の方が 6 ポイントほど高い。女性の方が高い割合を示す項目のうち、男女差が大きいのは「医療施設や救急医療体制の整備」や「災害対策・防犯対策」であり、どちらも女性の方が 5 ポイントほど高い（図 105）。

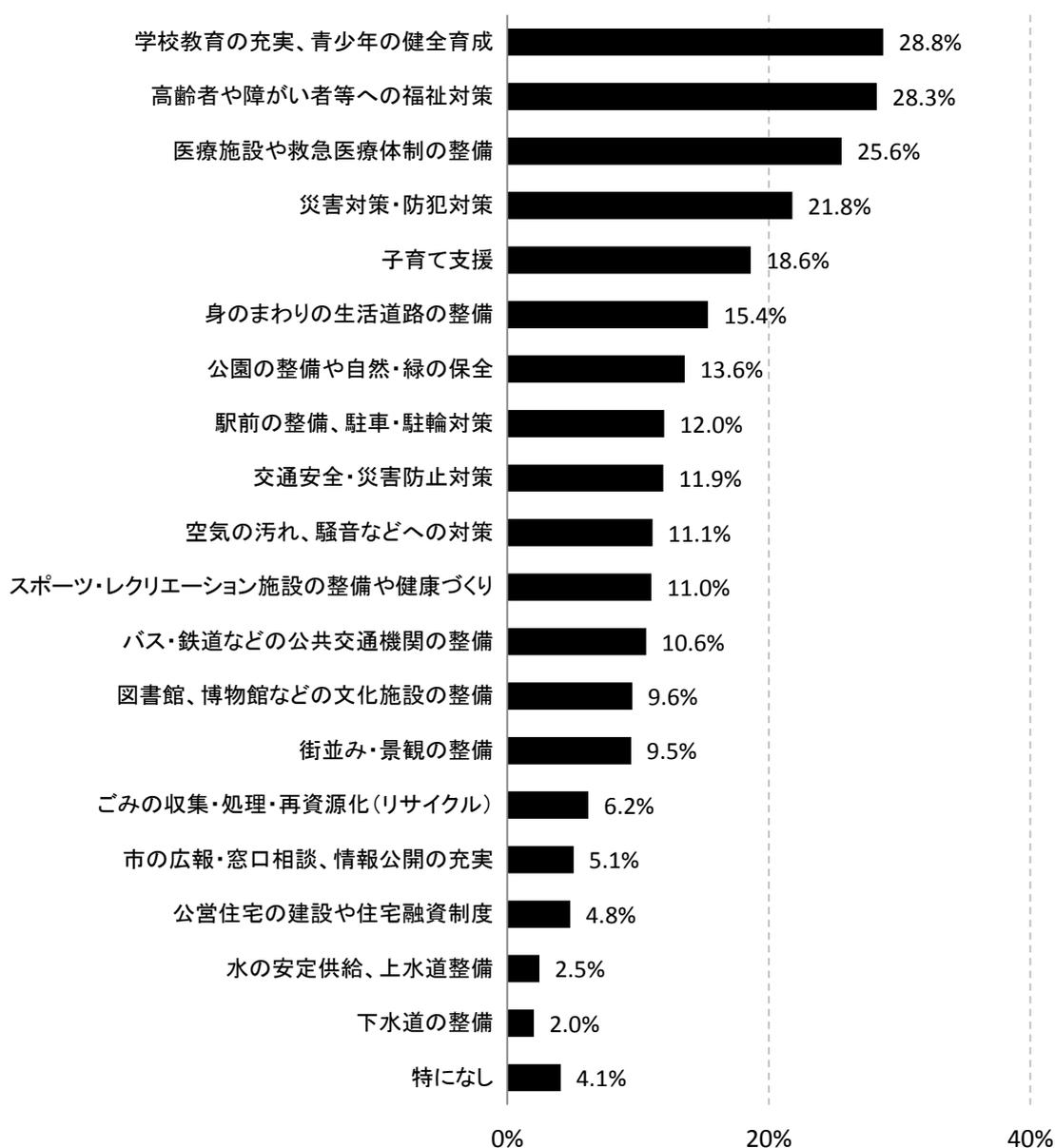


図 104 Q40② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（複数回答・全体 N=1224）

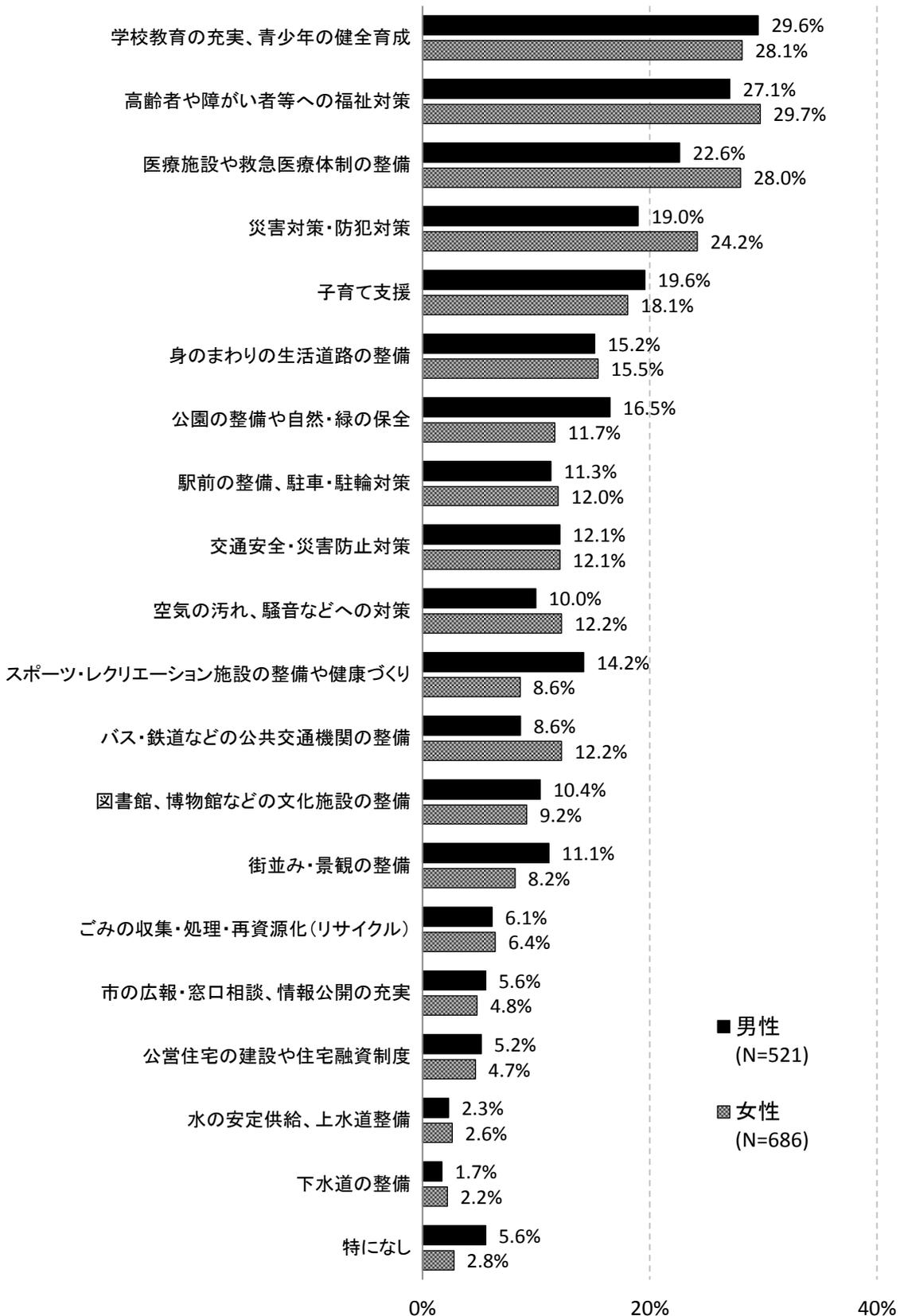


図 105 Q40② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（複数回答・男女別）

Q40②を年代別で見ると、「子育て支援」において30代が48.3%と、その他の年代よりも15ポイント以上高い割合である。「学校教育の充実、青少年の健全育成」においても30代が41.6%と、その他の年代よりも7ポイント以上高い。「スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり」においては20代が24.2%と、その他の年代よりも10ポイント以上高い。また、「高齢者や障がい者等への福祉対策」と「子育て支援」において、40代以下と50代以上での割合の差が特に大きい（表10、図106）。

表10 Q40② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（複数回答・年代別）

	(%)						
	学校教育の 充実、青少年の 健全育成	高齢者や 障がい者等への 福祉対策	医療施設や救急 医療体制の整備	災害対策・ 防犯対策	子育て支援	身のまわりの 生活道路の整備	公園の整備や 自然・緑の保全
20代 (N=95)	22.1	9.5	12.6	16.8	32.6	18.9	13.7
30代 (N=149)	41.6	18.8	23.5	14.8	48.3	17.4	22.1
40代 (N=209)	34.0	17.7	23.9	29.7	25.4	15.8	12.9
50代 (N=181)	30.9	33.7	32.0	23.8	14.9	13.8	15.5
60代 (N=266)	25.2	36.1	26.7	22.2	8.3	15.8	9.8
70代以上 (N=303)	23.1	37.6	26.7	20.1	6.6	13.2	12.5

	(%)						
	駅前の整備、 駐車・駐輪対策	交通安全・ 災害防止対策	空気の汚れ、 騒音などへの 対策	スポーツ・レクリ エーション施設の 整備や健康づくり	バス・鉄道などの 公共交通機関の 整備	図書館、博物館 などの文化施設 の整備	街並み・景観の 整備
20代 (N=95)	20.0	12.6	16.8	24.2	15.8	16.8	10.5
30代 (N=149)	8.7	10.1	12.1	14.1	12.1	13.4	12.8
40代 (N=209)	12.4	13.4	8.1	11.0	12.4	9.6	8.6
50代 (N=181)	13.3	16.0	11.0	11.6	11.6	8.8	12.2
60代 (N=266)	12.0	12.0	9.0	9.0	8.6	12.0	6.4
70代以上 (N=303)	9.6	9.6	13.2	7.3	8.6	4.3	9.2

	(%)					
	ごみの収集・ 処理・再資源化 (リサイクル)	市の広報・ 窓口相談、 情報公開の充実	公営住宅の建設 や住宅融資制度	水の安定供給、 上水道整備	下水道の整備	特になし
20代 (N=95)	4.2	4.2	2.1	3.2	1.1	3.2
30代 (N=149)	5.4	6.0	5.4	0.7	2.0	2.0
40代 (N=209)	5.3	6.2	5.3	1.9	1.9	5.7
50代 (N=181)	7.2	3.9	3.3	3.9	2.2	4.4
60代 (N=266)	6.8	6.8	4.5	2.6	0.8	3.8
70代以上 (N=303)	7.3	3.3	5.6	2.6	3.0	4.0

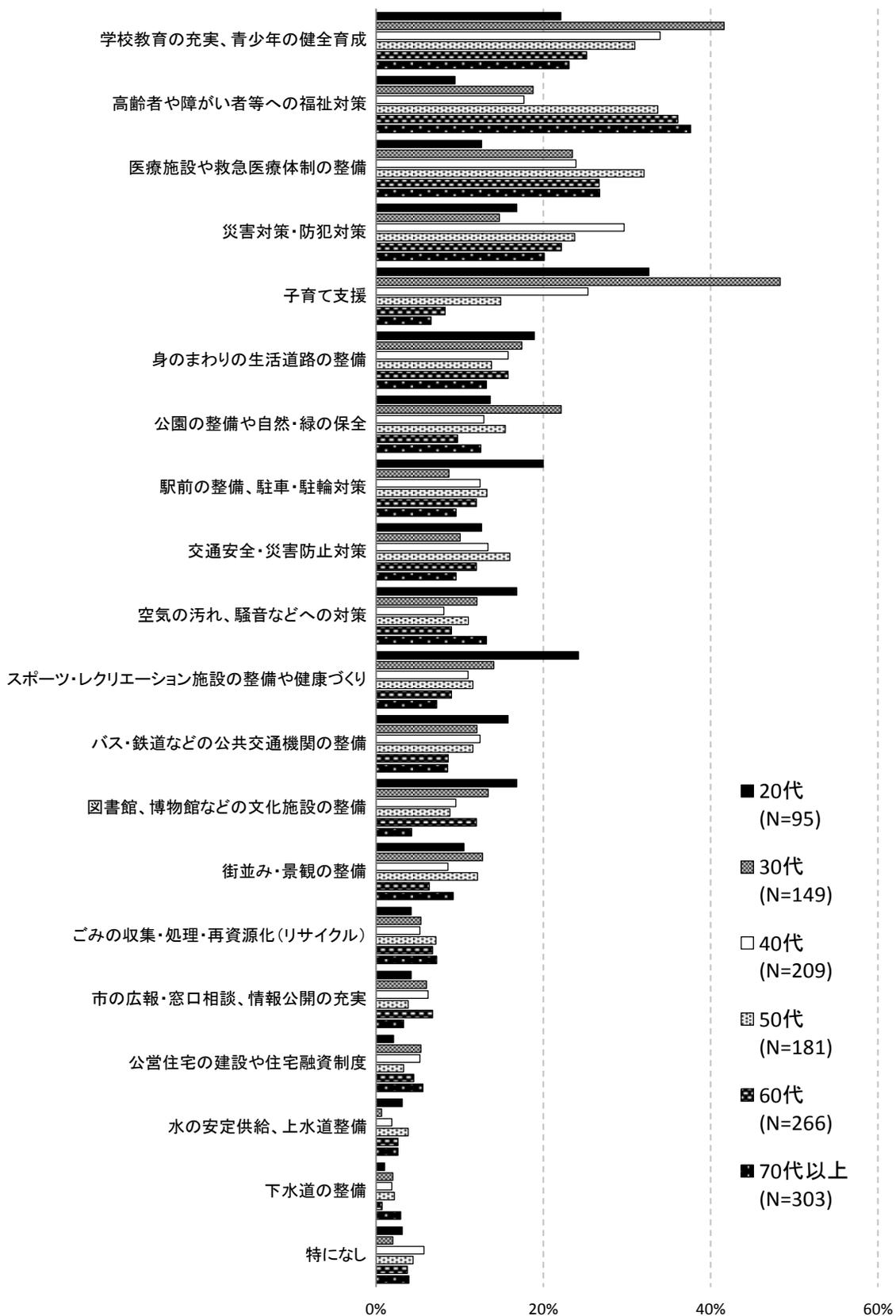


図 106 Q40② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（複数回答・年代別）

Q40②を居住地域別で見ると、「バス・鉄道などの公共交通機関の整備」において、三箇牧地区が 44.1%と、その他の地区よりも 31 ポイントほど高い割合である。「医療施設や救急医療体制の整備」において、五領地区が 41.2%と、その他の地区よりも 8 ポイント以上高い割合である。「高齢者や障がい者等への福祉対策」において、高槻西地区が 34.9%と、その他の地区よりも 6 ポイント以上高い割合である（表 11, 図 107）。

表 11 Q40② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（複数回答・居住地域別）

	学校教育の 充実、青少年の 健全育成	高齢者や 障がい者等への 福祉対策	医療施設や救急 医療体制の整備	災害対策・ 防犯対策	子育て支援	身のまわりの 生活道路の整備	公園の整備や 自然・緑の保全
高槻北地区 (N=357)	30.5	28.0	23.5	21.8	20.4	14.6	14.0
高槻南地区 (N=311)	26.0	28.6	24.4	22.8	19.3	16.4	14.8
五領地区 (N=34)	23.5	26.5	41.2	23.5	11.8	17.6	0.0
高槻西地区 (N=186)	30.1	34.9	29.0	22.0	17.7	16.1	12.9
如是・富田地区 (N=242)	31.4	27.3	26.4	21.1	18.6	15.3	16.9
三箇牧地区 (N=34)	23.5	17.6	32.4	5.9	20.6	23.5	2.9

	駅前の整備、 駐車・駐輪対策	交通安全・ 災害防止対策	空気の汚れ、 騒音などへの 対策	スポーツ・レクリ エーション施設の 整備や健康づくり	バス・鉄道などの 公共交通機関の 整備	図書館、博物館 などの文化施設 の整備	街並み・景観の 整備
高槻北地区 (N=357)	11.8	13.2	10.4	10.1	12.9	9.2	10.1
高槻南地区 (N=311)	14.1	11.9	14.8	12.5	9.0	13.5	10.0
五領地区 (N=34)	11.8	5.9	14.7	17.6	8.8	2.9	5.9
高槻西地区 (N=186)	9.7	10.8	10.2	12.9	10.2	8.6	9.1
如是・富田地区 (N=242)	9.5	11.6	8.3	7.9	6.6	9.1	11.2
三箇牧地区 (N=34)	14.7	11.8	8.8	14.7	44.1	8.8	0.0

	ごみの収集・ 処理・再資源化 (リサイクル)	市の広報・ 窓口相談、 情報公開の充実	公営住宅の建設 や住宅融資制度	水の安定供給、 上水道整備	下水道の整備	特になし
高槻北地区 (N=357)	6.4	5.6	3.4	2.0	2.0	4.5
高槻南地区 (N=311)	6.4	3.2	5.1	3.2	3.2	4.2
五領地区 (N=34)	2.9	2.9	2.9	0.0	0.0	5.9
高槻西地区 (N=186)	5.9	5.9	5.4	1.6	2.7	3.2
如是・富田地区 (N=242)	7.0	6.2	6.2	3.3	0.8	3.3
三箇牧地区 (N=34)	2.9	8.8	8.8	5.9	0.0	0.0

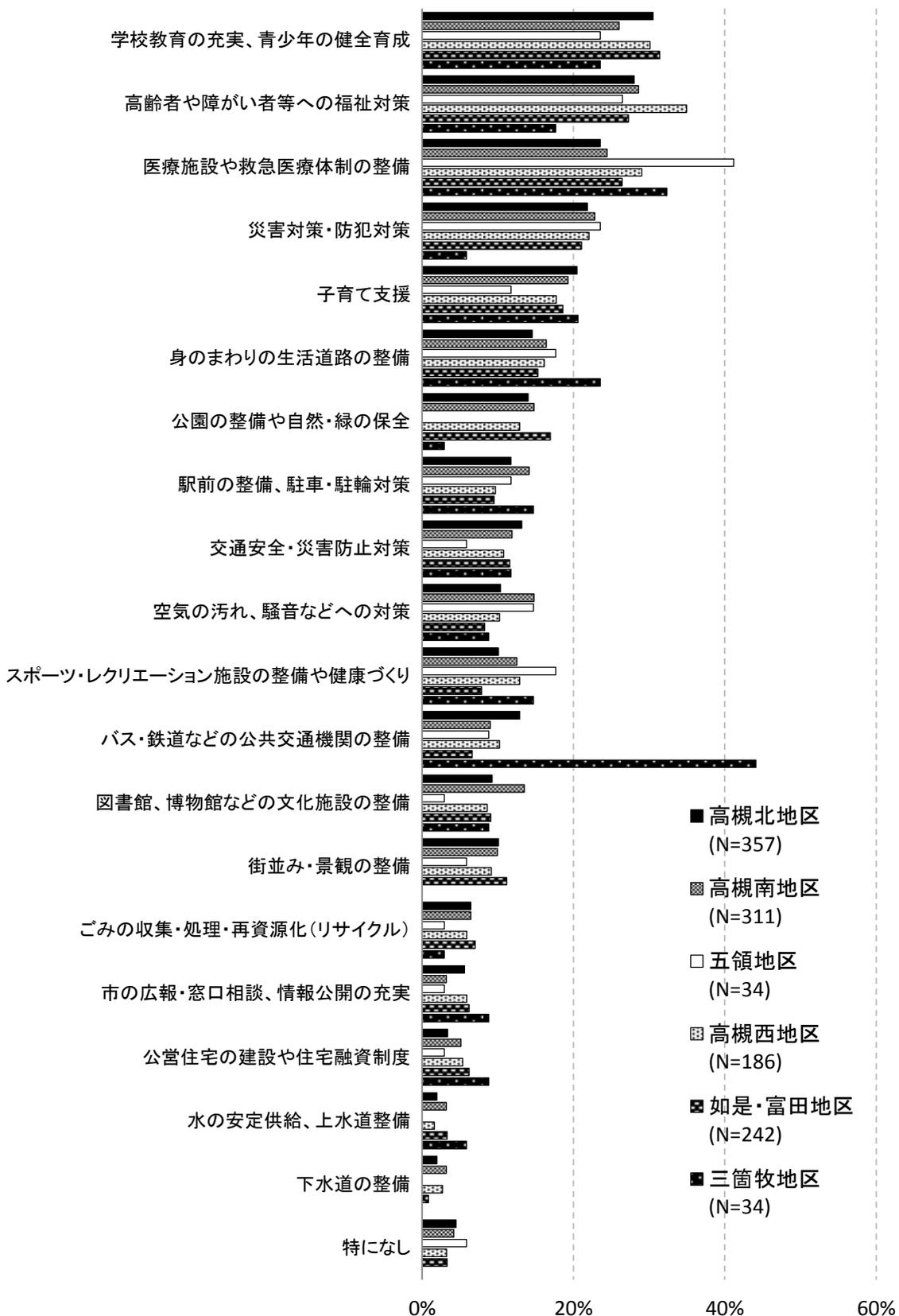


図 107 Q40② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（複数回答・居住地域別）

Q40②を居住年数別に見ると、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」において、1年未満の居住者が35.3%と、その他の年数の居住者よりも21ポイント以上高い割合である。「図書館、博物館などの文化施設の整備」においては、3年以上5年未満の居住者が24.0%と、その他の年数の居住者よりも9ポイント以上高い（表12、図108）。

表12 Q40② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（複数回答・居住年数別）

	(%)						
	学校教育の 充実、青少年の 健全育成	高齢者や 障がい者等への 福祉対策	医療施設や救急 医療体制の整備	災害対策・ 防犯対策	子育て支援	身のまわりの 生活道路の整備	公園の整備や 自然・緑の保全
1年未満 (N=17)	5.9	17.6	17.6	23.5	17.6	11.8	5.9
1年以上3年未満 (N=40)	32.5	12.5	15.0	12.5	37.5	15.0	7.5
3年以上5年未満 (N=50)	42.0	8.0	24.0	24.0	34.0	10.0	8.0
5年以上10年未満 (N=85)	36.5	25.9	17.6	12.9	32.9	20.0	18.8
10年以上20年未満 (N=149)	34.9	22.1	16.8	28.9	20.8	14.1	18.1
20年以上30年未満 (N=213)	29.6	31.9	24.9	18.3	20.2	13.6	16.9
30年以上40年未満 (N=266)	27.4	32.7	32.0	23.7	19.9	16.2	14.7
40年以上50年未満 (N=277)	24.9	32.9	32.1	23.1	8.3	13.7	9.0
50年以上 (N=103)	23.3	30.1	20.4	18.4	10.7	24.3	13.6

	(%)						
	駅前の整備、 駐車・駐輪対策	交通安全・ 災害防止対策	空気の汚れ、 騒音などへの 対策	スポーツ・レクリ エーション施設の 整備や健康づくり	バス・鉄道などの 公共交通機関の 整備	図書館、博物館 などの文化施設 の整備	街並み・景観の 整備
1年未満 (N=17)	35.3	17.6	11.8	11.8	17.6	11.8	11.8
1年以上3年未満 (N=40)	10.0	12.5	7.5	17.5	17.5	7.5	5.0
3年以上5年未満 (N=50)	12.0	12.0	14.0	12.0	8.0	24.0	8.0
5年以上10年未満 (N=85)	11.8	8.2	9.4	11.8	16.5	14.1	10.6
10年以上20年未満 (N=149)	13.4	13.4	6.0	10.1	10.1	11.4	8.7
20年以上30年未満 (N=213)	11.7	9.9	15.5	16.9	11.7	11.7	9.4
30年以上40年未満 (N=266)	11.3	15.8	10.5	9.4	8.3	8.3	9.8
40年以上50年未満 (N=277)	11.2	10.8	11.6	8.3	10.8	6.5	9.0
50年以上 (N=103)	9.7	9.7	11.7	8.7	8.7	4.9	13.6

	(%)						
	ごみの収集・ 処理・再資源化 (リサイクル)	市の広報・ 窓口相談、 情報公開の充実	公営住宅の建設 や住宅融資制度	水の安定供給、 上下水道整備	下水道の整備	特になし	
1年未満 (N=17)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	17.6	
1年以上3年未満 (N=40)	0.0	0.0	12.5	2.5	0.0	12.5	
3年以上5年未満 (N=50)	4.0	6.0	6.0	0.0	0.0	0.0	
5年以上10年未満 (N=85)	5.9	3.5	7.1	1.2	3.5	1.2	
10年以上20年未満 (N=149)	5.4	5.4	4.7	1.3	0.7	6.7	
20年以上30年未満 (N=213)	8.5	7.5	3.3	3.8	3.3	2.8	
30年以上40年未満 (N=266)	6.8	5.3	5.6	3.0	1.9	2.3	
40年以上50年未満 (N=277)	8.7	5.1	4.3	2.9	1.1	4.3	
50年以上 (N=103)	1.0	1.9	2.9	1.9	4.9	4.9	

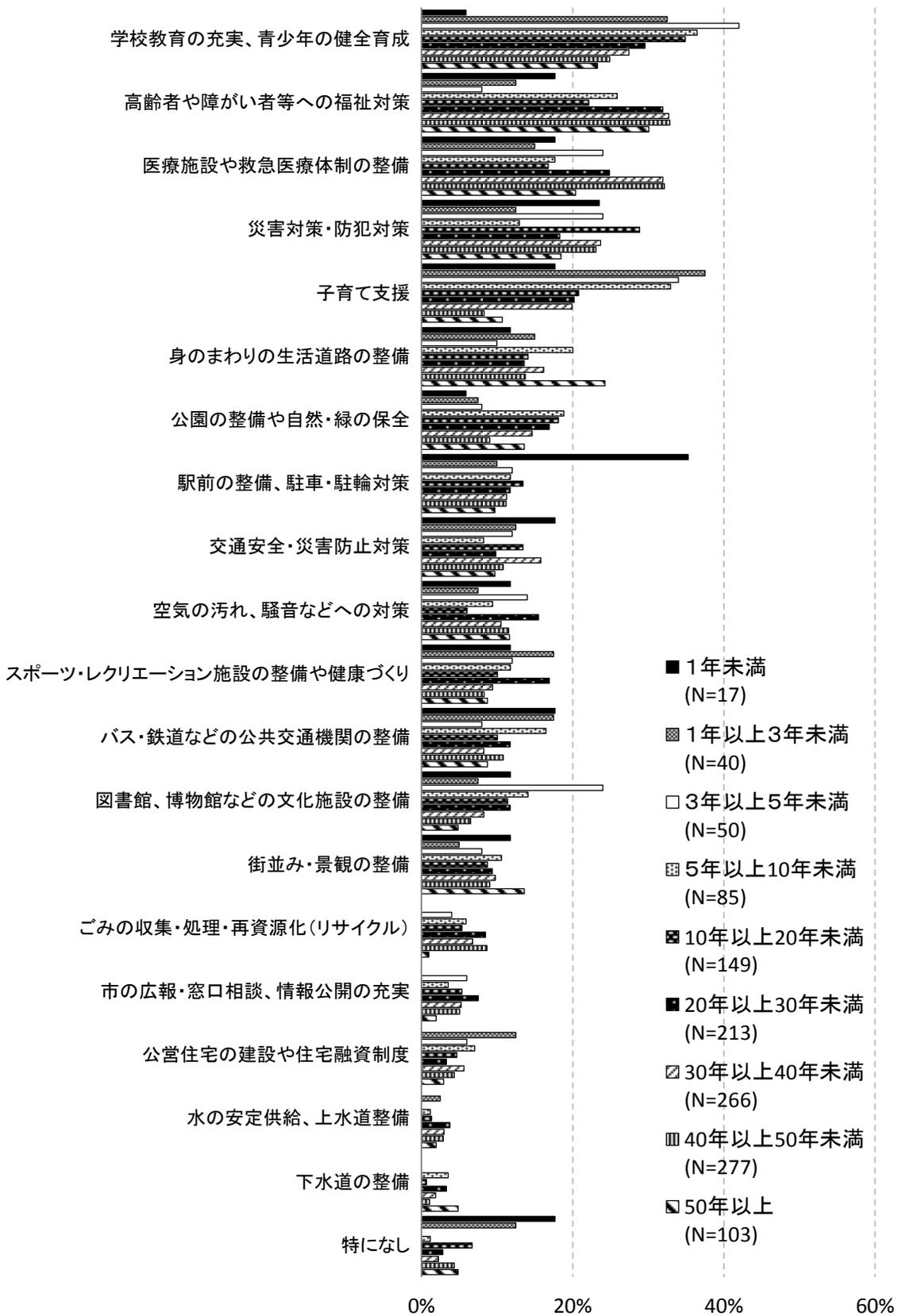


図 108 Q40② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（複数回答・居住年数別）

Q41 の情報収集にインターネット上のやりとりを重視するかに関しては、「重視する」または「少し重視する」と回答した人の割合は、合計で見ると、57.5%である。男女別で見ると、その割合は、男性では 63.9%、女性では 52.7%と、男性の方が 11 ポイントほど高い。年代別で見ると、「重視する」の割合は、20 代が 54.7%と最も高い割合であるが、年代が上がるごとに減少し、70 代以上では 7.6%である（図 109）。

Q42 の知り合いから聞いた情報に影響されやすいかに関しては、男女別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は男性では 35.9%、女性では 48.8%であり女性の方が 13 ポイントほど高い。年代別で見ると、その割合は 30 代で最も高く 66.4%であるが、年代が上がるごとに減少し、70 代以上では 27.4%になる。なお、20 代では 51.6%である（図 110）。

Q43 の情報を取り入れることに積極的かに関しては、男女別で見ると、「かなり積極的」または「やや積極的」と回答した人の割合は男性では 68.0%、女性では 57.7%であり女性の方が 10 ポイントほど高い。年代別で見ると、その割合は、30 代で最も高く 77.2%であるが、年代が上がるごとに減少し、70 代以上では 46.9%になる。なお、20 代では 75.8%である（図 111）。

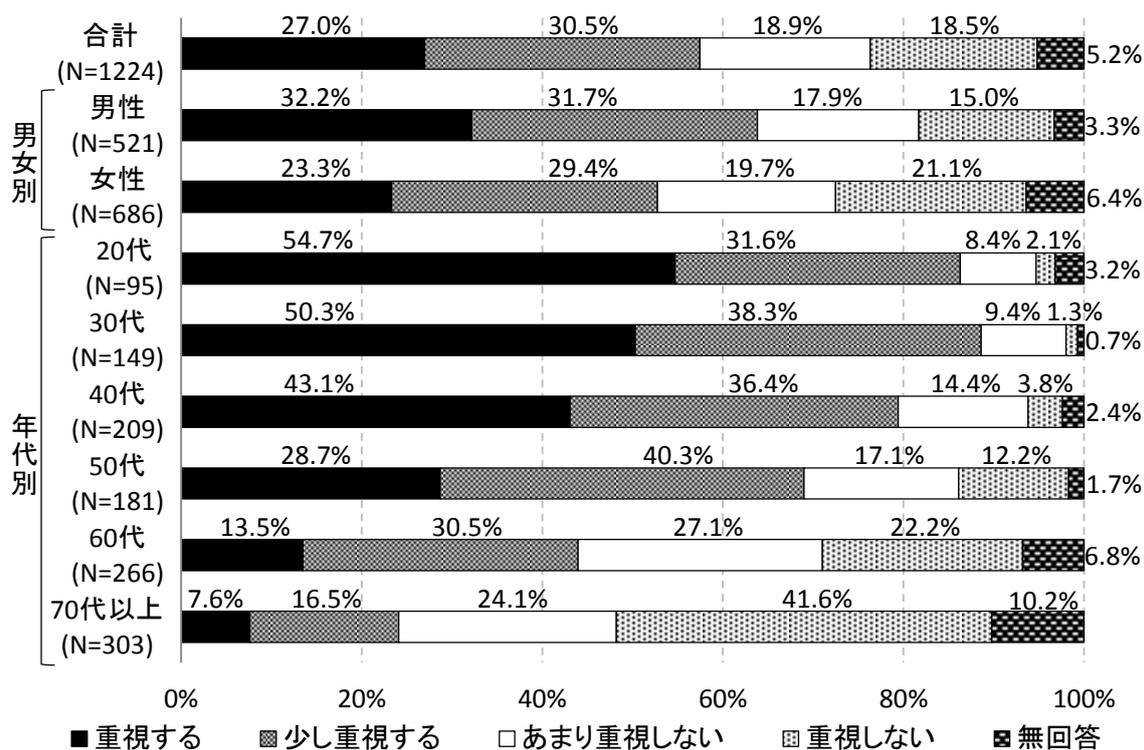


図 109 Q41 情報収集にインターネット上のやりとりを重視するか

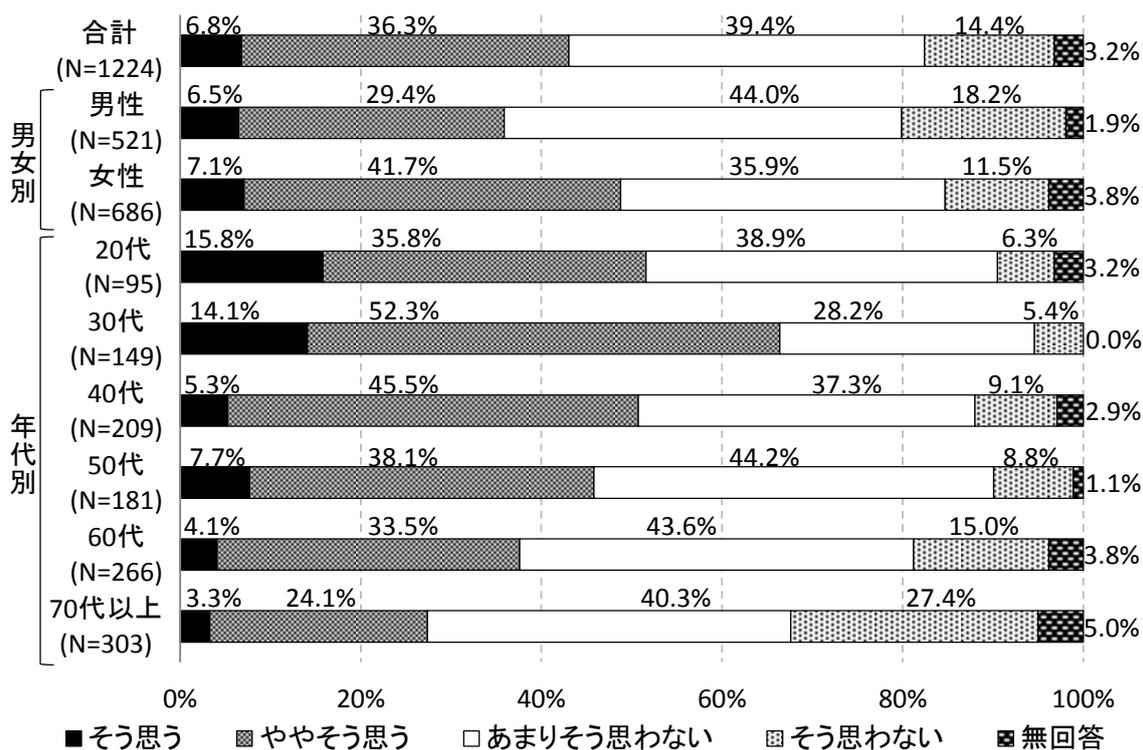


図 110 Q42 知り合いから聞いた情報に影響されやすいか

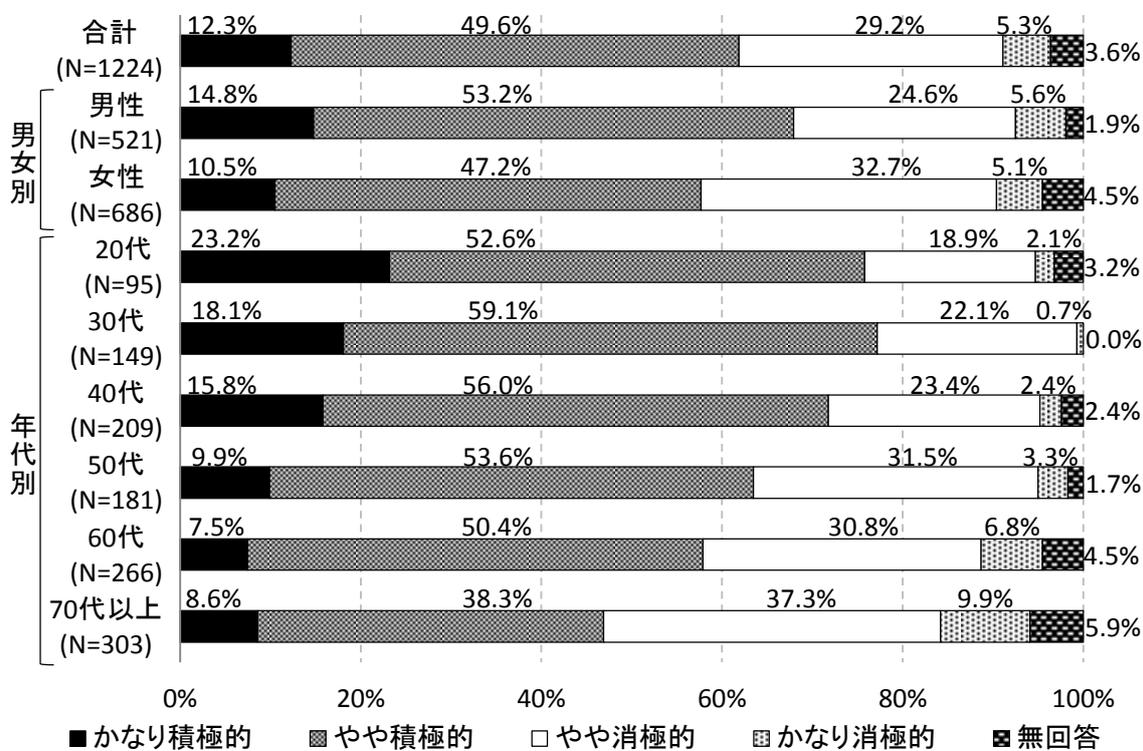


図 111 Q43 情報を取り入れることに積極的か

Q44A～A44D では、それぞれを用いて1日で情報収集に費やす時間について尋ねている。

Q44A の紙の新聞・雑誌に関しては、年代別で見ると、「全く利用しない」の割合は20代で最も高く48.4%であるが、年代が上がるごとに減少し、70代以上では8.6%になる。また、30代と40代では「20分未満」が最も高い割合であるが、50代と60代では「20分以上40分未満」が最も高い割合である。70代以上になると「40分以上1時間未満」が最も高い(図112)。

Q44B のテレビ・ラジオに関しては、30代と40代を除く男女別・年代別のすべての層で「2時間以上」が最も高い割合である。30代と40代では「1時間以上2時間未満」が最も高い割合である。年代別で見ると、「2時間以上」の割合は、60代で最も高く41.7%であり、30代で最も低く15.4%である(図113)。

Q44C の携帯電話・スマートフォンに関しては、合計で見ると、情報収集に20分以上費やす人の割合は42.9%である。年代別で見ると、「2時間以上」の割合は20代で最も高く51.6%であり、その他の年代よりも30ポイント以上高い。また、「全く利用しない」の割合は、20代で最も低く3.2%であるが、年代が上がるごとに増加し、70代以上では43.6%になる(図114)。

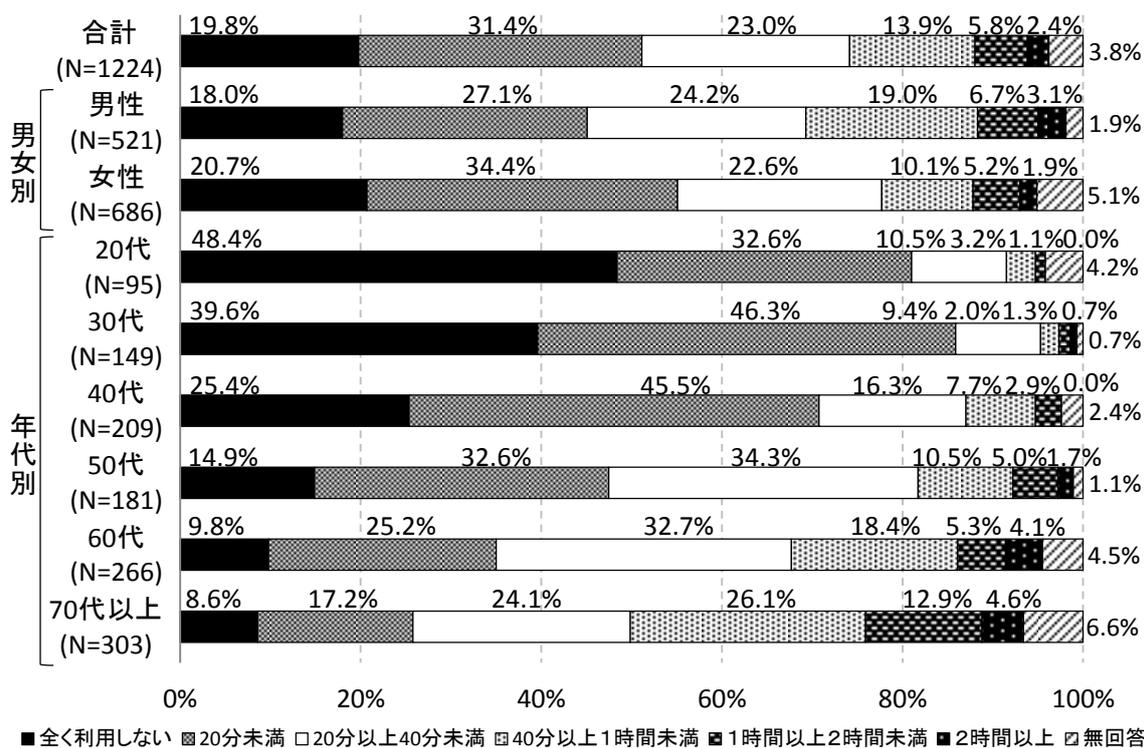


図 112 Q44A 1日で情報収集に費やす時間 紙の新聞・雑誌

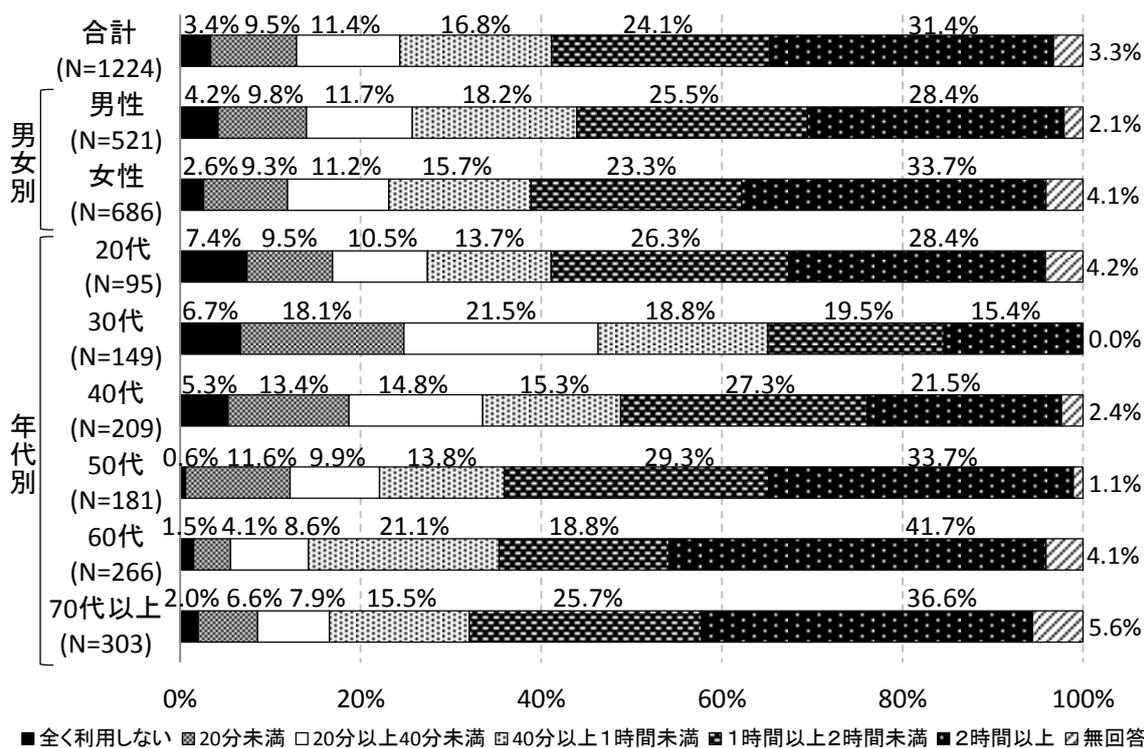


図 113 Q44B 1日で情報収集に費やす時間 テレビ・ラジオ

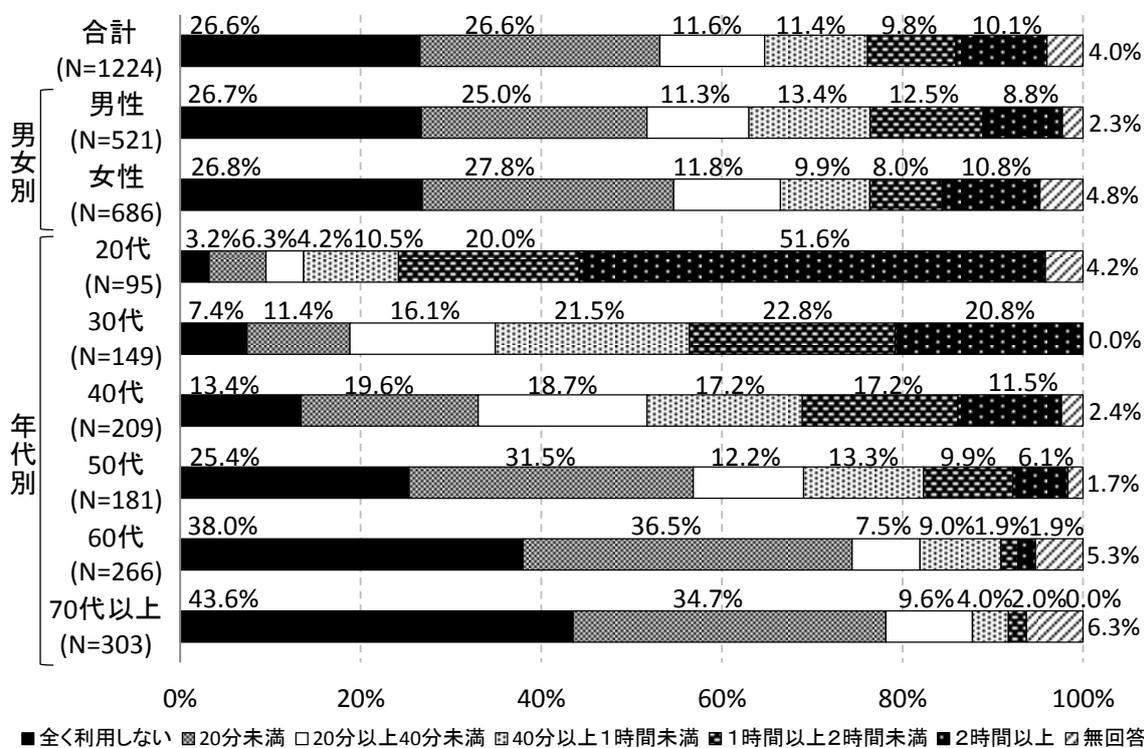


図 114 Q44C 1日で情報収集に費やす時間 携帯電話・スマートフォン

Q44D のパソコン（インターネット）に関しては、男女別に見ると、「全く利用しない」の割合は男性では 32.2%、女性では 45.3%であり、女性の方が 13 ポイントほど高い。年代別で見ると、20 分以上を費やす人の割合は、20 代で最も高く 55.8%であるが、年代が上がるごとに減少し、70 代以上では 17.8%である（図 115）。

Q45 の選挙へ投票に行く頻度に関しては、男女別・年代別のすべての層で「必ず行く」が最も高い割合である。年代別に見ると、「必ず行く」または「よく行く」と回答した人の割合は、20 代で最も低く 55.8%であるが、年代が上がるごとに増加し、70 代以上では 88.8%になる（図 116）。

Q46 の適当だと思う消費税率に関しては、男女別・年代別のすべての層で「5%」が最も高い割合である。また、男性を除く男女別・年代別のすべての層で、「5%」に続いて「8%（現在の税率）」、「10%」の順に高い割合である。男性では「10%」の方が「8%（現在の税率）」よりも高い割合である（表 13）。

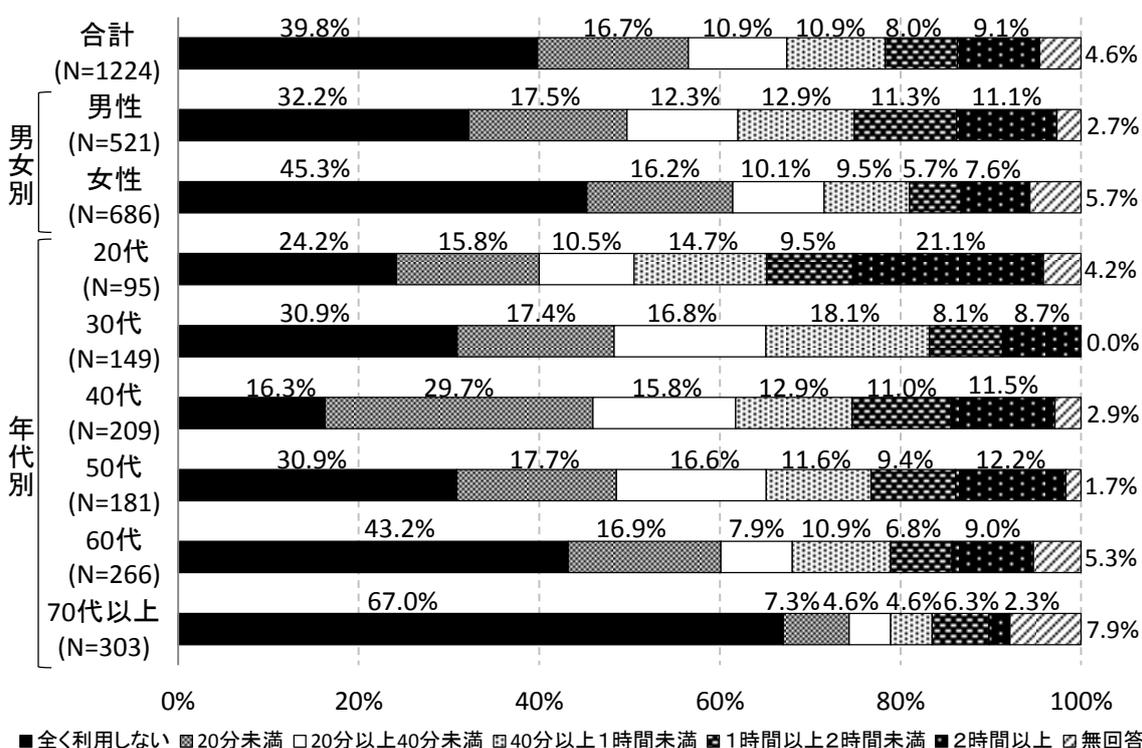


図 115 Q44D 1日情報収集に費やす時間 パソコン（インターネット）

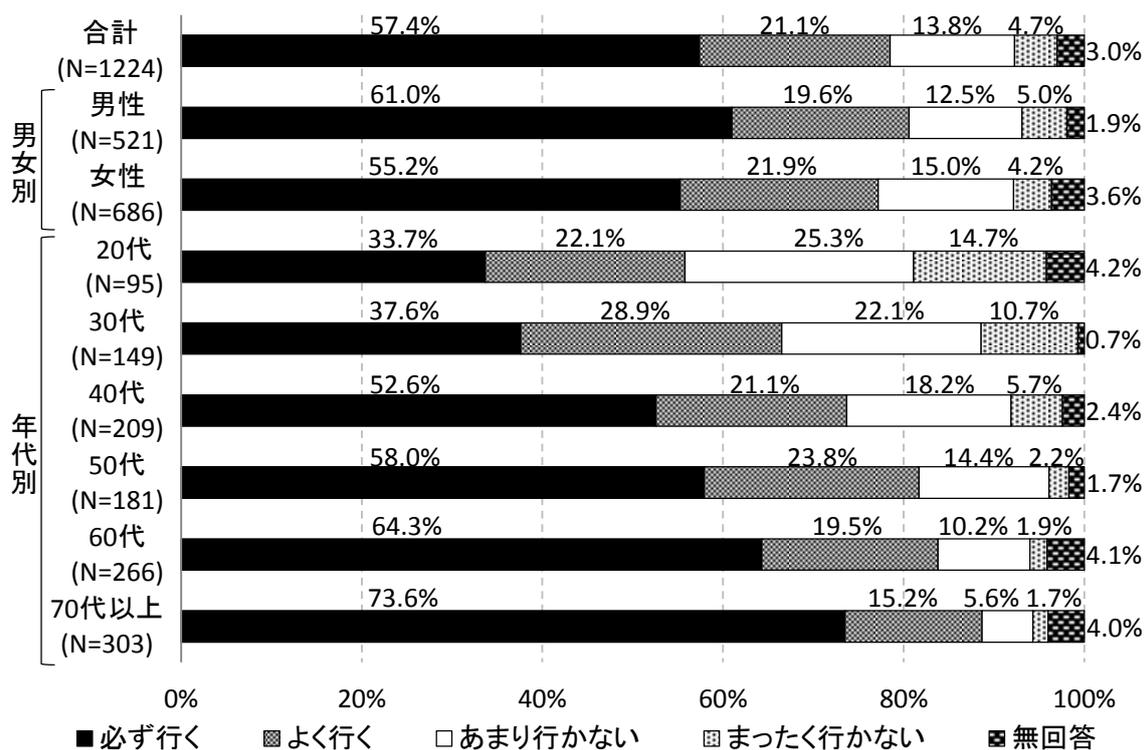


図 116 Q45 選挙へ投票に行く頻度

表 13 Q46 適当だと思う消費税率

		(%)								
		0%	1~4%	5%	6~7%	8%(現在の税率)	9%	10%	11%以上	無回答
男女別	合計 (N=1224)	7.4	4.8	42.4	1.6	21.7	0.2	14.8	2.8	4.3
	男性 (N=521)	8.1	3.8	38.4	0.4	20.5	0.4	20.7	5.2	2.5
	女性 (N=686)	6.7	5.7	45.3	2.6	22.6	0.0	10.6	1.0	5.4
年代別	20代 (N=95)	5.3	5.3	53.7	0.0	17.9	0.0	11.6	3.2	3.2
	30代 (N=149)	6.7	5.4	51.7	0.7	17.4	0.0	15.4	1.3	1.3
	40代 (N=209)	9.6	5.7	47.4	1.4	15.3	0.5	12.0	4.3	3.8
	50代 (N=181)	9.9	5.5	37.0	1.1	22.7	0.0	17.7	2.8	3.3
	60代 (N=266)	5.3	4.1	38.3	1.9	25.9	0.4	16.5	2.6	4.9
	70代以上 (N=303)	7.3	4.0	37.3	3.0	25.1	0.0	14.9	2.6	5.9

Q47の時間的ゆとりを持てているかに関しては、合計で見ると、「十分持てている」または「かなり持てている」と回答した人の割合は50.6%である。年代別で見ると、その割合は、40代以下では4割未満であるが、50代以上では4割以上である。特に60代以上では、その他の年代よりも2割以上高い(図117)。

Q48の生活を豊かにしたい面に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「健康の面で」、「金銭的な面で」、「精神的な面で」の順に高い割合である(図118)。

Q48を男女別で見ると、「精神的な面で」において男女差が最も大きく、男性が53.0%、女性が61.5%であり、女性の方が8ポイントほど高い。また、「趣味の面で」では、男性が42.2%、女性が34.7%であり、男性の方が8ポイントほど高い割合である(図119)。

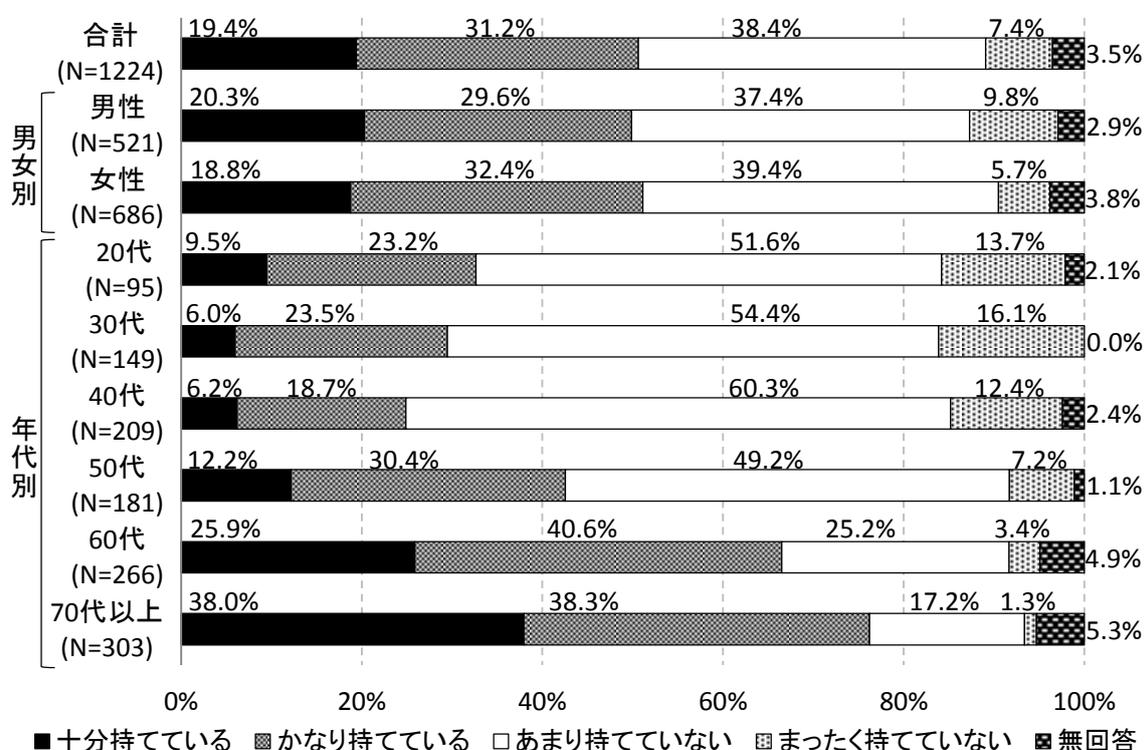


図 117 Q47 時間的ゆとりを持てているか

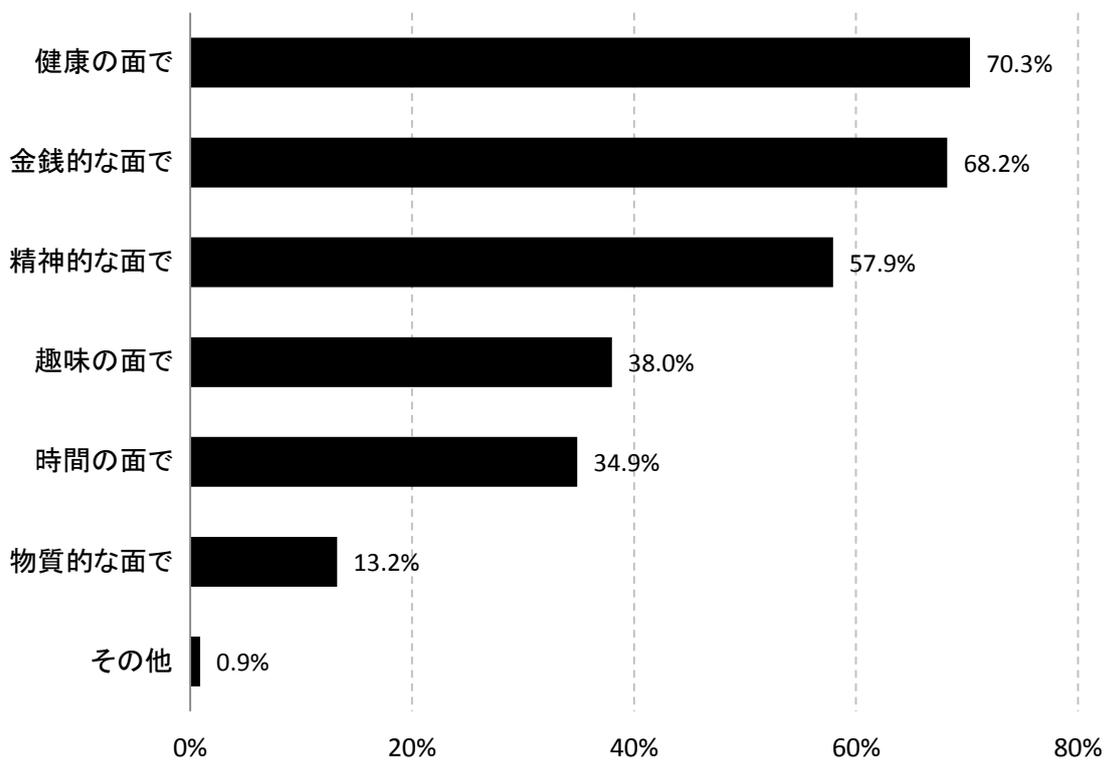


図 118 Q48 生活を豊かにしたい面（複数回答・全体 N=1224）

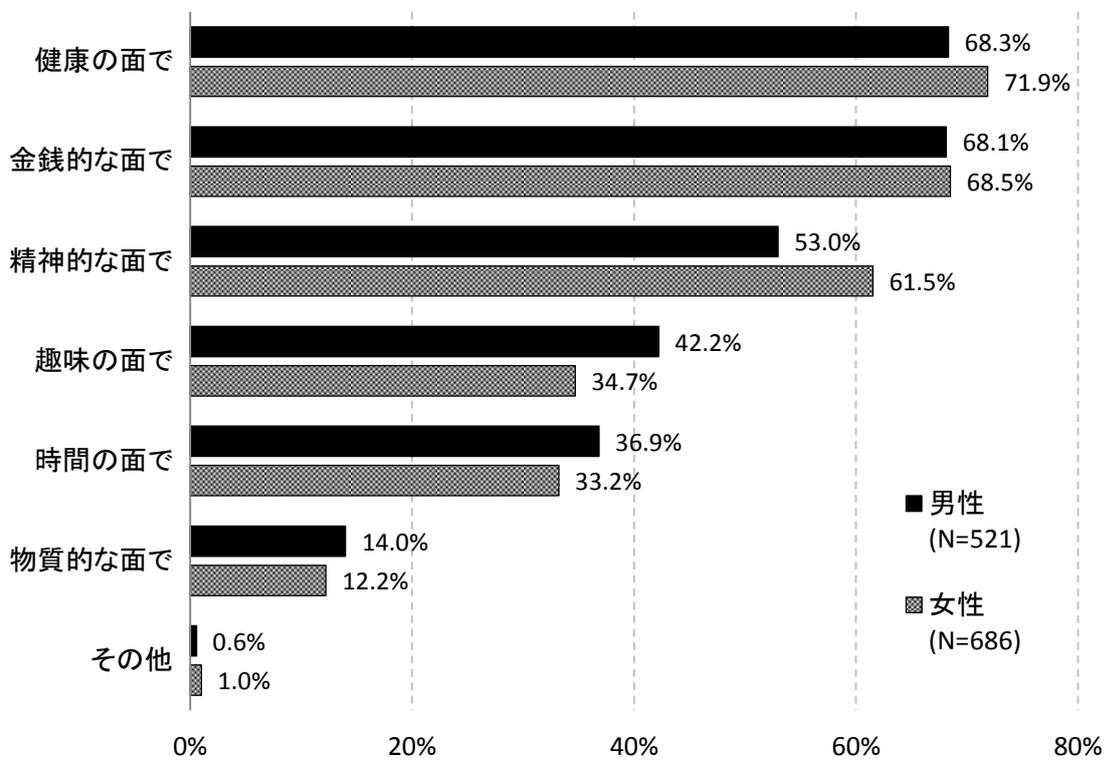


図 119 Q48 生活を豊かにしたい面（複数回答・男女別）

Q48 を年代別で見ると、「健康の面で」において、20代が38.9%と最も低い割合であるが、年代が上がるごとに増加し、70代以上では82.5%になる。また、「金銭的な面で」においては、20代が82.1%と最も高い割合であるが、年代が上がるごとに減少し、70代以上では55.4%になる（図120）。

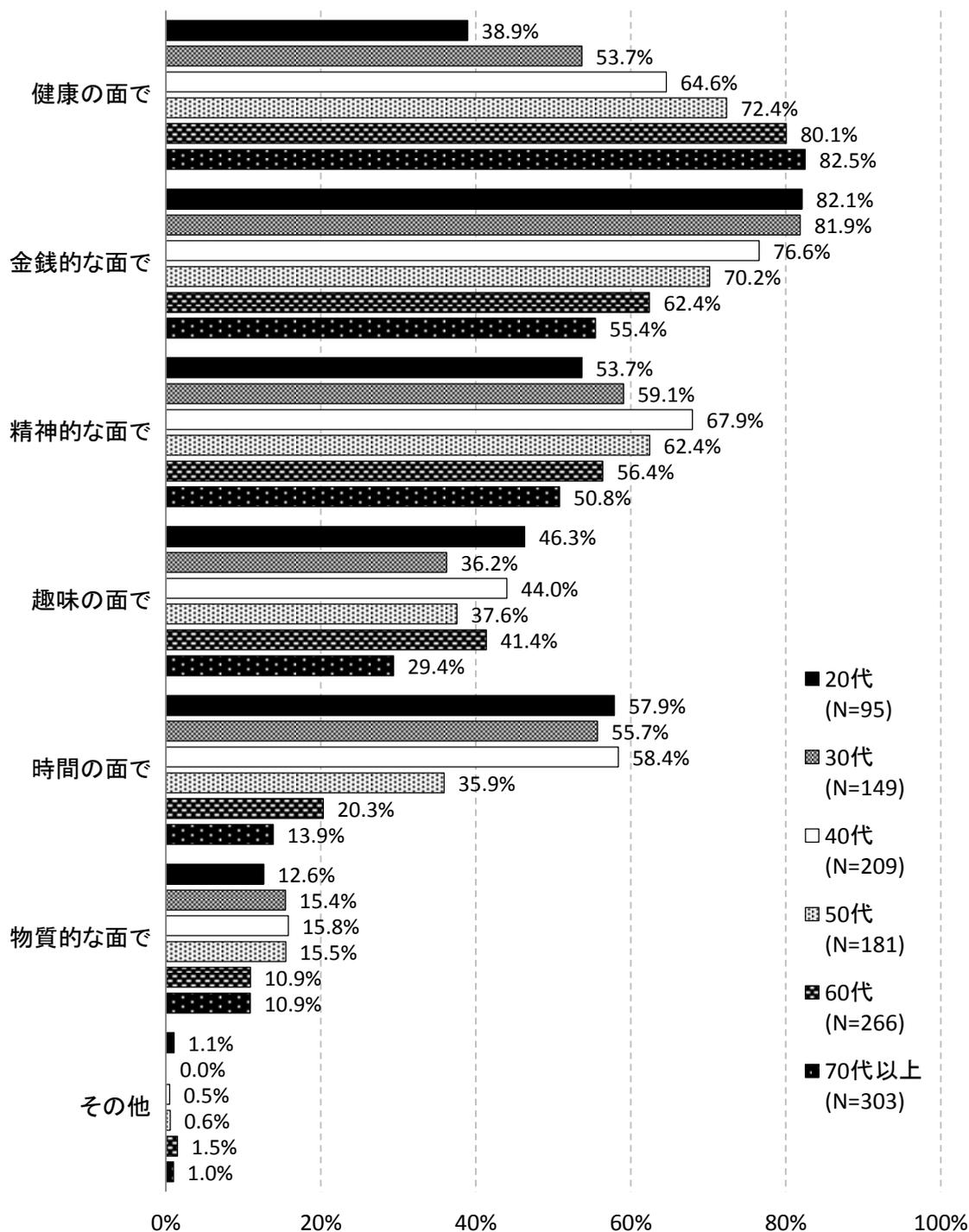


図120 Q48 生活を豊かにしたい面（複数回答・年代別）

Q49 の自分の部屋の掃除の頻度に関しては、週に 1 回以上の頻度で掃除をする割合は、合計では 80.8%である。男女別で見ると、その割合は、男性では 70.4%、女性では 88.8%であり、女性の方が 18 ポイントほど高い。年代別で見ると、年代が上がるごとに掃除をする頻度が上がっていることが分かる（表 14）。

表 14 Q49 自分の部屋の掃除の頻度

		(%)							
		ほぼ毎日	週に数回	週に1回程度	月に1回程度	年に数回	年に1回程度	まったくしていない	無回答
合計 (N=1224)		26.3	29.2	25.3	9.1	4	0.9	2.8	2.5
男女別	男性 (N=521)	17.5	22.6	30.3	14.6	6.3	1.5	5.6	1.5
	女性 (N=686)	33.4	34.1	21.3	5.0	2.2	0.4	0.7	2.9
年代別	20代 (N=95)	15.8	17.9	17.9	20.0	20.0	3.2	3.2	2.1
	30代 (N=149)	23.5	21.5	32.2	13.4	4.0	1.3	3.4	0.7
	40代 (N=209)	23.9	23.4	31.6	12.4	3.3	0.5	2.4	2.4
	50代 (N=181)	27.1	36.5	23.2	6.1	2.8	1.1	2.2	1.1
	60代 (N=266)	33.8	31.2	19.9	5.6	2.6	0.8	2.6	3.4
	70代以上 (N=303)	26.1	34.0	25.7	6.3	1.7	0.3	3.0	3.0

Q50 の家族との1日平均会話時間に関しては、合計で見ると、1時間未満の割合は、51.4%である。男女別で見ると、その割合は、男性では58.3%、女性では46.5%と、男性の方が12ポイントほど高い。年代別で見ると、50代が55.2%と最も高く、20代が47.4%と最も低い割合である（図121）。

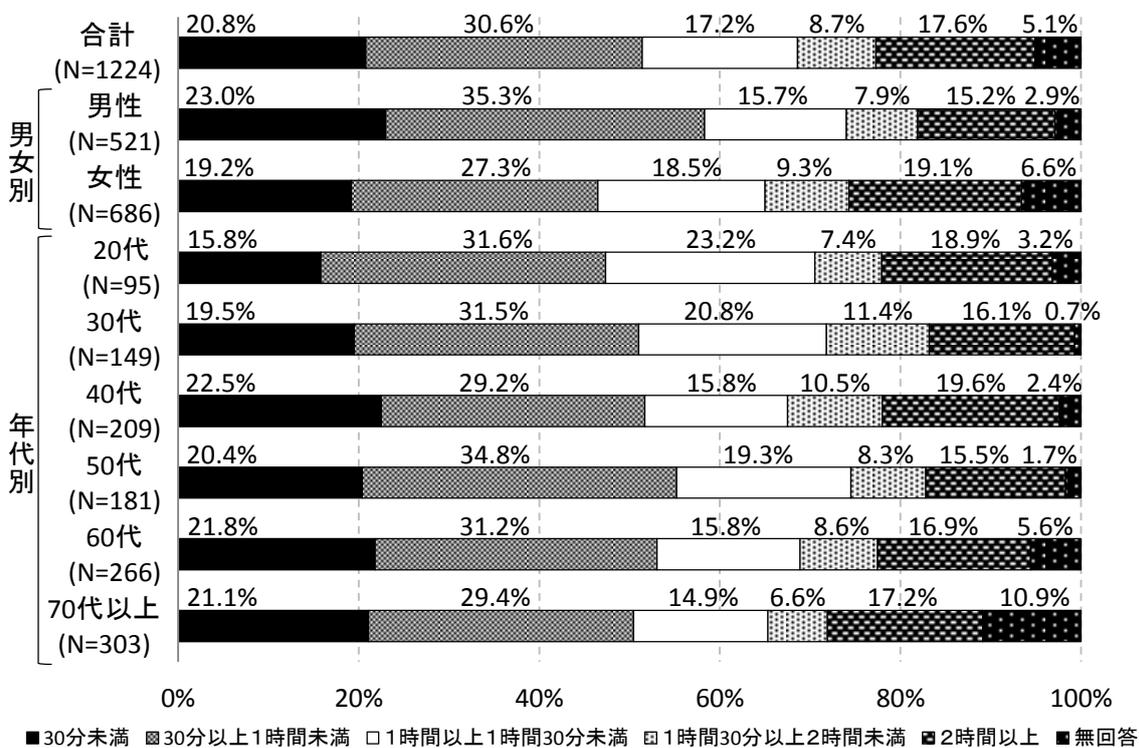


図 121 Q50 家族との1日平均会話時間

Q51 の婚姻状況に関しては、20 代を除く男女別・年代別のすべての層で、「既婚（配偶者あり）」が最も高い割合である。20 代では「未婚」が 73.7%と最も高い。男女別で見ると、「既婚（離別・死別）」の割合は、男性で 6.3%、女性で 17.9%と、女性の方が 12 ポイントほど高い（図 122）。

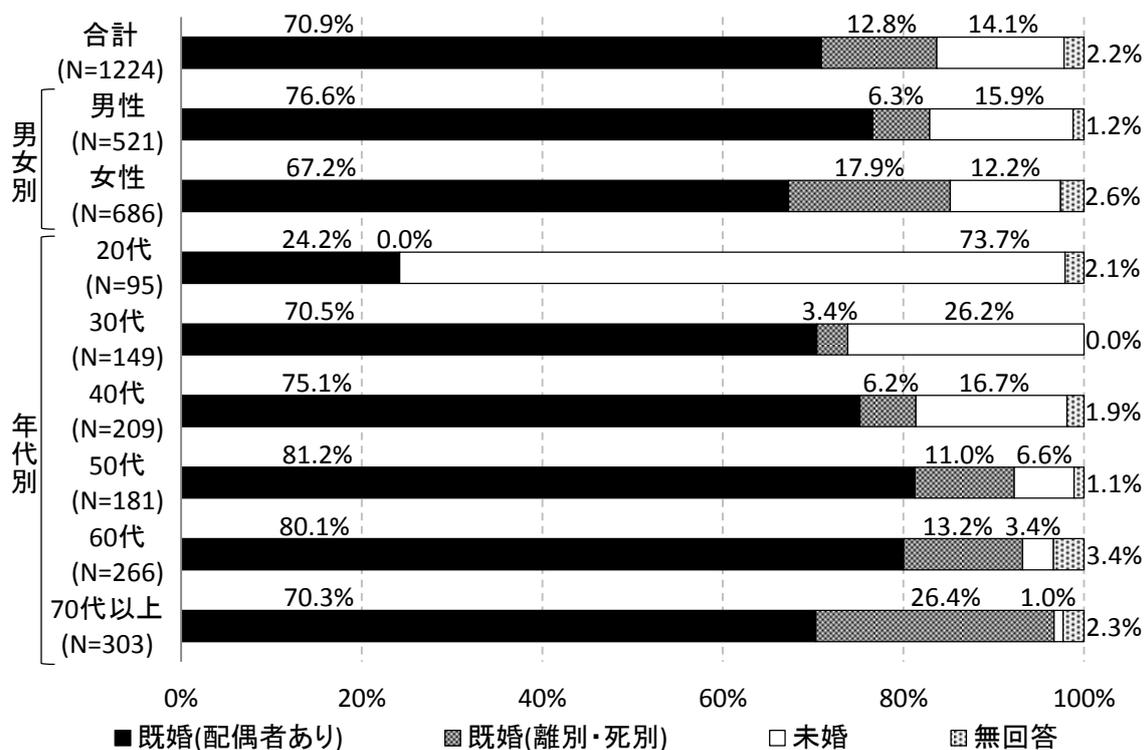


図 122 Q51 婚姻状況

Q52 の末子の年齢に関しては、合計と男性・女性で見ると、いずれも「18歳以上」が5割程度であり最も高い割合である。年代別で見ると、20代では「子どもはいない」、30代では「6歳未満」、40代では「6歳以上12歳未満」、50代以上では「18歳以上」が最も高い割合である（表15）。

表 15 Q52 末子の年齢

		(%)						
		6歳未満	6歳以上 12歳未満	12歳以上 15歳未満	15歳以上 18歳未満	18歳以上	子どもは いない	無回答
合計 (N=1224)		9.9	6.8	2.9	3.3	51.5	20.2	5.5
男女別	男性 (N=521)	10.6	6.9	3.1	3.3	51.1	20.9	4.2
	女性 (N=686)	9.3	6.4	2.9	3.4	52.6	19.4	6.0
年代別	20代 (N=95)	17.9	1.1	0.0	0.0	0.0	73.7	7.4
	30代 (N=149)	49.0	11.4	1.3	0.0	0.0	36.2	2.0
	40代 (N=209)	13.4	26.3	12.4	10.0	9.1	23.4	5.3
	50代 (N=181)	0.0	3.9	4.4	9.9	65.2	14.4	2.2
	60代 (N=266)	0.0	0.0	0.0	0.4	87.6	7.5	4.5
	70代以上 (N=303)	0.0	0.0	0.0	0.0	84.5	7.3	8.3

第3章 高槻市民の文化財に対する意識調査

池谷 紘

1. はじめに

近年、円安による影響により訪日外国人が増えている。2014年の日本政府観光局による「国籍別 / 目的別 訪日外客数」を見てみると、訪日外客数の総数 13,413,467 人のうちアジア地方（韓国、台湾、中国、香港、シンガポールなど）からの訪日外客数は 10,819,211 人と最も多い。また同年の日本交通公社の訪日アジア人（中国、韓国、台湾、タイ、インドネシア）に対するアンケートによると全体の 90%以上が日本の歴史文化財への関心を示しているという。このことから海外における日本の歴史文化財への注目度は高くなりつつあるといえる。

それでは日本国内ではどのような人が歴史文化財に関心を持っているのだろうか。日本交通公社の「歴史・文化観光に関する国内旅行市場調査」の年齢別に見た歴史文化観光への関心度の分布を見てみると、30歳代を除き年齢が上がるにつれて高関心層と中関心層を合わせた関心層の割合が増えている。

この傾向は観光地の文化財に限ったことなのであろうか。本研究では年齢と高槻市の歴史文化財に対する関心度の関係を検証する。

2. 仮説

2.1 先行研究

「平成 24 年度 高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査報告書」の平石(2013)によると定年退職を迎えて時間的余裕のある 60 代以上の高齢層のほうが若年層と比較して歴史遺産への訪問度が高いとある。

また河内長野市が実施した「平成 25 年度 河内長野市民意識調査」では文化財を適切に保存し、次世代につたえていくことを「とても必要」、あるいは「どちらかといえば必要」と答えた人が 60%を超えていた。

年齢が高いほど歴史遺産への訪問度が高いということは、文化財に何らかの関心を抱いているからではないのかと考えられる。そこで、以下のような仮説を立てた。

2.2 仮説

- ①年齢が高くなるほど文化財への関心度は高くなる。
- ②年齢が高くなるほど文化財を次世代に伝えていくことを重要だと思っている。

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 27 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1224 票、回収率は 61.2%である。

3.2. 変数

変数は以下のものを使用して分析するものとする。なお Q24 と Q25 においては数値が大きくなるほど関心が高くなる、あるいは重要視していることを表すように反転操作を行った。

① Q24. 高槻市の文化財に対する関心

「1.かなり関心がある」「2.やや関心がある」「3.どちらともいえない」「4.あまり関心がない」
「5. まったく関心がない」

② Q25. 文化財を次世代に伝えることの重要度

「1.非常に重要だと思う」「2.重要だと思う」「3.どちらともいえない」「4.重要ではないと思う」
「5. まったく重要ではないと思う」

③ Q53. あなたの性別はどちらですか。

「1.男性」「2.女性」

ここで「女性=0」「男性=1」とした変数「男性ダミー」を用いる。

④ Q54. あなたの年齢をお答えください。

「1. 20 代」「2. 30 代」「3. 40 代」「4. 50 代」「5. 60 代」「6. 70 代以上」

⑤ Q57 あなたの最終学歴を教えてください。

「1.中学(旧小学校など)」「2.高校(旧制中学など)」「3.専門学校」「4.短大・高専(5 年制)」
「5. 大学(旧高専)・大学院」「6.わからない」

ここでは「1, 9, 3=初等教育ダミー」「4=中等教育ダミー」「5=高等教育ダミー」を作成し、分析に用いた。

なお①～⑤全てに無回答の答えは欠損値として処理を行い、さらに⑤に関しては「6.わからない」に対しても欠損値処理を行った。

4. 分析

まず、クロス表を用いて Q24 「高槻市の文化財に対する関心度」と Q54 「年齢」との関連性を検討する(表 1)。

表 1 q24「高槻市の文化財に対する関心」反転

		全く関心 がない	あまり関 心がない	どちらとも いえない	やや関心 がある	かなり関 心がある	
20代	度数	14	27	19	28	4	92
	行パーセント	15.2%	29.3%	20.7%	30.4%	4.3%	100.0%
30代	度数	12	45	27	61	3	148
	行パーセント	8.1%	30.4%	18.2%	41.2%	2.0%	100.0%
40代	度数	19	51	48	77	11	206
	行パーセント	9.2%	24.8%	23.3%	37.4%	5.3%	100.0%
50代	度数	6	35	30	99	8	178
	行パーセント	3.4%	19.7%	16.9%	55.6%	4.5%	100.0%
60代	度数	5	49	66	122	21	263
	行パーセント	1.9%	18.6%	25.1%	46.4%	8.0%	100.0%
70代以上	度数	12	58	57	144	28	299
	行パーセント	4.0%	19.4%	19.1%	48.2%	9.4%	100.0%
合計		68	265	247	531	75	1186
		5.7%	22.3%	20.8%	44.8%	6.3%	

$\chi^2(df = 20, N = 1186) = 70.091^{***}, CramerV = 0.122^{***}$

***: $p < .001$, *: $p < .01$

検定の結果、カイ 2 乗の値は 70.091 で Cramer の V の値は 0.122 であり、それぞれ 0.1% 水準で有意であった。このことから、この分析はやや強い関連性の大きさがあることがわかる。また、表 1 をみると「やや関心がある」と答えた人は、50 代の 55.6% という数字を除けば、年齢が上がるほど文化財に対する関心度は右肩上がりになっていることがわかる。よって[仮説 1]「年齢が高くなるほど文化財への関心度は高くなる。」は支持された。

次に Q25「文化財を次世代に伝えることの重要度」と Q54「年齢」との関連性をクロス表にて検討する(表は省略)。検定の結果、カイ 2 乗の値は 31.191 で Cramer の V の値は 0.081 であり、いずれも有意ではなかった。どの年齢層でも「重要だと思う」を回答した人が 50% を超えており、文化財を次世代に伝えていくことに対する意識は年齢にかかわらず高いようである。従って、[仮説 2]「年齢が高くなるほど文化財保護を次世代に伝えていくことを重要だと思っている。」は支持されなかった。

続いて、Q25「伝承意識(反転後)」、Q53「性別」、Q54「年齢」、Q57「最終学歴」を含む複数の変数で、Q24「高槻市の文化財に対する関心」をどの程度説明できるのかを検証するため、これらの変数を用いて重回帰分析を行った。従属変数には「高槻市の文化財に対する関心」を投入し、独立変数には「年齢」「男性ダミー」「中等教育ダミー」「高等教育ダミー」「反転伝承意識度」を投入して説明力を分析した。

表 2 高槻市の文化財に対する関心度の重回帰分析結果

	B	SE	β
(定数)	**	.148	
年齢	.115 ***	.017	.177
男性ダミー	-.040 *	.054	-.019
中等教育ダミー	.206 **	.069	.081
高等教育ダミー	.243 ***	.064	.108
反転伝承意識度	.758 ***	.035	.534
調整済決定係数	.341 ***		
N	1154		

分析の結果、調整済決定係数が 0.341 である。これは、従属変数「高槻市の文化財に対する満足度」の分散の 34.1% が投入した独立変数によって説明できることを示している。また、「年齢」「高等教育ダミー」「反転伝承意識度」はすべて 0.1% 水準で有意であった。「中等教育ダミー」は 1% 水準、「男性ダミー」は 5% 水準で有意であった。

それぞれの独立変数が従属変数に与える影響量を比較するために、 β （ベータ）に着目する。 β の値の絶対値が大きいものから順に見ていくと、まず、変数「反転伝承意識度」における β の値 ($\beta=0.534$) が最大である。このことから、文化財を次世代に伝えていくことを重要であると考えている人ほど文化財に対する関心度が高い傾向にあることが示される。

次に β の値の絶対値が大きいのは、変数「年齢」であり、 β の値 ($\beta=0.177$) である。このことから、年齢が高い人ほど文化財に対する関心が高くなる傾向にあることが示される。つまり、第 2 節で設定した仮説 1 は支持される。

続いて、変数「高等教育ダミー」の β の値 ($\beta=0.108$) と「中等教育ダミー」の β の値 ($\beta=0.081$) から、高等教育や中等教育を受けた人は初等教育が最終学歴である人よりも、文化財に対して関心を持つ傾向があるということが示される。

最後に、変数「男性ダミー」の β の値 ($\beta=-0.019$) は負の値をとっていることから、男性は女性よりも文化財に対する関心が低いということがわかる。

5. 考察

表 1 の分析結果からは[仮説 1]「年齢が高くなるほど文化財への関心度は高くなる。」は支持される結果となり、これは最初に述べた観光地の文化財における意識調査と同じ結果であった。しかし、[仮説 2]「年齢が高くなるほど文化財を次世代に伝えていくことを重要だと思っている。」に関しては、今回の分析では有意な結果を得られることができなかった。よって[仮説 2]は支持されなかった。

[仮説 1]に関しては、先行研究で「年齢が高いほど歴史遺産への訪問度が高い」ということが述べられていることをふまえると、高齢層は文化財への訪問頻度が若年層よりも高いので、文化財のことを知る機会が若年層よりも多いためであると予測する。

[仮説 2]に関しては、どの年齢層においても「文化財を次世代に伝えていくことを重要である」と回答している人は 50%を超えており、年齢層による違いは見られなかった。このような結果が得られた理由として、小・中学校での歴史教育などを通して文化財とは貴重なものであるという意識を持つようになったからであると予測される。

仮説とは別に、表 2 の重回帰分析の結果からは文化財の関心に影響を与える要因としては「年齢」以外にも、「性別」、「最終学歴」が挙げられることがわかった。

文化財は日本の魅力の 1 つであり、これを目的として日本を訪れる外国人は多い。これらの文化財を今後も保護していくには将来的に莫大な費用がかかる。そのため、若年層に関心を持ってもらうことが必要不可欠といえるので、今後はいかにして若年層の関心を集めることができるかが、重要になってくると考えられる。

6. 文献

- [1]日本政府観光局(JNTO), 2014, 「国籍別/目的別訪日外客数」
(http://www.jnto.go.jp/jpn/reference/tourism_data/pdf/2013_15_tourists.pdf)
- [2]日本交通公社, 塩谷英生, 2015, 「歴史・文化観光に関する国内旅行市場調査」
(<https://www.jtb.or.jp/research/market-survey-1>)
- [3]関西大学 総合情報学部, 2013, 「平成 24 年度社会調査実習報告書—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査報告書—」
- [4]日本交通公社, 2014, 「アジア市場における歴史文化観光への関心度」
(<https://www.jtb.or.jp/research/asia-market-survey-1>)
- [5]河内長野市, 2014, 「平成 25 年度河内長野市民意識調査報告書」
(http://www.city.kawachinagano.lg.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/36/siminnisikih25_.pdf)

第4章 市街地へのアクセス時間とバス利用頻度の関係

伊藤 圭佑

1. はじめに

最近、電車やバスに代表される公共交通機関の利用者数が少なくなっているという報道が取り上げられている。例えば、産経新聞の2015年10月27日の記事によれば、尼崎市交通局が運営するバスは、人口減やマイカーの普及などで、利用者が2014年度にピーク時(1948年)の約3割に減少し、約2億円の累積赤字が計上された。そのため、2016年3月には民営バス会社へ運営が移譲されることになった。

さて、高槻市は、公営企業として「高槻市交通部」を持っている。「公営交通」の現状であるが、公営交通事業協会が2004年に発表した「規制改革の社会における公営バス事業の経営に関する調査研究会報告書」によると、昭和58年度に59事業者でピークであったが、平成14年度では48事業者となり、廃止・民営企業への委譲で年々減少している。高槻市交通部は、そのような状況である公営企業の1つとして、市民の足を長年支えている。

しかし、前段で述べたように、高槻市バスの利用者が減少しているという状況は他と同じである。また、民営事業者も同様の状況で、事業者の数は増えども、乗車人員が増えてはいない。ここで一つの理由として、「遠距離でなければバスは利用せず、近距離は徒歩や自転車を利用する」という考え方が出てきていることが推測される。

2. 仮説

今回、「市街地へのアクセス時間が短いほど、市バスを利用する機会は少ない」という仮説を立て、市街地への徒歩・自転車での利用時間が短くなれば、バスを利用はしない、という条件が成り立つかどうかを、高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を通して考える。

3. データと変数

3.1. データ

データは、平成27年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する20歳以上85歳未満の男女、計画標本サイズは2000、有効回収数は1224票、回収率は61.2%である。

3.2. 変数

今回の分析に使用した変数は以下の通りである。

Q12. あなたはどの程度高槻市内でバスを利用しますか。(反転処理を施した)

1. 利用しない
2. 年に1～2日
3. 月に1～2日
4. 週に1～2日
5. 週に3～4日
6. ほぼ毎日

Q14. 繁華街までの交通機関・自動車を利用しないでの所要時間(反転処理なし)

1. 10分未満
2. 10分以上20分未満
3. 20分以上30分未満
4. 30分以上1時間未満
5. 1時間以上

Q53. 性別

1. 男性
2. 女性

Q54. 年齢

1. 20代
2. 30代
3. 40代
4. 50代
5. 60代
6. 70代以上

Q55. 職業

その他職業ダミーは、1が臨時雇用・パート・アルバイト、家事専業、学生、無職、その他であり、0は、それ以外の職業とした。

Q57. 最終学歴

初等学歴ダミーは、1を旧小学校などを含む中学と、高校(または旧制中学)をまとめたものとし、0をそれ以外の学歴とした。中等学歴ダミーは、1を専門学校・短大・高専(5年制のもの)とし、0をそれ以外の学歴とした。

Q63. 世帯収入

1. 100万円未満
2. 100万円～200万円未満
3. 200万円～300万円未満
4. 300万円～400万円未満
5. 400万円～500万円未満
6. 500万円～600万円未満
7. 700万円～800万円未満
8. 800万円～900万円未満
9. わからない

4. 分析

表 1

市バスの利用頻度の重回帰分析結果

	B	標準誤差	ベータ
(定数)	1.086 ***	.273	
商店街や繁華街までの所要時間	.280 ***	.036	.242
性別	-.015	.095	-.005
年齢	.221 ***	.033	.250
世帯収入	.005	.028	.007
初等学歴ダミー	-.315 **	.110	-.113
中等学歴ダミー	-.214	.125	-.062
その他職業ダミー	.138	.113	.047
決定係数	.116 ***		
調整済み決定係数	.109 ***		
N	978		

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$ †: $p < .10$

仮説である、「市街地へのアクセス時間が短いほど、市バスを利用する機会は少ない」に係るQ.12とQ.14の有意確率は0.001未満で、有意であった。

表1の市バスの利用頻度の重回帰分析結果の各項目を見る前に、B値（非標準化偏回帰係数 B）について簡単に解説する。これは、独立変数（原因等を説明をする変数）の値が1増減した時、従属変数（説明される変数）がどれくらい増減するかを示すものである。

では、有意であった「繁華街までの所要時間」、「年齢」、「初等学歴ダミー」の項目を見る。まず「繁華街までの所要時間」が、市バスの利用頻度に与える影響を考える。回帰係数(B=.280)が正の値であるため、独立変数のQ14「繁華街への移動時間」の値が大きくなるほど、従属変数のQ12「バスの利用頻度」の値も大きくなると読み取れる。つまり、「繁華街への移動時間」が長くなればなるほど、市バスに乗る回数が多くなると説明できる。

次に、「年齢の」変数から考える。これも、偏回帰係数(B=.221)の値が正であるから、独立変数の「年齢」の値が大きくなるほど、従属変数のQ12「バスの利用頻度」の値も大きくなる。つまり、年齢が高い人ほどバスをよく利用すると解釈ができる。逆に言えば、年齢が若くなるほど、バスを利用する機会は少ないと読み取れる。

学歴の面では、初等学歴ダミーのB値が-.315である。中学・高校の学歴を持つ人が、大学卒の人と比べ、バスを利用する頻度が低くなるとわかる。

以上のことから、「市街地へのアクセス時間が短いほど、市バスを利用する機会は少ない」という仮説は立証された。

5. 考察

分析結果から、「市街地へのアクセス時間が短いほど、市バスを利用する機会は少ない」という仮説は立証された。ただ、バスを利用する年齢層が高いことがあり、繁華街から離れた地域に住む人全員がバスを利用するというわけではないことと、年齢が若ければ他の手段で繁華街へ出かけることが考えられる。近距離であれば、自転車あるいは徒歩を利用すると推測ができるが、長距離の場合は、自家用車などの手段になっているとも推測することができる。

公営企業である市営交通のみならず、民間会社でも「利用者数」という問題が取り上げられることが多い。交通事業者単独で活性化を図るのではなく、市政と一体をなして、利用者層を広げたり、バスの新しい利用の仕方を考える必要があると考えられる。

6. 文献

- [1] 高槻市交通部, 2011, 「市営バス経営改善計画」
<http://www.city.takatsuki.osaka.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/108/kaizenkeikakuhonbun01.pdf> (2015年11月24日閲覧)
- [2] 一般財団法人 公営交通事業協会, 2004, 『規制改革の社会における公営バス事業の経営に関する調査研究会報告書』
<http://www.mtwa.or.jp/h16main1.pdf> (2015年11月24日閲覧)
- [3] 産経新聞, 2015年10月27日, 「橋下さんお先に、尼崎市バスが民営化...利用者減少で経営危機」
<http://www.sankei.com/west/news/151027/wst1510270026-n1.html> (2015年12月22日閲覧)
- [4] 第1回 高槻市総合交通戦略検討協議会, 2014, 「高槻市の概況と人の移動実態」
http://www.city.takatsuki.osaka.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/74/09_idoujittai.pdf
(2015年12月20日閲覧)

第5章 高槻市民は情報を収集するのに どのような媒体を用いるのか？

井本 菜摘

1. はじめに

近年デジタル化が進み、個人の情報収集方法が多様化した。内閣府所管の財団法人経済広報センターの平成23年度の情報源に関する意識・実態調査では、インターネットなどデジタル媒体の利用年代は20代30代が一番多く、新聞・テレビなどのアナログ媒体では年代が上がるほどに利用割合が増加していると発表している。また60歳以上と29歳以下の利用率の差は50%もあると述べている。

年代ごとでの情報収集媒体の利用の違いは明らかである。そこで高槻市民が情報収集の際にどの媒体をよく利用するのか、年代別に分析する。高齢者に対しデジタル化は本当に進んでいるのか。年代別で情報収集を行う際に一番よく利用される媒体を調査する。

2. 先行研究と仮説

内閣府所管の財団法人経済広報センターの平成23年度の情報源に関する意識・実態調査では、生活者が一般的な社会の動きを知ろうとするときに利用する情報源としては、「テレビ」(84%)と「新聞」(82%)がそれぞれ8割を超え、「インターネット」は79%に上っている。生活者が情報をえる場合、この3つが情報源の柱となっている。「インターネット」は29歳以下(90%)および、30歳代(88%)で「テレビ」「新聞」の割合を大きく上回り、最大の情報源として利用されている。

本章では、高槻市の住民の傾向が上記の研究の結果と一致するのかを調べていく。

仮説1：年齢が高齢になるほど、新聞などアナログな媒体から情報を収集している

仮説2：20代、30代はインターネットなどのデジタル媒体から情報を取り入れる

仮説3：年齢が若いほど情報収集は積極的である

3. データと変数

3.1. データ

データについては、平成27年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する20歳以上85歳未満の男女、計画標本サイズは2000、有効回収数は1124票、回収率は61.2%であった。

3.2. 変数

q 54 あなたの年齢をお答えください。

- (1) 20代 (2)30代 (3)40代 (4)50代 (5)60代 (6)70代以上

q 41 情報収集にインターネット上のやりとりを重視するか

- (1) 重視する (2)少し重視する (3)あまり重視しない (4)重視しない

q42 知り合いから聞いた情報に影響されやすいか

- (1) そう思う (2)ややそう思う (3)あまりそう思わない (4)そう思わない

q43 情報を取り入れることに積極的か

- (1) かなり積極的 (2)やや積極的 (3)やや消極的 (4)かなり消極的

q 44 あなたは普段、情報収集のために、1日どれぐらいの時間だけ以下の媒体を使用していますか。

A. 紙の新聞・雑誌

- (1) 全く利用しない (2)20分未満 (3)20分以上 40分未満
(4)40分以上 1時間未満 (5)1時間以上 2時間未満 (6)2時間以上

B. 1日で情報収集に費やす時間 テレビ・ラジオ

- (1) 全く利用しない (2)20分未満 (3)20分以上 40分未満
(4)40分以上 1時間未満 (5)1時間以上 2時間未満 (6)2時間以上

C. 1日で情報収集に費やす時間 携帯電話・スマートフォン

- (1) 全く利用しない (2)20分未満 (3)20分以上 40分未満
(4)40分以上 1時間未満 (5)1時間以上 2時間未満 (6)2時間以上

D. パソコン (インターネット)

- (1) 全く利用しない (2)20分未満 (3)20分以上 40分未満
(4)40分以上 1時間未満 (5)1時間以上 2時間未満 (6)2時間以上

この5つの変数を主に使用している。なお5つの変数の無回答の答えは欠損値とし、処理を行って分析を行っている。

4. 分析

(1) の仮説について次のクロス表分析を行った。まず、高槻市民が情報収集に対してどのくらい積極的であるか、p54 と p43 をクロス表にし、度数とその%を表した（表 1）。

表 1

q54 年齢 と q44 情報を取り入れることに積極的かのクロス表		q43 情報を取り入れることに積極的か				合計
q54 年齢		かなり積極的	やや積極的	やや消極的	かなり消極的	
20代	度数	22	50	18	2	92
	q54 年齢の%	23.9%	54.3%	19.6%	2.2%	100.0%
30代	度数	27	88	33	1	149
	q54 年齢の%	18.1%	59.1%	22.1%	.7%	100.0%
40代	度数	33	117	49	5	204
	q54 年齢の%	16.2%	57.4%	24.0%	2.5%	100.0%
50代	度数	18	97	57	6	178
	q54 年齢の%	10.1%	54.5%	32.0%	3.4%	100.0%
60代	度数	20	134	82	18	254
	q54 年齢の%	7.9%	52.8%	32.3%	7.1%	100.0%
70代以上	度数	26	116	113	30	285
	q54 年齢の%	9.1%	40.7%	39.6%	10.5%	100.0%
合計	度数	146	602	352	62	1162
	q54 年齢の%	12.6%	51.8%	30.3%	5.3%	100.0%

分析の結果、情報を取り入れることに積極的かどうかをみると、「かなり積極的」や「やや積極的」の年齢が上がるにつれて割合が低くなっており、反対に「かなり消極的」や「やや消極的」は年齢が上がるにつれて割合が高くなっている傾向がある。

次に、情報収集にインターネットを重視するかをみると、表 1 と同じように「重視」、「少し重視する」に関しては年齢が高くなるごとに割合が低くなっており、反対に「あまり重視しない」、「重視しない」に関しては年齢が高くなるごとに割合が高くなっている傾向がある（表 2）。

表 2

q54 年齢 と q42 情報収集にインターネット上のやりとりを重視するかのクロス表						
q41 情報収集にインターネット上のやりとりを重視するか						
q54 年齢		重視する	少し重視する	あまり重視しない	重視しない	合計
20代	度数	52	30	8	2	92
	q54 年齢の %	56.5%	32.6%	8.7%	2.2%	100.0%
30代	度数	75	57	14	2	148
	q54 年齢の %	50.7%	38.5%	9.5%	1.4%	100.0%
40代	度数	90	76	30	8	204
	q54 年齢の %	44.1%	37.3%	14.7%	3.9%	100.0%
50代	度数	52	73	31	22	178
	q54 年齢の %	29.2%	41.0%	17.4%	12.4%	100.0%
60代	度数	36	81	72	59	248
	q54 年齢の %	14.5%	32.7%	29.0%	23.8%	100.0%
70代以上	度数	23	50	73	126	272
	q54 年齢の %	8.5%	18.4%	26.8%	46.3%	100.0%
合計	度数	328	367	228	219	1142
	q54 年齢の %	28.7%	32.1%	20.0%	19.2%	100.0%

表 3

		1日で情報収集に費やす時間 紙の新聞・雑誌 と年齢 のクロス表					
		20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
q44_a 1日 で情報収集 に費やす時 間 紙の新 聞・雑誌	全く利用し ない	46 50.5%	59 39.9%	53 26.0%	27 15.1%	26 10.2%	26 9.2%
	20分未満	31 34.1%	69 46.6%	95 46.6%	59 33.0%	67 26.4%	52 18.4%
	20分以上40 分未満	10 11.0%	14 9.5%	34 16.7%	62 34.6%	87 34.3%	73 25.8%
	40分以上1 時間未満	3 3.3%	3 2.0%	16 7.8%	19 10.6%	49 19.3%	79 27.9%
	1時間以上 2時間未満	1 1.1%	2 1.4%	6 2.9%	9 5.0%	14 5.5%	39 13.8%
	2時間以上	0 0.0%	1 .7%	0 0.0%	3 1.7%	11 4.3%	14 4.9%
	合計	91 100.0%	148 100.0%	204 100.0%	179 100.0%	254 100.0%	283 100.0%

表 3 の分析から、新聞を全く利用しない場合は年齢が高くなるごとに割合が低くなっているが、利用時間が 20 分未満から年齢が高くなるごとに割合が高くなっている傾向がある。

表 4

		1日で情報収集に費やす時間 テレビ・ラジオ と年齢 のクロス表					
		20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
q44_b 1日 で情報 収集に費 やす時間 テレビ・ラ ジオ	全く利用 しない	7 7.7%	10 6.7%	11 5.4%	1 .6%	4 1.6%	6 2.1%
	20分未 満	9 9.9%	27 18.1%	28 13.7%	21 11.7%	11 4.3%	20 7.0%
	20分以 上40分 未満	10 11.0%	32 21.5%	31 15.2%	18 10.1%	23 9.0%	24 8.4%
	40分以 上1時間 未満	13 14.3%	28 18.8%	32 15.7%	25 14.0%	56 22.0%	47 16.4%
	1時間以 上2時間 未満	25 27.5%	29 19.5%	57 27.9%	53 29.6%	50 19.6%	78 27.3%
	2時間以 上	27 29.7%	23 15.4%	45 22.1%	61 34.1%	111 43.5%	111 38.8%
	合計	91 100.0%	149 100.0%	204 100.0%	179 100.0%	255 100.0%	286 100.0%

表 4 の分析から、テレビ・ラジオを全く利用しない場合は年齢が高くなるごとに割合が

低くなっているが、利用時間が20分未満から2時間未満は年齢ごとでの割合は大きい違いはなかった。2時間以上の利用となると60代の利用の割合がとて大きくになっていた。

表 5

1日の情報収集に費やす時間 携帯電話・スマートフォン と 年齢 のクロス表		20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
q44_c 1日 で情報収集 に費やす時 間 携帯電 話・スマー トフォン	全く利用し ない	3 3.3%	11 7.4%	28 13.7%	46 25.8%	101 40.1%	132 46.5%
	20分未満	6 6.6%	17 11.4%	41 20.1%	57 32.0%	97 38.5%	105 37.0%
	20分以上 40分未満	4 4.4%	24 16.1%	39 19.1%	22 12.4%	20 7.9%	29 10.2%
	40分以上 1時間未満	10 11.0%	32 21.5%	36 17.6%	24 13.5%	24 9.5%	12 4.2%
	1時間以上 2時間未満	19 20.9%	34 22.8%	36 17.6%	18 10.1%	5 2.0%	6 2.1%
	2時間以上	49 53.8%	31 20.8%	24 11.8%	11 6.2%	5 2.0%	0 0.0%
	合計	91	149	204	178	252	284
		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表5の分析から、携帯電話・スマートフォンの利用については、年齢ごとに20代、30代は利用時間が増えるほど割合が高くなる傾向があるが、40代を境に利用時間が増えるほど割合が低くなる傾向がある。

表 6

1日の情報収集に費やす時間 パソコン（インターネット） と 年齢 のクロス表		20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
q44_d 1日 で情報収集 に費やす時 間 パソコン （インター ネット）	全く利用し ない	23 25.3%	46 30.9%	34 16.7%	56 31.5%	115 45.6%	203 72.8%
	20分未満	15 16.5%	26 17.4%	62 30.5%	32 18.0%	45 17.9%	22 7.9%
	20分以上40 分未満	10 11.0%	25 16.8%	33 16.3%	30 16.9%	21 8.3%	14 5.0%
	40分以上1 時間未満	14 15.4%	27 18.1%	27 13.3%	21 11.8%	29 11.5%	14 5.0%
	1時間以上 2時間未満	9 9.9%	12 8.1%	23 11.3%	17 9.6%	18 7.1%	19 6.8%
	2時間以上	20 22.0%	13 8.7%	24 11.8%	22 12.4%	24 9.5%	7 2.5%
	合計	91	149	203	178	252	279
		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表6の分析から、パソコン（インターネット）の利用については、どの年齢も利用時間

が増えるほど割合が低くなる傾向がある。

5. 考察

「情報収集にインターネット上のやりとりを重視するか」と年齢のクロス表（表1）においては、左上から右下につれて数字が大きくなっている。このことにより、情報収集にインターネット上のやりとりを重視するかどうかについては、年齢が高齢になるとともに重要視しなくなることがわかる。また、新聞・雑誌、TV・ラジオ、スマートフォン、パソコン（インターネット）の利用時間の割合の分布から、新聞・雑誌は年齢が高くなるほど利用時間の割合がまばらになり、年齢が低くなるほど極端に利用数が少なくなることがわかる。スマートフォンの利用時間の割合では、20代、30代は利用時間が増加するほど割合が増加した。パソコン（インターネット）に関しては30代以降から利用時間が増加するほど割合は低くなっていた。一方、TV・ラジオの利用時間の割合の分布は年齢ごとに利用時間が大きくなるほど割合も大きくなっており、どの年代もTV・ラジオを利用しているとわかった。以上より、仮説1の「年齢が高齢になるほど、新聞などアナログな媒体から情報を収集している」、仮説2の「20代、30代はインターネットなどのデジタル媒体から情報を取り入れる」は支持された。

仮説3の「年齢が若いほど情報収集は積極的である」については、若者の方が若干情報収集に積極的であるが、各年代の大きな違いはなかった。よって、仮説3は支持されなかった。

今回の分析結果から、一般財団法人経済広報センター（2013）の「情報源に関する意識・実態調査報告書」が示す動向に、高槻市民の傾向も当てはまっていることがわかった。ただし、各年代の情報の収集について、年齢ごとに母数が大きく違うことから、偏りが起こっている可能性がある。その一方、パソコン（インターネット）に関して、20代の分布が「全く利用しない」と「2時間以上利用する」に大きく分かれ二極化していたことについての要因や、他の情報媒体との違いが生じる要因を調べて比較すれば、広告の宣伝などにも応用できるのではないかと考えられる。

6. 文献

1. 「平成26年度社会調査実習報告書—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—」
http://www.kansai-u.ac.jp/Fc_inf/ug/certificate/pdf/26.pdf
2. 「情報源に関する意識・実態調査報告書」（2013）一般財団法人経済広報センター
<https://www.kkc.or.jp/data/release/00000088-1.pdf>

第 6 章 生活満足度と公共交通機関の満足度の関連性

大野 友也

1. はじめに

近年、通勤が健康に大きく関係しているというニュースがたびたび報じられている。実際、産業医科大学産業生態科学研究所の「労働者の時間外労働時間・通勤時間と睡眠時間の関係」では、通勤時間が長くなるほど睡眠時間が短くなる傾向があると述べられている。また、シゴトサブリ「満員電車で潜む意外な健康リスクと 4 つの予防策」では、満員電車のリスクとして、ストレス増加による生活習慣病リスクや伝染病や風邪を引きやすくなる、疲労がたまりやすくなるといった例が挙げられている。そのほか、イギリスの国家統計局の調査に関する Chorley (2014) の解説では、イギリスでは通勤時間が長くなるほど、運動する時間や家族とコミュニケーションをとる時間が減るなど、ストレスを解消する時間が削られているとされている。さらに、夏目 (2014) の紹介する米世論調査会社ギャロップの調査によると、起床してから就寝するまでの毎日の習慣的行動を調査対象者に評価してもらったところ、通勤を幸福度の低い行動だと考える人がもっとも多いという結果もあった。

2. 仮説

通勤と幸福度の関係性の例として、米世論調査会社ギャロップの調査によれば、通勤時間が長いほど幸福度は低くなる傾向があることが分かっている。この通勤時間と幸福度の関係性は、夏目 (2014) の紹介するチューリッヒ大学のブルーノ・フレイ氏の調査によれば、通勤時間がゼロから 22 分になった場合の幸福度の低下を相殺するためには、通常、収入が 3 分の 1 増える必要があるということも明らかとなっており、通勤時間が幸福度にもたらす影響がとても大きいということがわかる。また、通勤手段によっても幸福度や不安感が増減するということが明らかになっており、バス通勤、電車通勤、自転車通勤、徒歩通勤ごとに幸福度や不安感に与える影響の特徴が異なっていることも判明している。これらのことから通勤と幸福度の関連はとても大きなものであると推測できるため、通勤に用いる公共交通機関に満足している人ほど、生活満足度も高くなる傾向があると考えられる。よってこのことから対照的に、公共交通機関に満足している人ほど生活満足度は高くなる傾向があるのではないかと推測される。

仮説：公共交通機関に満足しているほど生活満足度は高くなる。

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 27 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1224 票、回収率は 61.2%である。

3.2. 変数

今回用いた変数は、Q1「生活満足度」、Q9「交通の満足度 電車」、Q10「交通の満足度 バス」、Q12「市バスの利用頻度」、Q53「性別」、Q54「年齢」、Q55「職業」、Q56「週あたりの労働日数」である。

【従属変数】

Q1「生活満足度」

値が大きいほど生活満足度が上がるように、コードの反転をしている。反転後のコードは、「1, 不満 2, やや不満 3, どちらともいえない 4, やや満足 5, 満足」である。

【独立変数】

Q9「交通の満足度 電車」

値が大きいほど交通の満足度が上がるように、コードの反転をしている。反転後のコードは、「1, 不満 2, やや不満 3, どちらともいえない 4, やや満足 5, 満足」である。

Q10「交通の満足度 バス」

値が大きいほど交通の満足度が上がるように、コードの反転をしている。反転後のコードは、「1, 不満 2, やや不満 3, どちらともいえない 4, やや満足 5, 満足」である。

Q12「市バスの利用頻度」

値が大きいほど市バスの利用頻度が上がるように、コードの反転をしている。反転後のコードは、「1, 利用しない 2, 年に 1~2 回 3, つきに 1~2 回 4, 週に 1~2 回 5, 週に 3~4 回 6, ほぼ毎日」である。

Q53「性別」

1, 男性 2, 女性

男性=1、女性=0 にリコードし「男性ダミー」を作成する。

Q54「年齢」

1, 20代 2, 30代 3, 40代 4, 50代 5, 60代 6, 70代

Q55 「職業」

それぞれ各項目をリコードしダミーを作成する。1, 常時雇用の勤め人 5, 経営者・役員を「常勤の勤め人ダミー」、3, 自営業者 4, 自営業者の家族従業員を「自営業ダミー」、2, 臨時雇用・パート・アルバイト 6, 家事専業 7, 学生 8, 無職 9, その他を「その他職業ダミー」とする。

Q56 「週あたりの労働日数」

0, 0日 1, 1日 2, 2日 3, 3日 4, 4日 5, 5日 6, 6日 7, 7日

以上の変数を用いてクロス表および重回帰分析を行う。

4. 分析

表 1 q1_生活満足度反転とq9_交通の満足度(電車)のクロス表

		q1 生活満足度					合計	
		不満	やや不満	どちらともいえない	やや満足	満足		
q9 交通の満足度 電車	不満	度数	5	6	3	5	1	20
		行%	25.0%	30.0%	15.0%	25.0%	5.0%	100.0%
	やや不満	度数	7	10	16	24	6	63
		行%	11.1%	15.9%	25.4%	38.1%	9.5%	100.0%
	どちらともいえない	度数	13	34	62	49	16	174
		行%	7.5%	19.5%	35.6%	28.2%	9.2%	100.0%
	やや満足	度数	10	54	98	235	45	442
		行%	2.3%	12.2%	22.2%	53.2%	10.2%	100.0%
	満足	度数	11	36	83	227	137	494
		行%	2.2%	7.3%	16.8%	46.0%	27.7%	100.0%
合計		度数	46	140	262	540	205	1193
		行%	3.9%	11.7%	22.0%	45.3%	17.2%	100.0%

χ^2 (df=16, N=1193)=164.508***, Cramer V=0.152***

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

検定の結果、カイ 2 乗検定の値は 164.508 で Cramer V の値は 0.152 であった。また有意確率は 1%水準で有意であった。これらの数値から表 1 の結果はある程度関連性が強いといえる。表 1 の結果より、「交通の満足度 電車」で満足と回答している人のうち 73.7%、やや満足と回答している人のうち 63.4%が、「生活満足度」で満足・やや満足と回答しており、いずれも過半数である。一方、「交通の満足度 電車」で不満と回答している人のうち 30.0%、やや不満と回答している人のうち 47.6%も、「生活満足度」で満足・やや満足と回答している。これは半数を割っているものの、一定数は存在していることが分かる。

表2 q1_生活満足度反転とq10_交通の満足度(バス)のクロス表

		q1 生活満足度反転					合計	
		不満	やや不満	どちらともいえない	やや満足	満足		
q10 交通の満足度 バス	不満	度数	7	16	22	18	8	71
		行%	9.9%	22.5%	31.0%	25.4%	11.3%	100.0%
	やや不満	度数	5	26	47	80	18	176
		行%	2.8%	14.8%	26.7%	45.5%	10.2%	100.0%
	どちらともいえない	度数	15	41	88	172	58	374
		行%	4.0%	11.0%	23.5%	46.0%	15.5%	100.0%
	やや満足	度数	10	46	62	169	51	338
		行%	3.0%	13.6%	18.3%	50.0%	15.1%	100.0%
	満足	度数	9	13	42	99	72	235
		行%	3.8%	5.5%	17.9%	42.1%	30.6%	100.0%
	合計	度数	46	142	261	538	207	1194
		行%	3.9%	11.9%	21.9%	45.1%	17.3%	100.0%

χ^2 (df=16,N=1194)=74.436***,Cramer V=0.125***

***:p<.001,**:p<.01,*:p<.05,†:p<.10

検定の結果、カイ2乗検定の値は74.436でCramer Vの値は0.125であった。また有意確率は1%水準で有意であった。これらの数値から表2の結果はある程度関連性が強いといえる。表2の結果より、「交通の満足度 バス」で満足と回答している人のうち65.1%、やや満足と回答している人のうち72.7%が、「生活満足度 バス」で満足・やや満足と回答しており、いずれも過半数である。また、「交通の満足度 電車」で不満と回答している人のうち、「生活満足度」でやや満足、満足という回答をしている人は36.7%と三分の一ほどの数値となっている。

表3 「生活満足度」の重回帰分析

	B	標準誤差	β
(定数)	2.557	.187	
q1_r 交通の満足度 電車 反転	.302 **	.034	.281
q1_r 交通の満足度 バス 反転	.056 **	.030	.062
q1_r 市バスの利用頻度 反転	.008	.023	.011
q56 週あたりの労働日数	-.063 *	.018	-.154
男性ダミー	-.039	.064	-.019
自営業者ダミー	-.003	.140	-.001
その他職業ダミー	-.338	.095	-.160
調整決定済み係数	.107 ***		
N	1068		

***:p<.001,**:p<.01,*:p<.05,†:p<.10

表3の結果を見ると、調査済み決定係数は0.107である。これは従属変数である「生活満足度」の分散のうち10.7%が、投入した独立変数で説明されていることを示している。0.1%水準で有意であることから、このモデルが生活満足度の予想に役立つことがわかる。この表を見ると「交通の満足度 電車」は有意確率1%水準で有意となり、「生活満足度」に正の影響を与えていることがわかる。それに対し、「交通の満足度 バス」は同じく有意確率

1%水準で有意であるもの、予想と異なり「交通の満足度 電車」と比べ低い数値となった。

5. 考察

表 1、2 の結果より「交通の満足度 電車」「交通の満足度 バス」とともに満足、やや満足していると回答すると生活満足度も満足、やや満足と回答する人が多くなり、不満の場合も同じような変化を見せているため、電車、バスともに生活満足度と強い関係性を持つことがわかる。よって仮説は正しいといえる。しかし、「交通の満足度 電車」「交通の満足度 バス」で不満、やや不満と回答した人の中で、「生活満足度」でやや満足と回答した人が一定程度いたことから、生活満足度の中で公共交通機関の満足度が占める割合が少ない層が一定数存在するように思われる。この層は日常的に公共交通機関を利用する訳ではないため、公共交通機関の満足度と生活満足度の関連性が小さいのだと思われる。

また、表 3 の結果を見ると「交通の満足度 電車」が「生活満足度」に与える影響は「交通の満足度 バス」と比べ大きいことがわかる。この数値の差の要因として高槻市ではバスよりも電車の方が高槻市民の交通手段として多く用いられているということが考えられる。実際高槻市には JR と阪急電車が通っており、新快速の電車が止まるなど大阪市近辺で働く人がベッドタウンとして暮らしている人も多いことからこの結果には納得することができる。そして、この結果からそれぞれの市町村によって多く用いられる交通手段が市民の生活満足度に大きな影響を与えると考えられる。そうすると、自家用車を主な交通手段として用いている市町村では自動車の車種が交通満足度に大きく影響し、公共交通機関を主に使っている市町村に比べ、取得が生活満足度に大きく影響するのではないかと思われる。

6. 文献

- [5] ロケットニュース 24 : 「通勤時間は人生の幸福度に大きな影響を与えるとの調査結果」
著者 : Nekolas
発表年 2014/2/18 2016/2/16 アクセス
<http://rocketnews24.com/2014/02/18/413411/>
- [6] 産業医科大学産業生態科学研究所 : 「労働者の時間外労働時間・通勤時間と睡眠時間の関係」
発表年 2007/03/1 2016/2/16 アクセス
産業医科大学雑誌 29(1), 128
- [7] リーディング&カンパニー株式会社「通勤時間が 22 分増えた場合の幸福度の低下を相殺するためには、収入を 30%増やす必要がある」
著者 : 夏目力
発表年 2014 2016/2/16 アクセス
http://randcom.com/google_bonus

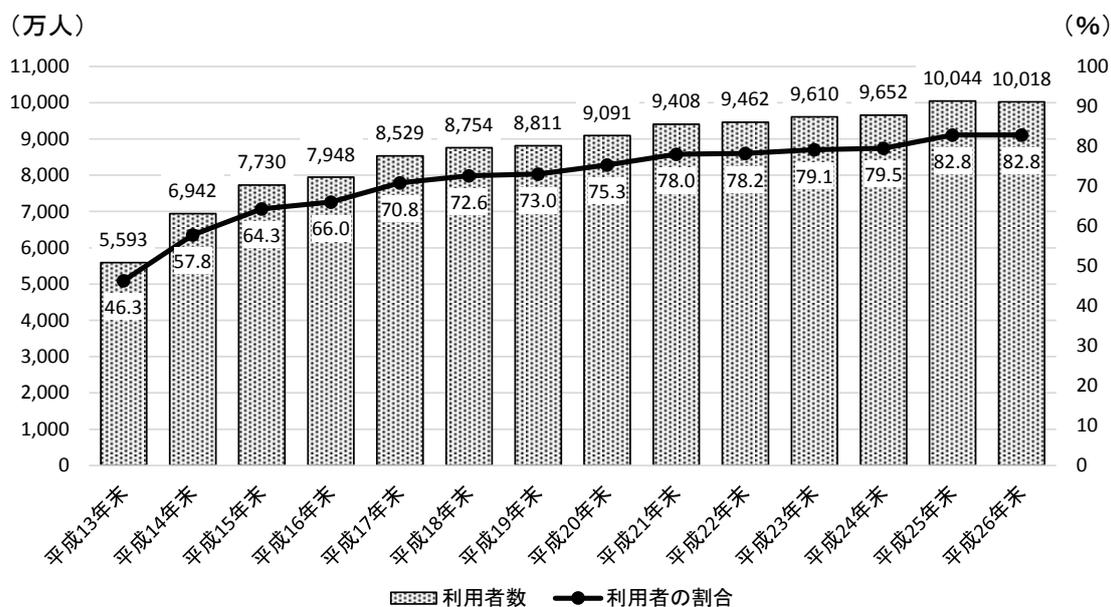
- [8] シゴトサプリ 「満員電車で潜む意外な健康リスクと4つの予防策」
著者：GozoRopp
発表年 2014/8/21 2016/2/16 アクセス
<http://tenshoku.mynavi.jp/knowhow/suppli/healthcare/016>
- [9] Mail Online 「It's official: Commuting to work makes you miserable (and spending more than half an hour on a bus is the worst way to travel)」
著者：MATT CHORLEY
発表年 2014/2/12 2016/2/25 アクセス
<http://www.dailymail.co.uk/news/article-2557564/Its-official-Commuting-work-makes-miserable-spending-half-hour-bus-worst-way-travel.html>

第7章 生活におけるインターネット利活用の影響

川島 拓也

1. はじめに

今日、インターネットの利用はますます簡単、便利になってきており、インターネットを利用する人が増えている。総務省の「平成26年 通信利用動向調査」によると、図1のように、平成26年の1年間にインターネットを利用したことがある人は1億18万人となり、インターネット利用者の割合は82.8%となっている。年齢階層別インターネット利用率を過去の調査結果と比較すると、全ての年代において利用率が上昇しており、特に60代以上のシニア層での上昇率が大きい。

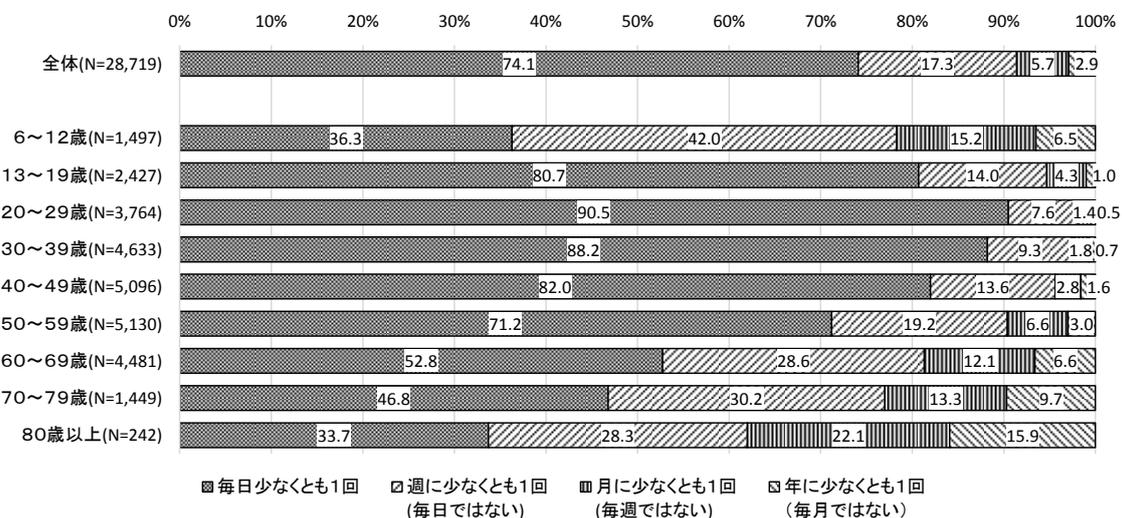


資料出典：総務省『平成26年 通信利用動向調査』より作成

図1. インターネットの利用者数及び利用者の割合の推移

図2は「年齢階層別インターネットの利用頻度」の100%積み上げ横棒グラフである。インターネット利用者の利用頻度をみると、「毎日少なくとも1回」の割合が7割以上となっていることが分かる。年齢階層別にみると、13～59歳までの各年齢階層で、「毎日少なくとも1回」の割合が7割以上となっていることも分かる。高齢者などの利用頻度が少ないという年齢差が見られるが、「週に少なくとも1回」、「月に少なくとも1回」となると全ての年齢階層において、利用者の割合が80%を超えている。よって、利用頻度にはまだ多少の

差が見られるが、全ての年齢階層においてインターネット利用率は高くなっていることが分かる。



資料出典：総務省『平成26年 通信利用動向調査』より作成

図2. 年齢階層別インターネットの利用頻度

また、総務省の「社会課題解決のための新たな ICT サービス・技術への人々の意識に関する調査研究」によると、「仕事や研究、勉強について調べたいことがある場合」や「商品やサービスの内容や評判について調べたいことがある場合」などの様々な場面において、「インターネットの検索サイトで検索する」との回答が約 7 割を占めた。年代による大きな傾向の差はみられず、何かを調べる際の最も一般的な手段として、年代を問わず、インターネットが広く浸透していることが分かる。

このように、インターネット利用をはじめとする ICT (Information and Communication Technology) 利活用は過去約 10 年間で全年代に浸透してきた。したがって本章では、インターネットの普及により、人々の情報収集の手段がどのように変化し、その結果、生活にどのような影響を与えているのかを分析する。

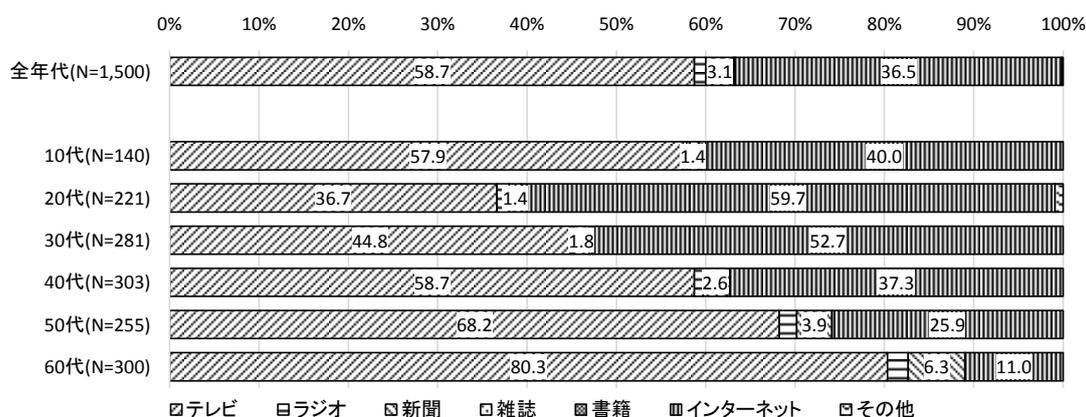
2. 仮説

総務省情報通信政策研究所の「平成 26 年 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」によると、「いち早く世の中のできごとや動きを知る」、「世の中のできごとや動きについて信頼できる情報を得る」、「趣味・娯楽に関する情報を得る」、「仕事や調べものに役立つ情報を得る」という目的別の利用メディアの割合は図 3-1、3-2、3-3、3-4 のような結果になった。

概ねいずれの目的でも、20代がテレビを最もよく利用する割合が低く、30代以降は年代

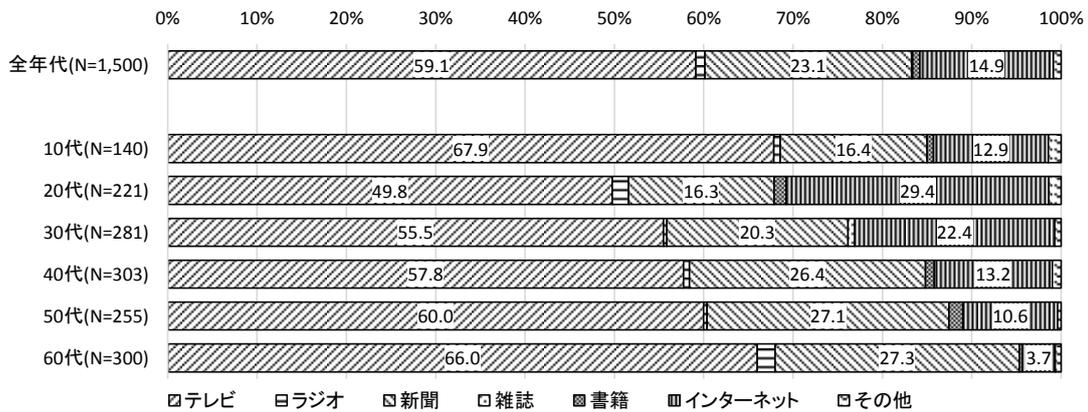
が上がるにつれてテレビを最もよく利用する割合が高くなっている。また、平成 25 年度の調査結果と比較すると、テレビを最もよく利用する割合が減少傾向にあり、インターネットを最もよく利用する割合が増加傾向にあることが分かる。特に、「いち早く世の中のできごとや動きを知る」においてテレビを選んだ者の割合が 6.4 ポイント下落し、インターネットを選んだ者が 6.3 ポイント上昇していることは特徴的である。よって、現在、最もよく利用するマスメディア媒体として、テレビからインターネットに移行していることが分かる。

時事情報を得る（「いち早く世の中のできごとや動きを知る」「世の中のできごとや動きについて信頼できる情報を得る」）ために最もよく利用するメディアとしては、全体平均ではテレビが約 6 割と最も高くなっている。このうち、いち早く時事情報を得るために最もよく利用するメディアとしては、テレビに次いでインターネットが選択されており、20 代と 30 代では、インターネットを選んだ者の割合がテレビを選んだ者の割合を上回っている。その一方で、時事情報であっても信頼できる情報を得るために最もよく利用するメディアとしては、テレビを選んだ者の割合が最も高く、インターネットを選んだ者の割合は年代を問わず相対的に低めであり、いち早く時事情報を得るための情報源としては 3.1%しか最もよく利用されていない新聞がここでは 23.1%と高くなっている。



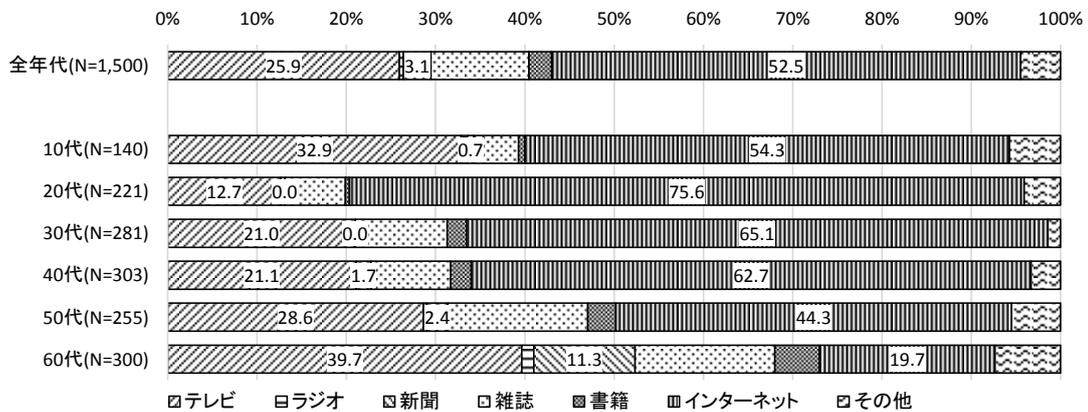
資料出典：総務省情報通信政策研究所
『平成26年 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査』より作成

図3-1. 目的別によるメディアの利用(いち早く世の中のできごとや動きを知る)



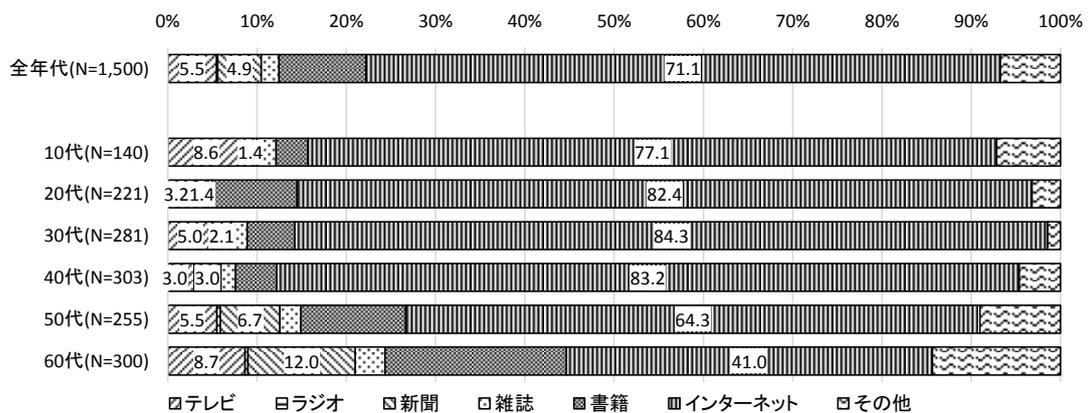
資料出典：総務省情報通信政策研究所
『平成26年 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査』より作成

図3-2. 目的別によるメディアの利用(世の中のできごとや動きについて信頼できる情報を得る)



資料出典：総務省情報通信政策研究所
『平成26年 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査』より作成

図3-3. 目的別によるメディアの利用(趣味・娯楽に関する情報を得る)



資料出典：総務省情報通信政策研究所
『平成26年 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査』より作成

図3-4. 目的別によるメディアの利用(仕事や調べものに役立つ情報を得る)

さらに、趣味・娯楽に関する情報を得るために一番利用するメディアとしては、多くの年代でインターネットがテレビを上回っており、仕事や調べものに役立つ情報を得るために一番利用するメディアとしては、インターネットがすべての年代において圧倒的である。

このように、かつては、世の中の出来事を知るための情報源はテレビやラジオ、新聞や雑誌などに限られていたが、今日では、インターネットが代表的な情報源の一つとなっている。そこで本章では、「インターネットを用いて情報収集を頻繁に行っている人ほど、生活満足度が高くなる」という仮説を立てた。

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 27 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収率は 1224 票、回収率は 61.2% である。

3.2. 変数

本章の分析では「q1_r 生活満足度反転」、「q41_r インターネット重視反転」、「q43_r 情報取り入れ積極的反転」、「q44 1 日で情報収集に費やす時間」、「男性ダミー」、「q54 年齢」、「常勤の勤め人ダミー」、「自営業者ダミー」、「その他職業ダミー」、「初等学歴ダミー」、「中等学歴ダミー」、「高等学歴ダミー」、「q63 世帯収入」の変数を利用し、分析をやすくするために、以下のように変数を操作した。なお、すべての変数において、無回答の場合は欠損値として処理した。

・「q1_r 生活満足度反転」

「q1 生活満足度」の選択肢は「1. 満足」「2. やや満足」「3. どちらともいえない」「4. やや不満」「5. 不満」である。これを反転して、数字が大きい選択肢ほど満足度が高いように「1. 不満」「2. やや不満」「3. どちらともいえない」「4. やや満足」「5. 満足」と書き換えた。

・「q41_r インターネット重視反転」

「q41 情報収集にインターネット上のやりとりを重視するか」の選択肢は「1. 重視する」「2. 少し重視する」「3. あまり重視しない」「4. 重視しない」である。これを反転して、数字が大きい選択肢ほど重視度が高いように「1. 重視しない」「2. あまり重視しない」「3. 少し重視する」「4. 重視する」と書き換えた。

・「q43_r 情報取り入れ積極的反転」

「q43 情報を取り入れることに積極的か」の選択肢は「1. かなり積極的」「2. やや積極的」「3. やや消極的」「4. かなり消極的」である。これを反転して、数字が大きい選択肢ほど積極度が高いように「1. かなり消極的」「2. やや消極的」「3. やや積極的」「4. かなり積極的」と書き換えた。

・「q44 1日で情報収集に費やす時間」

「q44 1日で情報収集に費やす時間」は「_a 紙の新聞・雑誌」、「_b テレビ・ラジオ」、「_c 携帯電話・スマートフォン」、「_d パソコン（インターネット）」に分かれており、すべての変数において選択肢は「1. 全く利用しない」「2. 20分未満」「3. 20以上40分未満」「4. 40分以上1時間未満」「5. 1時間以上2時間未満」「6. 2時間以上」である。

・「男性ダミー」

「q53 性別」の選択肢は「1. 男性」「2. 女性」である。これを「1. 男性」を「1」、「2. 女性」を「0」とする「男性ダミー」を作成した。

・「q54 年齢」

「q54 年齢」の選択肢は「1. 20代」「2. 30代」「3. 40代」「4. 50代」「5. 60代」「6. 70代以上」である。

・「常勤の勤め人ダミー」、「自営業者ダミー」、「その他職業ダミー」

「q55 職業」の選択肢は「1. 常時雇用の勤め人」「2. 臨時雇用、パート、アルバイト」「3. 自営業主」「4. 自営業の家族従業員」「5. 経営者」「6. 家事専業」「7. 学生」「8. 無職」「9. その他」である。この「1. 常時雇用の勤め人」「5. 経営者」を「1」その他を「0」とする「常勤の勤め人ダミー」、「3. 自営業主」「4. 自営業の家族従業員」を「1」その他を「0」とする「自営業者ダミー」、「2. 臨時雇用、パート、アルバイト」「6. 家事専業」「7. 学生」「8. 無職」「9. その他」を「1」その他を「0」とする「その他職業ダミー」を作成した。

・「初等学歴ダミー」、「中等学歴ダミー」、「高等学歴ダミー」

「q57 最終学歴」の選択肢は「1. 中学(旧小学校など)」「2. 高校(または旧制中学など)」「3. 専門学校」「4. 短大・高専(5年制)」「5. 大学(旧高専)・大学院」「6. わからない」である。この「1. 中学(旧小学校など)」「2. 高校(または旧制中学など)」を「1」その他を「0」とする「初等学歴ダミー」、「3. 専門学校」「4. 短大・高専(5年制)」を「1」その他を「0」とする「中等学歴ダミー」、「5. 大学(旧高専)・大学院」を「1」その他を「0」とする「高等学歴ダミー」を作成した。

・「q63 世帯収入」

「q63 世帯収入」の選択肢は「1. 100万円未満」「2. 100万円～200万円未満」「3. 200万円～400万円未満」「4. 400万円～600万円未満」「5. 600万円～800万円未満」「6. 800万円～1000万円未満」「7. 1000万円～1500万円未満」「8. 1500万円以上」「9. わからない」である。

4. 分析

まず、仮説のうち「情報収集を頻繁に行っている人ほど、生活満足度が高くなる」を検討する。表1は「情報を取り入れることに積極的か」と「生活満足度」に関係があるのかどうかを示したクロス表であり、図4はその関係を100%積み上げ横棒で表したグラフである。検定の結果、カイ2乗の値は38.758でCramer Vの値は0.105であり、カイ2乗とCramer

Vの有意確率はどちらも0.001より小さく、カイ2乗検定の結果が0.1%水準で有意なので、情報を取り入れることへの積極度と生活満足度に有意な関係があるといえる。

またこの分析結果から、情報を取り入れることによりかなり積極的と回答した人々の70.6%が現在の生活全体に満足している又はやや満足していると答えたが、情報を取り入れることによりかなり消極的と回答した人々は44.6%しか現在の生活全体に満足している又はやや満足していると答えた人がいないことが分かる。したがって、情報収集を積極的に行っている人ほど、生活満足度が高くなる傾向があるということが分かる。

表1. q43 情報を取り入れることに積極的かと q1 生活満足度 のクロス表

		q1 生活満足度					合計	
		満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	不満		
q43 情報を取り入れる ことに積極的か	かなり積極的	度数	41	65	24	15	5	150
		行パーセント	27.3%	43.3%	16.0%	10.0%	3.3%	100.0%
	やや積極的	度数	99	295	128	66	16	604
		行パーセント	16.4%	48.8%	21.2%	10.9%	2.6%	100.0%
	やや消極的	度数	52	152	87	46	17	354
		行パーセント	14.7%	42.9%	24.6%	13.0%	4.8%	100.0%
	かなり消極的	度数	9	20	16	12	8	65
		行パーセント	13.8%	30.8%	24.6%	18.5%	12.3%	100.0%
合計			201	532	255	139	46	1173
			17.1%	45.4%	21.7%	11.8%	3.9%	100.0%

$\chi^2(df=12, N=1173)=38.758^{***}$, Cramer V=0.105^{***}

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

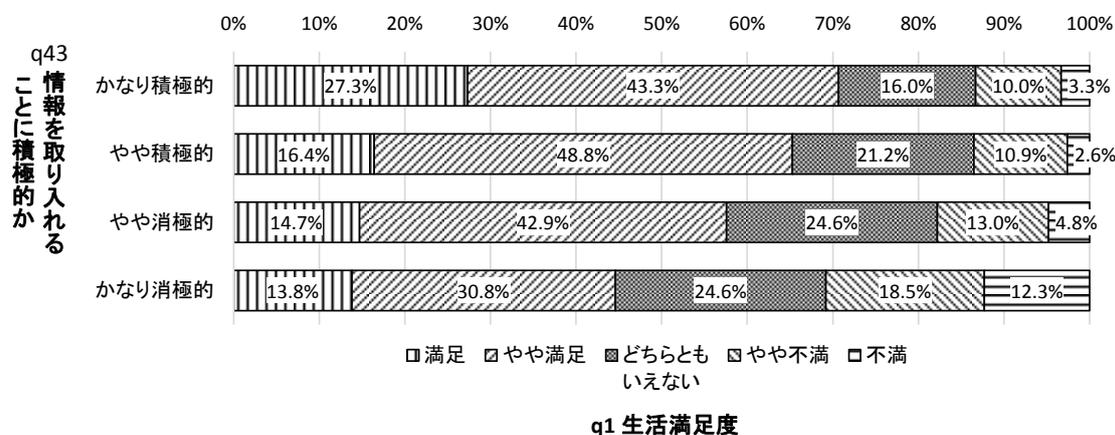


図4. q43情報を取り入れることに積極的かと q1生活満足度の関係

次に、様々な情報源の中でも「インターネットを用いて情報収集を頻繁に行っている人ほど、生活満足度が高くなる」を分析する。表2は「情報収集にインターネット上のやりとりを重視するか」と「生活満足度」に関係があるのかどうかを示したクロス表であり、図5はその関係を100%積み上げ横棒で表したグラフである。検定の結果、カイ2乗の値は35.033でCramer Vの値は0.101であり、カイ2乗とCramer Vの有意確率はどちらも0.001

より小さく、カイ 2 乗検定の結果が 0.1%水準で有意なので、情報収集におけるインターネット上のやりとり重視度と生活満足度に有意な関係があるといえる。

またこの分析結果から、情報収集にインターネット上のやりとりを重視すると回答した人々の 68.6%が現在の生活全体に満足している又はやや満足していると答えたが、情報収集にインターネット上のやりとりを重視しないと回答した人々は 50.0%しか現在の生活全体に満足している又はやや満足していると答えた人がいないことが分かる。したがって、インターネットを用いて情報収集を行っている人ほど、生活満足度が高くなる傾向があるということが分かる。

表2. q41情報収集にインターネット上のやりとりを重視するか と q1生活満足度 のクロス表

		q1 生活満足度					合計	
		満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	不満		
q41 情報収集にインターネット上のやりとりを重視するか	重視する	度数	73	152	52	37	14	328
		行パーセント	22.3%	46.3%	15.9%	11.3%	4.3%	100.0%
	少し	度数	53	191	78	37	11	370
		行パーセント	14.3%	51.6%	21.1%	10.0%	3.0%	100.0%
	あまり重視しない	度数	43	94	56	28	8	229
		行パーセント	18.8%	41.0%	24.5%	12.2%	3.5%	100.0%
重視しない	度数	30	83	62	38	13	226	
	行パーセント	13.3%	36.7%	27.4%	16.8%	5.8%	100.0%	
合計			199	520	248	140	46	1153
			17.3%	45.1%	21.5%	12.1%	4.0%	100.0%

$\chi^2(df=12, N=1153)=35.033^{***}$, Cramer V=0.101^{***}

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

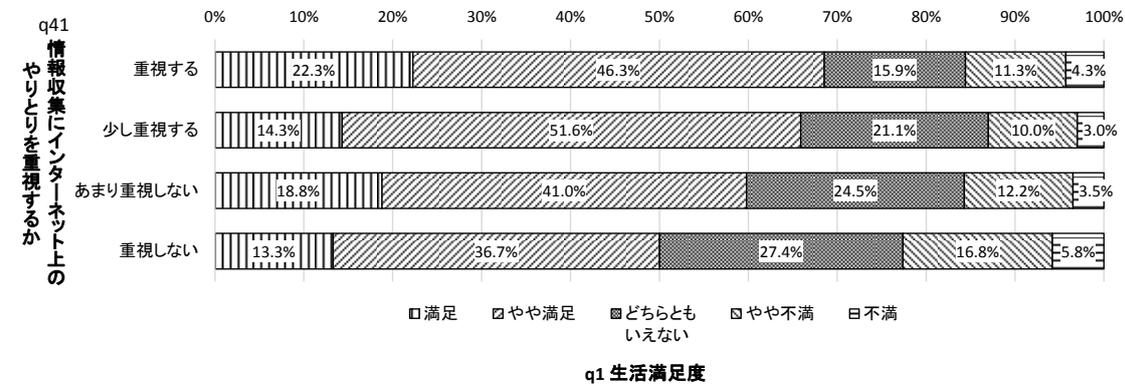


図5. q41情報収集にインターネット上のやりとりを重視するか と q1生活満足度の関係

最後に、インターネットを用いて情報収集をすることによって、どのくらい生活満足度が説明されるかを分析する。表 3 は「生活満足度」が「性別」、「年齢」、「最終学歴」、「職業」、「世帯収入」、「情報収集にインターネット上のやりとりを重視するか」によって、どのくらい正確に予想・説明されるかを示した重回帰分析結果である。

この分析結果で「生活満足度」の分散の 11.2%が説明でき、従属変数に有意に影響を与えている変数は、「男性ダミー」、「年齢」、「中等学歴ダミー」、「高等学歴ダミー」、「世帯収入」、「インターネット重視反転」の 6 個である。これらの内、「年齢」と「高等学歴ダミー」、「世

帯収入」は 0.1%水準で有意であり、「男性ダミー」と「中等学歴ダミー」、「インターネット重視反転」は 5%水準で有意である。

表3. 生活満足度の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	2.086 ***	.189	
男性ダミー	-.159 *	.072	-.077
q54 年齢	.147 ***	.026	.224
中等学歴ダミー	.194 *	.090	.077
高等学歴ダミー	.348 ***	.083	.160
常勤の勤め人ダミー	-.033	.086	-.015
自営業者ダミー	.095	.139	.022
q63 世帯収入	.159 ***	.021	.261
q41_r インターネット重視反転	.082 *	.037	.087
調整済みR ²	.112 ***		
N	936		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

分析結果より、年齢が高くなるほど生活満足度は高くなり、初等学歴の人に比べて中等学歴の人・高等学歴の人は生活満足度が高い。また、世帯収入が高くなるほど生活満足度が高くなり、女性に比べて男性の方が生活満足度は低い。さらに、情報収集にインターネット上のやりとりをより重視する人ほど、生活満足度が高くなることが読み取れる。しかし、有意な独立変数の中で、生活満足度に最も強い影響を与えているのは「世帯収入」(β=0.261)であり、次に強い影響を与えているのは「年齢」(β=0.224)である。したがって、「生活満足度」において、「情報収集にインターネット上のやりとりを重視するか」は、他の変数に比べて、あまり強い影響を与えていないことが分かる。

しかし、50代以下と60代以上に分けて分析を行うと、60代以上では「パソコン（インターネット）を用いた情報収集に費やす時間」が長いほど、「生活満足度」が高くなる傾向がある。表4-1、4-2は「生活満足度」が「紙の新聞・雑誌」、「テレビ・ラジオ」、「携帯電話・スマートフォン」、「パソコン（インターネット）」による情報収集に費やす時間によって、どのくらい正確に予想・説明されるかを示した重回帰分析結果である。

この分析結果で50代以下では、「生活満足度」の分散の1.7%が説明でき、従属変数に有意に影響を与えている変数は、「紙の新聞・雑誌」のみであり、1%水準で有意である。一方60代以上では、「生活満足度」の分散の3.8%が説明でき、従属変数に有意に影響を与えている変数は、「紙の新聞・雑誌」と「パソコン（インターネット）」である。これらのうち、「紙の新聞・雑誌」は5%水準で有意であり、「パソコン（インターネット）」は1%水準で有意である。

表4-1. 50代以下における生活満足度の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	3.053 ***	.173	
q44_a 1日で情報収集に費やす時間 紙の新聞・雑誌	.131 **	.043	.129
q44_b 1日で情報収集に費やす時間 テレビ・ラジオ	.031	.029	.045
q44_c 1日で情報収集に費やす時間 携帯電話・スマートフォン	.000	.026	.000
q44_d 1日で情報収集に費やす時間 パソコン(インターネット)	.023	.025	.038
調整済みR ²	.017 **		
N	613		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

表4-2. 60代以上における生活満足度の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	2.967 ***	.185	
q44_a 1日で情報収集に費やす時間 紙の新聞・雑誌	.084 *	.036	.107
q44_b 1日で情報収集に費やす時間 テレビ・ラジオ	.046	.035	.060
q44_c 1日で情報収集に費やす時間 携帯電話・スマートフォン	.037	.044	.039
q44_d 1日で情報収集に費やす時間 パソコン(インターネット)	.080 **	.029	.126
調整済みR ²	.038 ***		
N	512		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

分析結果より、50代以下では、紙の新聞・雑誌を用いた情報収集に費やす時間が長くなるほど生活満足度は高くなることが読み取れる。一方、60代以上では、紙の新聞・雑誌を用いた情報収集だけではなく、パソコン(インターネット)を用いた情報収集に費やす時間が長くなるほど生活満足度は高くなることも読み取れる。したがって、若年者と高齢者では、情報収集に費やす時間が長いマスメディア媒体の種類によって、生活満足度への影響が変化することが分かる。

5. 考察

分析の結果、仮説である「インターネットを用いて情報収集を頻繁に行っている人ほど、生活満足度が高くなる」は証明された。また、現在、情報収集にインターネット上のやり

とりを重視するかどうかは、生活満足度にあまり強い影響を与えていないが、若年者と高齢者では生活満足度に影響を与えるマスメディア媒体別の使用時間が異なることが明らかになった。この結果より、若年者が紙の新聞・雑誌を利用する人が少ないため、紙の新聞・雑誌を用いた情報収集に費やす時間が長い 50 代以下の人は、他の同世代の人と比べて、より幅広い多くの情報を知ることができ、生活満足度が高いと思われる。また、高齢者はパソコン（インターネット）を利用する人が少ないため、パソコン（インターネット）を用いた情報収集に費やす時間が長い 60 代以上の人は、他の同世代の人と比べて、より幅広い多くの情報を知ることができ、生活満足度が高いと思われる。このように、若年者と高齢者では、インターネット利活用と生活満足度の関係が異なる。

今日、情報通信分野の発展は目覚しく、インターネットの普及に伴い、国民のほとんどが情報通信を利用し、国民生活の利便性を向上させ、社会や経済などの根幹を支えるインフラとしても機能するようになった。ICT 産業は、名目国内生産額の約 1 割を占める我が国最大の産業であり、ICT 産業の実質 GDP 成長への寄与度は一貫してプラスである。また、人口減少下においても、生産活動を活性化させ、地域の経済成長を促すためにも注目されている。

さらに、インフラや防犯・防災・医療・教育といった多様な分野において ICT を活用した新たな街づくりが行われている。例えば、総務省では観光や防災の拠点における来訪者や住民の情報収集等の利便性を高めるための公衆無線 LAN 整備を実施する地方公共団体等へ支援を行う「観光・防災 Wi-Fi ステーション整備事業」を敷衍している。また、最近では、家族や地域の絆の再生としても利用され、携帯電話のメールの送受信や地域 SNS(Social Networking Service)への参加など、我が国の ICT 利用の特徴であるコミュニケーション利用が活発になっている。

しかし、まだまだ環境が整っていないという問題点もある。ICT 先進国中でも日本はブロードバンド整備など基盤に優れ、世界最高水準を維持していると評価されているが、「利活用」や「安心」という面ではまだまだ不十分である。これらを改善し、高齢者においても、安心して使えるように整備することで、国民生活の利便性をさらに向上させ、生活満足度も向上していこう。

6. 文献

- [1] 総務省(2015)『平成 27 年度版 情報通信白書』
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/> (2015 年 7 月 14 日アクセス)
- [2] 総務省(2014)『平成 26 年 通信利用動向調査』
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05.html>
(2015 年 7 月 14 日アクセス)

- [3] 総務省情報通信政策研究所(2014)
『平成 26 年 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査』
<http://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/seika/houkoku-since2011.html>
(2015 年 7 月 14 日アクセス)
- [4] 総務省「ICT 利活用の促進」
http://www.soumu.go.jp/menu_seisaku/ictseisaku/ictriyou/index.html
(2015 年 12 月 22 日アクセス)
- [5] 関西大学総合情報学部(2015)
『平成 26 年度社会調査実習報告書－高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査－』

第 8 章 生活満足度と観光客誘致心理の関係性

木下 雅貴

1. はじめに

観光資源の創出、地域ブランドの確立、テーマパークなどの設備の整備、またはゆるキャラの設置など、近年、全国で地域おこしが活発になってきている。そのような活動を助けるために、地域おこし協力隊という地方公共団体も平成 21 年に総務省によって制度化された。観光客の獲得、人口流出の歯止め、新規住民の獲得など地域おこしには様々な目標が設定されているが、本調査では特に観光に焦点を当てる。そして、観光と人々の意識についての関係性を明らかにする。

じゃらんリサーチセンターの「じゃらん宿泊旅行調査 2014」(p8)によると、訪問した旅行先を選んだ理由別都道府県ランキングの全体平均(2013)はそれぞれ「特定のイベントやアクティビティに興味があったから」30.0%、「テレビや雑誌などで話題になっていたから」20.6%、「特定の観光地・観光スポットに興味があったから」64.4%、「そこならではの食、特産品に興味があったから」39.8%、「良い宿・ホテルがあったから」49.1%、「魅力的な温泉があったから」33.2%であった。この調査によると、観光客がその観光地を選ぶ要因は魅力的な観光資源の有無であると答えた人の割合が一番多い(64.4%)。これより、多くの観光客が訪れる地域は魅力的な観光資源を持つ地域である、と言える。

2. 仮説

地域に愛着をもつためにはその地域での生活に満足している必要があるのではないかと推測される。つまり、「生活満足度が高い人ほど地域に愛着を持っている」という仮説が立つ。また、その地域の観光資源をイメージでき、その地域にもっと観光客を呼び込みたいと思うときはその地域に愛着を持っていると考えられる。つまり、「地域に愛着がある人ほどその地域の観光資源をイメージできる」という仮説が立つ。「1.はじめに」から、自分たちの住んでいる地域に観光客を呼び込みたいときは観光資源を創出することが一番結果に繋がると推測される。つまり、「その地域の観光資源をイメージできる人ほどその地域に観光客を呼び込みたいと思っている」という仮説が立つ。

仮説①「生活満足度が高い人ほど地域に愛着を持っている」

仮説②「地域に愛着がある人ほどその地域の観光資源をイメージできる」

仮説③「その地域の観光資源をイメージできる人ほどその地域に観光客を呼び込みたいと思っている」

この3つの仮説を踏まえ、本調査では高槻市民を対象にし、「生活満足度が高い人ほど高槻市に観光客をもっと呼び込みたいと思っている」という最終的な仮説を立てた。

3. データと変数

3.1. データ

データは平成27年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する20歳以上85歳未満の男女、計画標本サイズは2000、有効回収数は1224票、回収率は61.2%である。

3.2. 変数

今回の分析では「Q1 生活満足度」「Q8 高槻市に愛着を感じるか」「Q22 高槻市に観光客を呼び込みたいか」「Q23 高槻市に地域ブランドがあるか」「Q24 高槻市の歴史文化財に関心があるか」「Q53 性別」「Q54 年齢」「Q57 最終学歴」「Q63 世帯収入」を変数として扱う。重回帰分析では一部変数を以下のように操作して分析を行う。

- ・「Q1 生活満足度」を反転させ、「5. 満足している」、「4. やや満足」、「3. どちらでもない」、「2. やや不満」、「1. 不満」と、数値が大きいほど生活満足度が高くなるように操作した。変数名は「Q1_r 生活満足度反転」。
- ・「Q8 高槻市に愛着を感じるか」を反転させ、「4. 感じる」、「3. やや感じる」、「2. あまり感じない」、「1. 感じない」と、数値が大きいほど高槻市への愛着度が高くなるように操作した。変数名は「Q8_r 愛着度反転」。
- ・「Q22 高槻市に観光客を呼び込みたいか」を反転させ、「5. そう思う」、「4. ややそう思う」、「3. どちらともいえない」、「2. あまりそう思わない」、「1. そう思わない」と、数値が大きいほど高槻市に観光客を呼び込みたい度合が高くなるように操作した。変数名は「Q22_r 観光客を呼び込みたいか反転」。
- ・「Q23 高槻市に地域ブランドがあるか」を反転させ、「5. そう思う」、「4. ややそう思う」、「3. どちらともいえない」、「2. あまりそう思わない」、「1. そう思わない」と、数値が大きいほど高槻市に地域ブランドがあると思う度合が高くなるように操作した。変数名は「Q23_r 地域ブランドがあるか反転」。
- ・「Q24 高槻市の歴史文化財に関心があるか」を反転させ、「5. かなり関心がある」、「4. やや関心がある」、「3. どちらともいえない」、「2. あまり関心がない」、「1. まったく関心がない」と、数値が大きいほど高槻市の歴史文化財への関心度が高くなるように操作した。変数名は「Q24_r 歴史文化財への関心度反転」。
- ・「Q53 性別」の回答項目から「男性(=1)」「女性(=0)」とし、男性を「男性ダミー」とした。

- ・「Q57 最終学歴」の回答項目から「1.中学(旧小学校など)」「2.高校(または旧制中学など)」「3.専門学校」を「1.初等学歴」とした。同様に「4.短大・高専(5年制)」を「2.中等学歴」、「5.大学(旧高専)・大学院」を「3.高等学歴」とした。また、分類した「1.初等学歴」「2.中等学歴」「3.高等学歴」を利用して、「1.初等学歴」を「初等学歴(=1)」、これ以外を「その他(=0)」として初等学歴を「初等学歴ダミー」とした。同様に「2.中等学歴」を「中等学歴(=1)」、これ以外を「その他(=0)」として中等学歴を「中等学歴ダミー」とし、「3.高等学歴」を「高等学歴(=1)」、これ以外を「その他(=0)」として高等学歴を「高等学歴ダミー」とした。
- ・「Q54 年齢」、「Q63 世帯収入」はそのまま使用する。

4. 分析

まず、仮説①「生活満足度が高い人ほど地域に愛着を持っている」の検証を行う。

表1 q8_r愛着度反転の重回帰分析結果

	<i>B</i>	<i>SE</i>	β
(定数)	3.132 ***	.107	
q1_r生活満足度反転	.280 ***	.027	.294
年齢	.004	.007	.018
男性ダミー	-.067	.059	-.034
中等学歴ダミー	.050	.089	.017
高等学歴ダミー	-.237 ***	.064	-.112
世帯収入	-.001	.001	-.035
調整済みR ²	.091 ***		
N	1162		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

表1からわかるように、「q8_r 愛着度反転」に影響を与えている変数は「q1_r 生活満足度反転」「高等学歴ダミー」の2個である。これらはすべて0.1%水準で有意である。さらに、「q8_r 愛着度反転」に最も強い影響を与えているのは「q1_r 生活満足度反転」($\beta=.294$)である。B=.280なので、生活満足度が高い人ほど地域に愛着を持っているといえる。

次に、仮説②「地域に愛着がある人ほどその地域の観光資源をイメージできる」の検証を行う。この仮説は、具体的に仮説②-a「地域に愛着がある人ほど地域ブランドがあると思っている」と仮説②-b「地域に愛着がある人ほど歴史文化財に関心がある」という2つの仮説に分けて考える。

仮説②-a 「地域に愛着がある人ほど地域ブランドがあると思っている」の検証を行う。

表2 q23_r地域ブランドがあるか反転の重回帰分析結果

	<i>B</i>	<i>SE</i>	β
(定数)	1.548 ***	.153	
q8_r愛着度反転	.277 ***	.034	.234
年齢	-.002	.008	-.008
男性ダミー	-.210 **	.071	-.090
中等学歴ダミー	.315 **	.106	.090
高等学歴ダミー	.153 *	.076	.062
世帯収入	.001	.001	.028
調整済みR ²	.073 ***		
N	1150		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

表2からわかるように、「q23_r 地域ブランドがあるか反転」に影響を与えている変数は「q8_r 愛着度反転」「男性ダミー」「中等学歴ダミー」「高等学歴ダミー」の4個である。このうち「q8_r 愛着度反転」は0.1%水準、「男性ダミー」「中等学歴ダミー」は1%水準、「高等学歴ダミー」は5%水準で有意である。さらに、「q23_r 地域ブランドがあるか反転」に最も強い影響を与えているのは「q8_r 愛着度反転」($\beta=.234$)である。 $B=.277$ なので、地域に愛着を持っているほど地域ブランドがあると思っているといえる。

仮説②-b 「地域に愛着がある人ほど歴史文化財に関心がある」の検証を行う。

表3 q24_r歴史文化財への関心度反転の重回帰分析結果

	<i>B</i>	<i>SE</i>	β
(定数)	1.924 ***	.139	
q8_r愛着度反転	.274 ***	.031	.254
年齢	.018 *	.007	.073
男性ダミー	.045	.064	.021
中等学歴ダミー	.276 **	.096	.087
高等学歴ダミー	.240 **	.069	.106
世帯収入	.000	.001	.000
調整済みR ²	.076 ***		
N	1154		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

表3からわかるように、「q24_r 歴史文化財への関心度反転」に影響を与えている変数は「q8_r 愛着度反転」「年齢」「中等学歴ダミー」「高等学歴ダミー」の4個である。このうち「q8_r 愛着度反転」は0.1%水準、「中等学歴ダミー」「高等学歴ダミー」は1%水準、「年齢」は5%水準で有意である。さらに、「q24_r 歴史文化財への関心度反転」に最も強い影響を与

えているのは「q8_r 愛着度反転」($\beta=.254$)である。B=.274 なので、地域に愛着を持っているほど歴史文化財に関心があるといえる。

最後に仮説③「その地域の観光資源をイメージできる人ほどその地域に観光客を呼び込みたいと思っている」の検証を行う。この仮説は、具体的に仮説③-a「地域ブランドがあると思っている人ほどその地域に観光客を呼び込みたいと思っている」と仮説③-b「歴史文化財に関心がある人ほどその地域に観光客を呼び込みたいと思っている」という2つの仮説に分けて考える。

仮説③-a「地域ブランドがあると思っている人ほどその地域に観光客を呼び込みたいと思っている」の検証を行う。

表4 q22_r観光客を呼び込みたいか反転の重回帰分析結果

	B	SE	β
(定数)	2.384 ***	.104	
q23_r地域ブランドがあるか反転	.250 ***	.029	.245
年齢	.011	.008	.041
男性ダミー	-.019	.073	-.008
中等学歴ダミー	-.121	.109	-.034
高等学歴ダミー	-.167 *	.078	-.066
世帯収入	-.001	.001	-.034
調整済みR ²	.061 ***		
N	1152		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

表4からわかるように、「q22_r 観光客を呼び込みたいか反転」に影響を与えている変数は「q23_r 地域ブランドがあるか反転」「高等学歴ダミー」の2個である。このうち「q23_r 地域ブランドがあるか反転」は0.1%水準、「高等学歴ダミー」は5%水準で有意である。さらに、「q22_r 観光客を呼び込みたいか反転」に最も強い影響を与えているのは「q23_r 地域ブランドがあるか反転」($\beta=.245$)である。B=.250 なので、地域にブランドがあると思っているほど観光客を呼び込みたいと思っているといえる。

仮説③-b「歴史文化財に関心がある人ほどその地域に観光客を呼び込みたいと思っている」

表5 q22_r観光客を呼び込みたいか反転の重回帰分析結果2

	<i>B</i>	<i>SE</i>	β
(定数)	2.002 ***	.117	
q24_r歴史文化財への関心度反転	.344 ***	.032	.306
年齢	.005	.008	.017
男性ダミー	-.086	.071	-.036
中等学歴ダミー	-.145	.107	-.041
高等学歴ダミー	-.202 **	.077	-.080
世帯収入	-.001	.001	-.025
調整済みR ²	.095 ***		
N	1154		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

表5からわかるように、「q22_r 観光客を呼び込みたいか反転」に影響を与えている変数は「q24_r 歴史文化財への関心度反転」「高等学歴ダミー」の2個である。このうち「q24_r 歴史文化財への関心度反転」は0.1%水準、「高等学歴ダミー」は1%水準で有意である。さらに、「q22_r 観光客を呼び込みたいか反転」に最も強い影響を与えているのは「q24_r 歴史文化財への関心度反転」($\beta=.306$)である。 $B=.344$ なので、歴史文化財に関心を持っているほど観光客を呼び込みたいと思っているといえる。

5. 考察

仮説①「生活満足度が高い人ほど地域に愛着を持っている」、仮説②「地域に愛着がある人ほどその地域の観光資源をイメージできる」、仮説③「その地域の観光資源をイメージできる人ほどその地域に観光客を呼び込みたいと思っている」の3つの仮説は上の分析で有意であることがわかった。したがって、最終的な仮説「生活満足度が高い人ほど高槻市に観光客をもっと呼び込みたいと思っている」は支持された。また、表1~3の高等学歴ダミーを見たとき、表1でマイナス値を示していることがわかる。これはつまり、高学歴の人は地域ブランドや歴史文化財には関心があり知っているが、地域に愛着はないということがいえる。高学歴の人は自分の地域の知識は持っているが、それが地域への愛着につながっていないということがわかった。

自分の生活に満足しているということは、住んでいる地域への不満が少ないという見方もできるが、高槻市に住んでいる生活満足度が高い住民は、不満が少ないだけではなく、高槻市を他地域に住む人々にアピールできるいい市だと思っているということが本調査でわかった。しかしながら、高学歴の人で顕著であったように、地域ブランドや歴史文化財などを知っていても地域愛着度につながっていないという事例もみられた。今後高槻市を外にPRするだけでなく、地域ブランドや歴史文化財の魅力を高槻市に住んでいる住民に

もきちんとわかってもらう活動をし、地域の人みんなで高槻市をPRすれば、よりいっそう高槻市に観光客が呼び込めるのではないかと推測する。

6. 文献

- [10] 地域おこし協力隊 HP (2015.6.26 閲覧)
<http://www.iju-join.jp/chiikiokoshi/report/>
- [11] 地域おこし協力隊 / 総務省 (2015.6.26 閲覧)
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyousei08_03000066.html
- [12] 株式会社 NTT データ経営研究所 (2015.6.30 閲覧)
<http://www.keieiken.co.jp/aboutus/newsrelease/140708/supplementing01.html>
- [13] 住民のための「観光」とは? (2015.6.30 閲覧)
http://www.geocities.jp/o_fumiyoshi/html/kouenroku/ishikawa.html
- [14] じゃらんリサーチセンター / じゃらん宿泊旅行調査 2014 (2015.6.30 閲覧)
http://jrc.jalan.net/jrc/files/research/jalasyuku_20140725.pdf

第9章 地域への愛着と商店街の関わり

草野 優希

1. はじめに

近年活気にあふれ、人々で賑わっている商店街は少なく、商店街の景況は衰退している印象がある。中小企業庁の「商店街実態調査報告書」によると、現在の商店街が抱える問題として、「経営者の高齢化による後継問題（63.0%）」、「集客力が高い・話題性のある店舗／業種が少ない又は無い（37.8%）」、「店舗等の老朽化（32.8%）」が上位に挙げられている。また、商店街への来街者数も減っていると感じている商店街が多く、その理由としては「魅力ある店舗の減少（55.2%）」、「業種・業態の不足（52.2%）」、「近郊の大型店の進出（50.3%）」、「地域の人口減少（42.1%）」、「駐輪場・駐車場の不足（13.8%）」が上位に挙げられている。その一方で、地域住民のニーズに対応した取り組みや地域の伝統文化の継承、安心・安全などの取り組みを行うために、地域の各団体などとの連携の促進も重要視されている。そこで本調査では、活気にあふれ、魅力的な商店街を取り戻すために必要な地域や地域住民と商店街との関係性を検証していく。

2. 仮説

高橋ら（2014）は、自分を中心とした人間関係と、商店主と自分との特殊な人間関係を期待できる商店街が身近にあるクラスと、それらの機能を有する商店街を身近に有しないクラスに分類した。前者は地域への愛着が最も高く、商店街に対する期待も高いが、後者は消費に関心がなく、地域への愛着も低い層と、消費への関心があり地域愛着もとりわけ低いわけではないが、商店街に気に入ったお店が無い場合普段はコンビニエンスストアやスーパーマーケットを利用している層が見られた。これらの結果より、商店街が魅力的な消費機能を満たすかどうかによって関与が変化すると考察している。また、鈴木ら（2007）は、百貨店や小規模店舗、商店街での店員との会話の頻度は、大規模店舗よりも多く、それ故にその店舗への愛着が高くなり、結果としてそれらの商店街や小規模店舗が存在する地域への愛着が高くなると考察している。これらの知見をふまえ、商店街の利用と地域への愛着との間には何らかの関連があると予想されるため、本章ではそこに焦点を置き、以下の仮説をたてて分析を進めることにした。

仮説：地域に対する愛着が高いほど商店街に行く頻度は高くなる。

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 27 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1224 票、回収率は 61.2%である。

3.2. 変数

今回使用した変数は以下の通りである。

Q8 「高槻市に愛着を感じるか」

- 「1. 感じる」「2. やや感じる」「3. どちらともいえない」「4. あまり感じない」
- 「5. 感じない」

Q8 は下のように反転処理を行い、数値が高くなるほど、高槻市への愛着度が高くなるようにした。

- 「1. 感じない」「2. あまり感じない」「3. どちらともいえない」「4. やや感じる」
- 「5. 感じる」

Q15 「商店街や繁華街に行く頻度」

- 「1. ほぼ毎日」「2. 週に 3~4 日」「3. 週に 1~2 日」「4. 月に 1~2 日」「5. 年に 1~2 日」
- 「6. 行くことがない」

Q15 は下のように反転処理を行い、数値が高くなるほど、商店街や繁華街に行く頻度が高くなるようにした。

- 「1. 行くことがない」「2. 年に 1~2 日」「3. 月に 1~2 日」「4. 週に 1~2 日」
- 「5. 週に 3~4 日」「6. ほぼ毎日」

Q53 「性別」

- 「1. 男性」「2. 女性」

ここで、「男性=1、女性=0」としたダミー変数「男性ダミー」を作成した。

Q54 「年齢」

- 「1. 20 代」「2. 30 代」「3. 40 代」「4. 50 代」「5. 60 代」「6. 70 代以上」

Q55 「職業」

- 「1. 常時雇用の勤め人」「2. 臨時雇用、パート、アルバイト」「3. 自営業主」
- 「4. 自営業の家族従業者」「5. 経営者、役員」「6. 家事専業」「7. 学生」「8. 無職」
- 「9. その他」

ここで、「常時雇用の勤め人、経営者、役員=1、それ以外=0」としたダミー変数「常勤の勤め人ダミー」、「自営業主、自営業の家族従業者=1、それ以外=0」としたダミー変数「自営業者ダミー」、「臨時雇用、パート、アルバイト、家事専業、学生、無職、その他=1、それ以外=0」としたダミー変数「その他職業ダミー」を作成した。

Q57 「最終学歴」

- 「1. 中学（旧小学校など）」「2. 高校（または旧制中学など）」「3. 専門学校」
- 「4. 短大・高専（5年制）」「5. 大学（旧高専）・大学院」「6. わからない」

ここで、「中学、高校、専門学校=1、それ以外=0」としたダミー変数「初等学歴ダミー」、「短大・高専=1、それ以外=0」としたダミー変数「中等学歴ダミー」、「大学・大学院=1、それ以外=0」としたダミー変数「高等学歴ダミー」を作成した。

Q63 「世帯収入」

- 「1. 100万円未満」「2. 100万円～200万円未満」「3. 200万円～400万円未満」
- 「4. 400万円～600万円未満」「5. 600万円～800万円未満」「6. 800万円～1000万円未満」
- 「7. 1000万円～1500万円未満」「8. 1500万円以上」

この変数については、そのまま用いた。

4. 分析

Q15「商店街や繁華街に行く頻度」とQ54「年齢」を含む複数の変数を用いて、重回帰分析を行った。

分析では「商店街や繁華街に行く頻度の反転」を従属変数とし、「高槻市への愛着度反転」「男性ダミー」「常勤の勤め人ダミー」「自営業者ダミー」「中等学歴ダミー」「高等学歴ダミー」「世帯収入」「年齢」を独立変数とした。

表 商店街や繁華街に行く頻度の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	1.196 ***	.226	
男性ダミー	-.273 **	.084	-.114
常勤の勤め人ダミー	-.133	.100	-.052
自営業者ダミー	-.251	.164	-.048
中等学歴ダミー	.138	.102	.047
高等学歴ダミー	.502 ***	.096	.197
q63 世帯収入	.016	.024	.022
q54 年齢	.069 *	.028	.090
高槻市愛着度反転	.219 ***	.038	.179
調整済みR ²	0.67 ***		
N	982		

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, †: $p < .10$

この分析結果から、「商店街や繁華街に行く頻度」の分散の 6.7%を説明できる。また、従属変数に有意に影響を与えている変数は、0.1%水準で有意な「高等学歴ダミー」「高槻市愛着度反転」、1%水準で有意な「男性ダミー」、5%水準で有意な「年齢」の4個である。「常勤の勤め人ダミー」「自営業者ダミー」「中等学歴ダミー」「世帯収入」が有意でない。以上の結果から、次のことが考えられる。

「男性ダミー」が有意であることから、男性に比べて、女性の方が商店街や繁華街に行く頻度は高い傾向があると考えられる。「高等学歴ダミー」が有意であることから、初等学歴の人に比べて、高等学歴の人は商店街や繁華街に行く頻度が高い傾向があると考えられる。「年齢」が有意であることから、年齢が高くなるほど、商店街や繁華街に行く頻度は高くなることがわかる。「高槻市愛着度反転」が有意であることから、高槻市への愛着度が高くなるほど、商店街や繁華街に行く頻度は高くなる傾向があると考えられる。

また、有意な独立変数の中で、商店街や繁華街に行く頻度に最も強い影響を与えているのは「高等学歴ダミー」($\beta = .197$)であることがわかった。

5. 考察

以上の分析より、高槻市に愛着を感じている人ほど商店街や繁華街に行く頻度は高くなり、仮説「地域に対する愛着が高いほど商店街に行く頻度は高くなる」は支持されたといえる。また分析結果より、年齢が高くなるほど商店街に行く頻度が高くなることもわかっている。よって、高齢者間や高齢者と商店街にある店との間に、長い期間かけて人間関係が形成され、その結果、高槻市に愛着を感じ、地域への愛着度と商店街利用頻度の関係に結びついているのではないかと推測できる。これは先行研究の結果にも当てはまり、地域への愛着度は、近隣住民や商店街との人間関係の有無が影響を与えており、また商店街の利用頻度にも影響が及ぶことが考えられる。

ここで、分析結果の別の数値を読み取ると、「高等学歴ダミー」が最も強い影響を与えていることから、「高槻市愛着度反転」より「高等学歴ダミー」の方が大きな影響を与えていることがわかった。また、性別も影響を与えていることもわかった。以上より、商店街に行く頻度が高くなるのは、比較的年齢が高く、高槻市に愛着を感じており、高等教育を受けている女性であることが考察でき、その中でも高等教育を受けているかどうかということが最も重要視されると推測できる。

6. 文献

- 1) 中小企業庁, 2012 年, 「平成 24 年 商店街実態調査」
- 2) 高橋尚也、川上善郎、川浦康至, 2014 年, 「商店街に対する態度と購買意識による類型別にみた地域愛着」『立正大学心理学研究所紀要』第 12 号 : 77-86
- 3) 鈴木春菜、藤井聡, 2007 年「利用店舗への愛着が地域愛着へ及ぼす影響とその規定因に関する研究」『都市計画論文集』42(3) : 13-18

第 10 章 公園に行く頻度と情報収集との関係

多井中 美咲

1. はじめに

平成 28 年度、総務省「平成 26 年通信利用動向調査」によると 13 歳から 59 歳のインターネット普及率は 9 割を超え、情報化社会が進みあらゆるデバイスから情報を得ることが可能になった。それではインターネットの普及に伴い、情報収集行動にどのような変化があったのだろうか。従来、情報源はテレビ、ラジオや新聞などであったが、インターネットが新たなメディアとして加わり、パソコンのウェブサイトからも情報を得られるようになってきた。インターネットの更なる普及により、企業が提供する情報に加えて、ソーシャルメディア等を介した消費者の情報発信が増加し、インターネット上全体の情報量や情報幅が増加している。情報の提供形態の多様化も進み、情報の収集・利用の仕方も大きな変化を遂げている。ただし、インターネットから情報収集する場合、情報の精査、真偽の見極め等の消費者のリテラシーも必要になってきている。

このように情報収集行動そのものが複雑に変化してきたが、情報収集を積極的に行っている利用者に共通の行動はないだろうか。情報を積極的に集めている人は、媒体を用いる以外にも情報を集めるために何か行動をしているのではないかと考えられる。本研究では、情報を積極的に収集している人の共通の行動を調査・分析していく。

2. 仮説

情報を集めるために行動する場所として、公園が挙げられる。2003 年に発表された宇都朋子の「コミュニティの場としての公園利用」によると、公園がコミュニティに果たす役割は場所の提供、出会い、日常の交流であると実証されている。より多くの情報を得る上で他人との交流が一つの重要な手段である。ゆえに情報を積極的に収集している人ほど、公園に行く頻度が高いと考えられる。本研究では、行動範囲を公園に絞り研究を行う。

仮説 情報を積極的に収集している人ほど、公園に行く頻度が高い

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 27 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1224 票、回収率は 61.2%である。

3.2. 変数

今回の分析では「Q43 情報を取り入れることに積極的か」「Q53 性別」「Q54 年齢」「Q55 職業」「Q57 最終学歴」「Q63 世帯収入」「Q13 公園に行く頻度」の7つの変数を利用し、分析のために以下のように変数を操作した。

[従属変数]

Q13 公園に行く頻度

1.ほぼ毎日 2.週に3~4日 3.週に1~2日 4.月に1~2日 5.公園には行かない
(反転していない)

[独立変数]

Q53 性別

「0.女性」「1.男性」になるように「男性ダミー」を作成した。

Q57 最終学歴

「0.初等ダミー」、「1.中等ダミー」、「2.高等ダミー」になるように選択肢 1.中学、2.高校、3.専門学校を「初等ダミー」、選択肢 4.短大・高専を「中等ダミー」、選択肢 5.大学・大学院を「高等ダミー」として作成した。

Q55 職業

「0.常勤の勤めダミー」、「1.無職ダミー」になるように、1.常時雇用の勤め人、2.臨時雇用・パート・アルバイト、3.自営業主、4.自営業の家族従業者、5.経営者・役員を「常勤の勤めダミー」、6.家事専業、7.学生、8.無職、9.その他を「無職ダミー」として作成した。

Q54 年齢

1.20代 2.30代 3.40代 4.50代 5.60代 6.70代以上

Q63 世帯収入

1.100万円未満 2.100万円~200万未満 3.200万円~400万未満
4.400万円~600万未満 5.600万円~800万未満 6.800万円~1000円未満
7.1000万円~1500万未満 8.1500万円以上 9.わからない

Q43 情報を取り入れることに積極的か

1.かなり積極的 2.やや積極的 3.やや消極的 4.かなり消極的
(反転していない)

4. 分析

本研究は「公園に行く頻度」を規定する共通する要因を重回帰分析によって解明することを目的とする。分析結果を表1に示す。

表1 公園へ行く頻度に関する重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	4.558 ***	.177	
中等ダミー	.021	.091	.008
高等ダミー	-.135	.084	-.062
無職ダミー	-.313 ***	.076	-.151
男性ダミー	-.281 ***	.071	-.135
q54 年齢	-.014	.025	-.022
q63 世帯収入	-.003	.017	-.006
q43 情報を取り入れることに積極的か	.056	.045	.040
調整済み決定係数	.037 **		
N	1005		

***:p<.001,**:p<0.01,*:p<0.05

調整済み決定係数は0.037である。これは、従属変数である「公園に行く頻度」の分散のうち3.7%は投入した独立変数で説明されていることを示している。

次に独立変数ごとに結果を読み取る。無職ダミーと、男性ダミーが有意であることがわかる。積極的に情報を取り入れることは公園に行く頻度に対して有意ではないとわかった。さらに、年齢、世帯収入、最終学歴も有意ではないとわかった。その一方、男性ダミー($\beta=-.135$)と無職ダミー($\beta=-.151$)は有意であった。従属変数の「公園に行く頻度」に反転処理を行っていないので、この二つの変数は正の効果を持っていることになる。故に女性よりも男性のほうが公園に行く頻度が多く、常勤よりも無職の人のほうが公園に行く頻度が高いと分かる。

5. 考察

今回の分析により、公園に行く頻度は情報収集の積極性と関係がないことがわかった。ここで影響した変数と影響しなかった変数の違いについて考察する。「無職ダミー」「男性ダミー」は公園に行く頻度に影響を及ぼす。無職ダミー、つまり専業主婦、学生、無職、その他の人たちは働いている人達に比べ、比較的時間に余裕があるため、各々の目的によって公園に行くことがわかる。男性ダミーについては性別による公園の利用の仕方が関係すると考えられる。ここで、有意な結果が得られなかった「年齢」「最終学歴」「世帯収入」は公園に行く頻度には関係がないことがわかった。今回の分析結果により、公園に行くことは情報を積極的に収集する人の共通の行動ではないことがわかった。

ここで、なぜ時間的に余裕がある人たちは公園に行くのか、理由を考察すると無職の場合、人とのつながりを求めて公園に行くのではないかと考えられる。仕事を退職した人は、仕事でできた人間関係のつながりがなくなる一方、時間的にも余裕ができる。そこで求めるものは、時間を有意義に使うための人とのつながりである。近場の公園に行けば、近所の人たちと会うことができ、時間を有意義に使うための目的ができる。無職の人たちは自分の居場所を求めて公園に向かうのではないかと考えられる。そして、性別が公園に行く頻度と関係する理由として、男性のほうがスポーツが好きであることが関係してくると考えられる。平成26年、株式会社ライフメディアによる「スポーツに関する調査」で「あなたは運動・スポーツをすることが好きですか」という質問に対して男性は48.2%、女性は30.2%好きであると答え、男性の方がスポーツをすることが好きであることがわかる。そこで、スポーツをするために利用する場所として公園が考えられる。スポーツをするためには広い場所や砂場が必要であり、手軽に利用することができる点で公園は最適であると考えられる。情報を求めて公園に行くのではなく、自分の居場所を求め、そしてスポーツをするための場所として利用することがわかった。

6. 文献

- [15] 宇都朋子 2003年 「コミュニティの場としての公園利用—利用者間の関わりについて注目しながら—」九州大学大学院人間環境学府 2002年度修士論文
- [16] 総務省「平成26年通信利用動向調査」
- [17] ライフメディアによる「スポーツに関する調査」
http://research.lifemedia.jp/2014/11/141112_sports.html
閲覧日：2016年2月16日

第 11 章 緑を見る量とゆとりの関係

徳田 亜也美

1. はじめに

日本の高度成長期の頃、東京や大阪、名古屋を中心とする大都市圏への人口流入という形で都市化が進展した。消費者庁の「国民生活審議会 総合政策部会調査委員会報告」によると、昭和 45 年の三大都市圏（東京圏、大阪圏、名古屋圏）の人口比率は 43.6%であり 50 年には 45%にまで増加した。しかし昭和 50 年あたりから大都市への人口集中は鎮静化の傾向を示し、それに代わり地方中枢・中核都市及びその周辺市町村において都市化が進むこととなった。これは地域間所得格差の縮小等により鎮静化していったものと考えられる。

都市圏の人口集中が進むにつれ、住みやすい町をつくるため元々森林や農地だった土地の開発が進み、住居や店舗、道路などがつくられてきた。森林、農用地、原野面積は、昭和 47 年には 285 万haあったものが昭和 58 年には 273 万haへとわずかではあるが減少し、対全面積比も 72.9 から 69.4 に低下した。

しかし、EY 総合研究所の「価値観の変化」によると、1980 年(昭和 55 年)頃から人々は物の豊かさより、ゆとりに重きを置いた生活を求めるようになっており、国民の価値観の変化が起こっていることがわかる。このことから、やすらぎや潤いを居住の場に求める風潮が高まってきているといえる。大都市圏においても緑化活動が多くみられるようになり、人々の自然環境に対する欲求が増大している。人々の暮らしには自然が欠かせない。国土交通省の「都市の緑量と心理的効果の相関関係の社会実験調査」によると、人は緑が多い場所、例えば緑視率(視界に入る緑の量の割合)が約 80%にもなると「安らぎのある」「さわやかな」「潤いのある」と感じる人が多いことがわかる。心にゆとりを持たず上でも自然をたくさん見ることが重要だと考えられる。この傾向は高槻市も例外ではないと考えられる。

2. 仮説

「都市の緑量と心理的効果の相関関係の社会実験調査」では、都市の緑には、都市の熱環境を改善する機能があるとともに、人間にとってうるおい感や安らぎ感を向上させるなど、快適性を高める心理的効果があることも指摘されている。さらに、その景色の中に緑が見える量が多くなるにつれ、潤い感、安らぎ感、さわやかさなどの心理的効果が向上するとされている。

都会では電車やバスなどの交通の便がよくなり、何でもほしいものが手に入るなど利便性が高まってきている。物質的に豊かになり、生活にはスピーディさを求め、刺激のある

毎日を送れるようになってきた。その一方、そのスピーディさによって時間が空いた分、そこに仕事を詰め込むなどして、毎日心にゆとりのないまま生活している人も多くいると考えられる。また利便性を向上するために、自然を開拓し、町中に緑を見ることも少なくなってきた。そんな忙しい社会でも緑を見ることで何か心の変化はあるだろうか。生活の中で緑を見る人が多い人ほど、生活に安らぎが与えられ、自分自身の心にゆとりを感じることができると考えられ、「自然や緑をたくさん見る人ほど、日常生活でゆとりを多く感じる」という仮説をたてた。

3. データと変数

3.1. データ

用いたデータは「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」である。この調査は、大阪府高槻市に居住している 20 歳以上の市民が対象であり、調査対象者は無作為に選ばれている。計画サンプル数は 2000 人、有効回収数は 1224 人、有効回収率は 61.2% である。

3.2. 変数

変数は以下の質問項目、および回答を使用した。

本分析で用いる従属変数は以下の通りである。この変数には元の変数に欠損値処理を施したのち反転させている。つまり、数値が高くなるほど、ゆとりを感じるということを表している。

「Q47. 時間的ゆとりを感じるか」 (反転後)

1. まったく持っていない
2. あまり持っていない
3. かなり持っている
4. 十分持っている

次に、従属変数の要因として考えられる、重回帰分析で用いる独立変数は以下の 5 つである。これら全ての変数には欠損値処理を施しており、Q4、Q5 には反転処理を施している。

1) 「Q4. 地域で植物を見かけるか」 (反転後)

1. まったく見かけない
2. あまり見かけない
3. どちらともいえない
4. ときどき見かける
5. よく見かける

2) 「Q5. 地域の自然の量」 (反転後)

1. 少ないと思う
2. やや少ないと思う
3. 普通だと思う
4. やや多いと思う
5. 多いと思う

3) 「Q53. 性別」

本分析では、「1.男性 (=1)」、「2.女性 (=0)」とした、変数「男性ダミー」を用いる。

4) 「Q54. 年齢」

この質問における回答は、「1. 20代」「2. 30代」「3. 40代」「4. 50代」「5. 60代」「6. 70代」の6段階である。

5) 「Q63. 世帯収入」

この質問における回答は、「1. 100万円未満」「2. 100万円～200万円未満」「3. 200万円～400万円未満」「4. 400万円～600万円未満」「5. 600万円～800万円未満」「6. 800万円～1000万円未満」「7. 1000万円～1500万円未満」「8. 1500万円以上」の8段階である。

4. 分析

今回、ゆとりを感じる人は、それぞれの独立変数にどのような影響を与えているのかを見るため、重回帰分析を行った。その結果を表1に示す。

表1 「時間的ゆとりを感じるか」の重回帰分析

	B	標準誤差	β
(定数)	1.430 ***	.162	
q4_r地域で植物を見かけるか反転	.072 †	.037	.070
q5_r地域の自然の量反転	.036	.027	.047
男性ダミー	-.011	.051	-.006
q54 年齢	.236 ***	.017	.415
q63 世帯収入	-.049 **	.016	-.093
調整済みR ²	.221 ***		
N	1157		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

重回帰分析の結果より、調整済み決定係数(R²)が0.221であるため、従属変数の「時間的ゆとりを感じるか」の分散のうち、22%が独立変数によって説明できるということがわかった。また、分散分析でF検定を行うと、有意確立は0.1%水準で有意であることがわかるため、決定係数の値は統計的に有意であり、母集団においても「時間的ゆとりを感じるか」の予測に役立つモデルであることがわかる。

次に従属変数に有意な影響を与えている独立変数を見ていく。分析結果より「地域で植物を見かけるか反転」、「年齢」、「世帯収入」が従属変数に有意な影響を与えていることがわかる。つまり、この3つの変数が「時間的ゆとりを感じるか」に影響を及ぼしているといえる。

まず、「地域で植物を見かけるか反転」の標準化偏回帰係数が正の値($\beta=0.070$)であること

から、緑を見ることが多い人ほどゆとりを感じる傾向があるといえる。この結果から、今回の仮説「自然や緑をたくさん見る人ほど、日常生活でゆとりを多く感じる」は成立したといえる。

次に「年齢」の係数は $\beta=0.415$ であり、正の値であることから、年齢が上がるにつれてゆとりを感じるが多くなるということがいえる。最後に「世帯収入」の係数は $\beta=-0.093$ であり、負の値であることから、世帯収入は低いほうがゆとりを感じるということがいえる。

以上の結果から、緑などの植物をよく見る人かつ高齢者で、世帯収入が低いとされる人がゆとりを感じる傾向にあるといえる。

5. 考察

分析の結果から、「自然や緑をたくさん見る人ほど、日常生活でゆとりを感じる」という仮説は支持された。地域の緑の量は関係なく、植物を「見る」という行動をすることによってゆとりを得ることができる。しかしそれ以上に、ゆとりを感じる度合いは年齢に左右されることがわかった。確かに高齢者になると、退職し働いていた分の時間を自由な時間にあてることができる。その時間で今までにできなかったことや、体を休めることができ、時間を思う存分使うことができるといえる。その点、高齢者は緑を見ても見なくてもゆとりを持っていて考えることもできる。また収入が多いほうが金銭的にゆとりは出るだろうが、生活の面でゆとりを得られるのかと考えると、そうとは考えがたい。高齢者に関しては、退職し、得られる収入が少なくなるため、世帯収入が低い人は必然的に高齢者が多くなってしまう。世帯収入が低い方がゆとりを感じる、というのには高齢者がゆとりを感じるというところに通じていると考えられる。そのためゆとりは高齢者がゆとりを感じやすいという結論になった。

しかし全体のデータを見るとゆとりとの関係は低い。ゆとりを感じる度合いは人によって違うし、ゆとりであるという基準も人によって違う。もっとゆとりと密接に関係しているもの、それは何なのか、またどうすればゆとりを感じるのか他の要因も今後調べていく必要がある。

6. 文献

- [1] 消費者庁 「第10次 国民生活審議会 総合政策部会調査委員会報告 (第4章 NSI 個別指標からみた国民生活)」
(http://www.caa.go.jp/seikatsu/shingikai2/kako/spc10/houkoku_d/spc10-houkoku_d-4_3_4.htm
1#0 2015.12.22 閲覧)

- [2] 国土交通省 都市・地域整備局 公園緑地課緑地環境推進室
「都市の緑量と心理的効果の相関関係の社会実験調査について」(平成 17 年 8 月 12 日)
(http://www.mlit.go.jp/kisha/kisha05/04/040812_3_.html 2015.12.22 閲覧)
- [3] アサヒグループホールディングス、毎週アンケート (9 月 27 日～10 月 3 日実施分)
(<http://www.asahigroup-holdings.com/company/research/hapiken/maian/bn/200610/00154.html>
2015.12.22 閲覧)
- [4] EY 総合研究所株式会社、変化する価値観：シェアの時代、ルレ美華子著
(<http://eyi.eyjapan.jp/knowledge/insight/2014-10-vol02-03.html> 2016 年 1 月 12 日閲覧)

第 12 章 高槻市民における生活満足度と人々の関わり

中尾 真子

1. はじめに

近年、身近な人々との関わりが希薄になりつつあるという報道が度々なされている。これは携帯電話やスマートフォンの普及や、メディアや交通機関の発達が原因と言われている。また、平成 19 年度版内閣府の調査国民生活白書によると近隣住民と望ましいつきあい方についての回答「なにかにつけ相談したり、助け合えるつきあい」と答えた人の割合が、73 年の 34.5%から 03 年は 19.6%と大きく減少している。また、「あったときにあいさつする程度のつきあい」と回答した割合が 15.1%から 25.2%と上昇しており、深い近隣関係を望まない人が増えていることがわかる。

一方で地域貢献は近年企業活動や早稲田大学の新たな入試方法でより注目されているようになっている言葉である。平成 19 年度版国民生活白書によると「住民間すべての間で困ったときに互いに助け合う」が 36.7%、「気の合う住民間で困ったときに助け合う」25.8%、とあわせて 6 割を超えており、困ったときに助け合う関係を望んでいることがわかった。また、人々の社会への貢献意識を見ると「何か社会の役に立ちたい」と考える人が 60%前後で推移しており、どのように貢献したいかと質問したところ「自然・環境保護に関する活動」が 37.9%、「社会福祉に関する活動」が 35.8%、「町内会などの地域活動」が 35.0%と、地域活動を通じて社会に貢献したいと考える人が多かった。今回、高槻市と関西大学で合同アンケートを実施し、高槻市民の方々が実際にどの程度近隣住民と関わり、どのような行動をとっているのかを検証していく。

2. 仮説

平成 19 年度国民生活白書より、人々はそれほど深い人間関係を求めている訳ではないが、困った時には助け合う関係を望んでいることがわかった。また、地域貢献意識は高まっていること、また、地域意識が高まっていることがわかった。これは生活が安定し、心にゆとりができたので生活満足度が上がったとみることができる。次に、生活満足度が上がると地域貢献意識が高くなり、また人と関わる機会も増えると考えられる。そこで、仮説①「生活が安定すると生活満足度も上昇する」、仮説②「生活満足度が上がると地域貢献意識が高くなる」、仮説③「生活満足度が上がると人と関わる機会が増える」を設定し、合わせて大きな仮説「生活が安定するほど生活満足度が高くなる。その結果、地域貢献意識も高くなり、人と関わる機会も増える」を考える。以下では、生活の安定の変数として「暮らしやすさ」、人と関わる機会の変数として「近隣住民と世間話の頻度」「近所づきあいの増減」「ボランティア活動の有無」、地域貢献意識の変数として「買い物袋の有無」「地域のゴ

ミの集団回収の参加」「食料の地産地消」を使用する。

3. データと変数

3.1. データ

高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査（平成 27 年度市民意識調査）を利用する。調査対象者は、無造作に選ばれた、20 歳以上 85 未満の男女の高槻市民である。対象者数 2000 人、有効回収数 1224 人、回収率は 61.2%であった。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。

- ・ q1 は「q1. 現在の生活全体にどのくらい満足していますか。」を反転している。
「1. 不満」「2. やや不満」「3. どちらともいえない」「4. やや満足」「5. 満足」の 5 段階である。
- ・ q2 は「q2 あなたのお住まいの地域は全体的に暮らしやすいと思いませんか」を反転している。「1. 非常に悪い」「2. やや悪い」「3. どちらともいえない」「4. まあよい」「5. 非常によい」の 5 段階である。
- ・ q6 は「q6 あなたは近所の人たちとどの程度世間話をしますか」を反転している。「1. ほとんどない」「2. 月に 1～2 日」「3. 週に 1～2 日」「4. 週に 3～4 日」「5. ほぼ毎日」の 5 段階である。
- ・ q7 は「q7.あなたは今まで以上に近所付き合いを増やしたいですか。それとも減らしたいですか。」を反転している。「1. 減らしたい」「2. 少し減らしたい」「3. どちらともいえない」「4. 少し増やしたい」「5. 増やしたい」の 5 段階である。
- ・ q20 は「q20 あなたは地域のボランティア活動にどれくらい参加していますか」を反転している。「1. 全くない」「2. 数年に 1 回」「3. 1 年に 1～2 回」「4. 半年に 2～3 回」「5. 月に 1 回以上」の 5 段階である。
- ・ q28_a は「q28_a.買い物のとき、レジ袋を断り、自分の買い物袋やかばんを利用する。」を反転している。「1. まったくしない」「2. ときどきする」「3. よくする」「4. いつもする」の 4 段階である。
- ・ q28_b は「q28_b.旬の食材や、地元でとれた食材を購入する。」を反転している。「1. まったくしない」「2. ときどきする」「3. よくする」「4. いつもする」の 4 段階である。
- ・ q28_c は「q28_c.食品トレイ、ペットボトルをスーパー等にある回収ボックスに入れる。」を反転している。「1. まったくしない」「2. ときどきする」「3. よくする」「4. いつもする」の 4 段階である。

・q28_gは「q28.地域の集団回収(新聞・アルミ缶など)に参加する。」を反転している。
「1. まったくしない」「2. ときどきする」「3. よくする」「4. いつもする」の4段階である。

q1(生活満足度)、q6(世間話の頻度)、q7(近所づきあいの増減)、q20(ボランティア活動の有無)はダミー変数を作成している。q1(生活満足度)の回答を「0. 満足」「1. 不満」、q6(世間話)の回答を「0.する」「1.しない」、q7(近所づきあいの増減)「0. 減らす」「1. 増やす」、q20(ボランティア活動)の回答「0. ある」「1. ない」の2段階に変更している。

4. 分析

まず、仮説①に合わせて、q1(生活満足度)とq2(暮らしやすさ)の相関分析を行う。

表1 「生活満足度」と「暮らしやすさ」の相関分析

相関関係		
	q1 生活満足度	q2暮らしやすさ
q1 生活満足度	1	.445**
q2暮らしやすさ	.445**	1

N=1216

***:p<.001, **p<0.1, *:p<.05, †:p<.10

表1より、q1(生活満足度)とq2(暮らしやすさ)は $r=0.445$ より正の相関があった。これより、仮説①「生活が安定すると生活満足度も上昇する」は成立した。

次に、仮説②に合わせて、q1(生活満足度)とq28_a(買い物袋の有無)、q28_b(地産地消)、q28_c(回収ボックスの利用)、q28_g(集団回収への参加)それぞれの相関分析を行う。

表2 「生活満足度」と「買い物袋の有無」の相関分析

相関関係		
	q1 生活満足度	q28_a買い物袋の有無
q1 生活満足度	1	.079**
q28_a買い物袋の有無	.079**	1

N=1192

***:p<.001, **p<0.1, *:p<.05, †:p<.10

表3 「生活満足度」と「地産地消」の相関分析

相関関係		
	q1 生活満足度	q28_b地産地消
q1 生活満足度	1	.110**
q28_b地産地消	.110**	1

N=1192

***:p<.001, **p<0.1, *:p<.05, †:p<.10

表4 「生活満足度」と「回収ボックス」の相関分析

相関関係		
	q1 生活満足度	q28_c回収ボックスの利用
q1 生活満足度	1	.049**
q28_c回収ボックスの利用	.049**	1

N=1192

***:p<.001, **p<0.1, *:p<.05, †:p<.10

表5 「生活満足度」と「集団回収への参加」の相関分析

相関関係		
	q1 生活満足度	q28_g集団回収への参加
q1 生活満足度	1	.075**
q28_g集団回収への参加	.075**	1

N=1193

***:p<.001, **p<0.1, *:p<.05, †:p<.10

表2より、q1(生活満足度)とq28_a(買い物袋の有無)は $r=0.079$ より相関がなかった。

表3より、q1(生活満足度)とq28_b(食料の地産地消)は $r=0.110$ より相関がなかった。

表4より、q1(生活満足度)とq28_c(回収ボックスの利用)は $r=0.049$ より相関がなかった。

表5より、q1(生活満足度)とq28_g(集団回収への参加)は $r=0.075$ より相関がなかった。

以上の結果より全ての相関分析の結果で相関がなかった。よって、仮説②「生活満足度が上がると地域貢献意識が高くなる」は成立しなかった。

最後に、仮説③に合わせて、q1(生活満足度)とq6(世間話の頻度)、q7(近所づきあいの増減)、q20(ボランティア活動の有無)それぞれのクロス表分析を行う。

表6 「生活満足度」と「ボランティア活動の有無」(2値)のクロス表

度数		q1 生活満足度					合計
		どちらとも					
		不満	やや不満	いえない	やや満足	満足	
ボランティア 有無2値	ある	8	25	57	146	63	299
	行パーセント	2.7%	8.4%	19.1%	48.8%	21.1%	100%
	ない	37	115	197	392	142	883
	行パーセント	4.2%	13.0%	22.3%	44.4%	16.1%	100%
合計		45	140	254	538	205	1182

$\chi^2(df=4, N=1182)=10.712^*$, Cramer V=0.095*

***:p<.001, **p<.01, *p<0.05 †:p<.10

表7 「生活満足度」と「近所づき合い」(2値)のクロス表

度数		q1 生活満足度					合計
		どちらとも					
		不満	やや不満	いえない	やや満足	満足	
近所づき 合い2値	増やしたい	5	41	48	163	52	309
	行パーセント	1.6%	13.3%	15.5%	52.8%	16.8%	100%
	減らしたい	42	103	220	382	152	899
	行パーセント	4.7%	11.5%	24.5%	42.5%	16.9%	100%
合計		47	144	268	545	204	1208

$\chi^2(df=4, N=1208)=19.790^{**}$, Cramer V=0.128**

***:p<.001, **p<.01, *p<0.05 †:p<.10

表8 「生活満足度」と「世間話」(2値)のクロス表

度数		q1 生活満足度					合計
		どちらとも					
		不満	やや不満	いえない	やや満足	満足	
世間話2値	する	10	54	100	244	93	501
	行パーセント	2.0%	10.8%	20.0%	48.7%	18.6%	100%
	しない	37	91	169	301	112	710
	行パーセント	5.2%	12.8%	23.8%	42.4%	15.8%	100%
合計		47	145	269	545	205	1211

$\chi^2(df=4, N=1211)=14.742^{**}$, Cramer V=0.110**

***:p<.001, **p<.01, *p<0.05 †:p<.10

表6より、q1(生活満足度)とq20(ボランティア活動の有無)について関連を見たところ、 $\chi^2=10.712^*$, Cramer V=0.095であった。また、有意確率は5%で有意であった。よって、生活

満足度が高くなるほどボランティア活動の経験が多い。

表 7 より、q1(生活満足度)と q7(近所つき合い)について関連を見たところ、 $\chi^2=19.790^{**}$, Cramer V=0.128 であった。また、有意確率は 1% で有意であった。よって、生活満足度が高くなるほど近所つき合いを増やしたい傾向にある。

表 8 より、q1(生活満足度)と q6(世間話)について関連を見たところ、 $\chi^2=14.742^{**}$, Cramer V=0.110 であった。また、有意確率は 1% で有意であった。よって、生活満足度が高くなるほど世間話をする傾向にある。

以上より、仮説③「生活満足度が上がると人と関わる機会が増える」は成立した。

5. 考察

仮説①「生活が安定すると生活満足度も上昇する」と仮説③「生活満足度が上がると人と関わる機会が増える」は成立し、仮説②「生活満足度が上がると地域貢献意識が高くなる」は成立しなかった。これより、生活が安定すると生活満足度は上昇し、人と関わる機会も増えるが、地域貢献意識までは上昇しないことがわかった。人々は、地域に貢献することよりもまず先に近隣住民との関係を充実させていくことで、より生活を安定させることができているのではないだろうか。また、人々は踏み込んだ人間関係ではなく、近所つき合いや世間話など程度の重くない人間関係を築いていることから、あまり深い人間関係ではないが困った時には助け合う関係を望んでいることがわかった。地域貢献活動への参加のきっかけや、それらの活動に割く時間は、不足しているのではないだろうか。近隣住民との関わりを持つ時間を優先した結果、地域貢献にまでは手が回っていないのだと考えられる。

6. 文献

- [1] 富田, 2003, 「携帯電話と人間関係」(成蹊大学文学部現代社会学科門口充徳ゼミ「携帯電話と人間関係と信頼と」演習報告)
<http://www.d4.dion.ne.jp/~mkad/> (2015/11/24 閲覧)
- [2] 内閣府調査 平成 19 年度版 国民生活白書 P.84
<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/> (2015/07/14 閲覧)
- [3] NHK 放送文化研究所「日本人の意識・2008」第 9 問
<https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/yoron/social/pdf/090213.pdf> (2015/07/12 閲覧)
- [4] 小川 憲治 2001 年「IT 時代の人間関係とメンタルヘルス」
https://nagano.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_action_common_download&item_id=397&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1&page_id=13&block_id=17 (2015/11/24 閲覧)

- [5] iran Japanese Radio 2015/01/15 「携帯電話の普及と生活様式の変化」
<http://japanese.irib.ir/component/k2/item/51348-%E6%90%BA%E5%B8%AF%E9%9B%BB%E8%A9%B1%E3%81%AE%E6%99%AE%E5%8F%8A%E3%81%A8%E7%94%9F%E6%B4%BB%E6%A7%98%E5%BC%8F%E3%81%AE%E5%A4%89%E5%8C%96> (2015/11/24 閲覧)
- [6]総務省 平成 22 年情報通信白書 「ICT による地域の絆の再生」
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h22/pdf/m1020000.pdf> (2015/11/24 閲覧)
- [7]牧崎幸夫 「よりよい人間関係を築くためのボランティア活動」
<http://www.cao.go.jp/zeicho/gijiroku/b08kisoa.html> (2015/11/24 閲覧)
- [8] 内閣府政策統括官(防災担当) 内閣府平成 26 年度防災白書第五章 「自助・共助に関する国民意識の高まりと地域コミュニティにおける活動」
http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h26/honbun/0b_5s_02_00.html (2016/01/12 閲覧)
- [9]リセマム 2015/12/10
YAHOO!ニュース 「早大、AO や推薦を拡大・・・地域貢献型人材発掘入試を導入」
<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20151210-00000010-resemom-life>

第13章 地域イベントへの参加頻度と客層

中根 梨恵

1. はじめに

現在、日本各地では地域文化や伝統行事を通じた地域活性化のための様々なイベントが存在する。活性化事業の例として金・三橋(2005)の「過疎農村における文化イベントの地域活性化に果たす役割」によると、新潟県小国町での地域住民が主体となって三日間かけて行われた「もちひとまつり」において、既存の主要イベントとは別に地域の歴史ロマンをテーマに、地域資源を活かし新しいイベントを創造した。このイベントでは三日間を通して地域住民だけでなくマスコミ関係者や他地域の来訪者など多くの観客が訪れた。

私たちが通う関西大学がある高槻市でも、スポーツや音楽など様々な分野でのイベントが開催されている。現在の高槻市の人口は355,287人と前年度から497人減少しており、年々減少傾向にある。そのため高槻市では衰退しつつある地域の活性化とまちづくりを目的としてイベントが開催されている。

それでは、地域のイベントには、どのような人達が参加しているのでしょうか。本章では参加頻度と家族構成の関係について分析を行う。

2. 仮説

大阪市淀川区役所が行った「地域コミュニティに関するアンケート調査」によると、地域の祭りや伝統行事への参加状況において、調査全体の結果は「積極的に参加している」「都合が合えば参加するようにしている」「声をかけてもらったときは参加している」の割合はそれぞれ10.1%、27.5%、5.8%である。その中でも「就学前・小学生・中学生の子どもまたは孫のいる世帯」は「積極的に参加している」16.8%、「都合が合えば参加するようにしている」47.3%、「声をかけてもらったときは参加している」6.2%と、子どもまたは孫がいる世帯は地域の祭りや伝統行事への参加率が高いと考えられる。また、横江・鈴木・鷺見・武田が行った「住環境及びコミュニティ調査」での「子供が地域に愛着を持てるように地域の伝統行事に参加するなど、まず自身が努力しているか」という質問でも「はい」と答えた人が70%であった。以上のことを踏まえて、高槻市で行われるイベントへの世帯構成別参加頻度を調べるために、以下の仮説を立てる。

仮説：子供がいる家庭はイベントへの参加頻度が高くなる

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 27 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1224 票、回収率は 61.2%である。

3.2. 変数

今回の分析では以下の変数を用いた。

- Q21_a 高槻シティハーフマラソンへの参加頻度
- Q21_b 高槻まつりへの参加頻度
- Q21_c 高槻ジャズストリートへの参加頻度
- Q21_d 関西大学の行事（講演会や学園祭など）への参加頻度

尚、Q21_a～Q21_dについては下の通り反転処理を行っている。つまり、数値が高くなるほど、参加頻度が高くなることを表している。

1:参加したことがない 2:1 回だけ参加した
3:時々参加している 4:毎年参加している

- Q52 末っ子の年齢

1:6 歳未満 2:6 歳以上 12 歳未満 3:12 歳以上 15 歳未満
4:15 歳以上 18 歳未満 5:18 歳以上 6:子供はいない

ここで「1, 2=小学生以下ダミー」「3, 4=中高生ダミー」「5=18 歳以上ダミー」

「6=子供なしダミー」というダミー変数を作成した。子供なしダミーを 0、それ以外のダミー変数を 1 とする。

- Q53 性別

1:男性 2:女性

これらは名義尺度であるので、重回帰分析で用いる際には「1:男性」「0:女性」の「男性ダミー」として投入した。

- Q54 年齢

1:20 代 2:30 代 3:40 代 4:50 代 5:60 代 6:70 代以上

- Q63 世帯収入

1:100 万円未満 2:100 万円～200 万円未満 3:200 万円～400 万円未満
4:400 万円～600 万円未満 5:600 万円～800 万円未満 6:800 万円～1000 万円未満
7:1000 万円～1500 万円未満 8:1500 万円以上

・ Q55 職業

1:常時雇用の勤め人 2:臨時雇用、パート、アルバイト 3:自営業主
 4:自営業の家族従業者 5:経営者、役員 6:家事専業 7:学生 8:無職 9:その他
 「1, 5=常勤勤め人ダミー」「3, 4=自営業者ダミー」「2, 6, 7, 8, 9=その他職業ダミー」というダミー変数を作成した。その他職業ダミーを0、それ以外のダミー変数を1とする。

・ Q57 最終学歴

1: 中学（旧小学校など） 2: 高校（または旧制中学） 3: 専門学校
 4: 短大・高専（5年制） 5: 大学（旧高専）・大学院
 ここで「1,2=初等学歴ダミー」「3,4=中等学歴ダミー」「5=高等学歴ダミー」の3つのダミー変数を作成する。初等学歴ダミーを0、それ以外のダミー変数を1とする。

4. 分析

今回の分析では、従属変数に「高槻シティハーフマラソンへの参加頻度」「高槻まつりへの参加頻度」「高槻ジャズストリートへの参加頻度」「関西大学の行事への参加頻度」をそれぞれ投入し、独立変数に「年齢」「男性ダミー」「世帯収入」「中等学歴ダミー」「高等学歴ダミー」「常勤の勤め人ダミー」「自営業者ダミー」「小学生未満」「中高生」「18歳以上」を投入した。

表1 「高槻シティハーフマラソンへの参加頻度反転」の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	.978 ***	.068	
年齢	.011	.014	.043
男性ダミー	.045	.030	.054
世帯収入	-.004	.007	-.020
中等学歴ダミー	.046	.037	.045
高等学歴ダミー	.033	.034	.038
常勤の勤め人ダミー	.040	.035	.045
自営業者ダミー	.022	.059	.012
小学生以下ダミー	.070	.043	.064
中高生ダミー	.074	.059	.045
18歳以上ダミー	.012	.047	.015
調整済決定係数	.002		
N	977		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

表1は従属変数に「高槻シティハーフマラソンへの参加頻度反転」を投入したものであり、調整済み決定係数が0.002であるが有意ではない。そのため、それぞれの独立変数は高槻シティハーフマラソンに影響を与えているとは言えない。

表2 「高槻まつりへの参加頻度反転」の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	2.194 ***	.162	
年齢	-.111 **	.034	-.171
男性ダミー	-.032	.072	-.015
世帯収入	.020	.017	.038
中等学歴ダミー	.202 *	.088	.080
高等学歴ダミー	.058	.081	.026
常勤の勤め人ダミー	.018	.083	.008
自営業者ダミー	.017	.141	.004
小学生以下ダミー	.579 ***	.103	.211
中高生ダミー	.545 ***	.141	.133
18歳以上ダミー	.222 *	.111	.106
調整済決定係数	.092 ***		
N	986		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

表2の分析結果より、調整済み決定係数が0.092であることから、従属変数「高槻まつりへの参加頻度反転」の分散のうち、9.2%が投入した独立変数により説明できる。分散分析でF検定を行うと、有意確率0.1%水準で有意であり、母集団においても「高槻まつりへの参加頻度」の予測に役立つモデルであることを示している。

「小学生未満ダミー」「中高生ダミー」がそれぞれ0.1%水準、「18歳以上ダミー」が5%水準と有意であることから、子供がいない家庭に比べて、子供がいる家庭の方が参加頻度は高いことがわかる。さらに、小学生未満ダミー($\beta=0.211$)、中高生ダミー($\beta=0.133$)、18歳以上ダミー($\beta=0.106$)であることから、子供の年齢が低い家庭の方が参加頻度は高くなる。

「中等学歴ダミー」は5%水準で有意で $\beta=0.080$ 、「年齢」は5%水準で有意であり $\beta=-0.171$ と負の影響を与えているため、年齢が低い人ほど参加頻度は高くなる。

表3 「高槻ジャズストリートへの参加頻度反転」の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	1.3 ***	.155	
年齢	.046	.033	.077
男性ダミー	-.005	.069	-.003
世帯収入	.001	.017	.002
中等学歴ダミー	.148 †	.084	.064
高等学歴ダミー	.251 **	.078	.125
常勤の勤め人ダミー	-.004	.079	-.002
自営業者ダミー	-.109	.135	-.026
小学生以下ダミー	.125	.099	.050
中高生ダミー	.191	.134	.051
18歳以上ダミー	.032	.107	.017
調整済決定係数	.007 †		
N	988		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

表3の分析結果より、調整済み決定係数が0.007であることから、従属変数「高槻ジャズストリートへの参加頻度反転」の分散のうち、0.7%が投入した独立変数により説明できる。分散分析でF検定を行うと、有意確率10%水準で有意であり、母集団においても「高槻ジャズストリートへの参加頻度」の予測に役立つモデルであることを示している。

「中等学歴ダミー」は10%水準、「高等学歴ダミー」は1%水準で有意であり、「高槻ジャズストリートへの参加頻度」に正の影響を与えている。また「高等学歴ダミー」は $\beta=0.125$ と数値が極めて高いため、高槻ジャズストリートの参加者の中には、大学や大学院を卒業している人が多いと考えられる。

表4 「関西大学の行事への参加頻度反転」の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	.938 ***	.076	
年齢	.014	.016	.047
男性ダミー	.051	.034	.054
世帯収入	.026 **	.008	.110
中等学歴ダミー	.095 *	.041	.082
高等学歴ダミー	.085 *	.038	.085
常勤の勤め人ダミー	-.057	.039	-.057
自営業者ダミー	-.089	.067	-.043
小学生以下ダミー	.003	.049	.002
中高生ダミー	.076	.066	.041
18歳以上ダミー	-.017	.052	-.017
調整済決定係数	.018 **		
N	992		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

表 4 の分析結果より、調整済み決定係数が 0.018 であることから、従属変数「関西大学の行事への参加頻度反転」の分散のうち、1.8%が投入した独立変数により説明できる。分散分析で F 検定を行うと、有意確率 5%水準で有意であり、母集団においても「関西大学の行事への参加頻度」の予測に役立つモデルであることを示している。

「世帯収入」は 5%水準、「中等学歴ダミー」「高等学歴ダミー」は 10%水準でそれぞれ関西大学の行事への参加頻度に正の影響を与えている。その中でも世帯収入は $\beta=0.110$ と最も高い値であるので、世帯収入が高い人ほど関西大学の行事に参加する回数が多いことがわかる。

5. 考察

以上の分析結果より、子供がいる家庭はイベントへの参加頻度が高くなるという仮説は開催されるイベントの種類によっては支持されるということがわかった。

その上で、次に仮説にも関係する、子供がいる家庭の中での差異について説明する。末っ子の年齢を 4 つに分類した変数は高槻まつりには効果があったが、それ以外のイベントには効果がなかった。これは、高槻まつりなどの縁日には幼い子供も参加しやすいが、ジャズや大学の行事では子供はあまり楽しめないからだと考えられる。さらに高槻まつりの中でも、小学生未満、中高生、18 歳以上と参加頻度は少なくなることから、子供がある程度成長したら親とは参加せず、友達や恋人と参加するようになるからだと考えられる。

また、高槻シティハースマラソン以外のイベントへの参加頻度で、それぞれに「最終学歴」の効果がみられる。このようにイベントによって効果が違うのは、そのジャンルによってイベントの対象者の年齢層が異なっているからだと解釈する。

以上のことから、子供がいる家庭のイベントへの参加頻度は、子供の年齢とイベントのジャンルによって変化することがわかった。子供が幼いときは親や祖父母など家族が連れて行くことが多いが、中高生以上になると家族と参加する回数が減少する。そしてジャンルによっては子供は楽しめないという点から、仮説「子供がいる家庭はイベントへの参加頻度が高くなる」はイベントのジャンルによって支持されるかどうか異なっていた。

6. 文献

- [1] 金俊豪,三橋信夫(2003)「過疎農村における文化イベントの地域活性化に果たす役割:新潟県小国町における事例分析(農村計画)」日本建築学会関東支部研究報告集 II, 73, pp.197-200
- [2] 横江直樹・鈴木雅視・鷺見菜摘・武田美恵(2014)「地区・伝統行事が果たす地域コミュニティ形成の可能性:日進市米野木駅前及び長久手市長湫南部土地区画整理事業地区を事例として(5. 都市計画)」日本建築学会東海支部研究報告集, 52, pp.653-656
- [3] 大阪市淀川区役所 平成 21 年度「地域コミュニティに関するアンケート調査」 pp.41-42
<http://www.city.osaka.lg.jp/yodogawa/page/0000025132.html>

[4] 高槻市における人口動態の現況(平成 16 年度～平成 25 年度)

<http://www.city.takatsuki.osaka.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/9/jinkoudoutai%28H16-H25%29.3.pdf>

第 14 章 生活満足度と世帯人数の関連性

西野 満音

1. はじめに

「一人の方が楽だ」という言葉を耳にしたことはないだろうか。平成 25 年度の厚生労働白書によると、近年、人々の結婚に対する考えが変化してきていることがわかる。昭和期（1984 年の調査）では、「結婚することで一人前になる」という考えを持つ人が 6 割を占めていたのに対し、近年（1992~2009 年の調査）は「必ずしも結婚する必要はない」という考えに賛成する人が増加している。また、サンケイリビング新聞社のアンケート調査（2013）では、93%の主婦が「たまには一人になりたい」と回答しており、SUUMO 結婚生活調査（2015）では約半数の既婚者男性が「週 1~2 回は一人になりたい」と回答しているなど、近年では個人の自由を求める傾向が強まっているといえるだろう。

さらに、生活トレンド研究所が行った『20~40 代の恋愛・結婚・家庭観に関するアンケート』（2015）では、30 代独身・既婚女性それぞれの約半数が「子どもは欲しくない」と回答していることが明らかになった。女性だけでなく、3 割以上の 30 代独身男性も同じ回答をしている。これらの事実より、世帯人数が生活満足度に影響を及ぼすのではないかと考えられる。

本研究では、各世帯の人数に着目し、世帯人数の増減によって個人の生活満足度に差が見られるかどうかを調査・分析していく。

2. 仮説

小室（2011）は、一人暮らしであると生活満足度は高くなると述べているが、今現在においてもこの結果に変化はないのだろうか。

そこで、本研究では自由であることに重きを置く考え方に焦点を当て、世帯人数が現代社会における人々の生活満足度にどのような影響を与えるかを分析する。そのための足がかりとして、以下の仮説を設定する。

[仮説] 世帯人数が少ないほど、生活満足度が高い。

3. データと変数

3.1. データ

この分析のデータとして、平成 27 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1224 票、回収率は 61.2%となった。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。本分析では、すべての変数において欠損値処理を施している。

【従属変数】

1) q1. 生活満足度

クロス表分析では生活満足度のコードが3つになるように操作している。「1. 満足、2. やや満足 (=2. 満足)」、「3. どちらともいえない (=1. どちらともいえない)」、「4. やや不満、5. 不満 (=0. 不満)」と置いた。

重回帰分析では数値が大きくなるほど生活満足度が上がるようにコードの反転をしている。反転後のコードは「1. 不満」「2. やや不満」「3. どちらともいえない」「4. やや満足」「5. 満足」である。

【独立変数】

1) q51. 婚姻状況

変数「既婚ダミー」「離死別ダミー」「未婚ダミー」を用いる。

既婚ダミーは、「1. 既婚（配偶者あり） (=1)」、それ以外の回答を「0」と置いた。

離死別ダミーは、「2. 既婚（離別・死別） (=1)」、それ以外の回答を「0」と置いた。

未婚ダミーは、「3. 未婚 (=1)」、それ以外の回答を「0」と置いた。

2) q53. 性別

本分析では、「1. 男性 (=1)」、「2. 女性 (=0)」とした、変数「男性ダミー」を用いる。

3) q54. 年齢

この質問における回答は、「1. 20代」「2. 30代」「3. 40代」「4. 50代」「5. 60代」「6. 70代以上」の6段階である。

4) q55. 職業

変数「常勤の勤め人ダミー」「自営業ダミー」「その他職業ダミー」を用いる。

常勤の勤め人ダミーは、「1. 常時雇用の勤め人、5. 経営者、役員 (=1)」、それ以外の回答を「0」と置いた。

自営業ダミーは、「3. 自営業主、4. 自営業の家族従業者 (=1)」、それ以外の回答を「0」と置いた。

その他職業ダミーは、「2. 臨時雇用・パート・アルバイト、6. 家事専業、7. 学生、8. 無職、9. その他 (=1)」、それ以外の回答を「0」と置いた。

5) q57. 最終学歴

変数「初等学歴ダミー」「中等学歴ダミー」「高等学歴ダミー」を用いる。

初等学歴ダミーは、「1. 中学（旧小学校など）、2. 高校（または旧制中学など）、3. 専門学校（=1）」、それ以外の回答を「0」と置いた。

中等学歴ダミーは、「4. 短大・高専（5年制）（=1）」、それ以外の回答を「0」と置いた。

高等学歴ダミーは、「5. 大学（旧高専）・大学院（=1）」、それ以外の回答を「0」と置いた。

6) q62. 世帯人数

世帯人数のコードが3つになるように操作している。世帯人数が1人の場合を「0. 1人」、2～4人の場合を「1. 2人以上5人未満」、5人以上の場合を「2. 5人以上」と置いた。

7) q63. 世帯収入

この質問における回答は、「1. 100万円未満」「2. 100万円～200万円未満」「3. 200万円～400万円未満」「4. 400万円～600万円未満」「5. 600万円～800万円未満」「6. 800万円～1000万円未満」「7. 1000万円～1500万円未満」「8. 1500万円以上」の8段階である。

4. 分析

4.1 世帯人数による生活満足度の変化について

まず、世帯人数と生活満足度の関係性を明らかにするため、クロス表分析を行う。分析結果は表1である。

表1 世帯人数と生活満足度のクロス表

		生活満足度			合計	
		満足	どちらとも いえない	不満		
1人	度数	66	32	18	116	
	行パーセント	56.9%	27.6%	15.5%	100.0%	
世帯 人数	2人以上	度数	596	211	146	953
	5人未満	行パーセント	62.5%	22.1%	15.3%	100.0%
5人以上	度数	70	15	23	108	
	行パーセント	64.8%	13.9%	21.3%	100.0%	
合計		732	258	187	1177	
		62.2%	21.9%	15.9%	100.0%	

$\chi^2(df=4, N=1177)=7.923$, Cramer V= .057

***: $p<.001$, **: $p<.01$, *: $p<.05$, †: $p<.10$

検定の結果、カイ 2 乗の値は 7.923 で Cramer の V の値は 0.057 であった。これは統計的に有意とは言えない結果である。また、Cramer の V の値の低さからも、世帯人数と生活満足度の間には明確な関連性が見られないとわかる。

4.2 変数同士の相互影響を考慮した分析

4.1 の分析結果から、「世帯人数」という 1 つの変数が生活満足度に及ぼす影響は大きくないとわかった。これを踏まえて、「世帯人数」に加えて複数の変数を用い、生活満足度との相互作用を検証する。例えば変数「婚姻状況」を考慮した場合、同じ一人暮らしでも、自ら望んで一人で暮らしている場合と、離婚や死別の結果一人で暮らしている場合では状況が全く異なる。このように、「世帯人数」以外の要素が加わることで、この変数が実際に生活満足度に与える影響を具体的に分析できるのではないかと考えられる。このことを検証するため、以下の重回帰分析を行った。

まずは、重回帰分析において基本的な 5 つの変数と生活満足度との関連を見る。分析結果は以下の表 2 に示す。分析に用いた従属変数は「生活満足度反転」であり、独立変数は「年齢」、「性別（男性ダミー）」、「学歴（中等学歴ダミー、高等学歴ダミー）」、「職業（常勤の勤め人ダミー、自営業ダミー）」、「収入」である。

表2 生活満足度の重回帰分析結果

	B		SE	β
(定数)	.593	***	.106	
年齢	.093	***	.017	.194
男性ダミー	-.123	*	.051	-.082
中等学歴ダミー	.153	*	.063	.083
高等学歴ダミー	.281	***	.059	.175
常勤の勤め人ダミー	.014		.061	.009
自営業者ダミー	.049		.101	.015
世帯収入	.11	***	.015	.247
調整済みR ²	.096	***		
N	993			

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, †: $p < .10$

この重回帰分析では、自由度調整済み決定係数 (R²) が 0.96 であることから、従属変数である「生活満足度」の分散のうち 9.6% が投入した独立変数で説明されていることがわかる。また分散分析で F 検定を行うと 0.1% 水準で有意であるため、それぞれの変数が生活満

足度に及ぼす影響の予測に役立つモデルであることがわかる。

分析の結果、「年齢」、「高等学歴ダミー」、「世帯収入」は0.1%水準で有意であり、「男性ダミー」、「中等学歴ダミー」は5%水準で有意となった。

ここで、独立変数として新たに「世帯人数」と「婚姻状況（未婚ダミー、離死別ダミー）」を投入して、分析結果に差異が見られるかを検証する。この重回帰分析の結果は表3に示す。

表3 生活満足度の重回帰分析結果

	B		SE	β
(定数)	.782	***	.143	
年齢	.087	***	.02	.183
男性ダミー	-.121	*	.053	-.08
中等学歴ダミー	.162	*	.064	.088
高等学歴ダミー	.277	***	.059	.173
常勤の勤め人ダミー	.002		.062	.001
自営業者ダミー	.049		.102	.015
世帯収入	.111	***	.016	.249
世帯人数	-.145	*	.062	-.082
未婚ダミー	-.072		.083	-.031
離死別ダミー	-.157	*	.077	-.071
調整済みR ²	.101	***		
N	974			

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, †: $p < .10$

この重回帰分析では、自由度調整済み決定係数（R²）が0.101であることから、従属変数である「生活満足度」の分散のうち10.1%が投入した独立変数で説明されていることがわかる。表2に比べて分散を説明できる割合が増えていることから、新たに投入した2つの変数は「生活満足度」に少なからず影響しているといえる。また分散分析でF検定を行うと0.1%水準で有意であるため、それぞれの変数が生活満足度に及ぼす影響の予測に役立つモデルであることがわかる。

表2の分析結果に加えて、新たに変数「世帯人数」「離死別ダミー」が統計的に5%水準で有意となった。「世帯人数」のベータの値は負の数となっていることから、値が大きければ生活満足度が低くなり、逆に値が小さければ生活満足度が高くなることを示している。これは第2節で設定した仮説を支持する結果である。

また、有意確率に影響するほどではないものの、新たに加えた変数によって既存の独立変数の B やベータの値に変化が見られる。表 2 の分析結果に比べて、「年齢」や「高等学歴ダミー」、「常勤の勤め人ダミー」の B の値は低くなっていることから、「世帯人数」を考慮することで、これら 3 つの変数の影響は小さくなっていることがわかる。

さらに、「離死別ダミー」の分析結果に着目すると、ベータの値が負の数となっているため、既婚者に比べて離婚や死別を経験している人は生活満足度が低くなることがわかる。これは一見すると、「世帯人数が少ないほど生活満足度は高くなる」という仮説と相反する結果を示している。

5. 考察

クロス表分析の結果、世帯人数と生活満足度の間に直接的な関連は見られなかったが、重回帰分析の結果を見ると、他の変数との相互作用によって、世帯人数も生活満足度に影響を及ぼすことがわかった。他の変数に比べれば小さな影響だが、確かに世帯人数が少なくなると生活満足度は高くなるという、小室の先行研究と同様の結果になった。しかし婚姻状況に関する分析結果も加味すると、世帯人数が少なくなる要因であるにも関わらず、離婚や死別を経験した場合における生活満足度は低くなる。このことから、婚姻関係の破綻は生活満足度に悪影響を与え得ると言える。よって単に世帯人数を少なくすることで、高い生活満足度が得られるのではなく、条件として自ら望んでその環境に身を置いている必要があると推察される。

本分析において注目すべきは、人々の生活満足度は複数の要素が影響し合うことで決定されているということである。決して、一人暮らしの人の方が幸せだなどという単純な話ではなく、一人で暮らすことになった理由や周囲の環境などの様々な要因が絡み合うことで、「一人であること」に対して「自由」を感じる人もいれば「孤独」を覚える人もいるのだろう。また、人々が生活を多面的にとらえているということから、生活のどこに重きを置いているかによっても生活満足度は異なると推測される。分析結果からいえば、高槻市の人々は少ない世帯人数でも高い生活満足度を感じているため、自由を重んじるといった近代の個人主義的傾向があると言える。これに対し、婚姻関係の破綻による生活満足度の低下は、介護や収入などの将来的な生活に対する不安から来るものではないかと考えられる。日新税理士事務所の経営情報レポート（2012）によると、日本における高齢者介護の担い手は大半がその高齢者の家族である。介護ヘルパーを雇うにも介護サービスを利用するにも金銭が必要になる以上、収入を年金に頼り、身近に頼れる人もいない状況では生活に対し不安を覚えるのも必然である。「本来ならば、配偶者とともに力を合わせて暮らしていたはず」といった婚姻関係の破綻が起きなかった状況を想像することで不満が助長されているとも考えられる。

上記のような不安を取り除くためにも、近隣住民との交流や助け合いが必要不可欠である。「お隣さん」という間柄であれば世帯人数を増やすわけではないため個人の自由は浸食

されず、かつ困った時に助け合うことができる。そういった相手を見つけるためにもある程度地域交流には参加しておくべきである。官庁通信社（2015）のニュース記事では、首都圏に暮らす20歳以上の独身のうち約4分の1が「隣人の顔を知らない」と回答しており、さらに「トラブルが起きたとき周囲に頼れる人がいない」と答えた人は6割を超えている。個人主義的傾向が強まるあまり、無縁社会とまで称される現代社会において、今後積極的に取り組むべき課題として、希薄化した近隣関係の改善を提案する。

今回の分析においては、調査対象者を20歳以上85歳未満の男女から無作為に抽出しているが、仮説の段階で参照したデータや分析結果は比較的若年層、高くても中年層を対象としたものが多かった。そのため、さらに正確な分析結果を得るためには、同様の分析を年代別、特に若年層と高齢層との比較として行う必要があると考えられる。

6. 文献

- [1] 厚生労働省 『厚生労働白書』 p.60 2013（2015.7.14 閲覧）
<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/dl/1-02-2.pdf>
- [2] サンケイリビング新聞社 『自由時間についてのアンケート』
2013（2015.7.14 閲覧）
<http://news.mynavi.jp/news/2013/05/23/033/>
- [3] SUUMO 『SUUMO 結婚生活調査』 2015（2015.7.14 閲覧）
<http://suumo.jp/journal/2015/06/12/91862/>
- [4] 生活トレンド研究所 『20~40代の恋愛・結婚・家庭観に関するアンケート』 2015
（2015.7.14 閲覧）
<http://venustap.jp/archives/1231631>
- [5] 小室奈緒 『文教大学情報学部 社会調査Ⅲ 研究報告 生活環境と生活意識の調査報告』 p20 2011（2015.7.14 閲覧）
<http://www.bunkyo.ac.jp/~mediares/2011/sya3/059komuro.pdf>
- [6] 日新税理士事務所 『高齢者ケアの将来とは 慢性期医療の課題と今後の展望』 2012
（2016.2.6 閲覧）
<http://www.ns-1.biz/report/i-201301.pdf>
- [7] 介護のニュースサイト JOINT 官庁通信社 『無縁社会に関する実態調査』 2015
（2016.2.6 閲覧）
<http://www.joint-kaigo.com/social/pg1423.html>

第 15 章 水をよく使う人の特徴

尾藤 俊輔

1. はじめに

地球は水の惑星といわれている。しかし、私たちが利用できる水の量は全体の 0.01%にも満たないといわれている。2006 年の「人間開発報告書」によると、不衛生な水しか得られないことが原因で、世界中で年間約 180 万人の子どもたちが亡くなっているというデータもある。その一方で、日本では蛇口をひねると、いつでも安心して飲める水がでてくる。国土交通省（2015）によると生活用水の使用量は 1998 年頃からは緩やかに減少傾向になっているが、1965 年～2000 年の間に約 3 倍に増加した。また、一日での一人あたりの使用量は 1965 年～2000 年までの間に約 2 倍に増加した。その恵まれた環境のせいか、日本人の節水意識がどんどん薄れているといえる。国際連合食料農業機構（2003）によると、世界的に見て日本の水の消費量はカナダ、アメリカ、イタリアに次ぐ 4 位になっており、日本は水不足の危機に直面している。

生活用水の使用目的の割合は、東京都水道局パンフレット（2005）によると、お風呂 24%、トイレ 28%、炊事 23%、洗濯 17%、その他 8%と内訳されており、使用水量が一番多いのはトイレで、次に多いのはお風呂だということが分かる。トイレをよく使う人の一例としては、過敏性腸症候群がある。佐原力三郎（2006）によるとこの病気は神経質・几帳面な人に多く、腹痛や下痢や便秘の症状を引き起こす。よって使用水量が多い人は神経質や几帳面な人に多いのではないかと予測できる。お風呂をよく使う人の一例としては、きれい好きで潔癖症の人が挙げられる。お風呂のお湯を使用せずにシャワーを使用するといった理由で、潔癖症の人は使用水量が多くなると予測できる。

このように水は生活する中でもよく使用され用途は様々ではあるが、身の回りを清潔に保つために多くの水が使われていることが分かる。

2. 仮説

これらより、家庭での一人あたりの使用水量が多い人の特徴は、几帳面な性格か潔癖症ではないかと予測できる。今回は潔癖症などを示す変数がないので、代替指標として「自分の部屋の掃除回数」を使用する。OCD 研究会（2013）によると几帳面、潔癖といわれるタイプの人は常に部屋の掃除や整理が行き届いている。自分がきれいな状態が好きだから、率先して掃除や洗浄を丁寧に行うのである。これらのことから、掃除の回数と使用水量に関係があると考えられる。そこで、以下のような仮説をたてた。

仮説：部屋の掃除をする回数が多い人ほど、家庭での使用水量（ m^3 ）が多い

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 27 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1224、回収率 61.2%となっている。

3.2. 変数

今回は分析するために以下の変数を利用する。

Q31. あなたの世帯の、直近 2 ヶ月の使用水量を教えてください。なお、高槻市では、水道料金の請求書には 2 ヶ月分の使用水量が記載されています。

選択肢：1. 10 m³未満 2. 10 m³以上 20 m³未満 3. 20 m³以上 30 m³未満
4. 30 m³以上 40 m³未満 5. 40 m³以上 50 m³未満 6. 50 m³以上 60 m³未満
7. 60 m³以上 70 m³未満 8. 70 m³以上

Q49. あなたは、普段、自分の部屋の掃除をどのぐらいの頻度で行っていますか。自分の部屋がないという人は、家の中で特に長く過ごしている部屋としてお答えください。

分析がしやすいように選択肢を反転し用いる。

選択肢：1. まったくしていない 2. 年に 1 回程度 3. 年に数回 4. 月に 1 回程度
5. 週に 1 回程度 6. 週に数回 7. ほぼ毎日

Q53. あなたの性別はどちらですか。

選択肢：1. 男性 2. 女性

今回、男性ダミーは選択肢 1 を[1]、2 を[0]に変換して使用する。

Q55. あなたの現在の職業はどれにあたりますか。(複数の職業に就かれている場合は、主なものに 1 つマル)

選択肢：1. 常時雇用の勤め人 2. 臨時雇用、パート、アルバイト 3. 自営業主
4. 自営業の家族従業者 5. 経営者、役員 6. 家事専業 7 学生 8. 無職
9. その他

今回は、常勤ダミーは選択肢 1 と 5 を[1]、2,3,4,6,7,8,9 を[0]

自営業主ダミーは選択肢 3 と 4 を[1]、1,2,5,6,7,8,9 を[0]

その他職業ダミーは選択肢 2,6,7,8,9 を[1]、1,3,4,5 を[0]

に変換して使用する。

Q57. あなたの最終学歴を教えてください。(在学中の方は、いま通っている学校を選んでください)

選択肢：1. 中学（旧小学校など） 2. 高校（または旧制中学） 3. 専門学校
4. 短大・高専（5年制） 6. 大学（旧高専）・大学院 6. わからない

今回は、初等学歴ダミーは選択肢1を[1]、2,3,4,5を[0]

中等学歴ダミーは選択肢2を[1]、1,3,4,5を[0]

高等学歴ダミーは選択肢3,4,5を[1]、1と2を[0]

に変換して使用する。

Q62. あなたの世帯の人数を、あなたも含めてお答えください。

Q63. 過去一年間のあなたの世帯の収入はどれぐらいですか。臨時収入、副収入も含めてお答えください。

選択肢：1. 100万円未満 2. 100万円～200万円未満 3. 200万円～400万円未満
4. 400万円～600万円未満 5. 600万円～800万円未満
6. 800万円～1000万円未満 7. 1000万円～1500万円未満 8. 1500万円以上
9. わからない

4. 分析

「自分の部屋の掃除の頻度」に影響する要因を分析するために重回帰分析を行う。「自分の部屋の掃除の頻度」を従属変数、「直近2ヶ月の使用水量」「性別」「職業」「最終学歴」「世帯収入」を独立変数とする。

表1

直近2ヶ月の使用水量(m ³)の重回帰分析			
	B	SE	β
(定数)	2.631 ***	.339	
反転自分の部屋の掃除頻度	-.025	.042	-.020
男性ダミー	.351 **	.119	.101
中等学歴ダミー	-.166	.204	-.047
高等学歴ダミー	-.344 †	.206	-.100
常勤の勤めダミー	-.618 ***	.135	-.167
自営業者ダミー	-.353	.240	-.047
世帯人数	.670 ***	.048	.472
世帯収入	.078 *	.038	.075
調整済みR ²	.248 ***		
N	780		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

この分析結果で「直近 2 ヶ月の使用水量」の分散の 24.8%を独立変数によって説明できる。また、この変数に影響を与えている変数は、「男性ダミー」「高等学歴ダミー」「常勤の勤めダミー」「世帯人数」「世帯収入」の 5 個である。これらの有意な独立変数の中で「直近 2 ヶ月の使用水量」に最も強い影響を与えているのは 0.1%水準で有意な「世帯人数」($\beta = .470$) であり、世帯人数が多い方が使用水量は多いことがいえる。その他に 0.1%水準で有意な「常勤の勤めダミー」($\beta = -.167$)、1%水準で有意な「男性ダミー」($\beta = .101$)、5%水準で有意な「世帯収入」($\beta = .075$)、10%水準で有意な「高等学歴ダミー」($\beta = -.100$) が「直近 2 ヶ月の使用水量」に影響している。

5. 考察

分析結果により、部屋の掃除をする回数が多い人ほど、家庭での使用水量 (m^3) が多いという仮説は成り立たなかった。しかし、「男性ダミー」「高等学歴ダミー」「常勤の勤めダミー」「世帯人数」「世帯収入」は使用水量に関係していることがわかった。そこで、独立変数の効果について解釈を行う。

第一に、女性に比べて、男性の方が使用水量は多い。これは性別によって生活様式や体の構造が違うことから使用水量に差が出たと考えられる。しかし使用水量は家族全員が使用した合計となるので家族構成によっては当てはまらないこともある。第二に、初等学歴の人に比べて、高等学歴の人の方が使用水量は少ない（中等学歴の人は有意な差はない）ことがいえる。これは学歴によって職業に違いがでるため、使用水量に差がでたと考えられる。第三に、その他職業の人と比べて常勤で勤めている人の方が使用水量は少ない（自営業者は有意な差はない）ことがわかった。これは常勤で勤めている人は家にいる時間が少ないためであると考えられる。第四に、世帯人数が多い方が使用水量は多い。これは几帳面や潔癖症に関わらず世帯人数が多いと、家庭で水を使う人が多くなるのでおのずと使用水量が多くなる。第五に、世帯収入が多い方が使用水量は多い。これはお金があるとお金のことを気にせずに、自分が水を使いたいだけ使えるからだと考えられる。

以上より、使用水量が多い人の特徴は世帯収入と世帯人数が多く、常勤で勤めており、男性で初等学歴の人だということが分かった。今回の分析で仮説が成り立たなかった原因として、世帯人数や家族構成が大きく関係しているといえる。使用水量が家庭でのものとなるので、今回の分析では個人単位の厳密な分析が行えなかった。水を使う人の特徴を明確にするためには、多方面から詳しく分析していく必要があるといえる。

6. 文献

- [1]国連開発計画 (2006) 『人間開発報告書』国際協力出版会
- [2]国際連合食料農業機構 (2003) 『FAO aquastat 』
- [3]国土交通省水管理・国土保全局水資源部 (2015) 『日本の水資源』2016/01/12 閲覧
http://www.mlit.go.jp/tochimizushigen/mizsei/c_actual/actual03.html

- [4]OCD 研究会 (2013)『第 110 回 OCD コラム 小さなことが気になるあなたへ』2016/01/12
閲覧 http://ocd-net.jp/column/c_110.html
- [5]佐原力三郎 (2006)『よくわかる最新医学 大腸がん・潰瘍性大腸炎・過敏性腸症候群』
p 132～135 主婦の友社
- [6]東京都水道局 (2005)『パンフレット、節水の習慣：上手に使う大切な水』

第 16 章 理想とする消費税率と選挙投票率

藤 優希

1. はじめに

税金と呼ばれるものは、所得税、法人税、消費税、酒税、たばこ税、相続税など私たちの周りには数多く存在する。これら税金の分類の仕方も様々である。まず、直接税、間接税という分類がある。先にあげた税金をこれらで分類すると、直接税に分類されるものは、所得税、法人税、相続税であり、間接税に分類されるものは、酒税、たばこ税、そして本章で中心となる消費税である。また、間接税の中でも、特定の商品サービスを受ける際に課税される個別間接税とは異なり、消費に広く公平に負担を求める間接税が消費税である。(藤曲, 2009)。日本経済新聞(2014.11)によれば、2014年4月に消費税が8%に増税され、2017年4月には10%に増税されることが明言されている。2014年12月の衆議院選挙では、過半数の238議席獲得しなければ安倍晋三首相は退陣すると意向を示していたが、自民党公明党が合わせて326議席を獲得し圧勝した。このことによって、消費税率の引き上げ、先送りについて国民の了承を得られたということになった。

しかし、この年の衆議院議員総選挙の投票率は、過去最低の52.66%、中でも20代前半は、20%台であった(総務省ホームページ参照)。このように低い投票率で過半数を獲得したからといって、国民全体の意見といえるのだろうか。増税に反対の人の方が割合が高かったとしても、増税に賛成の人の方が選挙参加率が高ければ、増税に賛成するという結果が出ると予測される。そこで、本論文では理想とする消費税率と選挙投票率の関係について明らかにすることを目的とする。

2. 仮説

総務省の『家計調査』によれば、2012年と2013年の1月～3月期、2013年と2014年の1月～3月期の2つの期間における消費の変化率が大きく変化していた。特に変化が大きかったのは、家具・家事用品で、2012年1月～3月期と2013年1月～3月期の対前年増減率が-3.7%だったのに対して、2013年1月～3月期と2014年1月～3月期の対前年増減率は41.1%であった。このような2014年の急激な支出の増加は、消費税が上がる前に、高いものを買っておこうという考えのあらわれだと考えられる。増税に対する顕著な行動の変化は、買い物だけでなく、政治との関わり方にも見られるのではないか。理想とする消費税率が高い人ほど、政治に興味があり、政治に興味がある人ほど、選挙に投票しているのではないか。ここで言う政治との関わり方は、選挙の参加率で考える。そこで次の仮説が当てられる。

仮説『理想とする消費税率が高いほど、選挙によく参加している。』

3. データと変数

3.1. データ

分析においては、平成 27 年に実施された、「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」のデータを用いた。調査対象者は、無作為に選ばれた、高槻市に在住している 20 歳以上 85 歳未満の男女である。計画標本サイズは 2000 で、有効回収数は 1224、回収率は 61.2%であった。

3.2. 変数

Q45 あなたは、どれくらいの頻度で選挙へ投票に行きますか。

選択肢：1. 必ず行く 2. よく行く 3. あまり行かない 4. まったく行かない

今回は、選択肢を反転して分析に使用している。

選挙投票率反転:1. まったく行かない 2. あまり行かない 3. よく行く 4. 必ず行く

Q46 あなたは、消費税は何%が適当だと思いますか。

選択肢：1. 0% 2. 1~4% 3. 5% 4. 6~7% 5. 8% 6. 9% 7. 10% 8. 11%以上

今回は、もともとの消費税率に数値をリコードして分析を進めた。

ただし、範囲があるものは、平均値を使用する(選択肢 2 は 2.5 を、選択肢 4 には 6.5 を、選択肢 8 は 11 に変換する)。

消費税率:1. 0% 2. 2.5% 3. 5% 4. 6.5% 5. 8% 6. 9% 7. 10% 8. 11%以上

Q53 あなたの性別はどちらですか。

選択肢：1. 男性 2. 女性

ただし今回は、ダミー変数に変換して分析に使用している。

男性ダミー：1. 男性 0. 女性

Q54 あなたの年齢をお答えください。

選択肢：1. 20代 2. 30代 3. 40代 4. 50代 5. 60代 6. 70代以上

これらは、コードの区切りが等間隔でないため分析で用いる際には、それぞれの階級値にリコードした年齢階級値：1. 25歳 2. 35歳 3. 45歳 4. 55歳 5. 65歳 6. 75歳を使用した。

Q57 あなたの最終学歴を教えてください。

選択肢：1. 中学（旧小学校など） 2. 高校（または旧制中学） 3. 専門学校
4. 短大・高専（5年制） 5. 大学（旧高専）・大学院 6. わからない

今回は、「1. 中学」「2. 高校」を1に、それ以外を0にしたダミーを初等学歴ダミー
「3. 専門」「4. 短大・高専」を1に、それ以外を0にしたダミーを中等学歴ダミー
「5. 大学・大学院」を1に、それ以外を0にしたダミーを高等学歴ダミーとする。
「6. わからない」「9. 無回答」は欠損地処理を行い分析に使用した。

Q63 過去一年間のあなたの世帯の収入はどれぐらいですか。臨時収入、副収入も含めてお答えください。

選択肢：1. 100万円未満 2. 100万円～200万円未満
3. 200万円～400万円未満 4. 400万円～600万円未満
5. 600万円～800万円未満 6. 800万円～1000万円未満
7. 1000万円～1500万円未満 8. 1500万円以上 9. わからない

今回は、それぞれの値の階級値にリコードした

世帯収入(階級値)：1. 50万 2. 150万 3. 350万 4. 500万 5. 700万 6. 900万
7. 1250万 8. 1750万を使用している。

4. 分析

本調査における、Q45.「あなたは、どれくらいの頻度で選挙へ投票に行きますか」と、
Q46.「あなたは、消費税は何%が適当だと思いますか」のそれぞれの度数分布は以下(表1, 2)
のようになった。また、重回帰分析の結果は表3のようになった。

表1 理想とする消費税率の度数分布表

	度数	構成比(%)
まったく行かない	57	4.8
あまり行かない	169	14.2
よく行く	258	21.7
必ず行く	703	59.2
合計	1187	100

表2 選挙投票率の度数分布表

	度数	構成比(%)
0%	91	7.8
1~4%	59	5
5%	519	44.3
6~7%	20	1.7
8%(現在の税率)	265	22.6
9%	2	0.2
10%	181	15.5
11%以上	34	2.9
合計	1171	100

表3 選挙の投票率の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	1.816 ***	.136	
理想とする消費税率	.024 *	.009	.079
年齢(階級値)	.022 ***	.002	.400
世帯収入(階級値)	.000 *	.000	.067
男性ダミー	-.052	.056	-.029
中等学歴ダミー	.103	.073	.048
高等学歴ダミー	.256 ***	.068	.136
調整済み R^2	.143 ***		
N	966		

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$

調整済み決定係数は 0.143 であり、従属変数の選挙の投票率のうち、14.3%がこのモデルで説明されていると言える。理想とする消費税率、世帯収入(階級値)において 5%水準で、高等学歴ダミー、年齢階級値において 0.1%水準で有意な結果が得られた。 β 値を見ると、特に、年齢(階級値)が高い数値($\beta=0.400$)を示した。このことから、選挙の投票率に理想とする消費税率($\beta=0.079$)も影響を及ぼしていることが分かるが、より大きな影響を及ぼしているのは、年齢、次いで高等学歴ダミーであることが分かった。

5. 考察

本研究の結果から以下のことが明らかにできた。

まず、選挙の投票率と消費税率には関連があるということである。理想とする消費税率が高い人ほど、選挙により投票に行くということが明らかになった。これより、理想とする消費税率が高い人ほど、政治に関心があり、政治に関心がある人ほど、選挙に投票に行くという仮説が正しいということになった。

また、高等学歴の人の方が難しい社会問題も理解しようとする傾向にあると考えられる

ため、選挙の投票率に対する高等学歴の影響の分析結果は予想できるものであった。しかし、学歴の要因を抜いてもなお、理想とする消費税率と選挙投票率に関連があったということから、単純に消費税率が低くなるだけでは、社会が財政面で破綻するということを理解し、社会問題を様々な観点から考える人が多いのではと考えられる。

6. 文献

[18] 藤曲武美(2009)『税の基礎』経済法令研究会

[19] 総務省 統計情報 〈http://www.soumu.go.jp/menu_seisaku/toukei/〉

第 17 章 結婚と幸せの関係性

宮崎 友紀

1. はじめに

近年、人々の間ではお金やモノの豊かさなどの目に見える価値だけでなく、目に見えない価値についても重要性が叫ばれるようになってきている。その一つとして家族関係がある。内閣府が平成 22 年 3 月に実施した「国民生活選好度調査」によると、『幸福感を判断する際に、重視した事項は何ですか。』という質問では、1 位が「健康状態」、2 位が「家族関係」、3 位が「家計の状況（所得・消費）」という結果になっている。

また、近年の家族・結婚のあり方については、第一生命保険が 30 歳以上 89 歳以下の全国男女 800 人を対象に実施した、幸福感に関する意識調査においても、どの程度幸せかを判断するにあたって、重視した項目を 3 つまで選択してもらったところ「健康」(65.6%)、「経済的ゆとり」(60.5%)、「家族関係」(59.0%) の回答率が突出して多かった、と指摘されている。いずれの調査でも、お金の匹敵するほど家族も重要視されている。では、なぜそれほどまでに家族関係が重要視されるのだろうか。

2. 仮説

NBER が 2014 年に発表した論文「How's Life at Home? New Evidence on Marriage and the Set Point for Happiness」は、結婚と幸福度には明確な因果関係があり、純粹に結婚すること自体に幸福度を高める肯定的な効果があることを実証的に示している。

さらに、結婚や子育てなどの際、幸せな家庭を築くには膨大なお金がかかる。そのため、結婚するにはある程度の収入が必要であると考えられる。

そこで、以下の 2 つの仮説を立てた。

- ① 未婚者と比べ既婚者の方が、生活満足度が高い。
- ② 未婚者と比べ既婚者の方が、所得が多い人の割合が高くなる。

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 27 年に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1224 票、回収率は 61.2% である。

3.2. 変数

従属変数の要因として考えられる独立変数を列挙する。全ての変数において欠損値処理を施している。

1) 婚姻状況

「Q51 婚姻状況」をリコードし、「1.既婚（配偶者あり）」を0、「2.既婚（離別・死別）」を1、「3.未婚」を0とした変数「既婚者配偶者ありダミー」と、「1.既婚（配偶者あり）」を1、「2.既婚（離別・死別）」を0、「3.未婚」を0とした変数「既婚者死別ダミー」を用いる。

2) 生活満足度

「Q1 生活満足度」をそのまま用いる。

「1.満足」「2.やや満足」「3.どちらともいえない」「4.やや不満」「5.不満」

3) 層別世帯収入

「Q63 世帯収入」をリコードし、「1. 100万円未満」「2. 100万円～200万円」「3. 200万円～400万円」を「低所得」、「4. 400万円～600万円」「5. 600万円～800万円」を「中間所得」、「6. 800万円～1000万円」「7. 1000万円～1500万円」「8. 1500万円以上」を「高所得」として用いる。

4. 分析

まず、クロス表を用いて、生活満足度と婚姻状況の関係性を検討する。

表 1

q51 婚姻状況 と q1 生活満足度 のクロス表

		q1 生活満足度					合計	
		満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満		
q51 婚姻状況	既婚(配偶者あり)	度数	165	400	178	91	29	863
		行パーセント	19.1%	46.3%	20.6%	10.5%	3.4%	100.0%
	既婚(離別・死別)	度数	21	65	41	23	7	157
		行パーセント	13.4%	41.4%	26.1%	14.6%	4.5%	100.0%
	未婚	度数	17	70	43	29	11	170
		行パーセント	10.0%	41.2%	25.3%	17.1%	6.5%	100.0%
合計	度数	203	535	262	143	47	1190	
	行パーセント	17.1%	45.0%	22.0%	12.0%	3.9%	100.0%	

$X^2(df=8, N=1190)=22.157^{***}$, Cramer V= 0.096^{***}

***:p<.001, **:p<.01, *p<.05, †:p<.10

分析結果の有意性検定を行った結果、有意確率が.001未満となっており、婚姻状況により生活満足度に有意な差があるといえる。

生活に満足している人（満足・やや満足と答えた人）は、既婚者（配偶者あり）、既婚者

(離別・死別)、未婚者という順で割合が高く、生活に不満がある人(やや不満・不満と答えた人)は逆であることがわかる。

次に、クロス表を用いて、婚姻状況と世帯収入の関連性を検討する。

表 2

婚姻状況 と 層別世帯収入 のクロス表

		層別世帯収入			合計	
		低所得	中間所得	高所得		
婚姻状況	既婚(配偶者あり)	度数	305	280	162	747
		行パーセント	40.8%	37.5%	21.7%	100.0%
	既婚(離別・死別)	度数	102	19	9	130
		行パーセント	78.5%	14.6%	6.9%	100.0%
	未婚	度数	74	29	19	122
		行パーセント	60.7%	23.8%	15.6%	100.0%
合計	度数	481	328	190	999	
	行パーセント	48.1%	32.8%	19.0%	100.0%	

$X^2(df=4, N=999) = 71.753^{***}$, Cramer V = 0.190^{***}

***:p<.001, **:p<.01, *p<.05, †:p<.10

分析結果の有意性検定を行った結果、有意確率が 0.01 未満となっており、有意であった。すなわち、婚姻状況により、世帯収入に有意な差があるといえる。

未婚者は既婚者(配偶者あり)と比べて、高所得の人の割合が低い。しかし、既婚者(離別・死別)と比べると高所得の人の割合は高い。

5. 考察

婚姻状況と生活満足度のクロス表による分析結果より、仮説①の「未婚者と比べ既婚者の方が、生活満足度が高い」は正しいと言え、さらに既婚者の中でも配偶者がいる方が離別・死別している人より生活満足度が高いと言える。

層別世帯収入と婚姻状況のクロス表による分析結果より、仮説②の「未婚者と比べ既婚者の方が、所得が多い人の割合が高くなる。」は既婚者に配偶者がいる場合のみ正しいと言える。

この2つの結果より、結婚によって収入が増えることにより物理的に生活が満たされる、ということが推測できる。これは、上記の「平成 22 年度国民生活選好度調査」も結果にある幸福感を判断する際にであった「家計の状況」がより良くなることと、「家族関係」が良いことが結びついていると考えられる。

さらに結婚は、このようにお金のような物理的なものによって得ることのできない、人間の情緒的な満足も得ることができる。誰かと共に生きることにより孤独死をする恐れがないこともその 1 つである。さらに、誰かと生活を共にすることにより、突然何らかの理

由で倒れた場合、すぐに助けを呼ぶことができるので、幸福感を判断する際に最も重視する項目「健康状態」も維持することができるといえる。

以上より、結婚することは、人々に物理的な満足だけでなく情緒的な満足を与えてくれる。これが、幸せにおいて家族関係が重視される理由である。

6. 文献

- ・ 内閣府「国民生活選好度調査」
http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/h21/21senkou_03.pdf (2016年1月19日閲覧)
(全国に居住する15歳以上80歳未満の男女対象 平成22年3月11日～22日実施)
- ・ 第一生命研究開発室 小谷みどり「どんな人が幸せなのかー幸福に対する価値観と関連からー」
<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/report/rp1207a.pdf> (2016年1月19日閲覧)
- ・ Shawn Grover, John F. Helliwell (2014) 『How's Life at Home? New Evidence on Marriage and the Set Point for Happiness』 NBER Working Paper No. 20794.
<http://www.nber.org/papers/w20794.pdf> (2016年1月19日閲覧)

資料：
予告はがき・調査票

郵便はがき



□□□□□□□□

予告はがき

「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」
ご協力のお願い

高槻市と関西大学は、高槻市民の生活ともの見方についての調査を共同で実施することになりました。調査の対象は、無作為に選ばれた20歳以上の市民の方です。

近日中に調査票の入った大きな茶封筒（ボールペン入り）が届きます。ご多忙中、誠に恐縮ですが、届き次第、調査票に回答をご記入の上、ご返送頂きますようよろしくお願い申し上げます。

平成27年8月



高槻市
Takatsuki City

市民生活部 市民生活相談課
〒569-0067 高槻市桃園町2-1
TEL 072-674-7130

関西大学

関西大学 総合情報学部
〒569-1095 高槻市霊仙寺町2-1-1
TEL 072-690-2151

※あて所に尋ねあたらぬ場合は、高槻市へ返戻して下さい。

高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査

(調査実施) 高槻市・関西大学総合情報学部

高槻市と関西大学は共同で、市政と市民生活に関する調査を行います。市は、今後の施策を検討するうえでの基礎資料とすることを目的に、大学は、高槻市民の生活とものの見方に関する研究と教育を行うことを目的に実施するもので、調査の対象は、無作為に選ばれた 20 歳以上の市民の方です。この調査票に、**封筒宛名のご本人様ご自身で**、回答をご記入いただきますようお願いいたします。調査の回答は、調査の目的以外には、一切利用いたしませんので安心してお答えください。

調査結果につきましては、本年 12 月頃に速報版を、翌年 3 月中旬に最終報告書を発行し、高槻市と関西大学で閲覧できるようにいたします。できるだけ多くの方のご意見を反映した調査を目指しておりますので、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

*ボールペンを同封しております。回答の際にご利用ください(返却の必要はありません)。

*ご回答は、とくに断りがなければ、選択肢番号を 1 つだけ選んでマルをつけてください。マルをつける個数が決められていたり、回答していただく方が限られていたりするものは、指示に従ってお答えください。

*お忙しいところ誠に恐縮ですが、**9月11日(金)**までに、同封の封筒(切手貼付済み)でご返送いただきますようお願いいたします。

*この調査票と封筒には、ご住所やお名前を記入されないようお願いいたします。

(どなたがどのような回答をされたかわからないようにするためです。)

<調査に関するお問い合わせ> 高槻市 市民生活部 市民生活相談課
関西大学 総合情報学部

tel : 072-674-7130

tel : 072-690-2151

Q1. 現在の生活全体にどのくらい満足していますか。

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

Q2. あなたのお住まいの地域は、全体的に暮らしやすいと思いますか。

1	2	3	4	5
非常によい	まあよい	どちらともいえない	やや悪い	非常に悪い

Q3. あなたは、現在住んでいる地域にどのくらい「住み続けたい」と思いますか。

1	2	3	4	5
ずっと住み続けたい	住み続けたい	まあ住み続けたい	どちらともいえない	機会があれば引っ越したい

Q4. あなたが現在住んでいる地域では、花や木などの植物をどのくらい見かけますか。

1	2	3	4	5
よく見かける	ときどき見かける	どちらともいえない	あまり見かけない	まったく見かけない

Q5. あなたが現在住んでいる地域は、自然や緑が多い方だと思いませんか、それとも少ない方だと思いませんか。

1	2	3	4	5
多いと思う	やや多いと思う	普通だと思う	やや少ないと思う	少ないと思う

Q6. あなたは近所の人たちとどの程度世間話をしますか。

1	2	3	4	5
ほぼ毎日	週に 3~4 日	週に 1~2 日	月に 1~2 日	ほとんどない

Q7. あなたは、今まで以上に近所づきあいを増やしたいですか。それとも減らしたいですか。

1	2	3	4	5
増やしたい	少し増やしたい	どちらともいえない	少し減らしたい	減らしたい

Q8. あなたは高槻市に愛着を感じますか。それとも感じませんか。

1	2	3	4	5
感じる	やや感じる	どちらともいえない	あまり感じない	感じない

Q9. あなたは、お住まいの地域の電車で、どのくらい満足していますか。

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

Q10. あなたは、お住まいの地域のバスに、どのくらい満足していますか。

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

Q11. 高槻市のバスの乗客は、乗車中にマナーを守って行動していると思いますか。

1	2	3	4	5
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない

Q12. あなたはどの程度高槻市内でバスを利用しますか。

1	2	3	4	5	6
ほぼ毎日	週に3~4日	週に1~2日	月に1~2日	年に1~2日	利用しない

Q13. あなたはどれくらいの頻度で、近くの公園に出かけますか。

1	2	3	4	5
ほぼ毎日	週に3~4日	週に1~2日	月に1~2日	公園には行かない

Q14. あなたの自宅から高槻市の商店街や繁華街まで、交通機関や自動車を使用しないで行くのに、どれくらいの時間がかかりますか。

1	2	3	4	5
10分未満	10分以上20分未満	20分以上30分未満	30分以上1時間未満	1時間以上

Q15. あなたは、高槻市の商店街や繁華街に、通勤・通学・商用以外でどのくらいの頻度で行きますか。

1	2	3	4	5	6
ほぼ毎日	週に3~4日	週に1~2日	月に1~2日	年に1~2日	行くことがない

Q16. あなたは、買い物・食事・娯楽などで中心市街地（JR高槻駅・阪急高槻市駅周辺）に行く頻度が、3年前と比べて増加しましたか。それとも減少しましたか。

1	2	3	4	5	6
増加した	少し増加した	変わらない	少し減少した	減少した	3年前を知らない

Q17. あなたは、中心市街地（JR高槻駅・阪急高槻市駅周辺）に関する以下の点について、3年前と比べて向上したと思いますか。それとも低下したと思いますか。

A. 防災面での安全性や快適性

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

B. 防犯面での安全性や快適性

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

C. 居住環境

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

D. 公共交通機関の利便性

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

E. 歩行者にとっての歩きやすさ

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

F. 風紀や治安

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

Q18. あなたは、中心市街地（JR高槻駅・阪急高槻市駅周辺）に関する以下の点について、3年前と比べて増加したと思いますか。それとも減少したと思いますか。

A. 文化活動

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

B. コミュニティ活動

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

C. 商店街の魅力

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

D. 百貨店などの大型店の魅力

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

E. 買い物やイベントでのにぎわい

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

F. 魅力的な飲食店

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

G. オフィスなど業務施設

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

H. 病院などの医療機関

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

I. 道路の渋滞

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

J. 駐輪場

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

K. 街なかの緑や潤い

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

Q19. 中心市街地（JR高槻駅・阪急高槻市駅周辺）を住み良い街にするために、あなたはどのような取り組みが必要だと思いますか。3つ以内にマルをつけてください。

1. 街路樹や植栽、公園の整備など、緑豊かな住居環境の向上を図る。
2. 日常生活に困らないよう、スーパーマーケットや食料品店などの充実を図る。
3. 休日や夜間の突然の病気やケガで困らないよう、病院など医療機能の充実を図る。
4. 安心・安全に生活できるよう、治安・防犯の向上を図る。
5. 高齢者等も安全・快適に生活できるよう、街のバリアフリー化を図る。
6. 民間のマンションや公的住宅など、中心市街地での住宅の供給を促進する。
7. その他
()
8. 今以上の取り組みは必要ない。

Q20. あなたは地域のボランティア活動にどれくらい参加していますか。

1	2	3	4	5
月に1回以上	半年に2~3回	1年に1~2回	数年に1回	まったくしない

Q21. 高槻市内で行われている次のような行事への、あなたの参加頻度はどのくらいですか。

A. 高槻シティハーフマラソン

1. 毎年参加している	3. 1回だけ参加した
2. 時々参加している	4. 全く参加したことがない

B. 高槻まつり

1. 毎年参加している	3. 1回だけ参加した
2. 時々参加している	4. 全く参加したことがない

C. 高槻ジャズストリート

1. 毎年参加している	3. 1回だけ参加した
2. 時々参加している	4. 全く参加したことがない

D. 関西大学の行事（講演会や学園祭など）

1. 毎年参加している	3. 1回だけ参加した
2. 時々参加している	4. 全く参加したことがない

Q22. あなたは、高槻市に観光客をもっと呼び込みたいと思いますか。

1	2	3	4	5
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない

Q23. 地域ブランドと呼べるような特産品や観光地が、高槻市にはあると思いますか。

1	2	3	4	5
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない

Q24. あなたは、高槻市の歴史文化財に、どの程度関心がありますか。

1	2	3	4	5
かなり関心がある	やや関心がある	どちらともいえない	あまり関心がない	まったく関心がない

Q25. あなたは、文化財を地域の宝として次世代に伝えていくことを、どの程度重要だと思いますか。

1	2	3	4	5
非常に重要だと思う	重要だと思う	どちらともいえない	重要ではないと思う	まったく重要ではないと思う

Q26. あなたの関心が高い、環境問題に関する話題はなんですか。3つ以内にマルをつけてください。

- | | | |
|---------------------|----------------|----------------|
| 1. 地球温暖化 | 9. 騒音・振動 | 17. 森林減少 |
| 2. ヒートアイランド現象・熱帯夜 | 10. オゾン層の破壊 | 18. 水不足 |
| 3. 異常気象 | 11. 黄砂 | 19. 景観 |
| 4. 省エネルギー | 12. 砂漠化 | 20. 廃棄物・リサイクル |
| 5. 新エネルギー・再生可能エネルギー | 13. ダイオキシン・PCB | 21. 不法投棄 |
| 6. 大気汚染・PM2.5 | 14. 食品・飲料水の安全性 | 22. 自然再生 |
| 7. 水質汚染 | 15. 生物多様性 | 23. 都市緑化 |
| 8. 土壌汚染・地下水汚染 | 16. 外来種・外来生物 | 24. その他() |
| | | 25. いずれにも関心がない |

↓ Q27へ

Q27. 次のa~jは、環境保全の活動です。以下から、あなたが、参加したことがある活動、参加したことはないが今後参加してみたい活動を選び、あてはまる番号すべてにマルをつけてください。

参加したことはないが、今後参加してみたい活動		
参加したことがある活動		
a. 地域緑化リーダー、環境保全活動リーダー、森林ボランティア養成講座	1	1
b. 環境関係のNPOなど市民団体の活動	2	2
c. こども会などが主催するリサイクル品の集団回収	3	3
d. 自治会など地域で行う清掃活動	4	4
e. 市が実施する市内一斉清掃	5	5
f. 公園や学校の花壇を活用した地域緑化活動やビオトープなどの維持管理作業	6	6
g. 森林、竹林の間伐や下草刈り	7	7
h. 植物や動物などの自然観察会	8	8
i. 学校や公民館などでの環境教育の講師ボランティア	9	9
j. その他 参加したことがある:() ← 10		10
参加してみたい:() ←		
k. 特になし	11	11

Q28. あなたは、以下のそれぞれの行動を、どの程度行っていますか。

A. 買い物のとき、レジ袋を断り、自分の買い物袋やかばんを利用する。

- | | | | |
|-------|------|--------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| いつもする | よくする | ときどきする | まったくしない |

B. 旬の食材や、地元でとれた食材を購入する。

- | | | | |
|-------|------|--------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| いつもする | よくする | ときどきする | まったくしない |

C. 食品トレー、ペットボトルをスーパー等にある回収ボックスに入れる。

- | | | | |
|-------|------|--------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| いつもする | よくする | ときどきする | まったくしない |

D. 環境にやさしいエコマーク商品を選んで購入する。

- | | | | |
|-------|------|--------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| いつもする | よくする | ときどきする | まったくしない |

E. 冷暖房の温度設定を、できるだけ控えめに設定する。

- | | | | |
|-------|------|--------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| いつもする | よくする | ときどきする | まったくしない |

F. 家電製品や照明器具など、使わない時は電源を消す。

- | | | | |
|-------|------|--------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| いつもする | よくする | ときどきする | まったくしない |

G. 地域の集団回収(新聞・アルミ缶など)に参加する。

- | | | | |
|-------|------|--------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| いつもする | よくする | ときどきする | まったくしない |

H. 破損しても修理して使うなど、物を長く使用する。

- | | | | |
|-------|------|--------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| いつもする | よくする | ときどきする | まったくしない |

I. 近くの外出は徒歩か自転車を利用し、なるべく自家用車やタクシーなどを使わないようにする。

- | | | | |
|-------|------|--------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| いつもする | よくする | ときどきする | まったくしない |

J. 自動車を運転する際、加減速の少ない運転など、エコドライブを心掛ける。

- | | | | | |
|-------|------|--------|---------|-------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| いつもする | よくする | ときどきする | まったくしない | 運転免許を持っていない |

Q29. 水の使用量に配慮した以下の機器の中で、あなた
が使用しているものすべてにマルをつけてください。

1. 食器洗い機（水を循環させて食器の洗浄、すすぎ、乾燥を自動的に行う機械）
2. 節水型洗濯機（ドラム式洗濯機、バスポンプ内蔵洗濯機など）
3. 節水型トイレ（一般的なものよりも、洗浄水量の少ないトイレ）
4. シングルレバー式湯水混合水栓（レバーひとつで水温・流量が調節可能な蛇口）
5. 節水シャワーヘッド（手元で一時的に水を止める機能付のもの、一般的なものよりも水の出る量が少ないものなど）
6. 家庭用バスポンプ（洗濯などに利用するため風呂の残り湯をくみ上げるポンプ）
7. 24時間風呂（浴槽内の湯を浄化して再利用できる風呂）
8. 雨水利用施設（雨水を貯留し、家庭内の様々な雑用水として利用できる施設）
9. その他：
()
10. いずれも使用していない

Q30. あなたは、今後1年以内に、水を使用する機器を
購入するご予定はありますか。ある場合は具体的に
ご記入ください。

1. ある：() 2. ない

Q31. あなたの世帯の、直近2ヶ月の使用水量を
教えてください。なお高槻市では、水道料金の請求書
には2ヶ月分の使用水量が記載されています。

- | | |
|---|---|
| 1. 10m ³ 未満 | 5. 40m ³ 以上50m ³ 未満 |
| 2. 10m ³ 以上20m ³ 未満 | 6. 50m ³ 以上60m ³ 未満 |
| 3. 20m ³ 以上30m ³ 未満 | 7. 60m ³ 以上70m ³ 未満 |
| 4. 30m ³ 以上40m ³ 未満 | 8. 70m ³ 以上 |

Q32. 高槻市は、新エネルギー・省エネルギー機器の
設置に対する補助制度(エコハウス補助金)を行って
います。それについて、以下でお答えください。

A. 補助制度の対象であると知っている機器すべてに
マルをつけてください。

- | | |
|--------------|-------------|
| 1. 太陽光発電システム | 6. エネファーム |
| 2. 太陽熱利用システム | 7. エコウィル |
| 3. ペレットストーブ | 8. 蓄電池 |
| 4. ペアガラス・二重窓 | 9. 雨水貯留タンク |
| 5. エコキュート | 10. 1つも知らない |

B. 今後、自宅へ導入したいと思う機器すべてにマルを
つけてください。

- | | |
|--------------|------------|
| 1. 太陽光発電システム | 6. エネファーム |
| 2. 太陽熱利用システム | 7. エコウィル |
| 3. ペレットストーブ | 8. 蓄電池 |
| 4. ペアガラス・二重窓 | 9. 雨水貯留タンク |
| 5. エコキュート | 10. 特になし |

Q33. 高槻市は、環境に関する基本的な方針として「第
2次高槻市環境基本計画」を策定しており、6つの環境
分野ごとに、望ましい環境像を定めています。

あなたは、現在の市の環境が、それぞれの環境像にどの
程度近づいていると感じますか。

[環境行動] 市民一人ひとりの心と行動が将来へ良好な
環境を引き継ぐまち。

- | | | | | |
|------|------|------|------|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 十分 | かなり | あまり | まったく | わから |
| 近づいて | 近づいて | 近づいて | 近づいて | ない |
| いる | いる | いない | いない | |

[生活環境] 誰もが心地よく、憩いと安らぎある生活を
営めるまち。

- | | | | | |
|------|------|------|------|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 十分 | かなり | あまり | まったく | わから |
| 近づいて | 近づいて | 近づいて | 近づいて | ない |
| いる | いる | いない | いない | |

[自然環境] 河川を軸に人と自然をつなぐみどり豊かな
まち。

- | | | | | |
|------|------|------|------|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 十分 | かなり | あまり | まったく | わから |
| 近づいて | 近づいて | 近づいて | 近づいて | ない |
| いる | いる | いない | いない | |

[都市環境] ゆったりとした時間が流れるおだやかで風
格のあるまち。

- | | | | | |
|------|------|------|------|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 十分 | かなり | あまり | まったく | わから |
| 近づいて | 近づいて | 近づいて | 近づいて | ない |
| いる | いる | いない | いない | |

[循環型社会] 限りある資源を活かして、ごみゼロをめ
ざすまち。

- | | | | | |
|------|------|------|------|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 十分 | かなり | あまり | まったく | わから |
| 近づいて | 近づいて | 近づいて | 近づいて | ない |
| いる | いる | いない | いない | |

[地球環境] 地球規模で考え、身近なことから行動する
まち。

- | | | | | |
|------|------|------|------|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 十分 | かなり | あまり | まったく | わから |
| 近づいて | 近づいて | 近づいて | 近づいて | ない |
| いる | いる | いない | いない | |

Q41. あなたは、情報収集の手段として、インターネット上でやりとりすることをどれくらい重視しますか。

- | | | | |
|------|--------|----------|-------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 重視する | 少し重視する | あまり重視しない | 重視しない |

Q42. あなたは、知り合いから聞いた情報に影響されやすい方だと思いますか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

Q43. あなたは、情報を取り入れることに積極的ですか。それとも消極的ですか。

- | | | | |
|--------|-------|-------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| かなり積極的 | やや積極的 | やや消極的 | かなり消極的 |

Q44. あなたは普段、情報収集のために、1日でどれぐらいの時間だけ以下の媒体を使用していますか。

A. 紙の新聞・雑誌

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 全く利用しない | 4. 40分以上1時間未満 |
| 2. 20分未満 | 5. 1時間以上2時間未満 |
| 3. 20分以上40分未満 | 6. 2時間以上 |

B. テレビ・ラジオ

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 全く利用しない | 4. 40分以上1時間未満 |
| 2. 20分未満 | 5. 1時間以上2時間未満 |
| 3. 20分以上40分未満 | 6. 2時間以上 |

C. 携帯電話・スマートフォン

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 全く利用しない | 4. 40分以上1時間未満 |
| 2. 20分未満 | 5. 1時間以上2時間未満 |
| 3. 20分以上40分未満 | 6. 2時間以上 |

D. パソコン(インターネット)

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 全く利用しない | 4. 40分以上1時間未満 |
| 2. 20分未満 | 5. 1時間以上2時間未満 |
| 3. 20分以上40分未満 | 6. 2時間以上 |

Q45. あなたは、どれぐらいの頻度で、選挙へ投票に行きますか。

- | | | | |
|------|------|---------|----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 必ず行く | よく行く | あまり行かない | まったく行かない |

Q46. あなたは、消費税は何%が適当だと思いますか。

- | | |
|---------|---------------|
| 1. 0% | 5. 8% (現在の税率) |
| 2. 1~4% | 6. 9% |
| 3. 5% | 7. 10% |
| 4. 6~7% | 8. 11%以上 |

Q47. あなたは日常生活の中で、仕事や学業に追われず、ゆっくりと過ごせるような時間を持っていますか。

- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 十分に持っています | かなり持っています | あまり持っていない | まったく持っていない |

Q48. あなたはどのような面で、これからの生活を豊かにしていきたいですか。あてはまる番号すべてにマルをつけてください。

- | | |
|-----------|----------|
| 1. 金銭的な面で | 4. 時間の面で |
| 2. 物質的な面で | 5. 趣味の面で |
| 3. 精神的な面で | 6. 健康の面で |
| 7. その他() | |

Q49. あなたは、普段、自分の部屋の掃除をどのぐらいの頻度で行っていますか。自分の部屋がないという人は、家の中で特に長く過ごしている部屋としてお答えください。

- | | |
|-----------|--------------|
| 1. ほぼ毎日 | 4. 月に1回程度 |
| 2. 週に数回 | 5. 年に数回 |
| 3. 週に1回程度 | 6. 年に1回程度 |
| | 7. まったくしていない |

Q50. あなたは、家族と1日平均何分ぐらい会話をしていますか。

- 30分未満
- 30分以上1時間未満
- 1時間以上1時間30分未満
- 1時間30分以上2時間未満
- 2時間以上

Q51. あなたは、現在、結婚なさっていますか。

- | | | |
|---------|---------|----|
| 1 | 2 | 3 |
| 既婚 | 既婚 | 未婚 |
| (配偶者あり) | (離別・死別) | |

Q52. あなたのお子さまの中で、一番下のお子さまの年齢はおいくつですか。

- | | | | | | |
|------|-----------|------------|------------|-------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 6歳未満 | 6歳以上12歳未満 | 12歳以上15歳未満 | 15歳以上18歳未満 | 18歳以上 | 子どもはいない |

執筆者紹介

塚常 健太	(つかつね けんた)	編集・はじめに・第1章	(関西大学非常勤講師)
松本 渉	(まつもと わたる)	編集・第1章	(関西大学総合情報学部准教授)
吉崎 雅基	(よしざき まさき)	第2章	(関西大学ティーチング・アシスタント)
池谷 紘	(いけや ひろむ)	第3章	(関西大学総合情報学部生)
伊藤 圭佑	(いとう けいすけ)	第4章	(関西大学総合情報学部生)
井本 菜摘	(いもと なつみ)	第5章	(関西大学総合情報学部生)
大野 友也	(おおの ともや)	第6章	(関西大学総合情報学部生)
川島 拓也	(かわしま たくや)	第7章	(関西大学総合情報学部生)
木下 雅貴	(きのした まさたか)	第8章	(関西大学総合情報学部生)
草野 優希	(くさの ゆうき)	第9章	(関西大学総合情報学部生)
多井中 美咲	(たいなか みさき)	第10章	(関西大学総合情報学部生)
徳田 亜也美	(とくだ あやみ)	第11章	(関西大学総合情報学部生)
中尾 真子	(なかお まこ)	第12章	(関西大学総合情報学部生)
中根 梨恵	(なかね りえ)	第13章	(関西大学総合情報学部生)
西野 満音	(にしのみおん)	第14章	(関西大学総合情報学部生)
尾藤 俊輔	(びとう しゅんすけ)	第15章	(関西大学総合情報学部生)
藤 優希	(ふじ ゆき)	第16章	(関西大学総合情報学部生)
宮崎 友紀	(みやざき ゆき)	第17章	(関西大学総合情報学部生)

平成 27 年度社会調査実習報告書
—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—

編集 関西大学総合情報学部、発行 関西大学総合情報学部、発行年月 平成 28 年 3 月

※ 関連する資料として、同時期に発行された『高槻市と関西大学による市民意識調査報告書—平成 27 年度—』（関西大学総合情報学部[編集]，高槻市・関西大学総合情報学部[発行]）があります。本報告書の 3 章～17 章が省略されたものになります。